平成２０年４月２８日

京都精華大学人文学部総合人文学科設置届出

学校法人　京都精華大学

基　本　計　画　書

基　本　計　画		
事　項	記　入　欄	備　考
計画の区分	学部の学科の設置	
フリガナ 設置者	ｶﾞｯｺｳﾎｳｼﾞﾝ　ｷｮｳﾄｾｲｶﾀﾞｲｶﾞｸ 学校法人　京都精華大学	
フリガナ 大学の名称	ｷｮｳﾄｾｲｶﾀﾞｲｶﾞｸ 京都精華大学　(Kyoto　Seika　University)	
大学本部の位置	京都府京都市左京区岩倉木野町１３７	
大学の目的	学校教育法および教育基本法の規定するところに従い、大学教育を施し､広く知識を授けるとともに、深奥な学問芸術を研究･教授し、よりよき社会人としての人間形成を行うことを目的とする。	
新設学部等の目的	主に人文科学、社会科学の幅広い教養に加えて、芸術や現代文化の諸相を深く理解した上で、よりよい文化や社会の構築に寄与できる人材を育成する。	

新設学部等の概要

新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地
	年	人	年次 人	人		年　月 第　年次	
人文学部 〔Faculty of Humanities〕 総合人文学科 〔Department of Liberal Arts〕	4	450	2年次 24 3年次 34	1,940	学士（人文）	平成21年4月 第1年次 平成22年4月 第2年次 平成23年4月 第3年次	京都市左京区岩倉木野町１３７
計		450	58	1,940			

同一設置者内における変更状況（定員の移行，名称の変更等）	
	・平成21年4月　人文学部環境社会学科、社会メディア学科、文化表現学科の学生募集の停止（在学生の卒業を待って廃止） ・平成15年4月　人文学部人文学科の学生募集の停止（在学生の卒業を待って廃止）

教育課程

新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数
	講義	演習	実験・実習	計	
人文学部総合人文学科	203科目	108科目	3科目	314科目	124単位

教員組織の概

学部等の名称		専任教員等 教授	准教授	講師	助教	計	助手	兼任教員
新設分	人文学部　総合人文学科	29人 (29)	12人 (12)	3人 (3)	0人 (0)	44人 (44)	0人 (0)	122人 (61)
新設分	計	29 (29)	12 (12)	3 (3)	0 (0)	44 (44)	0 (0)	122 (61)
既設	芸術学部　造形学科	12 (12)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	16 (16)	2 (2)	62 (62)
既設	芸術学部　素材表現学科	7 (7)	1 (1)	1 (1)	0 (0)	9 (9)	2 (2)	36 (36)
既設	芸術学部　メディア造形学科	7 (7)	1 (1)	3 (3)	0 (0)	11 (11)	2 (2)	50 (50)
既設	デザイン学部　ビジュアルデザイン学科	5 (5)	6 (6)	2 (2)	0 (0)	13 (13)	1 (1)	33 (33)
既設	デザイン学部　プロダクトデザイン学科	5 (5)	3 (3)	3 (3)	0 (0)	11 (11)	1 (1)	25 (25)
既設	デザイン学部　建築学科	7 (7)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	10 (10)	1 (1)	39 (39)
既設	マンガ学部　マンガ学科	8 (8)	5 (5)	5 (5)	0 (0)	18 (18)	1 (1)	24 (24)
既設	マンガ学部　マンガプロデュース学科	4 (4)	4 (4)	2 (2)	0 (0)	10 (10)	1 (1)	6 (6)
既設	マンガ学部　アニメーション学科	7 (7)	2 (2)	4 (4)	0 (0)	13 (13)	1 (1)	5 (5)

要	分	計	62 (62)	29 (29)	20 (20)	0 (0)	111 (111)	12 (12)	280 (280)	
	合計		91 (91)	41 (41)	23 (23)	0 (0)	155 (155)	12 (12)	402 (402)	

教員以外の職員の概要	職種	専任	兼任	計	
	事務職員	110 人 (110)	35 人 (35)	145 人 (145)	
	技術職員	0 (0)	0 (0)	0 (0)	
	図書館専門職員	4 (4)	19 (19)	23 (23)	
	その他の職員	0 (0)	7 (7)	7 (7)	
	計	114 (114)	61 (61)	175 (175)	

校地等	区分	専用	共用	共用する他の学校等の専用	計	
	校舎敷地	107,911㎡	0㎡	0㎡	107,911㎡	校舎敷地には、平成20年2月25日付法人合併が認可されたインターナショナル学園敷地を含む
	運動場用地	92,561㎡	0㎡	0㎡	92,561㎡	
	小計	200,472㎡	0㎡	0㎡	200,472㎡	
	その他	0㎡	0㎡	0㎡	0㎡	
	合計	200,472㎡	0㎡	0㎡	200,472㎡	

校舎	専用	共用	共用する他の学校等の専用	計	
	55,643㎡ (55,643㎡)	0㎡ (0 ㎡)	0㎡ (0 ㎡)	55,643㎡ (55,643㎡)	校舎面積にはインターナショナル学園校舎を含む

教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設	
	室	室	室	室 (補助職員 人)	室 (補助職員 人)	

専任教員研究室	新設学部等の名称	室数	
		室	

図書・設備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	
		〔 〕 (〔 〕)	〔 〕 (〔 〕)	〔 〕 (〔 〕)	( )	( )	( )	
	計	〔 〕 (〔 〕)	〔 〕 (〔 〕)	〔 〕 (〔 〕)	( )	( )	( )	

図書館	面積	閲覧座席数	収納可能冊数	
	㎡			

体育館	面積	体育館以外のスポーツ施設の概要		
	㎡			

経費の見積り及び維持方法の概要	経費の見積り	区分	開設年度	完成年度	区分	開設前年度	開設年度	完成年度	
		教員1人当り研究費等	500千円	500千円	図書購入費	23,000千円	23,000千円	23,000千円	図書費には電子ｼﾞｬｰﾅﾙ・ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽの整備費（運用ｺｽﾄ含む）を含む。
		共同研究費等	40,000千円	40,000千円	設備購入費	200,000千円	80,000千円	80,000千円	

学生1人当り納付金：人文学部	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次
	1,266千円	1,086千円	1,086千円	1,086千円	1,086千円	1,086千円
芸術学部	1,730千円	1,550千円	1,550千円	1,550千円	1,550千円	1,550千円
ﾃﾞｻﾞｲﾝ学部・ﾏﾝｶﾞ学部	1,759千円	1,579千円	1,579千円	1,579千円	1,579千円	1,579千円

学生納付金以外の維持方法の概要	資産運用収入・寄附金などの自己資金と国庫補助金等で充当する。

大学の名称	京都精華大学							
学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地
	年	人	年次 人	人		倍		
人文学部 環境社会学科	4	120	2年次12 3年次12	540	学士（人文）	0.92 0.80	平成12年度	京都市左京区岩倉木野町137
社会メディア学科	4	175	2年次6 3年次11	740	学士（人文）	0.89	平成15年度	

既設大学等の状況	文化表現学科	4	155	2年次6 3年次11	660	学士（人文）	1.06	平成15 年度		
	人文学科	4	－	－	－	学士（人文）	－	平成元 年度		平成15年度より 学生募集停止
	芸術学部 造形学科	4	112	2年次6 3年次11	495	学士（芸術）	1.07 1.13	昭和54 年度		平成18年度より 入学定員を変更
	素材表現学科	4	64	2年次3 3年次3	201	学士（芸術）	0.90	平成18 年度		
	メディア造形学科	4	64	2年次3 3年次3	201	学士（芸術）	0.98	平成18 年度		
	デザイン学科	4	－	－	－	学士（芸術）	－	昭和54 年度		平成18年度より 学生募集停止
	マンガ学科	4	－	－	－	学士（芸術）	－	平成12 年度		平成18年度より 学生募集停止
	デザイン学部 ビジュアルデザイン学科	4	96	2年次4 3年次4	300	学士（芸術）	1.07 1.08	平成18 年度		
	プロダクトデザイン学科	4	64	2年次3 3年次3	201	学士（芸術）	1.08	平成18 年度		
	建築学科	4	48	2年次2 3年次2	150	学士（芸術）	1.04	平成18 年度		
	マンガ学部 マンガ学科	4	96	2年次3 3年次3	297	学士（芸術）	1.06 1.06	平成18 年度		
	マンガプロデュース学科	4	40	2年次2 3年次2	126	学士（芸術）	1.07	平成18 年度		
	アニメーション学科	4	64	2年次2 3年次2	198	学士（芸術）	1.06	平成18 年度		

附属施設の概要	該当なし	

教　育　課　程　等　の　概　要

（人文学部総合人文学科）

科目区分		授業科目の名称	配当年次	単位数 必修	単位数 選択	単位数 自由	授業形態 講義	授業形態 演習	授業形態 実習	専任教員等配置 教授	専任教員等配置 准教授	専任教員等配置 講師	専任教員等配置 助教	専任教員等配置 助手	備考
基礎教育科目	教養科目	考古学	1･2･3･4 前		2		○								兼1
		民俗学Ⅰ	1･2･3･4 前		2		○								兼1
		民俗学Ⅱ	1･2･3･4 後		2		○								兼1
		地理学Ⅰ	1･2･3･4 前		2		○								兼1
		地理学Ⅱ	1･2･3･4 後		2		○								兼1
		哲学	1･2･3･4 後		2		○								兼1
		宗教学	1･2･3･4 後		2		○				1				
		倫理学	1･2･3･4 前		2		○								兼1
		日本文学	1･2･3･4 前		2		○								兼1
		世界文学	1･2･3･4 後		2		○								兼1
		心理学Ⅰ	1･2･3･4 前		2		○								兼1
		心理学Ⅱ	1･2･3･4 後		2		○								兼1
		芸術学Ⅰ	1･2･3･4 前		2		○								兼1
		芸術学Ⅱ	1･2･3･4 後		2		○								兼1
		総合講座	1･2･3･4 前		2		○			1					
		キャリアデザインⅠ	1･2･3･4 前		2		○			1					
		キャリアデザインⅡ	1･2･3･4 後		2		○			1					
		キャリアデザインⅢ	2･3･4 前		2		○								兼1
		キャリアデザインⅣ	2･3･4 後		2		○								兼1
		教育と社会	1･2･3･4 後		2		○			1					
		法学概論	1･2･3･4 前		2		○								兼1
		日本国憲法	1･2･3･4 後		2		○								兼1
		社会学Ⅰ	1･2･3･4 前		2		○								兼1
		社会学Ⅱ	1･2･3･4 後		2		○								兼1
		経済学Ⅰ	1･2･3･4 前		2		○								兼1
		経済学Ⅱ	1･2･3･4 後		2		○								兼1
		政治学概論	1･2･3･4 前		2		○								兼1
		国際政治学	1･2･3･4 後		2		○								兼1
		文化人類学	1･2･3･4 前		2		○								兼1
		障害者理解	1･2･3･4 前		2		○								兼1
		生物学Ⅰ	1･2･3･4 前		2		○								兼1
		生物学Ⅱ	1･2･3･4 後		2		○								兼1
		科学史	1･2･3･4 後		2		○			1					
		環境と文明	1･2･3･4 前		2		○								兼1
		生命科学と倫理	1･2･3･4 前		2		○								兼1
		自然科学概論	1･2･3･4 前		2		○								兼1
		数学	1･2･3･4 前		2		○								兼1
		論理学	1･2･3･4 後		2		○								兼1
		会計学	1･2･3･4 前		2		○								兼1
		経営学	1･2･3･4 後		2		○								兼1
		生涯学習概論Ⅰ	1･2･3･4 前		2		○								兼1
		生涯学習概論Ⅱ	1･2･3･4 後		2		○								兼1
		ボランティア論	1･2･3･4 後		2		○								兼1
		日本史	1･2･3･4 後		2		○								兼1
		西洋史	1･2･3･4 前		2		○								兼1
		東洋史	1･2･3･4 後		2		○								兼1
		教育学概論	1･2･3･4 前		2		○								
		図書館概論	1･2･3･4 前		2		○			1					
		健康学Ⅰ	1･2･3･4 前		2		○			1					
		健康学Ⅱ	1･2･3･4 後		2		○			1					
		スポーツ実習Ⅰ	1･2･3･4 前		1				○						兼1
		スポーツ実習Ⅱ	1･2･3･4 後		1				○						兼1
		身体運動文化実習	1･2･3･4 後		1				○						兼1
		小計（　53科目）	－	0	103	0		－		6	1	0	0	0	兼35
	科目語学	英語Ⅰ	1 前		2			○		1					
		英語Ⅱ	1 後		2			○		1					

科目区分		授業科目の名称	配当年次	単位数 必修	単位数 選択	単位数 自由	授業形態 講義	授業形態 演習	授業形態 実習	専任教員等配置 教授	専任教員等配置 准教授	専任教員等配置 講師	専任教員等配置 助教	専任教員等配置 助手	備考	
基礎教育科目	語学科目	Oral Communication Ⅰ	1 前		1			○							兼1	
		Oral Communication Ⅱ	1 後		1			○							兼1	
		Grammar and Vocabulary Ⅰ	1 前		1			○		1						
		Grammar and Vocabulary Ⅱ	1 後		1			○		1						
		Oral Presentation Ⅰ	2 前		1			○							兼1	
		Oral Presentation Ⅱ	2 後		1			○							兼1	
		Writing and Vocabulary Ⅰ	2 前		1			○		1						
		Writing and Vocabulary Ⅱ	2 後		1			○		1						
		日本語Ⅰ	1 前		2			○		1						
		日本語Ⅱ	1 後		2			○							兼1	
		日本語Ⅲ	2･3･4 前		2			○							兼1	
		日本語Ⅳ	2･3･4 後		2			○		1						
		フランス語Ⅰ	1･2･3･4 前		2			○							兼1	
		フランス語Ⅱ	1･2･3･4 後		2			○							兼1	
		フランス語Ⅲ	2･3･4 前		2			○							兼1	
		フランス語Ⅳ	2･3･4 後		2			○							兼1	
		中国語Ⅰ	1･2･3･4 前		2			○							兼1	
		中国語Ⅱ	1･2･3･4 後		2			○							兼1	
		中国語Ⅲ	2･3･4 前		2			○							兼1	
		中国語Ⅳ	2･3･4 後		2			○							兼1	
		朝鮮語Ⅰ	1･2･3･4 前		2			○							兼1	
		朝鮮語Ⅱ	1･2･3･4 後		2			○							兼1	
		朝鮮語Ⅲ	2･3･4 前		2			○							兼1	
		朝鮮語Ⅳ	2･3･4 後		2			○							兼1	
		タイ語Ⅰ	1･2･3･4 前		2			○							兼1	
		タイ語Ⅱ	1･2･3･4 後		2			○							兼1	
		タイ語Ⅲ	2･3･4 前		2			○							兼1	
		タイ語Ⅳ	2･3･4 後		2			○							兼1	
		ドイツ語Ⅰ	1･2･3･4 前		2			○							兼1	
		ドイツ語Ⅱ	1･2･3･4 後		2			○							兼1	
		ドイツ語Ⅲ	2･3･4 前		2			○							兼1	
		ドイツ語Ⅳ	2･3･4 後		2			○							兼1	
		スペイン語Ⅰ	1･2･3･4 前		2			○							兼1	
		スペイン語Ⅱ	1･2･3･4 後		2			○							兼1	
		スペイン語Ⅲ	2･3･4 前		2			○							兼1	
		スペイン語Ⅳ	2･3･4 後		2			○							兼1	
		小計（ 38科目）	－	0	68	0		－		5	0	0	0	0	兼12	
	情報基礎科目	情報ネットワーク論	1･2･3･4 前		2		○			1						
		情報メディアと法律	1･2･3･4 後		2		○								兼1	
		情報と倫理	1･2･3･4 前		2		○								兼1	
		メディア･リテラシー論	1･2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		小計（ 4科目）	－	0	8	0		－		1	0	0	0	0	兼3	
	情報リテラシー科目	情報リテラシーⅠ	1 前		1			○							兼1	
		情報リテラシーⅡ	1 後		1			○							兼1	
		メディア･システム設計Ⅰ	1･2･3･4 前		1			○							兼1	
		メディア･システム設計Ⅱ	1･2･3･4 後		1			○							兼1	
		メディア･データ編集Ⅰ	1･2･3･4 前		1			○							兼1	
		メディア･データ編集Ⅱ	1･2･3･4 後		1			○							兼1	
		小計（ 6科目）	－	0	6	0		－		0	0	0	0	0	兼3	
	大学入門科目	大学ナビⅠ	1 前	2			○			1						
		大学ナビⅡ	1 後	2			○			1						
		初年次演習Ⅰ	1 前	2				○		5						
		初年次演習Ⅱ	1 後	2				○		5						
		日本語リテラシーⅠ	1 前		3			○							兼1	
		日本語リテラシーⅡ	1 後		3			○							兼1	
		小計（ 6科目）	－	8	6	0		－		6	0	0	0	0	兼1	
専門教育科目	コース専門科目（現代文化表現コース）	美学概論	1･2･3･4 前		2		○				1					
		文化社会学概論	1･2･3･4 前		2		○				1					
		プロジェクト・プランニング	1･2･3･4 後		2		○				1					
		デザイン史	2･3･4 後		2		○				1					
		映画芸術史	2･3･4 後		2		○				1					
		ポピュラー・ミュージック史	2･3･4 前		2		○				1					

科目区分		授業科目の名称	配当年次	単位数 必修	選択	自由	授業形態 講義	演習	実習	専任教員等配置 教授	准教授	講師	助教	助手	備考
専門教育科目	コース専門科目（現代文化表現コース）	西洋美術史	2･3･4 前		2		○								兼1
		グループワーク概論	2･3･4 前		2		○			1					
		メディア編集論	2･3･4 後		2		○								兼1
		サブカルチャー論	2･3･4 前		2		○			1					
		サウンドスケープ論	2･3･4 後		2		○				1				
		身体表現論	2･3･4 後		2		○				1				
		現代芸術論	2･3･4 前		2		○								兼1
		現代文学論	2･3･4 後		2		○				1				
		建築文化論	2･3･4 前		2		○				1				
		コンテンツ・プロデュース論	2･3･4 後		2		○								兼1
		日本映画論	2･3･4 前		2		○								兼1
		ファッション論	2･3･4 前		2		○				1				
		映画批評論	2･3･4 前		2		○				1				
		空間デザイン論	2･3･4 後		2		○				1				
		音環境デザイン論	2･3･4 前		2		○				1				
		情報メディア論	2･3･4 後		2		○			1					
		舞踊史	2･3･4 前		2		○				1				
		マンガ文化論	2･3･4 前		2		○			1					
		アニメ文化論	2･3･4 後		2		○								兼1
		舞台芸術論	2･3･4 後		2		○								兼1
		「性」の社会・文化史	2･3･4 後		2		○			1					
		小計（ 27科目）	－	0	54	0		－		2	5	0	0	0	兼7
	コース専門科目（国際コミュニケーションコース）	英語音声学Ⅰ	2･3･4 前		2		○				1				
		英語音声学Ⅱ	2･3･4 後		2		○								兼1
		英米文学史	2･3･4 前		2		○								兼1
		英語圏文学Ⅰ	1･2･3･4 前		2		○			1					
		英語圏文学Ⅱ	2･3･4 後		2		○			1					
		文化心理学	2･3･4 後		2		○								兼1
		英語圏文化論Ⅰ	1･2･3･4 前		2		○			1					
		英語圏文化論Ⅱ	2･3･4 後		2		○			1					
		異文化間コミュニケーション	2･3･4 前		2		○								兼1
		言語学Ⅰ	2･3･4 前		2		○				1				
		言語学Ⅱ	2･3･4 後		2		○				1				
		地球市民論	1･2･3･4 後		2		○			1					
		国際社会論	2･3･4 前		2		○								兼1
		人間の安全保障	2･3･4 後		2		○								兼1
		Education and Society	2･3･4 前		2		○			1					
		Marginalized Voices	2･3･4 後		2		○			1					
		Intensive Reading Ⅰ	2･3･4 前		1			○		1					
		Intensive Reading Ⅱ	2･3･4 後		1			○		1					
		Advanced Oral Skills Ⅰ	3･4 前		1			○		1					
		Advanced Oral Skills Ⅱ	3･4 後		1			○		1					
		Academic Writing Ⅰ	3･4 前		1			○		1					
		Academic Writing Ⅱ	3･4 後		1			○		1					
		Academic Reading Ⅰ	3･4 前		1			○		1					
		Academic Reading Ⅱ	3･4 後		1			○		1					
		Academic Skills Ⅰ	4 前		1			○		1					
		Academic Skills Ⅱ	4 後		1			○		1					
		English Workshop Ⅰ	1･2･3･4 前		1			○			1				
		English Workshop Ⅱ	2･3･4 後		1			○			1				
		小計（ 28科目）	－	0	44	0		－		6	1	0	0	0	兼5
	コース専門科目（日本・アジア文化コース）	京都の自然と景観	2･3･4 後		2		○			1					
		アジアの宗教	2･3･4 前		2		○				1				
		アジアの歴史と思想	2･3･4 前		2		○								兼1
		日本の民俗文化	2･3･4 前		2		○								兼1
		アジアの民族芸能	2･3･4 前		2		○								兼1
		現代アジアの比較文化論	2･3･4 後		2		○				1				
		日本文化史概論	2･3･4 前		2		○								兼1
		日本文学史	2･3･4 後		2		○								兼1
		日本美術史	2･3･4 後		2		○			1					
		アジア美術史	2･3･4 前		2		○			1					
		日本の歴史と芸能	2･3･4 前		2		○			1					

科目区分		授業科目の名称	配当年次	単位数 必修	選択	自由	授業形態 講義	演習	実習	専任教員等配置 教授	准教授	講師	助教	助手	備考	
専門教育科目	コース専門科目（日本・アジア文化コース）	アジア交流史	2･3･4 前		2		○			1						
		伝統文化総合講座	1･2･3･4 前		2		○			1						
		口承文化の歴史	2･3･4 前		2		○								兼1	
		比較神話学	2･3･4 後		2		○								兼1	
		南島文化論	2･3･4 前		2		○				1					
		うたの文化論	1･2･3･4 後		2		○				1					
		都市伝説研究	2･3･4 後		2		○								兼1	
		説話・伝承史	1･2･3･4 後		2		○			1						
		絵画とものがたり	2･3･4 後		2		○								兼1	
		日本語学	2･3･4 前		2		○					1				
		日本語教授法	2･3･4 前		2		○			1						
		日本古典文学	2･3･4 後		2		○								兼1	
		くずし字講読	2･3･4 後		2		○								兼1	
		近代文学講読	2･3･4 後		2		○								兼1	
		小計（ 25科目）	―	0	50	0	―			5	2	1	0	0	兼11	
	コース専門科目（環境未来コース）	自然教育論	2･3･4 前		2		○			1						
		公害史	1･2･3･4 後		2		○			1						
		環境教育論	2･3･4 後		2		○			1						
		環境思想論	3･4 前		2		○			1						
		南北問題	2･3･4 前		2		○			1						
		エネルギーと環境	2･3･4 後		2		○			1						
		環境ビジネス	2･3･4 前		2		○			1						
		環境マネジメント論Ⅰ	2･3･4 前		2		○					1				
		環境マネジメント論Ⅱ	2･3･4 後		2		○					1				
		森と水の環境学	2･3･4 前		2		○			1						
		環境デザイン論	1･2･3･4 後		2		○			1						
		製品環境評価	2･3･4 後		2		○					1				
		環境政策論	2･3･4 前		2		○			1						
		地域環境論	2･3･4 後		2		○			1						
		環境社会学	2･3･4 前		2		○								兼1	
		開発教育論	2･3･4 後		2		○				1				兼1	
		生活環境学	1･2･3･4 後		2		○								兼1	
		有機農業論	2･3･4 前		2		○								兼1	
		環境経済学	2･3･4 後		2		○								兼1	
		環境法	2･3･4 前		2		○								兼1	
		生態学	2･3･4 後		2		○								兼1	
		まちづくり論	2･3･4 前		2		○								兼1	
		環境教育プログラム・デザイン	2･3･4 前		2			○							兼1	集中
		環境教育ワークショップ	2･3･4 前		2			○							兼1	集中
		環境教育実習	2･3･4 前		2			○			1				兼1	集中
		環境NGO論	2･3･4 前		2			○			1				兼1	
		小計（ 26科目）	―	0	52	0	―			6	1	2	0	0	兼8	
	コース専門科目（現代社会と人間コース）	現代社会と歴史認識Ⅰ	2･3･4 前		2		○								兼1	
		現代社会と歴史認識Ⅱ	2･3･4 後		2		○								兼1	
		日本思想史	2･3･4 後		2		○				1					
		日本社会の構造	2･3･4 前		2		○				1					
		ライフスタイル論	2･3･4 前		2		○			1						
		食と人間	2･3･4 後		2		○			1						
		人権教育論	2･3･4 前		2		○			1						
		多文化教育論	2･3･4 後		2		○			1						
		子どもの社会史	2･3･4 前		2		○				1					
		子ども支援論Ⅰ	2･3･4 後		2		○				1					
		子ども支援論Ⅱ	2･3･4 後		2		○				1					
		メディア･コミュニケーション論	2･3･4 後		2		○								兼1	
		メディア文化論	1･2･3･4 前		2		○								兼1	
		スポーツと時代	2･3･4 前		2		○			1						
		スポーツと社会	1･2･3･4 後		2		○			1						
		現代社会と哲学	2･3･4 前		2		○								兼1	
		現代社会と病理	2･3･4 前		2		○								兼1	
		高齢化社会論	2･3･4 後		2		○								兼1	
		ジェンダーと社会	2･3･4 後		2		○								兼1	
		医療と社会	2･3･4 後		2		○								兼1	

科目区分		授業科目の名称	配当年次	単位数 必修	単位数 選択	単位数 自由	授業形態 講義	授業形態 演習	授業形態 実習	専任教員等配置 教授	専任教員等配置 准教授	専任教員等配置 講師	専任教員等配置 助教	専任教員等配置 助手	備考	
専門教育科目	コース専門科目（現代社会と人間コース）	家族と社会	2･3･4 前		2		○								兼1	
		社会教育論	2･3･4 前		2		○								兼1	
		現代社会論	2･3･4 後		2		○			1						
		こころの時代と社会	1･2･3･4 前		2		○			1						
		こころと思想	2･3･4 後		2		○			1						
		メディアと政治	2･3･4 後		2		○								兼1	
		ジャーナリズム論	2･3･4 前		2		○								兼1	
		現代学校論	2･3･4 後		2		○								兼1	
		小計（ 28科目）	－	0	56	0		－		3	2	0	0	0	兼11	
	コース演習	コース演習Ⅰ	2 前		2			○		18	11	2				
		コース演習Ⅱ	2 後		2			○		18	11	2				
		コース演習Ⅲ	3 前		2			○		18	11	2				
		コース演習Ⅳ	3 後		2			○		18	11	2				
		小計（ 4科目）	－	0	8	0		－		29	12	3	0	0		
	プロジェクト演習	プロジェクト演習Ⅰ	2 前		4			○		8	3	2				
		プロジェクト演習Ⅱ	2 後		4			○		8	3	2				
		プロジェクト演習Ⅲ	3 前		4			○		8	3	2				
		プロジェクト演習Ⅳ	3 後		4			○		8	3	2				
		小計（ 4科目）	－	0	16	0		－		16	6	3	0	0		
	卒業プロジェクト	卒業プロジェクトⅠ	4 前	3				○		18	11	3				
		卒業プロジェクトⅡ	4 後	3				○		18	11	3				
		小計（ 2科目）	－	6	0	0		－		29	12	3	0	0		
	表現技法・ワークショップ科目（講義科目）	編集論Ⅰ	2･3･4 前		2		○								兼1	
		編集論Ⅱ	2･3･4 後		2		○								兼1	
		音楽とメディアⅠ	2･3･4 前		2		○								兼1	
		音楽とメディアⅡ	2･3･4 後		2		○								兼1	集中
		スポーツとメディア	2･3･4 後		2		○								兼1	集中
		作家･制作者による作品論Ⅰ	2･3･4 後		2		○								兼1	集中
		作家･制作者による作品論Ⅱ	2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		作家･制作者による作品論Ⅲ	2･3･4 後		2		○								兼1	集中
		作家･制作者による作品論Ⅳ	2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		小計（ 9科目）	－	0	18	0		－		0	0	0	0	0	兼8	
	表現技法・ワークショップ科目（表現技法科目）	プレゼンテーション技法	1･2･3･4 前		2			○							兼1	集中
		写真技法	1･2･3･4 前		2			○							兼1	
		視聴覚記録の技法	1･2･3･4 後		2			○			1					
		小計（ 3科目）	－	0	6	0		－		0	1	0	0	0	兼2	
	表現技法・ワークショップ科目（ワークショップ科目）	クリエイティブライティングⅠ	2･3･4 前		2			○							兼1	
		クリエイティブライティングⅡ	2･3･4 後		2			○							兼1	
		ドキュメンタリー制作Ⅰ	2･3･4 前		2			○							兼1	集中
		ドキュメンタリー制作Ⅱ	2･3･4 後		2			○							兼1	集中
		ノンフィクション・ルポルタージュⅠ	2･3･4 前		2			○							兼1	集中
		ノンフィクション・ルポルタージュⅡ	2･3･4 後		2			○							兼1	集中
		シナリオ制作Ⅰ	2･3･4 前		2			○							兼1	集中
		シナリオ制作Ⅱ	2･3･4 後		2			○							兼1	集中
		編集実践Ⅰ	2･3･4 前		2			○							兼1	集中
		編集実践Ⅱ	2･3･4 後		2			○							兼1	集中
		広告表現Ⅰ	2･3･4 前		2			○							兼1	集中
		広告表現Ⅱ	2･3･4 後		2			○							兼1	集中
		写真表現	2･3･4 後		2			○							兼1	
		図書館リテラシー	2･3･4 前		2			○		1						
		図書館文化演習Ⅰ	2･3･4 後		2			○		1						
		図書館文化演習Ⅱ	3･4 前		2			○		1						
		図書館文化演習Ⅲ	3･4 後		2			○		1						
		点字講座Ⅰ	2･3･4 前		2			○							兼1	
		点字講座Ⅱ	2･3･4 後		2			○							兼1	
		伝統楽器演習	2･3･4 前		2			○							兼1	
		書道	2･3･4 後		2			○							兼1	
		農的くらしⅠ	2･3･4 前		2			○							兼1	
		農的くらしⅡ	2･3･4 後		2			○							兼1	
		小計（ 23科目）	－	0	46	0		－		1	0	0	0	0	兼12	

科目区分		授業科目の名称	配当年次	単位数 必修	単位数 選択	単位数 自由	授業形態 講義	授業形態 演習	授業形態 実習	専任教員等配置 教授	専任教員等配置 准教授	専任教員等配置 講師	専任教員等配置 助教	専任教員等配置 助手	備考	
専門教育科目	地域研究科目（講義科目）	社会統計学	1･2･3･4 後		2		○			1						
		社会調査法Ⅰ	1･2･3･4 前		2		○					1				
		社会調査法Ⅱ	1･2･3･4 後		2		○								兼1	
		社会調査特論	1･2･3･4 後		2		○								兼1	
		社会調査技法Ⅰ	1･2･3･4 前		2		○								兼1	
		社会調査技法Ⅱ	1･2･3･4 前		2		○								兼1	
		京都地域学	1･2･3･4 前		2		○			1						
		京都の産業	1･2･3･4 後		2		○								兼1	
		京都の暮らしと祭礼	1･2･3･4 後		2		○			1						
		京都のまちづくり	1･2･3･4 後		2		○								兼1	
		日本の自然と風土	1･2･3･4 前		2		○			1						
		地域研究Ⅰ	1･2･3･4 前		2		○								兼1	
		地域研究Ⅱ	1･2･3･4 後		2		○			1						
		地域研究Ⅲ	1･2･3･4 前		2		○								兼1	
		地域研究Ⅳ	1･2･3･4 後		2		○								兼1	
		地域研究Ⅴ	1･2･3･4 前		2		○								兼1	
		地域研究Ⅵ	1･2･3･4 後		2		○								兼1	
		地域研究Ⅶ	1･2･3･4 前		2		○								兼1	
		地域研究Ⅷ	1･2･3･4 前		2		○			1						
		地域研究Ⅸ	1･2･3･4 前		2		○								兼1	
		小計（ 20科目）	－	0	40	0	－			5	1	0	0	0	兼11	
	（地域研究科目（現地研究科目）	国内フィールドプログラムⅠ	1･2･3･4 前		2			○		1						集中
		国内フィールドプログラムⅡ	1･2･3･4 前		2			○		1						集中
		国内フィールドプログラムⅢ	1･2･3･4 前		2			○		1						集中
		国内フィールドプログラムⅣ	1･2･3･4 前		2			○			1					集中
		海外フィールドプログラムⅠ	1･2･3･4 前		2			○		1						集中
		海外フィールドプログラムⅡ	1･2･3･4 前		2			○		1						集中
		海外フィールドプログラムⅢ	1･2･3･4 後		2			○		1						集中
		海外フィールドプログラムⅣ	1･2･3･4 後		2			○				1				集中
		小計（ 8科目）	－	0	16	0	－			6	1	1	0	0		
合計（ 314科目）			－	14	597	0	－			29	12	3	0	0	兼122	

学位又は称号	学士（人文）	学位又は学科の分野	社会学・社会福祉学関係

教育課程の編成方針

人文学部の組織を改編し、教育内容を変更する主な眼目は、それぞれ広範な教育分野を含む大規模な３つの既存学科を廃止し、教育内容が絞り込まれ、かつ内容の一貫性が高い中規模のコースを５つ設けることにある。既存の３学科に代わり、新たに総合人文学科を新設し、学部単位で合否判定を行って入学した学生を２年次に各コースに分属させ、更に教養教育と専門基礎教育を目的とした科目配置を行い、主専攻・副専攻の組合せを基本とした履修を推進することとしたものである。

この改組の目的は、人文学部の学士課程教育にて、平成１７年の中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」で記されている「総合的教養教育型」を目指すことにある。答申においてこの型として例示されているのは「学士課程段階では、教養教育と専門基礎教育を中心として主専攻・副専攻の組合せを基本としつつ、専門教育は修士・博士課程や専門職学位課程の段階で完成させるもの」であり、改組後の人文学部学士課程教育は基本的にこの立場をとることとした。

人文学部総合人文学科の科目は大きく分けて基礎教育科目と専門教育科目に分けられる。基礎教育科目は、教養科目（53科目）、語学科目（38科目）、情報基礎科目（4科目）、情報リテラシー科目（6科目）、大学入門科目（6科目）、合計107科目にて構成される。既存の３学科においては、基礎教育科目はＡ群（一般教養系科目58科目）、Ｂ群（スポーツ系科目6科目）、Ｃ群（語学系科目36科目）の合計100科目で構成されているが、内容に即した科目群の名称にあらためるとともに、各科目の必要性を精査し、教養教育を強く推進するため、体系的かつ解り易く再配置したものである。

専門教育科目は、各コース専門科目（5コース合計134科目）、コース演習科目（4科目）、プロジェクト演習科目（4科目）、卒業プロジェクト科目（2科目）以外に、表現技法・ワークショップ科目群35科目（講義科目（9科目）、表現技法科目（3科目）、ワークショップ科目（23科目））および地域研究科目群28科目（講義科目（20科目）、現地研究科目（8科目））の合計207科目を配置した。それぞれのコースは、各コース専門科目、同演習科目以外に基礎教育科目、表現技法・ワークショップ科目群および地域研究科目群などの中からコースの教育目標に合致した科目をいくつか指定し、それらの科目をコース指定科目と呼ぶ。コースに所属した学生はコース指定科目の中から必要な単位数を修得することが必要である。既存３学科の専門教育科目は、各学科の専門科目（環境社会学科62科目、社会メディア学科57科目、文化表現学科53科目）と学部共通科目（合計77科目、内訳はメディア・表現科目群20科目、ワークショップ科目群26科目、地域研究科目群28科目、総合研究科目群3科目）にて構成されていたが、専門基礎教育を目的とした主専攻・副専攻の組合せによる履修を推進するため、各科目の必要性を精査し、体系的かつ解り易く再配置したものである。

卒業要件及び履修方法

総合人文学科の教育課程は基礎教育科目と専門教育科目から構成され、卒業要件を合計124単位以上の履修とする。そのうち必修科目8単位を含めた36単位は基礎教育科目から選択履修し、所属するコースが指定した科目からの24単位と、他コース専門科目からの12単位を含めた40単位を専門教育科目及び基礎教育科目から選択履修し、必修科目6単位を含めた20単位を専門教育科目から選択履修する。残余の28単位については、基礎教育科目及び専門教育科目、他学部及び他大学等の専門教育科目を自由に選択履修し、その単位を修得したときに卒業要件単位に含むものとする。

授業期間等

１学年の学期区分	2	期
１学期の授業期間	15	週
１時限の授業時間	90	分

教　育　課　程　等　の　概　要

（人文学部環境社会学科）

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
基礎教育科目（A群）	哲学の歴史	1･2･3･4		2		○								非開講
	現代と哲学	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	宗教学Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	宗教学Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	倫理学	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	日本の文学	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	世界の文学	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	言語学Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	言語学Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	心理学Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	心理学Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	芸術学概論	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	考古学Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	考古学Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	民俗学Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	民俗学Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	地理と歴史	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	地理と社会	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	教育学Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	教育学Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	近現代の歴史Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	近現代の歴史Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	社会学Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	社会学Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	政治学Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	政治学Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	法学概論	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	日本国憲法	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	経済学Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	経済学Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	文化人類学Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	文化人類学Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	認知の科学Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	認知の科学Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	科学史Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	科学史Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	自然科学概論Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	自然科学概論Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	環境と文明Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	環境と文明Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	生物学Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	生物学Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	数学Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	数学Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	情報処理基礎Ⅰ	1･2･3･4		1			○							非開講
	情報処理基礎Ⅱ	1･2･3･4		1			○							非開講
	点字講座Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	点字講座Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	総合講座Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	総合講座Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○			1					
	総合講座Ⅲ	1･2･3･4		2		○								非開講
	総合講座Ⅳ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	生涯学習概論	1･2･3　前		2		○								兼1
	人権教育論	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	現代学校論	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	博物館学	1･2･3･4　前		2		○								兼1

科目区分		授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等配置					備考
				必修	選択	自由	講義	演習	実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
		教育学概論	1･2･3　前		2		○								兼1
		図書館概論	1　前		2		○								兼1
		小計（　58科目）	－	0	114	0		－		1	0	0	0	0	兼28
基礎教育科目（B群）		健康学Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
		健康学Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
		スポーツ演習Ⅰ	1･2･3･4　前		2			○							兼9
		スポーツ演習Ⅱ	1･2･3･4　後		2			○							兼9
		上級スポーツ演習Ⅰ	2･3･4　前		2			○							兼6
		上級スポーツ演習Ⅱ	2･3･4　後		2			○							兼6
		小計（　6科目）	－	0	12	0		－		0	0	0	0	0	兼11
基礎教育科目（C群）		英語Ⅰ	1　前		2			○		1					兼5
		英語Ⅱ	1　後		2			○		1					兼5
		英語Ⅲ	2･3･4		2			○							非開講
		英語Ⅳ	2･3･4		2			○							非開講
		上級英語Ⅰ	1･2･3･4　前		2			○							兼4
		上級英語Ⅱ	1･2･3･4　後		2			○							兼4
		上級英語Ⅲ	1･2･3･4　前		2			○							兼1
		上級英語Ⅳ	1･2･3･4　後		2			○							兼1
		日本語Ⅰ	1　前		2			○		1					兼1
		日本語Ⅱ	1　後		2			○		1					兼1
		日本語Ⅲ	2･3･4		2			○							非開講
		日本語Ⅳ	2･3･4		2			○							非開講
		上級日本語Ⅰ	1･2･3･4　前		2			○		1					兼1
		上級日本語Ⅱ	1･2･3･4　後		2			○		1					兼1
		上級日本語Ⅲ	1･2･3･4		2			○							非開講
		上級日本語Ⅳ	1･2･3･4		2			○							非開講
		フランス語Ⅰ	1･2･3･4　前		2			○							兼1
		フランス語Ⅱ	1･2･3･4　後		2			○							兼1
		フランス語Ⅲ	2･3･4　前		2			○							兼1
		フランス語Ⅳ	2･3･4　後		2			○							兼1
		中国語Ⅰ	1･2･3･4　前		2			○							兼1
		中国語Ⅱ	1･2･3･4　後		2			○							兼1
		中国語Ⅲ	2･3･4　前		2			○							兼1
		中国語Ⅳ	2･3･4　後		2			○							兼1
		朝鮮語Ⅰ	1･2･3･4　前		2			○							兼1
		朝鮮語Ⅱ	1･2･3･4　後		2			○							兼1
		朝鮮語Ⅲ	2･3･4　前		2			○							兼1
		朝鮮語Ⅳ	2･3･4　後		2			○							兼1
		タイ語Ⅰ	1･2･3･4　前		2			○							兼2
		タイ語Ⅱ	1･2･3･4　後		2			○							兼2
		タイ語Ⅲ	2･3･4　前		2			○							兼1
		タイ語Ⅳ	2･3･4　後		2			○							兼1
		原典講読Ⅰ	2･3･4　前		2			○							兼9
		原典講読Ⅱ	2･3･4　後		2			○							兼8
		原典講読Ⅲ	2･3･4　前		2			○							兼2
		原典講読Ⅳ	2･3･4　後		2			○							兼2
		小計（　36科目）	－	0	72	0		－		1	0	0	0	0	兼20
環境社会専門科目	専門教育科目（専門基礎科目）	入学セミナー	1　前	2			○			1					兼2
		「環境と社会」論Ⅰ	1　前	2			○			1	1				
		「環境と社会」論Ⅱ	1　後	2			○			1					
		環境社会基礎演習Ⅰ	1　前	2				○		4	1	2			
		環境社会基礎演習Ⅱ	1　後	2				○		4	1	2			
		環境社会基礎演習Ⅲ	2　前	2				○		6	1	2			
		小計（　6科目）	－	12	0	0		－		7	1	2	0	0	
	専門教育科目（環境学の理論領域）	環境社会学	1　前		2		○								兼1
		環境問題史	1　後		2		○								兼1
		ライフスタイル論	1　前		2		○								兼1
		環境マネジメント論	1　後		2		○			1					
		エネルギーと社会	2･3･4　前		2		○			1					
		環境経済学	2･3･4　前		2		○								兼1
		環境思想論	2･3･4　前		2		○			1					

科目区分		授業科目の名称	配当年次	単位数 必修	単位数 選択	単位数 自由	授業形態 講義	授業形態 演習	授業形態 実習	専任教員等配置 教授	専任教員等配置 准教授	専任教員等配置 講師	専任教員等配置 助教	専任教員等配置 助手	備考	
環境社会専門科目		環境と国際関係	2･3･4 前		2		○								兼1	
		社会調査	2･3･4 前		2		○					1				
		社会統計学	2･3･4 前		2		○			1						
		小計（ 10科目）	－	0	20	0		－		4	0	1	0	0	兼5	
	専門教育科目（環境問題の諸領域群）	南北問題	2･3･4 前		2		○				1					
		風土と民俗	2･3･4 前		2		○			1						
		民族と環境	2･3･4 後		2		○			1						
		食と環境	2･3･4 後		2		○			1						
		植生景観の歴史	2･3･4 後		2		○			1						
		コモンズ論	2･3･4 後		2		○								兼1	
		有機農業論	2･3･4 後		2		○								兼1	
		動物生態学	2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		保全生態学	2･3･4 後		2		○								兼1	
		森林生態学	2･3･4 前		2		○			1						
		環境アセスメント	2･3･4 後		2		○			1						
		化学物質と環境	2･3･4 後		2		○								兼1	
		環境家計簿	2･3･4 後		2		○								兼1	
		科学技術と公害	2･3･4 後		2		○			1						
		科学と社会	2･3･4 前		2		○								兼1	
		生命観と科学	2･3･4 後		2		○								兼1	
		社会統計学応用	2･3･4 後		2		○			1						
		小計（ 17科目）	－	0	34	0		－		6	1	0	0	0	兼7	
	専門教育科目（人文社会科目群）	生活環境学	2･3･4 前		2		○								兼1	
		環境政策論	2･3･4 前		2		○								兼1	
		ＮＧＯ論	2･3･4 後		2		○				1					
		環境と平和	2･3･4 後		2		○								兼1	
		まちづくり論	2･3･4 後		2		○								兼1	
		環境教育論	2･3･4 後		2		○			1						
		自然教育論	2･3･4 前		2		○			1						
		環境ジャーナリズム	2･3･4 後		2		○								兼1	
		環境法	2･3･4 後		2		○								兼1	
		小計（ 9科目）	－	0	18	0		－		2	1	0	0	0	兼4	
	専門教育科目（環境経営科目群）	環境監査Ⅰ	2･3･4 前		2		○					1				
		環境監査Ⅱ	2･3･4 後		2		○					1				
		ベンチャーと経営	2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		環境審査実践	2･3･4		2		○								非開講	
		環境ビジネス	2･3･4 前		2		○			1						
		製品環境評価	2･3･4 後		2		○					1				
		環境経営と法	2･3･4 前		2		○								兼1	
		森林マネジメント	2･3･4 前		2		○			1						
		環境ソリューション	2･3･4		2		○								非開講	
		小計（ 9科目）	－	0	18	0		－		2	0	2	0	0	兼2	
	専門演習科目	専門演習Ⅰ	2 後	2				○		6	1	2				
		専門演習Ⅱ	3 前	2				○		6	1	2				
		調査演習Ⅰ	3 後		6			○		6	1	1				集中
		調査演習Ⅱ	3 後		6			○		6	1	1				集中
		調査演習Ⅲ	3 後		6			○		6	1	1				集中
		環境マネジメント実務演習Ⅰ	3 後		6			○				1				集中
		環境マネジメント実務演習Ⅱ	3 後		6			○				1				集中
		環境マネジメント実務演習Ⅲ	3 後		6			○				1				集中
		卒業論文・卒業制作演習Ⅰ	4 前	2				○		7	1	2				
		卒業論文・卒業制作演習Ⅱ	4 後	2				○		7	1	2				
		卒業論文・卒業制作	4 通年	6				○		7	1	2				
		小計（ 11科目）	－	14	36	0		－		7	1	2	0	0		
人文学部共通科目	専門教育科目（メディア・表現科目群）	情報リテラシーⅠ	1 前	1				○							兼1	
		情報リテラシーⅡ	1 後	1				○							兼1	
		メディア・システム設計Ⅰ	2･3･4 前		2		○								兼1	
		メディア・システム設計Ⅱ	2･3･4 後		2		○								兼2	集中
		メディア・データ編集Ⅰ	2･3･4 前		2		○								兼1	
		メディア・データ編集Ⅱ	2･3･4 後		2		○								兼1	
		情報ネットワーク論	2･3 後		2		○								兼1	
		メディア・コミュニケーション論	2･3 前		2		○								兼1	

科目区分		授業科目の名称	配当年次	単位数 必修	単位数 選択	単位数 自由	授業形態 講義	授業形態 演習	授業形態 実習	専任教員等配置 教授	専任教員等配置 准教授	専任教員等配置 講師	専任教員等配置 助教	専任教員等配置 助手	備考	
人文学部共通科目	専門教育科目（メディア・表現科目群）	情報メディアと法律	2･3･4 後		2		○								兼1	
		情報と倫理	2･3･4 前		2		○								兼1	
		メディア・リテラシー論	2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		音楽とメディアⅠ	2･3･4 後		2		○								兼1	
		音楽とメディアⅡ	2･3･4 後		2		○								兼1	集中
		編集論Ⅰ	2･3･4 前		2		○								兼1	
		編集論Ⅱ	2･3･4 後		2		○								兼1	
		スポーツとメディア	2･3･4 後		2		○								兼1	集中
		作家・制作者による作品論Ⅰ	2･3･4 後		2		○								兼1	集中
		作家・制作者による作品論Ⅱ	2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		作家・制作者による作品論Ⅲ	2･3･4 後		2		○								兼1	集中
		作家・制作者による作品論Ⅳ	2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		小計（ 20科目）	―	2	36	0	―			0	0	0	0	0	兼18	
	専門教育科目（ワークショップ科目群）	日本語リテラシーⅠ	1 前		4		○								兼4	
		日本語リテラシーⅡ	1 後		4		○								兼4	
		言語表現技法Ⅰ	2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		言語表現技法Ⅱ	2･3･4 後		2		○								兼1	集中
		プレゼンテーション技法	2･3･4 前		2		○								兼2	集中
		視聴覚記録の技法	1 後		2		○								兼3	
		ドキュメンタリー制作Ⅰ	2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		ドキュメンタリー制作Ⅱ	2･3･4 後		2		○								兼1	集中
		ノンフィクション・ルポルタージュⅠ	2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		ノンフィクション・ルポルタージュⅡ	2･3･4 後		2		○								兼1	集中
		シナリオ技法Ⅰ	2･3･4 前		2		○								兼2	集中
		シナリオ技法Ⅱ	2･3･4 後		2		○								兼2	集中
		編集技法Ⅰ	2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		編集技法Ⅱ	2･3･4 後		2		○								兼1	集中
		広告表現技法Ⅰ	2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		広告表現技法Ⅱ	2･3･4 後		2		○								兼1	集中
		写真表現技法Ⅰ	2･3･4 前		2		○								兼1	
		写真表現技法Ⅱ	2･3･4 後		2		○								兼1	
		農的くらしⅠ	2･3･4 前		2		○								兼1	
		農的くらしⅡ	2･3･4 後		2		○								兼1	
		社会調査技法	2･3･4 前		2		○								兼1	
		環境教育プログラム・デザイン演習	2･3･4 前		2			○							兼1	集中
		環境教育ワークショップ演習	2･3･4 前		2			○							兼1	集中
		環境教育実習	2･3･4 前		2			○		1	1					集中
		開発教育ワークショップ	2･3･4 前		2			○							兼1	集中
		インターンシップ	3･4 前		2				○	7	1	2			兼15	集中
		小計（ 26科目）	―	0	56	0	―			7	1	2	0	0	兼27	
	専門教育科目（地域研究科目群）	京都地域学	2･3･4 前		2		○								兼1	
		京都の産業	2･3･4 後		2		○								兼1	
		京都の自然と景観	2･3･4 後		2		○			1						
		京都の暮らしと祭礼	2･3･4 前		2		○								兼1	
		京都のまちづくり	2･3･4 後		2		○								兼1	
		琵琶湖学Ⅰ	2･3･4 後		2		○			1						隔年開講・集中
		琵琶湖学Ⅱ	2･3･4		2		○								非開講	隔年開講・集中
		アジアの地域研究Ⅰ	2･3･4 前		2		○								兼1	
		アジアの地域研究Ⅱ	2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		アジアの地域研究Ⅲ	2･3･4 前		2		○								兼1	
		アジアの地域研究Ⅳ	2･3･4		2		○								非開講	
		アジアの地域研究Ⅴ	2･3･4 前		2		○								兼1	
		地域研究特別講義Ⅰ	2･3･4 後		2		○								兼1	集中
		地域研究特別講義Ⅱ	2･3･4 前		2		○								兼1	
		地域研究特別講義Ⅲ	2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		地域研究特別講義Ⅳ	2･3･4 前		2		○								兼1	
		地域研究特別講義Ⅴ	2･3･4 後		2		○								兼1	
		地域研究特別講義Ⅵ	2･3･4 後		2		○								兼1	
		地域研究方法論Ⅰ	2･3		2		○								非開講	
		地域研究方法論Ⅱ	2･3 後		2		○								兼1	
		国内現地研究Ⅰ	1･2･3･4 前		2		○			2						集中
		国内現地研究Ⅱ	1･2･3･4 前		2		○			1						集中

科目区分		授業科目の名称	配当年次	単位数 必修	単位数 選択	単位数 自由	授業形態 講義	授業形態 演習	授業形態 実習	専任教員等配置 教授	専任教員等配置 准教授	専任教員等配置 講師	専任教員等配置 助教	専任教員等配置 助手	備考	
人文学部共通科目	専門教育科目（地域研究科目群）	国内現地研究Ⅲ	1･2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		国内現地研究Ⅳ	1･2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		海外現地研究Ⅰ	1･2･3･4 前		2		○			1						集中
		海外現地研究Ⅱ	1･2･3･4 前		2		○					1				集中
		海外現地研究Ⅲ	1･2･3･4 後		2		○				1					集中
		海外現地研究Ⅳ	1･2･3･4 後		2		○								兼2	集中
		小計（ 28科目）	－	0	56	0	－			5	1	1	0	0	兼13	
	専門教育科目（総合研究科目群）	総合研究演習Ⅰ	1･2･3 前		6			○							兼3	集中
		総合研究演習Ⅱ	1･2･3 後		6			○		3						集中
		総合研究演習Ⅲ	1･2･3		6			○							非開講	集中
		小計（ 3科目）	－	0	18	0	－			3	0	0	0	0	兼2	
合計（ 239科目）			－	28	490	0	－			8	1	2	0	0	兼137	

学位又は称号	学士（人文）	学位又は学科の分野	社会学・社会福祉学関係

教育課程の編成方針

卒業要件及び履修方法	授業期間等	
	１学年の学期区分	期
	１学期の授業期間	週
	１時限の授業時間	分

教　育　課　程　等　の　概　要

（人文学部社会メディア学科）

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
基礎教育科目（A群）	哲学の歴史	1･2･3･4		2		○								非開講
	現代と哲学	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	宗教学Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○				1				
	宗教学Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○				1				
	倫理学	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	日本の文学	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	世界の文学	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	言語学Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	言語学Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	心理学Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	心理学Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	芸術学概論	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	考古学Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	考古学Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	民俗学Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	民俗学Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	地理と歴史	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	地理と社会	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	教育学Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○			1					
	教育学Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○			1					
	近現代の歴史Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	近現代の歴史Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	社会学Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	社会学Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	政治学Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	政治学Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	法学概論	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	日本国憲法	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	経済学Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	経済学Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	文化人類学Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	文化人類学Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	認知の科学Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	認知の科学Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	科学史Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○			1					
	科学史Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○			1					
	自然科学概論Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	自然科学概論Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	環境と文明Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	環境と文明Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	生物学Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	生物学Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	数学Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	数学Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	情報処理基礎Ⅰ	1･2･3･4　前		1			○							非開講
	情報処理基礎Ⅱ	1･2･3･4　後		1			○							非開講
	点字講座Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	点字講座Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	総合講座Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	総合講座Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	総合講座Ⅲ	1･2･3･4		2		○								非開講
	総合講座Ⅳ	1･2･3･4　前		2		○			1					
	生涯学習概論	1･2･3　前		2		○								兼1
	人権教育論	1･2･3･4　後		2		○			1					
	現代学校論	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	博物館学	1･2･3･4　前		2		○								兼1

科目区分		授業科目の名称	配当年次	単位数 必修	単位数 選択	単位数 自由	授業形態 講義	授業形態 演習	授業形態 実習	専任教員等配置 教授	専任教員等配置 准教授	専任教員等配置 講師	専任教員等配置 助教	専任教員等配置 助手	備考
		教育学概論	1･2･3 前		2		○								兼1
		図書館概論	1 前		2		○			1					
		小計（ 58科目）	－	0	114	0		－		4	1	0	0	0	兼25
基礎教育科目（B群）		健康学Ⅰ	1･2･3･4 前		2		○			1					
		健康学Ⅱ	1･2･3･4 後		2		○			1					
		スポーツ演習Ⅰ	1･2･3･4 前		2			○							兼9
		スポーツ演習Ⅱ	1･2･3･4 後		2			○							兼9
		上級スポーツ演習Ⅰ	2･3･4 前		2			○							兼6
		上級スポーツ演習Ⅱ	2･3･4 後		2			○							兼6
		小計（ 6科目）	－	0	12	0		－		1	0	0	0	0	兼10
基礎教育科目（C群）		英語Ⅰ	1 前		2			○							兼6
		英語Ⅱ	1 後		2			○							兼6
		英語Ⅲ	2･3･4		2			○							非開講
		英語Ⅳ	2･3･4		2			○							非開講
		上級英語Ⅰ	1･2･3･4 前		2			○							兼4
		上級英語Ⅱ	1･2･3･4 後		2			○							兼4
		上級英語Ⅲ	1･2･3･4 前		2			○							兼1
		上級英語Ⅳ	1･2･3･4 後		2			○							兼1
		日本語Ⅰ	1 前		2			○							兼2
		日本語Ⅱ	1 後		2			○							兼2
		日本語Ⅲ	2･3･4		2			○							非開講
		日本語Ⅳ	2･3･4		2			○							非開講
		上級日本語Ⅰ	1･2･3･4 前		2			○							兼2
		上級日本語Ⅱ	1･2･3･4 後		2			○							兼2
		上級日本語Ⅲ	1･2･3･4		2			○							非開講
		上級日本語Ⅳ	1･2･3･4		2			○							非開講
		フランス語Ⅰ	1･2･3･4 前		2			○							兼1
		フランス語Ⅱ	1･2･3･4 後		2			○							兼1
		フランス語Ⅲ	2･3･4 前		2			○							兼1
		フランス語Ⅳ	2･3･4 後		2			○							兼1
		中国語Ⅰ	1･2･3･4 前		2			○							兼1
		中国語Ⅱ	1･2･3･4 後		2			○							兼1
		中国語Ⅲ	2･3･4 前		2			○							兼1
		中国語Ⅳ	2･3･4 後		2			○							兼1
		朝鮮語Ⅰ	1･2･3･4 前		2			○							兼1
		朝鮮語Ⅱ	1･2･3･4 後		2			○							兼1
		朝鮮語Ⅲ	2･3･4 前		2			○							兼1
		朝鮮語Ⅳ	2･3･4 後		2			○							兼1
		タイ語Ⅰ	1･2･3･4 前		2			○							兼2
		タイ語Ⅱ	1･2･3･4 後		2			○							兼2
		タイ語Ⅲ	2･3･4 前		2			○							兼1
		タイ語Ⅳ	2･3･4 後		2			○							兼1
		原典講読Ⅰ	2･3･4 前		2			○		3					兼6
		原典講読Ⅱ	2･3･4 後		2			○		3					兼5
		原典講読Ⅲ	2･3･4 前		2			○		1					兼1
		原典講読Ⅳ	2･3･4 後		2			○		1					兼1
		小計（ 36科目）	－	0	72	0		－		4	0	0	0	0	兼20
社会メディア専門科目	（専門基礎科目）専門教育科目	入学セミナー	1 前	2			○			1					兼2
		社会メディア論Ⅰ	1 前	2			○				1				
		社会メディア論Ⅱ	1 後	2			○			1	1				
		社会メディア基礎演習Ⅰ	1 前	2				○		6	3				
		社会メディア基礎演習Ⅱ	1 後	2				○		6	3				
		社会メディア基礎演習Ⅲ	2 前	2				○		9	4				
		小計（ 6科目）	－	12	0	0		－		10	4	0	0	0	
	（現代社会の思想群）専門教育科目	現代の思想	2･3 前		2		○								兼1
		日本の思想	2･3 後		2		○				1				
		現代の宗教	2･3 前		2		○								兼1
		宗教と社会	2･3･4 後		2		○				1				
		メディアの思想	2･3･4 前		2		○								兼1
		生命科学と倫理	2･3･4 前		2		○								兼1
		現代社会と歴史認識Ⅰ	2･3･4 前		2		○								兼1
		現代社会と歴史認識Ⅱ	2･3･4 後		2		○								兼1

科目区分		授業科目の名称	配当年次	単位数 必修	単位数 選択	単位数 自由	授業形態 講義	授業形態 演習	授業形態 実習	専任教員等配置 教授	専任教員等配置 准教授	専任教員等配置 講師	専任教員等配置 助教	専任教員等配置 助手	備考	
社会メディア専門科目		小計（ 8科目）	－	0	16	0		－		0	2	0	0	0	兼4	
	専門教育科目（現代社会の構造群）	国際社会の構造	2･3 前		2		○			1						
		国際社会と経済	2･3 前		2		○								兼1	
		国際社会と法	2･3 前		2		○								兼1	
		コミュニティと社会	2･3 前		2		○								兼1	
		日本社会の構造	2･3･4 前		2		○				1					
		グローバリズムと文化	2･3･4 後		2		○			1						
		グローバリズムとメディア	2･3･4 前		2		○								兼1	
		家族と社会	2･3･4 後		2		○								兼1	
		現代政治と市民社会	2･3･4 前		2		○								兼1	
		消費と社会	2･3･4 後		2		○								兼1	
		地域の時代と社会	2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		小計（ 11科目）	－	0	22	0		－		2	2	0	0	0	兼7	
	専門教育科目（現代社会の現場群）	現代社会の病理Ⅰ	2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		現代社会の病理Ⅱ	2･3･4 後		2		○								兼1	
		国際社会とＮＧＯ	2･3･4 後		2		○								兼1	
		グローバル社会と紛争	2･3･4 後		2		○			1						集中
		青少年と社会	2･3･4 後		2		○				1					
		高齢化社会論	2･3･4 後		2		○								兼1	
		学校と教育	2･3･4 前		2		○			1						
		ジェンダーと社会	2･3･4 後		2		○								兼1	
		スポーツと社会Ⅰ	2･3･4 前		2		○			1						
		スポーツと社会Ⅱ	2･3･4 後		2		○			1						
		持続可能な社会Ⅰ	2･3･4		2		○								非開講	
		持続可能な社会Ⅱ	2･3･4 後		2		○								兼1	集中
		科学技術と社会Ⅰ	2･3･4 前		2		○			1						
		科学技術と社会Ⅱ	2･3･4 後		2		○			1						
		市民運動	2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		人間と安全保障	2･3･4 前		2		○								兼1	
		社会と教育	2･3･4 後		2		○			1						
		在日外国人と日本社会	2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		子どもと人権	2･3･4 前		2		○								兼1	
		若者文化と社会	2･3･4 前		2		○								兼1	
		医療と社会	2･3･4 前		2		○								兼1	
		社会調査Ⅰ	2･3･4 前		2		○								兼1	
		社会調査Ⅱ	2･3･4 後		2		○								兼1	
		小計（ 23科目）	－	0	46	0		－		4	0	0	0	0	兼11	
	専門演習科目	専門演習Ⅰ	2 後	2				○		9	4					
		専門演習Ⅱ	3 前	2				○		9	4					
		専門演習Ⅲ	3 後		2			○		9	4					
		調査演習Ⅰ	3 後		6			○		7	3					集中
		調査演習Ⅱ	3 後		6			○		7	3					集中
		調査演習Ⅲ	3 後		6			○		7	3					集中
		卒業論文・卒業制作演習Ⅰ	4 前	2				○		8	4					
		卒業論文・卒業制作演習Ⅱ	4 後	2				○		8	4					
		卒業論文・卒業制作	4 通年	6				○		8	4					
		小計（ 9科目）	－	14	20	0		－		10	4	0	0	0		
人文学部共通科目	専門教育科目（メディア・表現科目群）	情報リテラシーⅠ	1 前	1				○							兼1	
		情報リテラシーⅡ	1 後	1				○							兼1	
		メディア・システム設計Ⅰ	2･3･4 前		2		○								兼1	
		メディア・システム設計Ⅱ	2･3･4 後		2		○								兼2	集中
		メディア・データ編集Ⅰ	2･3･4 前		2		○								兼1	
		メディア・データ編集Ⅱ	2･3･4 後		2		○								兼1	
		情報ネットワーク論	2･3 後		2		○			1						
		メディア・コミュニケーション論	2･3 前		2		○								兼1	
		情報メディアと法律	2･3･4 後		2		○								兼1	
		情報と倫理	2･3･4 前		2		○								兼1	
		メディア・リテラシー論	2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		音楽とメディアⅠ	2･3･4 後		2		○								兼1	
		音楽とメディアⅡ	2･3･4 後		2		○								兼1	集中
		編集論Ⅰ	2･3･4 前		2		○								兼1	
		編集論Ⅱ	2･3･4 後		2		○								兼1	

科目区分		授業科目の名称	配当年次	単位数 必修	単位数 選択	単位数 自由	授業形態 講義	授業形態 演習	授業形態 実習	専任教員等配置 教授	専任教員等配置 准教授	専任教員等配置 講師	専任教員等配置 助教	専任教員等配置 助手	備考	
人文学部共通科目		スポーツとメディア	2･3･4 後		2		○								兼1	集中
		作家・制作者による作品論Ⅰ	2･3･4 後		2		○								兼1	集中
		作家・制作者による作品論Ⅱ	2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		作家・制作者による作品論Ⅲ	2･3･4 後		2		○								兼1	集中
		作家・制作者による作品論Ⅳ	2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		小計（ 20科目）	―	2	36	0		―		1	0	0	0	0	兼17	
	専門教育科目（ワークショップ科目群）	日本語リテラシーⅠ	1 前		4		○								兼4	
		日本語リテラシーⅡ	1 後		4		○								兼4	
		言語表現技法Ⅰ	2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		言語表現技法Ⅱ	2･3･4 後		2		○								兼1	集中
		プレゼンテーション技法	2･3･4 前		2		○								兼2	集中
		視聴覚記録の技法	1 後		2		○				1				兼2	
		ドキュメンタリー制作Ⅰ	2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		ドキュメンタリー制作Ⅱ	2･3･4 後		2		○								兼1	集中
		ノンフィクション・ルポルタージュⅠ	2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		ノンフィクション・ルポルタージュⅡ	2･3･4 後		2		○								兼1	集中
		シナリオ技法Ⅰ	2･3･4 前		2		○								兼2	集中
		シナリオ技法Ⅱ	2･3･4 後		2		○								兼2	集中
		編集技法Ⅰ	2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		編集技法Ⅱ	2･3･4 後		2		○								兼1	集中
		広告表現技法Ⅰ	2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		広告表現技法Ⅱ	2･3･4 後		2		○								兼1	集中
		写真表現技法Ⅰ	2･3･4 前		2		○								兼1	
		写真表現技法Ⅱ	2･3･4 後		2		○								兼1	
		農的くらしⅠ	2･3･4 前		2		○								兼1	
		農的くらしⅡ	2･3･4 後		2		○								兼1	
		社会調査技法	2･3･4 前		2		○								兼1	
		環境教育プログラム・デザイン演習	2･3･4 前		2			○							兼1	集中
		環境教育ワークショップ演習	2･3･4 前		2			○							兼1	集中
		環境教育実習	2･3･4 前		2			○							兼2	集中
		開発教育ワークショップ	2･3･4 前		2			○							兼1	集中
		インターンシップ	3･4 前		2				○	5	3				兼17	集中
		小計（ 26科目）	―	0	56	0		―		5	3	0	0	0	兼27	
	専門教育科目（地域研究科目群）	京都地域学	2･3･4 前		2		○								兼1	
		京都の産業	2･3･4 後		2		○								兼1	
		京都の自然と景観	2･3･4 後		2		○								兼1	
		京都の暮らしと祭礼	2･3･4 前		2		○								兼1	
		京都のまちづくり	2･3･4 後		2		○								兼1	
		琵琶湖学Ⅰ	2･3･4 後		2		○								兼1	集中・隔年開講
		琵琶湖学Ⅱ	2･3･4		2		○								非開講	集中・隔年開講
		アジアの地域研究Ⅰ	2･3･4 前		2		○				1					
		アジアの地域研究Ⅱ	2･3･4 前		2		○								兼1	
		アジアの地域研究Ⅲ	2･3･4 前		2		○								兼1	
		アジアの地域研究Ⅳ	2･3･4		2		○								非開講	
		アジアの地域研究Ⅴ	2･3･4 前		2		○			1						
		地域研究特別講義Ⅰ	2･3･4 後		2		○								兼1	集中
		地域研究特別講義Ⅱ	2･3･4 前		2		○			1						
		地域研究特別講義Ⅲ	2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		地域研究特別講義Ⅳ	2･3･4 前		2		○			1						
		地域研究特別講義Ⅴ	2･3･4 後		2		○								兼1	
		地域研究特別講義Ⅵ	2･3･4 後		2		○								兼1	
		地域研究方法論Ⅰ	2･3		2		○								非開講	
		地域研究方法論Ⅱ	2･3 後		2		○								兼1	
		国内現地研究Ⅰ	1･2･3･4 前		2		○								兼2	集中
		国内現地研究Ⅱ	1･2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		国内現地研究Ⅲ	1･2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		国内現地研究Ⅳ	1･2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		海外現地研究Ⅰ	1･2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		海外現地研究Ⅱ	1･2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		海外現地研究Ⅲ	1･2･3･4 後		2		○								兼1	集中
		海外現地研究Ⅳ	1･2･3･4 後		2		○			1					兼1	集中
		小計（ 28科目）	―	0	56	0		―		4	1	0	0	0	兼14	
人文学部共通科目	専門教育科目（総合研究科目群）	総合研究演習Ⅰ	1･2･3 前		6			○			1				兼3	集中
		総合研究演習Ⅱ	1･2･3 後		6			○							兼3	集中
		総合研究演習Ⅲ	1･2･3		6			○							非開講	
		小計（ 3科目）	―	0	18	0		―		0	1	0	0	0	兼4	

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
合計（　234科目）		ー	28	468	0	ー			10	4	1	0	0	兼139

学位又は称号	学士（人文）	学位又は学科の分野	社会学・社会福祉学関係

教育課程の編成方針

卒業要件及び履修方法	授業期間等	
	1学年の学期区分	期
	1学期の授業期間	週
	1時限の授業時間	分

教　育　課　程　等　の　概　要

（人文学部文化表現学科）

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
基礎教育科目（A群）	哲学の歴史	1･2･3･4		2		○								非開講
	現代と哲学	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	宗教学Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	宗教学Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	倫理学	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	日本の文学	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	世界の文学	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	言語学Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○				1				
	言語学Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○				1				
	心理学Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	心理学Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	芸術学概論	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	考古学Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	考古学Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	民俗学Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	民俗学Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	地理と歴史	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	地理と社会	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	教育学Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	教育学Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	近現代の歴史Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○			1					
	近現代の歴史Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○			1					
	社会学Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	社会学Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	政治学Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	政治学Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	法学概論	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	日本国憲法	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	経済学Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	経済学Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	文化人類学Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	文化人類学Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	認知の科学Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	認知の科学Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	科学史Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	科学史Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	自然科学概論Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	自然科学概論Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	環境と文明Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	環境と文明Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	生物学Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	生物学Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	数学Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	数学Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	情報処理基礎Ⅰ	1･2･3･4		1			○							非開講
	情報処理基礎Ⅱ	1･2･3･4		1			○							非開講
	点字講座Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	点字講座Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	総合講座Ⅰ	1･2･3･4　前		2		○				1				
	総合講座Ⅱ	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	総合講座Ⅲ	1･2･3･4		2		○								非開講
	総合講座Ⅳ	1･2･3･4　前		2		○								兼1
	生涯学習概論	1･2･3　前		2		○								兼1
	人権教育論	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	現代学校論	1･2･3･4　後		2		○								兼1
	博物館学	1･2･3･4　前		2		○								兼1

科目区分		授業科目の名称	配当年次	単位数 必修	単位数 選択	単位数 自由	授業形態 講義	授業形態 演習	授業形態 実習	専任教員等配置 教授	専任教員等配置 准教授	専任教員等配置 講師	専任教員等配置 助教	専任教員等配置 助手	備考
		教育学概論	1･2･3 前		2		○								兼1
		図書館概論	1 前		2		○								兼1
		小計（ 58科目）	－	0	114	0		－		1	1	0	0	0	兼24
基礎教育科目（B群）		健康学Ⅰ	1･2･3･4 前		2		○								兼1
		健康学Ⅱ	1･2･3･4 後		2		○								兼1
		スポーツ演習Ⅰ	1･2･3･4 前		2			○							兼9
		スポーツ演習Ⅱ	1･2･3･4 後		2			○							兼9
		上級スポーツ演習Ⅰ	2･3･4 前		2			○							兼6
		上級スポーツ演習Ⅱ	2･3･4 後		2			○							兼6
		小計（ 6科目）	－	0	12	0		－		0	0	0	0	0	兼11
基礎教育科目（C群）		英語Ⅰ	1 前		2			○		4	1				兼1
		英語Ⅱ	1 後		2			○		4	1				兼1
		英語Ⅲ	2･3･4		2			○							非開講
		英語Ⅳ	2･3･4		2			○							非開講
		上級英語Ⅰ	1･2･3･4 前		2			○		1					兼3
		上級英語Ⅱ	1･2･3･4 後		2			○		1					兼3
		上級英語Ⅲ	1･2･3･4 前		2			○		1					
		上級英語Ⅳ	1･2･3･4 後		2			○		1					
		日本語Ⅰ	1 前		2			○							兼2
		日本語Ⅱ	1 後		2			○							兼2
		日本語Ⅲ	2･3･4		2			○							非開講
		日本語Ⅳ	2･3･4		2			○							非開講
		上級日本語Ⅰ	1･2･3･4 前		2			○							兼2
		上級日本語Ⅱ	1･2･3･4 後		2			○							兼2
		上級日本語Ⅲ	1･2･3･4		2			○							非開講
		上級日本語Ⅳ	1･2･3･4		2			○							非開講
		フランス語Ⅰ	1･2･3･4 前		2			○							兼1
		フランス語Ⅱ	1･2･3･4 後		2			○							兼1
		フランス語Ⅲ	2･3･4 前		2			○							兼1
		フランス語Ⅳ	2･3･4 後		2			○							兼1
		中国語Ⅰ	1･2･3･4 前		2			○							兼1
		中国語Ⅱ	1･2･3･4 後		2			○							兼1
		中国語Ⅲ	2･3･4 前		2			○							兼1
		中国語Ⅳ	2･3･4 後		2			○							兼1
		朝鮮語Ⅰ	1･2･3･4 前		2			○							兼1
		朝鮮語Ⅱ	1･2･3･4 後		2			○							兼1
		朝鮮語Ⅲ	2･3･4 前		2			○							兼1
		朝鮮語Ⅳ	2･3･4 後		2			○							兼1
		タイ語Ⅰ	1･2･3･4 前		2			○							兼2
		タイ語Ⅱ	1･2･3･4 後		2			○							兼2
		タイ語Ⅲ	2･3･4 前		2			○							兼1
		タイ語Ⅳ	2･3･4 後		2			○							兼1
		原典講読Ⅰ	2･3･4 前		2			○		6					兼3
		原典講読Ⅱ	2･3･4 後		2			○		5					兼3
		原典講読Ⅲ	2･3･4 前		2			○		1					兼1
		原典講読Ⅳ	2･3･4 後		2			○		1					兼1
		小計（ 36科目）	－	0	72	0		－		8	1	0	0	0	兼14
文化表現専門科目	専門教育科目（専門基礎科目）	入学セミナー	1 前	2			○			1					兼2
		文化表現論Ⅰ	1 前	2			○			1	2				
		文化表現論Ⅱ	1 後	2			○			2	1				
		文化表現基礎演習Ⅰ	1 前	2				○		5	5				
		文化表現基礎演習Ⅱ	1 後	2				○		5	5				
		文化表現基礎演習Ⅲ	2 前	2				○		6	5				
		小計（ 6科目）	－	12	0	0		－		6	5	0	0	0	
	専門教育科目（文化表現の理論群）	芸能文化論	2･3･4 前		2		○			1					
		美学概論	2･3･4 後		2		○				1				
		宗教民俗学概論	2･3･4 前		2		○								兼1
		比較文学概論Ⅰ	2･3･4 前		2		○			1					
		比較文学概論Ⅱ	2･3･4 後		2		○			1					
		現代芸術論Ⅰ	2･3･4 前		2		○								兼1
		現代芸術論Ⅱ	2･3･4 後		2		○								兼1
		小計（ 7科目）	－	0	14	0		－		2	1	0	0	0	兼2

科目区分		授業科目の名称	配当年次	単位数 必修	単位数 選択	単位数 自由	授業形態 講義	授業形態 演習	授業形態 実習	専任教員等配置 教授	専任教員等配置 准教授	専任教員等配置 講師	専任教員等配置 助教	専任教員等配置 助手	備考	
文化表現専門科目	専門教育科目（文化表現の歴史群）	日本芸能史Ⅰ	2･3･4 後		2		○								兼1	
		日本芸能史Ⅱ	2･3･4 後		2		○								兼1	
		文芸表現史Ⅰ	2･3･4 前		2		○								兼1	
		文芸表現史Ⅱ	2･3･4 後		2		○								兼1	
		日本美術史	2･3･4 前		2		○			1						
		東洋美術史	2･3･4 後		2		○			1						
		西洋美術史	2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		口承文化の歴史Ⅰ	2･3･4 前		2		○								兼1	
		口承文化の歴史Ⅱ	2･3･4 後		2		○								兼1	
		音楽文化史Ⅰ	2･3･4 前		2		○								兼1	
		音楽文化史Ⅱ	2･3･4 後		2		○								兼1	
		小計（ 11科目）	―	0	22	0		―		1	0	0	0	0	兼8	
	専門教育科目（文化表現の諸領域群）	女性文学論	2･3･4 前		2		○			1						
		児童文学論	2･3･4 前		2		○			1						
		文学ジャーナリズム論	2･3･4 後		2		○								兼1	
		ものがたり論	2･3･4 前		2		○								兼1	
		説話・伝承史	2･3･4 後		2		○			1						
		日本文化史概論	2･3･4 後		2		○								兼1	
		日本映画論	2･3･4 前		2		○								兼1	
		映画芸術論	2･3･4 前		2		○				1					
		マンガ文化論	2･3･4 後		2		○								兼1	
		絵画と芸能	2･3･4 前		2		○								兼1	
		舞台芸術論	2･3･4 前		2		○								兼1	
		舞踊・舞踏論	2･3･4 前		2		○				1					
		ポピュラー・ミュージック史	2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		日本歌謡史	2･3･4 後		2		○								兼1	
		南島文化論	2･3･4 前		2		○				1					
		話芸史	2･3･4 後		2		○								兼1	集中
		大道芸研究	2･3･4 前		2		○								兼1	
		テレビと文化	2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		ファッション・メイク史	2･3･4 後		2		○				1					
		比較建築文化論	2･3･4 前		2		○				1					
		小計（ 20科目）	―	0	40	0		―		3	5	0	0	0	兼11	
	専門演習科目	専門演習Ⅰ	2 後	2				○		6	5					
		専門演習Ⅱ	3 前	2				○		6	5					
		専門演習Ⅲ	3 後		2			○		6	5					
		調査演習Ⅰ	3 後		6			○		5	5					集中
		調査演習Ⅱ	3 後		6			○		5	5					集中
		調査演習Ⅲ	3 後		6			○		5	5					集中
		卒業論文・卒業制作演習Ⅰ	4 前	2				○		5	5					
		卒業論文・卒業制作演習Ⅱ	4 後	2				○		5	5					
		卒業論文・卒業制作	4 通年	6				○		5	5					
		小計（ 9科目）	―	14	20	0		―		6	5	0	0	0		
人文学部共通科目	専門教育科目（メディア・表現科目群）	情報リテラシーⅠ	1 前	1				○							兼1	
		情報リテラシーⅡ	1 後	1				○							兼1	
		メディア・システム設計Ⅰ	2･3･4 前		2		○								兼1	
		メディア・システム設計Ⅱ	2･3･4 後		2		○								兼2	集中
		メディア・データ編集Ⅰ	2･3･4 前		2		○								兼1	
		メディア・データ編集Ⅱ	2･3･4 後		2		○								兼1	
		情報ネットワーク論	2･3 後		2		○								兼1	
		メディア・コミュニケーション論	2･3 前		2		○								兼1	
		情報メディアと法律	2･3･4 後		2		○								兼1	
		情報と倫理	2･3･4 前		2		○								兼1	
		メディア・リテラシー論	2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		音楽とメディアⅠ	2･3･4 後		2		○								兼1	
		音楽とメディアⅡ	2･3･4 後		2		○								兼1	集中
		編集論Ⅰ	2･3･4 前		2		○								兼1	
		編集論Ⅱ	2･3･4 後		2		○								兼1	
		スポーツとメディア	2･3･4 後		2		○								兼1	集中
		作家・制作者による作品論Ⅰ	2･3･4 後		2		○								兼1	集中
		作家・制作者による作品論Ⅱ	2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		作家・制作者による作品論Ⅲ	2･3･4 後		2		○								兼1	集中

科目区分		授業科目の名称	配当年次	単位数 必修	単位数 選択	単位数 自由	授業形態 講義	授業形態 演習	授業形態 実習	専任教員等配置 教授	専任教員等配置 准教授	専任教員等配置 講師	専任教員等配置 助教	専任教員等配置 助手	備考	
人文学部共通科目		作家・制作者による作品論Ⅳ	2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		小計（ 20科目）	－	2	36	0		－		0	0	0	0	0	兼18	
	専門教育科目（ワークショップ科目群）	日本語リテラシーⅠ	1 前		4		○								兼4	
		日本語リテラシーⅡ	1 後		4		○								兼4	
		言語表現技法Ⅰ	2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		言語表現技法Ⅱ	2･3･4 後		2		○								兼1	集中
		プレゼンテーション技法	2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		視聴覚記録の技法	1 後		2		○								兼3	
		ドキュメンタリー制作Ⅰ	2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		ドキュメンタリー制作Ⅱ	2･3･4 後		2		○								兼1	集中
		ノンフィクション・ルポルタージュⅠ	2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		ノンフィクション・ルポルタージュⅡ	2･3･4 後		2		○								兼1	集中
		シナリオ技法Ⅰ	2･3･4 前		2		○								兼2	集中
		シナリオ技法Ⅱ	2･3･4 後		2		○								兼2	集中
		編集技法Ⅰ	2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		編集技法Ⅱ	2･3･4 後		2		○								兼1	集中
		広告表現技法Ⅰ	2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		広告表現技法Ⅱ	2･3･4 後		2		○								兼1	集中
		写真表現技法Ⅰ	2･3･4 前		2		○								兼1	
		写真表現技法Ⅱ	2･3･4 後		2		○								兼1	
		農的くらしⅠ	2･3･4 前		2		○								兼1	
		農的くらしⅡ	2･3･4 後		2		○								兼1	
		社会調査技法	2･3･4 前		2		○								兼1	
		環境教育プログラム・デザイン演習	2･3･4 前		2			○							兼1	集中
		環境教育ワークショップ演習	2･3･4 前		2			○							兼1	集中
		環境教育実習	2･3･4 前		2			○							兼2	集中
		開発教育ワークショップ	2･3･4 前		2			○							兼1	集中
		インターンシップ	3･4 前		2				○	3	4				兼18	集中
		小計（ 26科目）	－	0	56	0		－		3	4	0	0	0	兼27	
	専門教育科目（地域研究科目群）	京都地域学	2･3･4 前		2		○								兼1	
		京都の産業	2･3･4 後		2		○								兼1	
		京都の自然と景観	2･3･4 後		2		○								兼1	
		京都の暮らしと祭礼	2･3･4 前		2		○								兼1	
		京都のまちづくり	2･3･4 後		2		○								兼1	
		琵琶湖学Ⅰ	2･3･4 後		2		○								兼1	隔年開講・集中
		琵琶湖学Ⅱ	2･3･4		2		○								非開講	隔年開講・集中
		アジアの地域研究Ⅰ	2･3･4 前		2		○								兼1	
		アジアの地域研究Ⅱ	2･3･4 前		2		○								兼1	
		アジアの地域研究Ⅲ	2･3･4 前		2		○								兼1	
		アジアの地域研究Ⅳ	2･3･4		2		○								非開講	
		アジアの地域研究Ⅴ	2･3･4 前		2		○								兼1	
		地域研究特別講義Ⅰ	2･3･4 後		2		○								兼1	集中
		地域研究特別講義Ⅱ	2･3･4 前		2		○								兼1	
		地域研究特別講義Ⅲ	2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		地域研究特別講義Ⅳ	2･3･4 前		2		○								兼1	
		地域研究特別講義Ⅴ	2･3･4 後		2		○				1					
		地域研究特別講義Ⅵ	2･3･4 後		2		○								兼1	
		地域研究方法論Ⅰ	2･3		2		○								非開講	
		地域研究方法論Ⅱ	2･3 後		2		○								兼1	
		国内現地研究Ⅰ	1･2･3･4 前		2		○								兼2	集中
		国内現地研究Ⅱ	1･2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		国内現地研究Ⅲ	1･2･3･4 前		2		○				1					集中
		国内現地研究Ⅳ	1･2･3･4 前		2		○				1					集中
		海外現地研究Ⅰ	1･2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		海外現地研究Ⅱ	1･2･3･4 前		2		○								兼1	集中
		海外現地研究Ⅲ	1･2･3･4 後		2		○								兼1	集中
		海外現地研究Ⅳ	1･2･3･4 後		2		○				1				兼1	集中
		小計（ 28科目）	－	0	56	0		－		0	2	0	0	0	兼15	
	専門教育科目（総合研究科目群）	総合研究演習Ⅰ	1･2･3 前		6			○			3					集中
		総合研究演習Ⅱ	1･2･3 後		6			○							兼3	集中
		総合研究演習Ⅲ	1･2･3		6			○							非開講	
		小計（ 3科目）	－	0	18	0		－		0	3	0	0	0	兼1	
合計（ 230科目）			－	28	460	0		－		10	6	0	0	0	兼131	

学位又は称号	学士（人文）	学位又は学科の分野	社会学・社会福祉学関係

教育課程の編成方針

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実習	教授	准教授	講師	助教	助手	

卒業要件及び履修方法	授業期間等	
	1学年の学期区分	期
	1学期の授業期間	週
	1時限の授業時間	分

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎教育科目	教養科目	考古学	考古学の基礎的な方法と知識を習得することが目的である。 まず後期旧石器時代以来の数万年に及ぶ日本列島の古代文化に関して、考古学的遺跡の紹介を通じて、その自然的、社会的背景とともに解説する。 また同時代の世界の考古学的遺跡も紹介し、その地域の特性を学ぶとともに、日本との比較も行う。特に、東アジア、そして東南アジアの古代文化と日本列島のそれとを比較し、古代における文化交流、人的交流の実態を探っていきたい。	
		民俗学Ⅰ	民俗学が近代日本において生まれた背景を知り、初期の民俗学から現在の民俗学に至までに歴史、およびそれぞれの時代における中心的な話題を知ることによって、日本民俗学の概観をつかむことを目的とする。 具体的には柳田国男の初期の業績、および「遠野物語」を講ずるとともに、折口信夫などの業績にも触れ、近代日本の自己認識としての民俗学の変遷を理解する。現代における都市民俗学の動向にも触れ、古典的な民俗学との方法を比較し、問題意識の変化をたどる。	
		民俗学Ⅱ	「民俗学I」に引き続いて、民俗学の個別課題についてやや詳しく掘り下げて解説する。具体的には、ハレとケの概念を用いて具体的な祭礼の分析、および社会的な区別、差別の問題など、身の回りの習俗を民俗学的に考察する。さらに一生における各種通過儀礼について、成人儀礼、婚姻儀、葬送儀礼などの具体例を分析し、日本人の人生観、死生観を探究する。古典的な事例だけではなく、なるべく現代における民俗学的な事例を用いて、現代日本人の精神構造の解明を目指したい。	
		地理学Ⅰ	人間を取り巻く自然的、人工的な空間と、人間活動の諸分野との関係を解説する。すなわち経済、社会、政治、文化などを地理学的な観点から分析し、解明していく。具体例として伝統的な農山漁村を用いることはもちろんだが、発達著しい都市の地理学にも重点を置いて、都市生活の地理学的な理解を試み、私たちの生活を地理学的に理解することを目指したい。また大局的に世界を見るひとつの視点として地政学にも触れることになろう。	
		地理学Ⅱ	自然環境、とくに地形、気候、植生などの現状を理解し、またそれらの形成と変遷を学びながら、人間活動の諸分野との関係を考察する。すなわち世界の地形の概略とその形成を大陸移動の観点から理解し、世界の気候を地球的な熱や水の循環という視点から理解する。その上で、日本列島の自然環境の特徴を周辺他地域と比較しながらやや詳しく学び、日本列島の自然地理的な属性をトータルにとらえた上でそこでの人間活動にあたえる影響を理解する。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎教育科目	教養科目	哲学	自然環境、とくに地形、気候、植生などの現状を理解し、またそれらの形成と変遷を学びながら、人間活動の諸分野との関係を考察する。すなわち世界の地形の概略とその形成を大陸移動の観点から理解し、世界の気候を地球的な熱や水の循環という視点から理解する。その上で、日本列島の自然環境の特徴を周辺他地域と比較しながらやや詳しく学び、日本列島の自然地理的な属性をトータルにとらえた上でそこでの人間活動にあたえる影響を理解する。	
		宗教学	宗教の歴史的な理解を深めるとともに、現代社会と宗教、現代のこころと宗教について考える。いわゆる「アニミズム」、「シャーマニズム」から祖先崇拝などの伝統的な宗教、そして三大宗教をはじめとした世界宗教の基本的な思想を理解する。さらに日本の宗教的な民俗についても解説し、近現代の日本における新宗教の出現とその発展、現状についても触れる。また現代における「宗教紛争」や「救済」、「死生観」の問題についても事例を挙げて考察する。	
		倫理学	人間行為の正、不正、善悪という価値を論じる。ものを盗んだり、他人を傷つけたりしてはならないのはなぜか、約束を守るべきだと考えられているのはなぜか、このような道徳的な規範を裏付けているのは何なのか、という問いに対して倫理学がどのように答えてきたのかを解説し、倫理学的な思考方法を理解する。それをふまえて、現在の倫理学的な問題、生命倫理、情報倫理、環境倫理についても具体的な事例を挙げて、倫理学的に考察することの意義を学ぶ。	
		日本文学	古代からの日本文学史を概観した上で、とくに近現代の日本語で書かれた文学について深く理解する。上代から現代までの文学形式とその歴史について概観するとともに、近現代の古典的な作品と現代文学を紹介する。近代以降の文学作品については、その時代背景、また社会、文化にあたえた影響などにも触れながら、作品理解のみならず文学のもつ多様な可能性を理解し、日本文学に対する複眼的な認識を得てもらうことを目的としている。	
		世界文学	もともと日本語以外で書かれた文学を対象とし、主な作品をいくつか選んで作品批評を交えながらその魅力を知ってもらう。文学的な伝統は、世界各地の歴史、社会、文化と密接に関係しているが、人間を描くという点で人類共通の財産ともなりうる。特に近現代以降の古典的な作品を各地域から選び、作品内容に即してその普遍性を指摘する。一生を通じて世界各地の文学に親しみ、学び、それを伴侶としていくための誘いとなる講義を目指す。	
		心理学Ⅰ	心理学の広範な分野を紹介し、基礎的なテーマを理解する。知覚心理学、認知心理学、学習心理学、感情心理学、性格心理学などの主要な研究テーマと、それに取り組むための基本的な考え方、法則などを解説する。またそれらを用いて、日頃誰もが感じるであろう素朴な疑問や信念を心理学的に解明することを試みる。自らの心の動きや行動を客観的に観察するための心理学的なツールを手に入れ、自己について考えるための一助となることを目的とする。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎教育科目	教養科目	心理学Ⅱ	「心理学I」に続き、心理学の諸分野を紹介し、基礎的なテーマを理解する。社会心理学、発達心理学、異常心理学、臨床心理学などの主要な研究テーマと、それに取り組むための基本的な考え方、法則などを解説する。またそれらを用いて、日頃誰もが感じるであろう素朴な疑問や信念を心理学的に解明することを試みる。自らの心の動きや行動を客観的に観察するための心理学的なツールを手に入れ、自己について考えるための一助となることを目的とする。	
		芸術学Ⅰ	視覚芸術を対象とし、ビジュアル・リテラシーについて理解を深めることを目的とする。扱う対象は、絵画、写真、映画、マンガ、ファッションと多岐にわたり、それらが「意味」をどのように作り上げているのか、その視覚的なメカニズムについて理解を深める。マンガや映画の「文法構造」、視覚的な記号論、物語と絵画の相互作用、絵画や映画における制作者、鑑賞者の視線の問題などを解説する。日常生活の視覚的な情報収集、コミュニケーションのメカニズムを理解して、芸術への理解を深めることを目指す。	
		芸術学Ⅱ	音響芸術を対象とし、その基本的な「構造」について理解を深めることを目的とする。扱う対象は、西洋古典音楽、現代音楽からワールド・ミュージック、ロック、J-ポップなど多岐にわたり、それらが「意味」をどのように作り上げているのか、その音響的なメカニズムについて理解を深める。西洋古典音楽の三要素のみならず、それぞれのジャンルにおける重要な要素について習得、理解し、各ジャンルの音楽を鑑賞し楽しむためのコツを会得することを目的とする。	
		総合講座	人文学部は５つのコースよりなり、現代社会の様々な問題に関連した講義、演習、フィールドプログラムを提供している。総合講座では、この広範な範囲でもまだとらえきることができない、しかし同時代性、緊急性の点で重要なテーマをいくつか選び、適切な講師によるタイムリーな解説をあたえることを目的としている。社会や文化のアクチュアルなテーマを深く理解し、それに取り組むことの意義を知ることによって、受講生が学問の力と重要性に気づくことを目指す。	
		キャリアデザインⅠ	将来の進路を選択する際に必要な知識と考え方について学ぶ。進学するにせよ、就職するにせよ、あるいは自らが起業するにせよ、自己の欲するところを探究し理解することは避けて通れない。同時に現代社会においてどのような生業形態があり得るのかについての知識も必要となる。その上で様々な業界で活躍している諸先輩から、自らのキャリアデザインの経験、業界や会社の現状とその将来についての解説を聴講し、自らの将来について具体的に考えるとともに、将来につながる大学生活を構想するきっかけとしたい。	
		キャリアデザインⅡ	将来の進路を選択する際に必要な知識と考え方について学ぶ。進学するにせよ、就職するにせよ、あるいは自らが起業するにせよ、自己の欲するところを探究し理解することは避けて通れない。同時に現代社会においてどのような生業形態があり得るのかについての知識も必要となる。その上で様々な業界で活躍している諸先輩から、自らのキャリアデザインの経験、業界や会社の現状とその将来についての解説を聴講し、自らの将来について具体的に考えるとともに、将来につながる大学生活を構想するきっかけとしたい。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎教育科目	教養科目	キャリアデザインⅢ	いまや、日本経済の将来を左右するとまでいわれるメディア・コンテンツ産業。本科目はそのビジネスを「プロデューサー」という立場で担う人材の育成を目的とする。プロデューサーには、クリエイターやアーティストの才能を見極め、企画、マーケティング、キャスティングから、予算編成、パブリシティまでを効果的に遂行していく総合的な能力が求められる。そこで本科目では、出版、広告、テレビ、映画、webなどあらゆるメディアでコンテンツプロデューサーとしての仕事に就けるよう、さまざまなメディアに関する基礎知識はもとより、メディアに仕事としてかかわる場合のアプローチの方法、企画の立て方、プレゼンテーションなど実践的なスキルを指導する。	
		キャリアデザインⅣ	「キャリアデザインⅢ」に引き続いて、メディア・コンテンツ産業においてプロデューサーとして働ける基礎的な能力を身につける。現代の文化状況においては趣味・知識のクラスター化が著しい。そのため新たなコンテンツを生み出すプロデューサーには、あらゆるカルチャーに対する横断的な知識が必要とされる。授業では、コンテンツ・プロデューサーとしての実践的なスキルを身につけるとともに、そのバックボーンとなるカルチャーの体系的な理解も深める。	
		教育と社会	学校の成立およびその存在がどのように地域社会や家庭とつながっているのかを考察し、現在の日本の学校、生徒、教師、が直面する現状と諸問題を身近なところから検討する。また、日本のことだけではなく世界の国々における教育と社会の関わりがどのような文化的・社会的背景や価値観に左右されているのか、比較教育の視点からも考察する。一方的な講義ではなく、各々が教育と社会に関する最も興味深いテーマを選び、発表してもらう、という双方向の授業スタイルで行う。	
		法学概論	国際社会・情報社会の進展に伴う現代社会における法のあり方を、その歴史と現状の側面から考察する。刑法、刑事訴訟法、民法など主な法の基本的な考え方を解説するとともに、具体的な事例、判例を通じて、法の理解、遵法意識の重要性について理解を深める。また科学技術の発展、社会の国際化に伴って生起してきた新たな問題、あるいは未解決の問題を、国際法、労働法、消費者関連の法などと絡めて解説し、現代社会における法の果たすべき役割についても考える。	
		日本国憲法	日本国憲法の全体を概観するとともに、主な章についてそれぞれ解説を加え、日本国の基本的なあり方について理解を深める。日本国憲法に盛り込まれた理念が近代の中で成立してきた歴史について学び、日本国憲法成立の背景を広い視野からとらえる。主な章や条文について詳しく解説するとともに、条文の解釈を裁判所などがどのように行ってきたのかを知るために、最高裁判例などを解説しながら現実生活の中で日本国憲法が果たしてきた役割を理解する。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎教育科目	教養科目	社会学Ⅰ	19世紀後半に成立した社会学は、現代社会を解明する不可欠な学問分野となった。社会学によって作り出された「社会の見方」のうち重要なものを、デュルケーム、モース、ウェーバーなどの古典的な業績を通して理解する。これら社会学の古典理論は、宗教社会学、社会人類学などの諸科学とも密接に関連しており、現代の諸問題の理解において現在も有効である。古典理論を現実の社会問題に適用して、現代社会を深く知ることも試みる。	
		社会学Ⅱ	21世紀を迎えた現在、グローバル化、情報化の著しい進展は、家族、国家、都市といった社会学的な概念の再検討まで迫っている。現代社会と現代人の変容を考える社会学の新しい取組について紹介する。具体的には、グローバリゼーションと国際社会の変化、社会階層の形成と政治経済構造の関連、現代家族の歴史的変遷、インターネット社会におけるコミュニティの変容とその意義、等についてアクチュアルな報道記事とそれに関連する社会学的な研究を紹介する。	
		経済学Ⅰ	マクロ経済学のエッセンスを解説し、日本の経済を理解するための基本的な知識を与える。一国単位で経済を把握するための指標、国民総生産、国内総生産などの概念を解説する。また好況、不況、失業やインフレ、デフレといった問題がなぜ起こるのか、またその対応策としての財政政策、金融政策の概要を述べ、それらが景気にあたえる影響、効果について解説する。また外国為替とそれに影響する諸因子についても説明し、国際経済を理解するための初歩的な知識を与える。	
		経済学Ⅱ	ミクロ経済学について解説する。ミクロ経済学は、消費者としての個人や生産者としての企業がどのように行動するか、その行動の総体がどのような結果を招くのかを把握するための学問である。利己的で合理的な個人の行動と公共性は両立するのか、市場秩序は万能なのか、過去の経済学者、すなわちアダム・スミス、ケインズからアマルティア・センまでの理念と彼らの処方箋を紹介しながらこれらの問題、および同時代の経済問題について考える。	
		政治学概論	政治学の基本的な概念、すなわちイデオロギー、権力、支配、政府などを知るとともに、現代日本の政治が形成されてきた歴史を戦前からたどり日本の政治に対する理解を深める。また諸外国の政治制度と日本の政治制度を比較し、それらの共通点、相違点が生まれてきた歴史的背景、またそれらの政治的機能について解説する。加えて同時代の政治的問題、政策的問題について具体的に分析する。とくに現代日本の政治、とくに権力、統治機構、民主主義の諸制度との関連について考える。	
		国際政治学	国家、国家連合、地域間の関係について、とくにそれらの間の外交、政策決定過程について基礎的な知識を学ぶ。国際政治を構成するこれらの主体、国際法、国際経済学、国際関係史、比較政治学などの諸分野についても簡単に触れ、国際政治を分析的に理解することを試みる。また日本の外交やその政策決定過程を、諸外国、特に欧米諸国のそれと比較し、それぞれの国家が国際政治の中に占める立場の違いについて、具体的な事例を挙げながら解明する。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎教育科目	教養科目	文化人類学	サルからヒトへの進化人類学の基礎を学びながら、生物における文化の起源、人類社会の諸文化の特徴について学ぶ。文化は人類だけのものではなく、すでにサル段階で後半に見られる現象である。サルからヒトへ進化した段階で、文化は人類社会の広範な基礎を与えるものとなった。文化について、生物学的、社会学的に解説し、また異文化を理解するための概念的な枠組を説明する。それらを用いて、一見奇異に見える異文化の現象が、実は納得可能なものであることを示し、異文化の深層を感得することを目指す。	
		障害者理解	障害には身体障害、知的障害、精神障害があり、またいくつかを同時に持っている場合もあって、各人各様の障害を持っている。またアスペルガー症候群や学習障害など発達障害の理解が進むにつれ、従来気づかれていなかった障害者にも支援の対象を広げる流れとなっている。この授業では、障害者の人権を尊重し、また健常者と障害者がともに共生できる社会の実現を目指して、さまざまな障害のあり方とその原因について理解を深め、障害者への具体的な支援について学ぶ。	
		生物学Ⅰ	いわゆる理系・文系などという枠から離れた現代生物学の立場から、人間社会を含めた生物の生き方を問い直し、捉え直していく。進化生物学、行動生態学、人間行動学などの知見を、ネコ、イヌ、カラスなどの身近な動物や植物を用いて解説し、生物というものに対する新しい認識を獲得することを目指す。このような理解を通じて人間とはどういう生物なのかを、人間固有の言語、幻想、美学などを生物学的に解釈しながら考えていく。	
		生物学Ⅱ	それぞれの動物はそれぞれの生き方を持っている。同じ哺乳類でもゾウとライオンは全く異なる生き方をしている。どちらが優れているとか、進化しているという問題ではない。この講義ではそれぞれの動物の生き方をそれぞれの「文化」と見なし、その文化の持つロジックを考える。具体的には肛門のある文化、ない文化、体節の文化、肢のある文化、などのように動物の主な文化について述べ、人間もこれら生物の文化のひとつであることを理解する。	
		科学史	1859年にダーウィンが著した『種の起源』は、その後の世界に大きな思想的影響を与えた。この本で語られているのは進化論、すなわち進化のメカニズムとしての自然選択説である。ダーウィンの進化論について説明するとともに、このような考え方がどのように生まれてきたのか、彼の旅行体験のみならず、思想的背景も吟味して解説する。またこの考え方がその後の世界に与えた影響を、生物学分野のみならず哲学、思想の分野においても探究する。	
		環境と文明	産業革命以降、大量生産、大量消費、大量廃棄型の社会システムが作り上げられた。農耕・牧畜文明から工業文明への転換と進行がもたらした深刻な環境破壊の現実から、共生と循環への社会へと転換するためには、一人一人の生き方の見直しが迫られている。環境との関わりにおいて、生命とは何か、知恵の実をとったヒトとは、どのような動物か、そして知恵によって生きるすばらしさが同時にもたらす危険を見つめ、文明の意味を考える。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎教育科目	教養科目	生命科学と倫理	現在、生命科学の進歩はまさに目を見張るものがある。しかし、それ故に様々な問題を投げかけてもいる。例えばクローンの問題である。技術的には、もはやクローンを作ることは可能だといわれているが、なかなかそれを進展させることができずにいる。それはもはや科学的、技術的な問題ではなく、人間存在にかかわる倫理的な問題になっているのである。クローン、人工多能性肝細胞、脳死、老化遺伝子などの倫理的な問題についても触れることになる。	
		自然科学概論	最近の宇宙物理学や天文学の進展は著しくそれまでの常識を覆しながら、さらに豊かな理解へと、現在も我々を動かし続けている。いまでは宇宙の年齢も140億年ほどであることがわかり、太陽系の外縁の理解も進み、太陽系内天体の分類の見直しを迫られ、一方、太陽系外の惑星も200個以上発見され、我々に新たな世界観をもたらしてきている。このような広大な宇宙における現象の最新の成果に触れあいながら、自然科学における基本的な考え方に親しみ、幅広い素養と、豊かな感性を養い、奥の深い考えにつなげていく力を養う。	
		数学	科学的認識の基礎としての数学的な知識や手法の成立過程について、古代文明の数学から近代の著名な数学者までの努力と創意の後を追いながら概説する。量とは何か、数の誕生、抽象と数学、確率の意味、無限と連続、証明法などについて論じる。また図形にかかわる事象を数学的な視点で捉え、ユークリッド幾何学、非ユークリッド幾何学の基礎、トポロジー、フラクタル図形についても簡単に触れ、基本的な定理の証明についても解説する。	
		論理学	主として記号論理学の基礎を学ぶ。バートランド・ラッセルとホワイトヘッドの『数学原理』における形式論理学の基本的な考え方を演習を交えながら学び、数学的で厳密な論理の組み立て方を論理記号を用いて解析する視点を獲得する。また形式論理学と関係の深い集合論についても言及し、論理的な思考を集合論を用いて組み立てる思考を身につける。形式論理学の限界を明確に示したクルト・ゲーデルの不完全性定理についても紹介し、それが与えた思想的影響についても解説する。	
		会計学	企業で働く場合の基本的スキルともいえる会計学の基礎を学ぶ。まず、会計制度の枠組みや損益、資産、負債、資本等の会計の基本的な概念を理解する。次に、これらの作成に必要な複式簿記の基本原理を理解した上で、現金預金取引、商品売買取引、手形取引、債券債務取引、有価証券取引、固定資産取引などの記帳と仕訳といった個別取引への対応スキルを身につける。さらに，決算で必要となる特別な手続きを行うスキルを身につける。	
		経営学	経営に不可欠な要素（経営資源）には「ヒト（従業員）、モノ（商品）、カネ、情報（競合他社の情報、顧客情報等）」の４つがある。経営学では、企業などの組織がこれらの経営資源を効率的に管理・運営するための基礎的な理論を学ぶ。組織とは何か、どのように経営計画を立てるのか、どのようにすれば従業員は意欲をもって仕事をするのか、他社との競争に勝つためにどうすればよいのかなど、経営の基礎知識を理解してもらうことを本講義の目的とする。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎教育科目	教養科目	生涯学習概論Ⅰ	生涯学習および社会教育の意義を理解し、学習活動を効果的に援助する方法等を理解する。生涯学習と学校教育、家庭教育などとの連携や相互補完、生涯学習のシステムにはどのようなものがあるのかを解説する。また生涯学習に関連する法規、およびそこに定められている国および地方公共団体、とくに教育委員会、などのそれぞれの役割について、具体例を挙げながら説明する。また今後の生涯学習施策がどのように展開していくのか、その方向性について諸外国の例などと比較しながら考察する。	
		生涯学習概論Ⅱ	社会教育の意義を理解し、それを支える制度、社会教育の教育システムなどを理解する。社会教育を支える社会教育行政についてやや詳しく解説し、社会教育の内容、方法、形態についての理解を身近な具体例を通して深めるとともに、社会教育指導者の位置づけとその役割、図書館、博物館、公民館などの社会教育施設、および国、地方公共団体以外の民間の社会教育関係団体、学習に関する情報提供の意義、学習相談の重要性などについて、実例を交えながら解説する。	
		ボランティア論	ボランティア活動は青年においては、自己成長の機会となる社会活動である。また成人以上にとっても、地域社会や異なった世代との交流を通じて自己存在の多面性、全体性を実感する有意義な活動である。このようにボランティア活動は、人生の全期間を通じて個人と公共の福祉を結びつける極めて重要な社会的意味を持っている。災害ボランティア、介護ボランティアのような大規模なものから、個人で行う小規模なものまで、様々なボランティア活動の実態とその意義を具体的な事例を挙げながら解説する。	
		日本史	日本列島の歴史を縄文・弥生時代から現代に至るまで概説する。古代、中世、近世、近代と順を追って概観するが、とくに周辺諸国との交流、また周辺諸国の歴史段階との比較に重点を置いて解説する。とりわけ現代日本に関わりの深い、近世、近代を重視し、現代日本の諸要素の起源をこの時代に探る視点を紹介する。また現代史に属する太平洋戦争の開始と終結、高度経済成長期、冷戦期と冷戦終結後、バブル経済の崩壊などについても触れる。	
		西洋史	ヨーロッパおよび北米の歴史を古代ギリシアから現代に至るまで概説する。古代、中世、近世、近代と順を追って概観するが、とくに欧米以外の諸地域との交流、またそれらの諸地域の歴史段階との比較に重点を置いて解説する。とりわけ現代の欧米を形成する要素が起源する近世、近代を重視し、資本主義形成に関わりの深い大航海時代、三角貿易、宗教改革と宗教戦争、市民革命と民主主義の誕生、帝国主義と二つの世界大戦などを詳述する。	
		東洋史	「東洋」はここでは東アジア、東南アジア、中央アジア、南アジア、西アジアまでを扱うこととし、これらの地域の古代から現代までを概観するが、とくに近世、近代を中心に諸地域間の交流に重点を置いて解説する。歴史的に日本と関係の深い中国、朝鮮半島と東南アジアはもちろんのこと、将来の超大国であるインドとその周辺諸国、およびイスラーム諸国に特に重点を置いて詳述する。この地域のさまざまな問題の歴史的な背景についても言及する。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎教育科目	教養科目	教育学概論	生を特定の目的に収斂しない開かれた過程として活性化するような教育を考える。そのような過程としての開かれた学習ないし教育の可能性は、出会いを通して人間の生を変容可能なプロセスとして洞察しうるかどうかにかかっている。したがって本講義ではさまざまな人間変容を題材とした物語や心の可能性に関する理論を手引きとして、人間のライフサイクルを様々な出会いの諸相として意味づけ、生涯学習社会における開かれた学習の可能性を探る。	
		図書館概論	図書館の意義および図書館をめぐるさまざまな側面について概説する。図書館の誕生とその歴史、また現在の動向について説明するとともに、現在の図書館に関する諸法規と行政による施策を紹介し、図書館の歴史的社会的背景を解説する。また紙媒体から電子媒体を用いるものまで、図書館が扱う様々な資料の特質および図書館どうしや類似の機関との間の相互協力の実際についても理解を深める。図書館員が守るべき倫理、図書館の自由など、知識社会の中心機関である図書館の原理についても学ぶ。	
		健康学Ⅰ	「人体組織の不思議理解」をテーマに、われわれの身体を構成している諸器官それぞれの基本的な機能の理解を得ることを目的とする。人間の身体の神秘をビデオ教材などを使用しながら解説する。具体的には、血液と心臓循環器系、筋肉と自律神経系、呼吸器、消化器系、肝臓など、主な臓器について基本的な理解を得る。その上で、近年の健康ブームで語られる言説の妥当性や真偽についても考察する。例えばサプリメントの効果やその用法について具体的に説明する。	
		健康学Ⅱ	「脳生理の不思議理解」をテーマにわれわれの日常生活で見られる人間行動が、脳の中で整理、決定され、大脳からの命令によって表出されるものであることを知る。さらに、その脳から指令を受ける筋・骨格系のメカニズムについても理解する。具体的には大脳、小脳、脳幹、などの脳の構造と、右脳、左脳などの脳の機能分化、脳機能と障害の関係などを重点的に詳述するとともに、簡単な実験を行って受講生に脳の機能について実感を持ってもらう。脳死と臓器移植の問題にも以上の基礎知識を得た上で言及する。	
		スポーツ実習Ⅰ	体力と健康の保持、増進を図ることを目的として、各種スポーツ、すなわち卓球、バスケットボール、テニス、バレーボール、バドミントン、フットサル、ウェイトトレーニングなどの種目から受講生が選択し、それぞれのスポーツの基本的な技能に関する練習とゲームを行う。故障を防ぐための基礎的な注意事項についても説明する。またそれぞれのスポーツの歴史およびルールなどについても多角的に学び、社会人になっても生涯スポーツに親しむことのできる知識、技能を習得する。	
		スポーツ実習Ⅱ	体力と健康の保持、増進を図ることを目的として、各種スポーツ、すなわち卓球、バスケットボール、テニス、バレーボール、バドミントン、フットサル、ウェイトトレーニングなどの種目から受講生が選択し、それぞれのスポーツの基本的な技能に関する練習とゲームを行う。故障を防ぐための基礎的な注意事項についても説明する。またそれぞれのスポーツの歴史およびルールなどについても多角的に学び、社会人になっても生涯スポーツに親しむことのできる知識、技能を習得する。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎教育科目	教養科目	身体運動文化実習	呼吸法や野口体操等の「ボディ・ワーク」、古武道や五禽戯等の「日本とアジアの身体技法」、神楽からアフリカンダンスまでの「世界の文化と舞踊」などの実習を通じて、武道や舞踊のみならず行住坐臥までを含む、広い意味での身体技法に埋め込まれた様々な身体文化を実感することを目的とする。自らの身体に解剖学的ではない視点から向き合うことにより、身体という自然の理を知り、身体の可能性と、新たな知の可能性の探求を目指す。	
	語学科目	英語Ⅰ	英語Ⅰは、総合英語プログラムで、中学や高校で学んできた基礎的な語彙や文法の定着を図り、「読む」「書く」「聞く」「話す」の四技能の伸長を目指す。特に重要と思われる文法事項を体系的に学習する。身の回りのことについて英語で聞いたり読んだりして理解し、また、身の回りのことについて比較的まとまりのある文章で自己表現ができるようになることを目指す。そのための土台である、語彙や文法および辞書の使い方についても学習する。	
		英語Ⅱ	英語Ⅱは、多読プログラムで、段階別教材のような比較的やさしい教材を多量に速くすらすらと読み、細かい内容にこだわらずに要点や概要を把握したり、内容を楽しんだりすることによって、個々の英語力に応じ、「読む」力を伸ばし、自立した読み手となることを目標にする。下位目標としては、和訳なしで英語を読み楽しむこと、英語を読む動機付けを高めること、リーディングのための技能やテクニックを身につけること、自分の興味関心や英語力に合った教材を選び適切な速さで読むこと、英語の文法や語彙力を伸ばすことである。	
		Oral Communication Ⅰ	英語による口頭でのコミュニケーション能力を身につけること、そして、それを通して自信を向上させることを目標とする。そのために、口頭でのコミュニケーションに必要な使用頻度の高い語彙や文法を学びながら、身近な場面や状況における口頭でのコミュニケーションで要求されるストラテジーを学習する。また、ペアやグループでの討議、インタビュー活動、ロールプレイなど、様々な学習形態で行う。なお、授業はすべて英語で行う。	
		Oral Communication Ⅱ	Oral Communication Ⅰで学習したことをさらに発展させて、英語で場面に応じた応答や意思伝達ができることを目標とする。前期は身近な場面や状況を想定した活動が多いが、後期はニュース報道やテレビドラマなどより幅の広い場面や状況を設定し、内容を的確につかみ、英語らしい表現で場面に応じた発話ができるように練習する。前期同様、ペアやグループでの討議、インタビュー活動、ロールプレイ、シミュレーションなど、様々な学習形態で、すべて英語で行う。	
		Grammar and Vocabulary Ⅰ	コミュニケーション能力を支える文法力や語彙力を強化することを目標とする。高校までに学んだ英語の文法や語彙の知識を確認し、さらに高いレベルのコミュニケーションを可能にするための文法力・語彙力をつける。語彙面では3000語レベルの語彙の定着を図り、文法面では基礎的な文法事項を整理・確認する。このような基礎的学力を身につけるためには、授業時間外での反復練習が必要と思われるので、ウェブ教材などを提供し、学外での予復習が可能になるようにする。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎教育科目	語学科目	Grammar and Vocabulary Ⅱ	コミュニケーション能力を支える文法力や語彙力を強化することを目標とする。高校までで学んだ英語の文法や語彙の知識を確認し、さらに高いレベルのコミュニケーションを可能にするための文法力・語彙力をつける。前期の授業を踏まえ、語彙面では4000から5000語レベルの語彙の導入を図り、文法面では情報発信をしながら文法事項を定着できるようにする。このためには、授業時間外での反復練習が必要と思われるので、ウェブ教材などを提供し、学外での予復習が可能になるようにする。	
		Oral Presentation Ⅰ	プレゼンテーションソフトウェアを利用して英語でプレゼンテーションを行うための理論と実践を学習する。効果的なプレゼンテーション、論理の組み立て方、説明のしかた、例の利用方法、話し方など幅広く学習する。前期は、自分の宝物や京都の観光地を外国人に紹介するなど具体的なトピックを中心に扱い、テーマの選び方、スピーチの準備の仕方、分かりやすい説明方法、作文の仕方、視聴覚資料の利用方法、実際に話す方法、デリバリーの注意点などを学習し、実際に英語でプレゼンテーションを行う。	
		Oral Presentation Ⅱ	プレゼンテーションソフトウェアを利用して英語でプレゼンテーションを行うための理論と実践を学習する。効果的なプレゼンテーション、論理の組み立て方、説明のしかた、例や証拠の利用方法、話し方や非言語コミュニケーションの利用など幅広く学習する。後期は、異文化理解に関するより抽象度の高いトピックを個人やグループで設定し、テーマの選び方、スピーチの準備の仕方、分かりやすい説明方法、作文の仕方、視聴覚資料の利用方法、実際に話す方法、デリバリーの注意点などを学習し、実際に英語でプレゼンテーションを行う。	
		Writing and Vocabulary Ⅰ	単なる和文英訳ではなく、英語で自分の考えや一定の情報を発信するために、英語で表現すること、それに必要な文法および語彙などを学ぶことを目標としている。併せて、パラグラフの構造についても学び、発信型の英語表現を身につける。語彙面では、学術的なエッセイや論文を読み書きするために、Academic Word Listのうち、頻度レベル１から５までの語彙の定着を図る。ここでも、授業内外で学習が可能なように、ウェブ教材を利用する。書くことでは、パラグラフを常に意識したまとまった文章が書けることを目指す。	
		Writing and Vocabulary Ⅱ	単なる和文英訳ではなく、英語で自分の考えや一定の情報を発信するために、英語で表現すること、それに必要な文法および語彙などを学ぶことを目標としている。併せて、パラグラフの構造についても学び、発信型の英語表現を身につける。語彙面では、学術的なエッセイや論文を読み書きするために、Academic Word Listのうち、頻度レベル６から10までの語彙の定着を図る。ここでも、授業内外で学習が可能なように、ウェブ教材を利用する。書くことでは、最終的には、短くてもひとつの内容のあるまとまったエッセイが書けることを目指す。	
		日本語Ⅰ	大学でレポート・論文を書くために、与えられた情報を整理し、レポートにふさわしい「形式」で、自分の言いたいことが読者に誤解なく伝わるようにまとめることを学ぶ。レポートにふさわしい「形式」を身につけるために、レポート・論文にふさわしい文体、文のレベルで気をつけるべき句読点・記号の使い方、事柄に視点をあてた客観的な文、主述関係、引用のしかた、参考文献表の書き方、アウトラインの作り方、報告型のレポートの書き方などを学ぶ。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎教育科目	語学科目	日本語Ⅱ	大学でレポート・論文を書くために、与えられた情報を整理し、レポートにふさわしい「組み立て」で、自分の言いたいことが読者に誤解なく伝わるようにまとめることを学ぶ。レポートにふさわしい「組み立て」を身につけるために、時間軸に沿った歴史的経緯の説明、定義のしかた、要約のしかた、分類のしかた、因果関係の説明のしかた、図表を使った比較対象のしかた、資料の使い方、論説文の構造、意見主張型のレポートの書き方などを学ぶ。	
		日本語Ⅲ	日本と世界の時事問題について新聞を読んだり、テレビニュースやビデオを聞き取ったりしながら、時事関係の語彙・表現を拡充し、聴解力をつける。同時にそれらの時事問題を理解する上で必要な基礎知識を確認するために関連資料を読む。さらに、最終段階として時事問題関係の語彙・表現を使い、日本語ⅠⅡで学んだレポート・論文の書き方を生かしながら、時事問題の概要をまとめたり、やそれについての意見を自分で話したり、書いたりする能力を養う。	
		日本語Ⅳ	大学生と知っているべき社会科学系の一般教養的な話題についての文章を読んだり論議を呼んだ話題について対照的な意見を掲載している複数の新聞記事を読んだりして、それぞれ話題を把握し、それについて批判的に考える力を養う。そして、提示されたテーマについて各自が調べ概略や背景を説明し、自分なりに考え、意見をのべるためのアウトラインを作り、クラスで発表し、それを小レポートにまとめることによってアカデミックな日本語力を高める。	
		フランス語Ⅰ	フランス語Ⅰは、総合基礎フランス語プログラムで、「読む」「書く」「聞く」「話す」の四技能の伸長を目指す。特に将来の文献講読やコミュニケーションのベースとなる基礎的文法と発音を習得し、テキストを用いた説明と、練習問題などを通じて知識の確認と定着を図る。文法事項の習得に重点を置くが、身の回りのことについて比較的まとまりのある文章で自己表現ができるようになることをめざし、さらにはフランス文化に触れながら、学習する。	
		フランス語Ⅱ	フランス語Ⅱは、基礎的なフランス語の言語運用能力の養成を目指す。フランス語Ⅰで学習した事項を身近な場面や状況において活用できるような運用の仕方を練習する。口頭でのコミュニケーションに必要な仕様頻度の高い語彙や文法を学びながら、基礎的な会話表現と聞き取り、簡単な文章の作成などが基本的な内容となる。言語の知識が抽象的なものにとどまらず、コミュニケーションの手段として機能するための実践的な学習を行う。	
		フランス語Ⅲ	フランス語Ⅲは、フランス語上級クラスで読解力の養成を目指す。フランス語Ⅰ、Ⅱで習得した基本語彙と基本文法を確実にしながら、さらに高いレベルのコミュニケーションを可能にするための文法力・語彙力をつける。社会情勢や文化の問題など、現在のフランスで起こっている様々な種類の時事問題についてフランス語で書かれた文章を読む。また、実用フランス語技能検定試験4級・3級に合格できる内容を目指し、授業中に検定対策も行う。	
		フランス語Ⅳ	フランス語Ⅳは、フランス語上級クラスで言語運用能力の養成を目指す。フランス語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲで習得した知識をベースに、「読む・聞く・書く・話す」の総合的なフランス語力をつけ、フランス文化全般についての理解を深めることに努める。発信型のフランス語表現を身につけ、語彙面では、学術的なエッセイや論文を読み書きできることを目指す。また、実用フランス語技能検定試験4級・3級に合格できる内容を目指し、授業中に検定対策も行う。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎教育科目	語学科目	中国語Ⅰ	中国語Ⅰは、総合基礎中国語プログラムで、「読む」「書く」「聞く」「話す」の四技能の伸長を目指す。特に将来の文献講読やコミュニケーションのベースとなる基礎的文法と発音を習得し、テキストを用いた説明と、練習問題などを通じて知識の確認と定着を図る。文法事項の習得に重点を置くが、身の回りのことについて比較的まとまりのある文章で自己表現ができるようになることをめざし、さらには中国文化に触れながら、学習する。	
		中国語Ⅱ	中国語Ⅱは、基礎的な中国語の言語運用能力の養成を目指す。中国語Ⅰで学習した事項を身近な場面や状況において活用できるような運用の仕方を練習する。口頭でのコミュニケーションに必要な仕様頻度の高い語彙や文法を学びながら、基礎的な会話表現と聞き取り、簡単な文章の作成などが基本的な内容となる。言語の知識が抽象的なものにとどまらず、コミュニケーションの手段として機能するための実践的な学習を行う。	
		中国語Ⅲ	中国語Ⅲは、中国語上級クラスで読解力の養成を目指す。中国語Ⅰ、Ⅱで習得した基本語彙と基本文法を確実にしながら、さらに高いレベルのコミュニケーションを可能にするための文法力・語彙力をつける。社会情勢や文化の問題など、現在の中国で起こっている様々な種類の時事問題について中国語で書かれた文章を読む。また、中国語検定試験2級・準1級に合格できる内容を目指し、授業中に検定対策も行う。	
		中国語Ⅳ	中国語Ⅳは、中国語上級クラスで言語運用能力の養成を目指す。中国語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲで習得した知識をベースに、「読む・聞く・書く・話す」の総合的な中国語力をつけ、中国文化全般についての理解を深めることに努める。発信型の中国語表現を身につけ、語彙面では、学術的なエッセイや論文を読み書きできることを目指す。また、中国語検定試験2級・準1級に合格できる内容を目指し、授業中に検定対策も行う。	
		朝鮮語Ⅰ	朝鮮語Ⅰは、総合基礎朝鮮語プログラムで、「読む」「書く」「聞く」「話す」の四技能の伸長を目指す。特に将来の文献講読やコミュニケーションのベースとなるハングル文字、基礎的文法と発音を習得し、テキストを用いた説明と、練習問題などを通じて知識の確認と定着を図る。文法事項の習得に重点を置くが、身の回りのことについて比較的まとまりのある文章で自己表現ができるようになることをめざし、さらには朝鮮半島の文化に触れながら、学習する。	
		朝鮮語Ⅱ	朝鮮語Ⅱは、基礎的な朝鮮語の言語運用能力の養成を目指す。朝鮮語Ⅰで学習した事項を身近な場面や状況において活用できるような運用の仕方を練習する。口頭でのコミュニケーションに必要な仕様頻度の高い語彙や文法を学びながら、基礎的な会話表現と聞き取り、簡単な文章の作成などが基本的な内容となる。言語の知識が抽象的なものにとどまらず、コミュニケーションの手段として機能するための実践的な学習を行う。	
		朝鮮語Ⅲ	朝鮮語Ⅲは、朝鮮語上級クラスで読解力の養成を目指す。朝鮮語Ⅰ、Ⅱで習得した基本語彙と基本文法を確実にしながら、さらに高いレベルのコミュニケーションを可能にするための文法力・語彙力をつける。社会情勢や文化の問題など、現在の朝鮮半島で起こっている様々な種類の時事問題について朝鮮語で書かれた文章を読む。また、ハングル能力検定3級・準2級に合格できる内容を目指し、授業中に検定対策も行う。	
		朝鮮語Ⅳ	朝鮮語Ⅳは、朝鮮語上級クラスで言語運用能力の養成を目指す。朝鮮語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲで習得した知識をベースに、「読む・聞く・書く・話す」の総合的な朝鮮語の力をつけ、朝鮮半島の文化全般についての理解を深めることに努める。発信型の朝鮮語表現を身につけ、語彙面では、学術的なエッセイや論文を読み書きできることを目指す。また、ハングル能力検定3級・準2級に合格できる内容を目指し、授業中に検定対策も行う。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎教育科目	語学科目	タイ語Ⅰ	タイ語Ⅰは、総合基礎タイ語プログラムで、「読む」「書く」「聞く」「話す」の四技能の伸長を目指す。特に将来の文献講読やコミュニケーションのベースとなる基礎的文法と発音を習得し、テキストを用いた説明と、練習問題などを通じて知識の確認と定着を図る。文法事項の習得に重点を置くが、身の回りのことについて比較的まとまりのある文章で自己表現ができるようになることをめざし、さらにはタイ文化に触れながら、学習する。	
		タイ語Ⅱ	タイ語Ⅱは、基礎的なタイ語の言語運用能力の養成を目指す。タイ語Ⅰで学習した事項を身近な場面や状況において活用できるような運用の仕方を練習する。口頭でのコミュニケーションに必要な仕様頻度の高い語彙や文法を学びながら、基礎的な会話表現と聞き取り、簡単な文章の作成などが基本的な内容となる。言語の知識が抽象的なものにとどまらず、コミュニケーションの手段として機能するための実践的な学習を行う。	
		タイ語Ⅲ	タイ語Ⅲは、タイ語上級クラスで読解力の養成を目指す。タイ語Ⅰ、Ⅱで習得した基本語彙と基本文法を確実にしながら、さらに高いレベルのコミュニケーションを可能にするための文法力・語彙力をつける。社会情勢や文化の問題など、現在のタイで起こっている様々な種類の時事問題についてタイ語で書かれた文章を読む。また、実用タイ語検定試験5級・4級に合格できる内容を目指し、授業中に検定対策も行う。	
		タイ語Ⅳ	タイ語Ⅳは、タイ語上級クラスで言語運用能力の養成を目指す。タイ語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲで習得した知識をベースに、「読む・聞く・書く・話す」の総合的なタイ語の力をつけ、タイ文化全般についての理解を深めることに努める。発信型のタイ語表現を身につけ、語彙面では、学術的なエッセイや論文を読み書きできることを目指す。また、実用タイ語検定試験5級・4級に合格できる内容を目指し、授業中に検定対策も行う。	
		ドイツ語Ⅰ	ドイツ語Ⅰは、総合基礎ドイツ語プログラムで、「読む」「書く」「聞く」「話す」の四技能の伸長を目指す。特に将来の文献講読やコミュニケーションのベースとなる基礎的文法と発音を習得し、テキストを用いた説明と、練習問題などを通じて知識の確認と定着を図る。文法事項の習得に重点を置くが、身の回りのことについて比較的まとまりのある文章で自己表現ができるようになることをめざし、さらにはドイツ文化に触れながら、学習する。	
		ドイツ語Ⅱ	ドイツ語Ⅱは、基礎的なドイツ語の言語運用能力の養成を目指す。ドイツ語Ⅰで学習した事項を身近な場面や状況において活用できるような運用の仕方を練習する。口頭でのコミュニケーションに必要な仕様頻度の高い語彙や文法を学びながら、基礎的な会話表現と聞き取り、簡単な文章の作成などが基本的な内容となる。言語の知識が抽象的なものにとどまらず、コミュニケーションの手段として機能するための実践的な学習を行う。	
		ドイツ語Ⅲ	ドイツ語Ⅲは、ドイツ語上級クラスで読解力の養成を目指す。ドイツ語Ⅰ、Ⅱで習得した基本語彙と基本文法を確実にしながら、さらに高いレベルのコミュニケーションを可能にするための文法力・語彙力をつける。社会情勢や文化の問題など、現在のドイツで起こっている様々な種類の時事問題についてドイツ語で書かれた文章を読む。また、ドイツ語検定試験4級・3級に合格できる内容を目指し、授業中に検定対策も行う。	
		ドイツ語Ⅳ	ドイツ語Ⅳは、ドイツ語上級クラスで言語運用能力の養成を目指す。ドイツ語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲで習得した知識をベースに、「読む・聞く・書く・話す」の総合的なドイツ語の力をつけ、ドイツ文化全般についての理解を深めることに努める。発信型のドイツ語表現を身につけ、語彙面では、学術的なエッセイや論文を読み書きできることを目指す。また、ドイツ語検定試験4級・3級に合格できる内容を目指し、授業中に検定対策も行う。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎教育科目	語学科目	スペイン語Ⅰ	スペイン語Ⅰは、総合基礎スペイン語プログラムで、「読む」「書く」「聞く」「話す」の四技能の伸長を目指す。特に将来の文献講読やコミュニケーションのベースとなる基礎的文法と発音を習得し、テキストを用いた説明と、練習問題などを通じて知識の確認と定着を図る。文法事項の習得に重点を置くが、身の回りのことについて比較的まとまりのある文章で自己表現ができるようになることをめざし、さらにはスペイン文化に触れながら、学習する。	
		スペイン語Ⅱ	スペイン語Ⅱは、基礎的なスペイン語の言語運用能力の養成を目指す。スペイン語Ⅰで学習した事項を身近な場面や状況において活用できるような運用の仕方を練習する。口頭でのコミュニケーションに必要な仕様頻度の高い語彙や文法を学びながら、基礎的な会話表現と聞き取り、簡単な文章の作成などが基本的な内容となる。言語の知識が抽象的なものにとどまらず、コミュニケーションの手段として機能するための実践的な学習を行う。	
		スペイン語Ⅲ	スペイン語Ⅲは、スペイン語上級クラスで読解力の養成を目指す。スペイン語Ⅰ、Ⅱで習得した基本語彙と基本文法を確実にしながら、さらに高いレベルのコミュニケーションを可能にするための文法力・語彙力をつける。社会情勢や文化の問題など、現在のスペインで起こっている様々な種類の時事問題についてスペイン語で書かれた文章を読む。また、スペイン語技能検定試験4級・3級に合格できる内容を目指し、授業中に検定対策も行う。	
		スペイン語Ⅳ	スペイン語Ⅳは、スペイン語上級クラスで言語運用能力の養成を目指す。スペイン語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲで習得した知識をベースに、「読む・聞く・書く・話す」の総合的なスペイン語の力をつけ、スペイン文化全般についての理解を深めることに努める。発信型のスペイン語表現を身につけ、語彙面では、学術的なエッセイや論文を読み書きできることを目指す。また、スペイン語技能検定試験4級・3級に合格できる内容を目指し、授業中に検定対策も行う。	
	情報基礎科目	情報ネットワーク論	インターネットや携帯電話が急速に普及し、情報ネットワークが世界的規模で拡大している。またコンピュータネットワーク上で行われる人間同士のコミュニケーションは非常に日常的、大衆的なものとなった。本講義ではコンピュータやインターネット、そして携帯電話などの誕生と発展を説明し、その技術的な特徴を解説する。さらにこれらのコミュニケーションテクノロジーが作り出す共同体と社会の新しい姿の特徴と課題について考察する。	
		情報メディアと法律	インターネット上でのトラブル、事件が数多く報じられている。本講義では、高度情報化社会におけるインターネットの利便性と危険性を情報弱者や生活者の立場から理解するとともに、インターネットを利用する際のルールやマナーといった作法や情報関連の法の知識を身につける。これらの理解をもとに、高度情報社会の発展、市民の情報福祉の向上のためには情報環境をどのように充実、進展させていけばよいのかを実践的に考察する。	
		情報と倫理	インターネットや携帯電話が普及した高度情報化社会では、未だ法的なルールが定められていない領域が多く残っている。これらの高度な情報ツールは一方で個人による表現の自由を解放し、個人による社会への貢献を容易にする機能を持っているが、他方他者の尊厳、知的財産権、あるいはプライバシー権などを侵害する可能性も持っている。従来の法律では規制の難しいこれらの課題に関して、何が問題となっているのか、またどのような取組が行われているのかを具体例を用いて解説し、高度情報化社会における人間倫理のあり方を考察する。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎教育科目	情報基礎科目	メディア・リテラシー論	「メディア・リテラシー」とは、「メディアを主体的に読み解く能力」である。メディア・リテラシーの基本的な手法を学ぶとともに、とりわけ映像メディアの特性について詳しく解説する。テレビ制作の最前線の事例を挙げつつ、メディアの抱える矛盾や問題点について日米メディアの比較も行いながら紹介する。デジタル化、メディアの再編、ねつ造問題等、さまざまな課題で混沌としている感のあるメディア界の今後の方向性、可能性についても考察する。	
	情報リテラシー科目	情報リテラシーⅠ	IT化の振興している現在では、学生は、インターネットやコンピュータを自ら操作し、情報処理ができる基本的な能力を備えることが必須である。「情報リテラシーⅠ」では、文章作成と表現能力の養成及び情報メディアの操作方法を習得し、それを使ってインターネットを活用した教育方法を学ぶことに主眼をおく。メールや案内状などのビジネス文章から、レポート・小論文といった学術文章作成の基礎を身につけさせる。また情報メディアを操作する際に必要なリテラシー教育を行なうことで、学生全員が最低限のリテラシー能力を身につけることを目標とする。	
		情報リテラシーⅡ	「情報リテラシーⅡ」では、情報メディアの操作能力を向上させることを目標とした前期の「情報リテラシーⅠ」の内容をもとに、就職活動、生涯続く情報化社会の社会人としての生活にも役立つ実践的な能力を身につけることを目的とする。具体的には、情報メディアを活用し、データの収集・分析・編集加工とPower Point を使ったプレゼンテーション資料の作成について学習し、学術成果の情報発信ができることを目標にする。	
		メディア・システム設計Ⅰ	情報の伝達・発信・収集などにおいて、インターネットの利用は不可欠である。インターネットのサービスの中でも、Web(WWW)は、コミュニケーションメディアとして、重要な役割を担っている。この授業では、インターネットの仕組み、例えばIPアドレス、ドメイン、プロトコルなどを解説し、インターネットの主なサービス、すなわち電子メール、FTP、Webについて学習する。さらにWebページの作成に必要な企画、取材、調査について説明した上で、実際にWebページを作成し、公開する。	
		メディア・システム設計Ⅱ	「メディア・システム設計I」で学習したことをふまえ、Webサイトを構築し実際に情報発信をしていく。Web上やアプリケーション上での文章、画像、音声などの編集、加工技術を習得し、在学生向け、あるいは受験生向けの情報提供、また大学の広報として実際に使用できるレベルの実践的なWebサイト構築まで指導する。少人数のグループ単位で作業を分担し、最終的にはひとつのWebサイトを構築し、実際にWeb上で公開する。	
		メディア・データ編集Ⅰ	情報通信ネットワークの発達によって、近年、メディアの価値やあり方が大きく変化してきている。伝える側の考えを反映した正しい情報を正しい範囲で伝えることがメディアに求められている。この科目では、マルチメディア、すなわち映像・文字・音の情報を一元化したメディアを扱い、情報を正しく伝達するための手法や技術を習得することを目的とする。その初歩として、静止画、文字、音の３種のデータを編集することにより、マルチメディアデータを作成する手法を学ぶ。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎教育科目	情報リテラシー科目	メディア・データ編集Ⅱ	「メディア・データ編集I」で学習したことをふまえ、動画、静止画、文字、音声データの編集を行う。この科目ではメディア・データ編集Iでは取り扱わなかった動画を編集することにより、より高度なマルチメディアデータ編集技術と知識を習得する。まず動画データの形式とその特徴を理解し、動画撮影の基礎的なテクニックを学習する。さらに動画編集用アプリケーションによるノンリニア編集に習熟した上で、作成したメディアファイルを用いてプレゼンテーションまで行う。	
	大学入門科目	大学ナビⅠ	大学での学びとは、そして大学生活の可能性とは、について具体的に紹介し、大学生活の有意義な過ごし方について考えることを目的とする。「初年次演習Ⅰ」、「日本語リテラシーⅠ」の授業担当者と緊密な連携を取りながら運営される。在学生や社会人のゲストを迎え、人生の先輩による実例から自らの将来を構想するヒントを得たい。具体的には、留学や海外プログラムの一般的な紹介、病気と健康（エイズや薬物に対する注意も含む）、セクハラを含むハラスメントの問題、大学内外の施設利用のメリットとその方法、法律と社会的責任など多岐に及ぶ。	
		大学ナビⅡ	「大学ナビI」と同様、「初年次演習Ⅱ」、「日本語リテラシーⅡ」の授業担当者と緊密な連携を取りながら運営される。１年次後期に開講され、２年次からのコース分属を控えているため、「初年次演習II」と連携しながら、各学生がコースをよく知った上で適切に選択できるような情報を与えることが目的となる。具体的には、各コースの内容のエッセンスの講義、各コースの特徴的なプログラムの紹介、各コースにおける履修モデルの解説などが含まれる。	
		初年次演習Ⅰ	本学初年次教育の中心となる必修の演習科目である。教員１名あたり約20名の学生による少人数クラスを編成する。「大学ナビ」、「日本語リテラシー」の授業担当者と緊密な連携を取りながら、授業内容の検討や、学生個々人に関する指導方針の検討なども行う。１年次前期に配当されるこの科目では、学習を中心とした大学生活へのスムーズな導入を図るため、野外調査、情報検索、意見交換の基礎的な方法に親しむことを目的とする。教員学生間の信頼関係の構築、学生間の交流等もこの科目の重要なテーマである。	
		初年次演習Ⅱ	「初年次演習I」と同様、少人数クラスを編成し、「大学ナビⅡ」、「日本語リテラシーⅡ」担当者と、授業内容、学生指導の点で緊密な連携をとる。１年次後期に配当されるこの科目では、２年次から各コースに分属するための準備として、各コースの内容に関する文献講読およびディスカッション、また各コースにおけるコース演習の見学やコース選択に関するガイダンス、相談を行う。各学生が様々な視点から学部教育の内容を深く理解し、２年次以降の学習テーマを発見できるように指導する。	
		日本語リテラシーⅠ	講義とそれに関連する実習を毎週１回ずつ行い、「読む・考える・書く」力を身につけることを目的とする。原則として１年生全員が履修し、約３週間でひとつの課題について理解を深め、それに関する課題文を添削を繰り返しながら完成させていくという作業を繰り返す。授業内容、学生指導の点で、「大学ナビⅠ」、「初年次演習Ⅰ」の担当者と緊密な連携をとる。たんなる読み書き能力の育成にとどまらず、学生各人の興味、関心、能力に応じながら、より明確に他人に伝えること、よりよく表現すること、より深く明晰に考える力を鍛えることを目標とする。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎教育科目	大学入門科目	日本語リテラシーⅡ	「日本語リテラシーI」と同様、１年生全員が講義と実習を毎週１回ずつ行い、「読む・考える・書く」力を身につけるため、３週間で課題文を作成する作業を繰り返す。「日本語リテラシーI」の課題内容とは異なり、身の回りの事象に関する考察のみならず、徐々に社会的、歴史的な範囲へと興味、関心を導くプログラムを構成する。また１年次後期に開講される科目のため、コースを選択するための問題意識の涵養をはかることのできるような題材、課題を用いる。	
専門教育科目	コース専門科目（現代文化表現コース）	美学概論	創造行為・表現行為・鑑賞行為といった人間の感性的営みに関する知見を深めるとともに、そうした営みの中心にある芸術作品の存在様態に関する理解を深める。受講生自身にも関係する具体的なトピックをいくつか取り上げ、そこに内在する美学的・感性論的な問題を抽出し、対応するこれまでの美学思想を紹介する。美学という学問において何が問題とされているのかを受講生が理解すると同時に、それらの問題について受講生自身が考察を発展させる機会を与えることを目的とする。	
		文化社会学概論	「文化」という概念には、大きく二つの捉え方がある。ウィリアムズの言葉を借りるなら、ひとつは「知的、とくに芸術的な活動の実践やそこで生み出される作品」という捉え方、もうひとつは「ある国民、ある時代、ある集団、あるいは人間全体の、特定の生活様式」という捉え方である。社会学は、このふたつの考え方を行ったり来たりしながら、「文化」という概念をどこかで固定することなく、また、作品や生活における物だけに着目するのではなく、それを生み出す人間の関係性に着目してきた。本講義では、文化を扱う方法論と、具体的に扱う領域を紹介していく。	
		プロジェクト・プランニング	プロジェクトとは、特定の目的のために、限られたスケジュール、スタッフ、コストのもとで目的を達成しようとする業務である。この講義では、プロジェクトを遂行するために最初に必要となる企画書の作成方法を学び、ついでそれを実行に移す際のスケジュールの管理方法等について学ぶ。プロジェクトでは、目的達成のために必要な行動の全体像を把握し、それらの行動を合理的に組み立てることが成功につながる重要な道筋である。本講義でもそれを踏まえて、受講生の関心がある具体的なプロジェクト例を通して、スケジュールや見積りの前提をシミュレーションし、プロジェクトのリスクの予見と対策を含めて、プランの策定を体験する。	
		デザイン史	産業革命、市民革命以降の近代社会において、デザインは人とどう関わることになったのか。ウィリアム・モリスを嚆矢とするいわゆる近代デザインの運動が、新しい産業社会に対して様々なアプローチを試みる一方で、その表裏である消費社会には膨大なモノが氾濫し、人々の欲望を喚起させてきた。単なるデザイナーやその作品の理解にとどまらない幅広いデザイン認識の中で19～20世紀という時代背景を理解しながら、デザインが人々の日常生活をどのように変えていったのかの歴史を学ぶ。	
		映画芸術史	19世紀末のリュミエール兄弟によるパリ・グランカフェでの映画上映から、映画館興行の全盛期を経て、テレビ放送との競合、さらには現代のインターネットを利用した動画配信に到るまでの、映画を鑑賞する状況の変化の中で、映画作品それ自体がどのように変化していったのかを通史として講義する。あわせてそれぞれの映画作品製作の背景についても紹介する。現在でも娯楽コンテンツの主要な一部門をなす映画についての知見を受講生が包括的に獲得することを目指す。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	コース専門科目（現代文化表現コース）	ポピュラー・ミュージック史	何をポピュラー音楽（大衆音楽、軽音、ポップ・ミュージック）ととらえるかによってポピュラー音楽の歴史の定義は違ってくる。プピュラー音楽とは、ある一部の層で評価の高い音楽ではなく、一般大衆に受け入れられている音楽である。レコードやCDなどの複製技術の進歩によって、音楽が、一部の特権階級のものでなくなったことにより生まれたジャンルといえる。本講義では、このような歴史的事実を踏まえながら、現代のロック、ポップスなどの音楽事情が与えた若者文化への影響、あるいはＣＤ産業、プロデュース会社、ラジオ、ヒットチャート、ＴＶ局の企業戦略からみた大衆音楽のありよう等について学ぶ。	
		西洋美術史	西洋美術史は、古代から現代までの西洋における美術の歴史を記述することが目的である。また、美術史のアプローチとして最も重要なのが時代と様式の分析である。本講義では、中世すなわち、15世紀初頭のルネサンス以降のヨーロッパ絵画を中心に、時代順の様式の変遷ではなく、コミュニケーション機能の視点から考察する。とくに、西洋美術の原典である聖書や神話，歴史物語を表した著名作品やキリスト教の宗旨をあらわす聖人像、聖画などの流れに色濃く見出される死生観、現実認識が創出した表現描写を個別の事例にもとづき分析して行く。あわせて宗教絵画の鑑賞方法についても論ずる。	
		グループワーク概論	ワークショップは、住民主体の農村開発・まちづくりの分野や、学習者主体の教育の分野、グループ・カウンセリングなど心理学の分野など様々な社会的課題を解決する場面で開発されてきた手法である。そこでは、講義など一方的な知識伝達のスタイルではなく、参加者が自ら参加・体験し、グループの相互作用の中で何かを学びあったり創り出したりする、双方向的な学びと創造のスタイルを学び、体験し、自ら実践する。	
		メディア編集論	インターネットの発展によって、Web表現がメディア表現の重要な位置を占めている。本講義では、Webの中でAdobe Flash, After Effectなどの動的な表現形態を使ってビジュアルな表現技術を身につける。受講者は、メディア編集方法とデザインを視点に検証・考察し、事例紹介、ワークショップ、課題制作等を通じて、メディア表現の視覚化、動的表現を実践してもらう。	
		サブカルチャー論	サブカルチャー（「下位文化」と訳されることもある）とは、社会の支配的な文化から逸脱した文化、絵画やクラシック音楽などのハイカルチャーに対し、娯楽を主目的とするマイナーな趣味的文化などを指し、近年では、マンガ、アニメ、コンピュータゲーム、特撮作品、フィギュアといった「おたく文化」を指すこともある。 現在の日本や欧米の現代思想としての「サブカルチャー」に関して、その意味と意義、歴史そしてその広がりと動きを講義する。「意味」「意義」においては文化概念一般とサブカルチャー概念を理論的に理解し、「歴史」においては、19世紀以来の大衆文化の発展や複製文化の展開を21世紀までおさえ、「広がり」と「動き」では、サブカルチャーの具体的側面について検討する。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	コース専門科目（現代文化表現コース）	サウンドスケープ論	サウンドスケープとは「音の風景」と邦訳される言葉で、1960年代に提唱された概念である。「音の環境教育」「音響生態学（地域の音環境調査）」「サウンドスケープ・デザイン（音環境デザイン）」を含んだこの概念は、様々な分野で応用できる活動領域である。この概念を通して、音を聴取する感性が芽生え、特定の空間づくりに活かせるものと思われる。本授業では、サウンドスケープの通史・技法・事例をもとに、体系的・基本的な音のあり方を伝える。	
		身体表現論	「肉体の復権」が謳われた1960年代に生まれBUTOHの名称のまま21世紀の身体表現を牽引しているアングラ・暗黒舞踏を手掛かりとして、素材、作品、制作者つまり主客を同一身体が生きる身体表現における身体を、修行や行住坐臥、ロボットから生体移植までとりあげつつ、東西身体観の相違からパフォーミングアーツとしての身体表現の領域と可能性拡大の具体的方法を提起する。	
		現代芸術論	芸術がその時代の世相、文化、政治、経済などの影響を受けて成立することはいうまでもない。とりわけさまざまな分野の脱領域がすすむ今日の社会にあって、芸術の脱領域は顕然としている。この講義では様々な現代芸術作品をとりあげ、そこに表現された美意識や思想が、社会のさまざまな局面とどうかかわるのかといった問題を考察し、現代芸術の意義を多角的に捉える方法論を理解する。	
		現代文学論	主に純文学を扱ってきたこれまでのアカデミックな文学論・文学史とは異なり、現代の文化において広く受け入れられているＳＦ小説・ホラー小説・推理小説・ヤングアダルト小説・携帯小説といった大衆文学を扱い、それらの文学ジャンルの成立史、受容史、ジャンルに含まれる作品の特性、ジャンルが文化一般に及ぼしてきた影響について講義する。受講生が日々慣れ親しんでいる文学に関する知見を深めるとともに、大衆文学を入り口として今日の文化状況全般に関する理解を助けることを目的とする。	
		建築文化論	建築空間のデザインには、その「地域」の文化、気候風土、その空間を使われる人々の個性がよく表れる。また、建築空間は象徴性、民族性、合理性、地域性など様々な文化的、地域的、または社会経済的事象に強く支配されている。さらに、建築空間は古代から近代を経て現在に至るまで、時代によってその形が多様化してきている。本講義では、建築のもつ文化的な側面とその構造を理論的に理解する。建築の各時代ごとの様式を通覧し、その特質と文化的背景について、具体的な事例を通して空間と生活の営みについて学習する。	
		コンテンツ・プロデュース論	映画、音楽、マンガ、小説、ゲームなど、メディアによって提供される表現作品は“コンテンツ”と総称される。コンテンツ制作は、作者ひとりの創作のみによって成立するものではなく、制作資金を調達して制作工程を管理し、宣伝を企画実行して鑑賞者のもとに届けるという役割を担うプロデューサーを必要とする。コンテンツ・プロデューサーの実務を作品の制作と流通の具体例を紹介しながら解説し、コンテンツ作品の成立過程と、表現と社会の関連について学ぶ。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	コース専門科目（現代文化表現コース）	日本映画論	映画機材の日本への移入期から現代の日本映画の状況に到る通史を概観しつつ、純映画運動やテレビドラマの映画化といった他芸術との関わり、戦時下の検閲や東宝争議といった政治との関わり、五社協定やシネマコンプレックスの隆盛といった経済との関わり、海外での日本映画の評価や日本ヌーヴェルヴァーグといった海外文化との関わりを、具体的な映画作品とともに紹介する。受講生が、日本の映画産業に関する知見を深めるとともに、現代日本の映像文化が成立した経緯の一端を理解することを目的とする。	
		ファッション論	ファッションは、人間の身体＝人間そのものの多様性を積極的に肯定し、多様な美のありかたを提案し続けている。その一方で、人びとを「洋服」という、たったひとつの身体様式に押し込められているとも言いうる。私たちが現在着ている「洋服」は、近代化の過程の中で、「ファッション・システム」とともに生まれてきたもので、ファッションとは可視化された近代的な権力構造だと言える。本講義では、「衣服」＝「人間の身体の表象」を通して、近代とは何かについて考えながら、私たち自身の身体とのつきあい方について考えていく。	
		映画批評論	映画を批評する方法論は、文学をはじめとする他分野の批評理論との関わりの中で多種多様に展開されてきた。本講義では、映画作品ならびに映画産業を批評してきたリアリズム、ロシア・フォーマリズム、ネオレアリスモ、構造主義、精神分析、フェミニズム、ポストコロニアリズム、文化装置理論、ジャンル理論、ポストフェミニズム等の方法論を概観しつつ、その長所と短所もあわせて紹介する。受講生が、映画に限らず芸術作品全般にアプローチする方法として、その一端を会得することを目指す。	
		空間デザイン論	人間と環境を考えた空間デザインのありようと課題について具体的に理解し、さまざまな空間デザインを行う際の視点と姿勢を学ぶ。具体的には、空間デザインを行う意義と有用性について哲学・倫理・技術面からのパースペクティブな思考を行い、屋内外、都市・自然風景地といったさまざまな空間デザインの具体的な事例に基づき、その背景とプロセスについて学ぶ。様々な空間を通して、私たちが作る人工環境の意味・意匠・機能について思考する基礎力を養う。空間把握，空間造形のダイナミズムを多くの作例とともに紹介する。近代から現代への空間デザインの流れと，居住空間、商業空間，劇的空間，展示空間、都市空間などの各領域の設計理念およびデザインプロセスによる実例を学ぶ。	
		音環境デザイン論	種々の作品制作や空間設計において、視覚重視のあり方を見直す切り口として、音の分野を考慮した活動である「音環境デザイン」が行われている。とくに、特定の公共空間の音環境を改善する場合、既成の音楽を流すだけでは、空間の質的向上にはつながらない。本授業では、音環境デザインの通史・技法・事例を紹介するとともに、環境音楽の制作プロセスを含めつつ、実践的な音の計画手法を伝える。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	コース専門科目（現代文化表現コース）	情報メディア論	インターネットや携帯電話が急速に普及し，情報ネットワークが世界的規模で拡大している。またコンピュータネットワーク上で行われる人間同士のコミュニケーションが非常に一般的なものとなった。本講義では，コミュニケーション・テクノロジーとしての情報 ネットワークを検討する。	
		舞踊史	舞踊は有史以前から人類の歴史とともにあり、舞踊のない民族はない。大いなる力との交流を願い祭りの場から始まった民族の魂としての舞踊は、風土と時代を背景に、多様な様式を生み、伝統芸能の道と、芸術への道を進む。本講義は、日本と西欧の舞踊史を概観し、アジアとアフリカの舞踊を加え、舞踊の人類に果たす意味と役割を問うことによって舞踊文化理解への導入とする。	
		マンガ文化論	外国のマンガ事情との比較を通して、日本マンガの歴史と社会的な意義を論ずる。そのうえでマンガを文学や美術と同じように分析する「批評」の視座の可能性に言及し、あわせて社会的な影響からみたマンガ文化の未来像にも焦点をあててみたい。	
		アニメ文化論	近年、日本のマンガやアニメ、ジャパンアニメーションが世界に大きな影響を与えている。本講義では国内外のアニメ事情と歴史、とくに、70年代、80年代～90年代のアニメ作品を中心に、日本アニメの変遷を分析し、作家たちの独自の視点で素描した画期的なアニメ文化を論ずる。また、日本や世界各国のさまざまなアニメを観て、それらを比較しながら、日本のアニメーションの特徴を分析し、なぜアニメが日本でここまで発達したのか、その文化的背景についても考察していく。	
		舞台芸術論	近・現代の日本の演劇について、演出法や舞台美術の側面から考究するのが、この講義の目的である。築地小劇場から宝塚歌劇団に至るまでの近代芝居の変遷を、舞台製作の視点を重視しながら論じていく。	
		「性」の社会・文化史	現在を生きるわれわれは、常に予め、性的存在である。われわれは、種的・類的であり、生物の機能の一つである「性」を持つ。しかしその「性」は、われわれが社会に生まれること、また、その社会がそれぞれ固有の文化を持つことと深く関係している。この講義では、現代の「性」をめぐる状況を踏まえつつ、それを規定する歴史を、特に社会と文化の中に探ることを目的として講義をおこなう。その際、性に関わる思想や芸術についての触れる。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	コース専門科目（国際コミュニケーションコース）	英語音声学Ⅰ	英語音声学の基礎知識を得るともに、特に日本人が英語を発音したり聞き取ったりする際の困難点を理解し、日本語と英語の音韻構造の違いや英語の音声指導のための手がかりを学ぶ。具体的には、分節的特徴を中心に扱い、音声学や音韻論の基本的で専門的な用語を理解すること、英語の母音や子音の音声学的な特徴（英語音の分類と記述、調音器官、発音のしかたなど）を知ること、そして、その知識を理解や産出の技能に結びつけることを目標にする。	
		英語音声学Ⅱ	前期は分節的特徴を中心に学習したのに対し、後期は超分節的特徴―主に、音の連結、アクセント、リズム、イントネーションなど―について学習する。コミュニケーションを的確に行うためには、文字として表記されないこれらの習得が必要である。この授業では、超分節的特徴を知ること、そして、その知識を理解や産出に結びつけることを目標とする。また、音声分析ソフトウェアを利用して、コンピュータを利用した音声分析や音声実験の手法についても学び、英語教育への応用についても考える。	
		英米文学史	この授業では、実に多彩で豊富な英米の主要な作家の作品がどのように生まれてきたのかを、歴史的背景を辿りながら説明する。人間が自分のおかれた時代の中で何を考え、どのような問題と立ち向かわねばならなかったのか、それを作家たちがどう扱ったのかを概観することによって、英米の文学の特徴や性格といったものの理解を深めることがこの授業の目的である。テキストは作家、作品、時代背景について簡潔にまとめたものを使用し、作家・時代背景についてのビデオ（英語、字幕なし）や映画化された作品を積極的に紹介するなど、立体的な授業を目指す。	
		英語圏文学Ⅰ	児童文学は現在、世界の多くの国で書かれ、子どもたちにまた大人にも読まれているが、その歴史はそれほど古いものではない。児童文学のメッカともいうべきイギリスでも本格的に創作されるようになったのは、19世紀からで、各地で長い間語り継がれてきた伝承を基盤として、様々な作品が生まれてきた。「英語圏文学Ⅰ」では、児童文学の領域に属する作品群の中でも、英語圏の文学に焦点をあてる。昔話、伝承、古典、新しい作品までの流れを概観しながら、子どもから読める文学作品である児童文学について、絵本、ファンタジー、家庭物語など主要ジャンルに分類し、主要作家や作品の概要を論じつつ検証していく。	
		英語圏文学Ⅱ	英語で書かれた文学は、カナダ、オーストラリア、ニュージランド、ナイジェリア、ガーナ、南アフリカ等のアフリカ諸国で広く読まれている。こうした英語圏文学を通してそれぞれの地域の文化や歴史、社会などを学ぶことによって、文学世界の普遍性や独自性を豊かな英語表現を通じて学ぶ。とりわけ、アフリカ大陸からは４人のノーベル文学賞受賞者がいる。日本ではあまり知られていないこうした作家たちの作品に触れることは、グルーバル化した現代においては重要なことである。	
		文化心理学	心理学における「文化」の位置付けや、文化研究における意味体系および文化心理学の理論を概観することによって、文化的影響のもとでの人間の心の働きについて、理論的枠組みを持つことを目的とする。また、社会文化的な存在である人間の心の働きと現実の生活における営為を、日本人の道徳意識、自己-他者関係の形成、親子関係と自立などの具体的な問題領域から実証的にアプローチし、心理学ではどのようにして捉えるのかを解説する。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	コース専門科目（国際コミュニケーションコース）	英語圏文化論Ⅰ	19世紀以降におけるイギリスの世界各地への進出の結果、また、その後におけるアメリカ合衆国の台頭により、英語は広く世界中で使われるようになり、「英語圏文化」と呼ばれる文化圏が形成された。この授業では、イギリス、アメリカはもとより、アイルランド、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド等だけではなく、広く英語を共通語として使う英語文化圏の人々の文化や文学に焦点をあてつつ、ファンタジーなど現代において国際的通用性を獲得している文芸様態について検討する。	
		英語圏文化論Ⅱ	英語圏文化論Ⅱはイギリス、アメリカだけでなく、より広範囲の英語圏を巡る文化や文学を研究します。具体的には、文学作品だけではなく、芸術作品、映画、音楽、などを取り上げます。また、「グローバル社会」の進展に伴い、さまざまなエスニシティを持つ人々の英語文化、あるいはもともと英語圏ではない国々で生み出され、そういった「ディアスポラ」の英語圏文化を考察するという視点から、新たな「国際コミュニケーション」の可能性を追求します。	
		異文化間コミュニケーション	この講義の目的は、21世紀のグローバル化した日本社会に生きていく上で必要な、基礎的知識や柔軟なものの見方、そして異文化間で生ずる問題の克服法などを身に付けることにある。個々の文化・地域に関する事例を検討し、現在日本や世界はどんな状況にあるのか、どんな問題があるのか、どう解決したらいいのか、どこへ向かおうとしているのか、などについて考えながら国際社会に関する基礎的な知識を学び、異文化（他者）を受け容れ・理解することによって自文化（自分）を深く見つめ直す。	
		言語学Ⅰ	言語学は人間のことばの本質を探求する学問である。この授業では、「言語とは何か」「言語はどのようにして働くか」という根源的な問いに対して、受講者自らが答えを見つけ出すことを期待する。具体的には、「音声学」「音韻論」「形態論」「統語論」「意味論」「語用論」を各論し、「すべての言語に共通する特徴」「人間の言語と動物の伝達の相違」「言語はなぜ変化するのか」「言語にまつわる神話」など具体的な問題を切り口にしながら、その問いについて考える。	
		言語学Ⅱ	我々人間の生活はことばの使用と切り離して考えることはできないし、ことばの使用には必ず意味の問題がさまざまな形で絡んでくる。この授業では、まず、日常生活の中で経験している身近な事柄を、意味論という枠組みの中で言語を対象化し、考察することを目的とする。具体的な切り口として、「意味とは何か」「語と意味」「文と意味」「文脈と意味」「高い文脈と低い文脈」「意味の変化」「比喩の理解」「意味の習得」などの事柄について深く考察する。	
		地球市民論	地球市民とは、世界平和や人権擁護、環境保護や経済的格差の是正など、地球全体の課題に自己の責任において取り組むことのできる人間である。「地球市民論」では、国際的な分野における多文化共生社会を担うという観点から、「市民」や「市民社会」という概念の歴史的背景やそれらに関連する諸問題を考える。また、その一環として、「ジェンダー、人種、階級」など、現代社会における多様生と共生を巡る理論と事例を分析しながら、地元の「市民」から「地球市民」になる可能性について考察する。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	コース専門科目（国際コミュニケーションコース）	国際社会論	国民国家および超国家的なアクターである各種国際機関、NGO、多国籍企業などが作り上げている国際社会の歴史的発展と、現状の構造的理解を目的とする。まず国民国家、および国家間の連合の起源と発展を概観し、それらが作り出してきた基本的な国際法の内容を紹介する。また経済的な活動の国際化に伴って出現した多国籍企業の特質とその問題について理解を深める。投機マネーの出所とその動きについても触れることになろう。さらに現在の国際政治、経済に大きな影響を及ぼすようになってきた非政府組織の代表的なものを紹介し、その意義についても論じる。	
		人間の安全保障	本講義では，人びとの生活の平和と安定を求める「人間の安全保障」の理論的および実践的な理解を通して，紛争や貧困といった国際社会が抱えるグローバルな問題を多角的に考察する力を身につける。特に，現在注目されているアフリカの事例をいくつか取り上げ，それらの背景・現状・将来の展望を，国際機関や地域的機構，NGO，地域社会など，さまざまなアクターの視点から具体的に分析する。そして帰納的に，グローバル化時代における国際社会の矛盾や課題に対する「人間の安全保障」という概念の可能性と限界について検討する。	
		Education and Society	学校の成立およびその存在がどのように地域社会や家庭とつながっているのかを考察し、現在の日本の学校、生徒、教師、が直面する現状と諸問題を身近なところから検討する。具体的には京都における日本最初の近代的小学校の歴史と変遷を地域社会との関連で考える。また、日本のことだけではなく世界の国々における教育と社会の関わりがどのような文化的・社会的背景や価値観に左右されているのか、比較教育の視点からも考察する。授業は英語で行われ、ノートの取り方や授業の話の構成等も説明し、英語で授業が受けられる訓練をする。また、教育と社会に関するテーマを選び、英語による発表もしてもらう。	
		Marginalized Voices	「周縁の人々の声」では、植民地主義時代から現代をとおして、近代世界システムの中心から周縁に押しやられ、排除されてきた人々によって生み出されてきた文学、評論、映像作品を読み解く。周縁を生きる人々固有の歴史的体験をたどりつつ、その多様な表現をとおして、「周縁」が内包する力、可能性を探る。近代を概観し、周縁が主流にどうみられてきたか、主流をどうとらえ返してきたかの関係性を考察することは、近代世界システムの構造をあぶりだすことでもある。	
		Intensive Reading Ⅰ	学士課程で要求される様々な種類の英語の文章を読むことができる能力を向上させることを目標とする。様々な英語教材を精読することによって、高校卒業までに培われた基礎的な英語の読解力を発展させ、論理的な組み立てや展開を理解し、知識を統合する能力を高める学習をする。前期は、小説をはじめ、演劇、詩、などの芸術作品を通して、英語の背後にある文化、社会、習慣、風俗を理解しながら、言語表現から醸し出される意味に意識を向け、その表現方法をも学ぶ。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	コース専門科目（国際コミュニケーションコース）	Intensive Reading Ⅱ	学士課程で要求される様々な種類の英語の文章を読むことができる能力を向上させることを目標とする。様々な英語教材を精読することによって、高校卒業までに培われた基礎的な英語の読解力を発展させ、論理的な組み立てや展開を理解し、知識を統合する能力を高める学習をする。後期は、新聞、雑誌、テレビ、インターネットなどのメディアを通して得られる海外のホットな英語情報を、英語の背後にある文化、社会、習慣、風俗を理解しながら、その表現方法をも学ぶ。	
		Advanced Oral Skills Ⅰ	この科目は、大学で学ぶべき高度な口頭でのコミュニケーション能力を養成するものである。パブリックスピーキングやディベートを主とした活動とし、すべて英語で授業を行う。ディベートについては、情報収集の手順や分析の仕方、議論の組み立て方、反論の仕方など実際に必要な技術も習得する。パブリックスピーキングについては、一人３分程度の原稿作成から発表に至るまでの手順も学習し、聴衆から批判を受けることで、優れた「口頭表現」とは何かを知り、その内容の充実を図る。	
		Advanced Oral Skills Ⅱ	この科目は、さらに高度な口頭でのコミュニケーション能力を養成するものである。パブリックスピーキングやディベートに加え、プレゼンテーションを主とした活動とし、すべて英語で授業を行う。パブリックスピーキングでは一人５分以上の発表を、ディベートではより長い時間の討議ができることを目指す。プレゼンテーションについては、プレゼンテーションソフトウェアを効果的に活用し、自分の専門領域の研究や卒業論文の内容についてプレゼンテーションをするための基礎と応用を学ぶ。	
		Academic Writing Ⅰ	英語のエッセイの作成における基礎を学ぶ。まず、パラグラフ・ライティングの構成と技法（トピックセンテンスの機能や談話標識の効果的な活用等を含む）、引用の方法、サマリーとヘッドラインの書き方、参考文献の書き方等、英語によるエッセイ作成のための基本的事項を学習する。その後、実際に各自で関心のあるトピックを選び、文献調査・資料収集の作業を経て、最終的にＡ４用紙２～３ページ程度のショートエッセイを作成する。論文作成を補助するツールやソフトウェアの活用方法についても学ぶ。	
		Academic Writing Ⅱ	英語のエッセイや論文の作成における基礎を習得した後、その応用を学ぶ。パラグラフ・ライティングの構成と技法（トピックセンテンスの機能や談話標識の効果的な活用等を含む）、引用の方法、サマリーとヘッドラインの書き方、参考文献の書き方等、英語による論文作成のための基本的事項をさらに深めた後、実際に各自で関心のあるトピックを選び、文献調査・資料収集の作業を経て、最終的にＡ４用紙４～５ページ程度のエッセイもしくはミニ論文を作成する。	
		Academic Reading Ⅰ	人文学分野のエッセイや論文など学術的な英語の文章を精読して、英語の文章の構成、説明手順、論理の展開方法などを理解する。筆者の主張とその証拠などを結びつける論証方法、具体的な事物や事象がどのように総合に関連しているかなど、重要な語の定義、論理の流れ、種々の説明の方法などを詳しく理解する。前期はまず具体的なものを中心に扱う。実際の学習では、パラグラフ単位の論理の展開、トピックセンテンスの理解、起承転結など英語を理解するために必要な基礎的なことを学術レベルで習得できるようにする。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	コース専門科目（国際コミュニケーションコース）	Academic Reading Ⅱ	オーセンティックな人文学分野の論文などの学術的な英語の文章を精読して、文章の構成、説明手順、論理の展開方法などを理解する。筆者の主張とその証拠などを結びつける論証方法、具体的な事物や事象がどのように総合に関連しているかなど、重要な語の定義、論理の流れ、種々の説明の方法などを詳しく理解する。後期は、一般的なものだけでなく、より専門的な内容も扱う。実際の学習では、パラグラフ単位の論理の展開、トピックセンテンスの理解、起承転結など英語を理解するために必要なことを学術レベルで習得できるようにする。	
		Academic Skills Ⅰ	専門の学問研究に不可欠な高度なレベルの「読む」「聞く」「話す」「聞く」四技能の統合的な能力の向上を目指す。特に、英語で書かれた各自の専門領域における種々のエッセイや論文の内容を批判的に考えながら読み、理解するための発展的な技能と語彙力を身につけ、またその内容について自らの考えや意見をパラグラフまたはエッセイの形で、的確に表現できるようになることを目指す。前期末には、Ａ４用紙８ページ程度のエッセイを作成する。	
		Academic Skills Ⅱ	専門の学問研究に不可欠な高度なレベルの「読む」「聞く」「話す」「聞く」四技能の統合的な能力の向上を目指す。特に、英語で書かれた各自の専門領域における種々のエッセイや論文の内容を批判的に考えながら読み、理解するための発展的な技能と語彙力を身につけ、またその内容について自らの考えや意見をパラグラフまたはエッセイの形で、的確に表現できるようになることを目指す。Ａ４用紙１０ページ以上のエッセイを作成し、それを英語による口頭でのプレゼンテーションにつなげるように、これまで得た技能をフルに活用する。	
		English Workshop Ⅰ	一年次末にコース所属が決定した学生を対象に行う４日間の集中講義。まず、二年次以降の学びについてガイダンスを行い、それまでの英語学習で身につけた学力の一層の向上を図ることを目的とする。できるだけ日本語を排して、英語中心で授業を進め、受講者の動機付けを高めると同時に英語運用能力を伸長する。具体的には、英語劇、ショートスピーチ、テーマに基づく会話練習、英語教員とのフリートーキングなど、豊富な活動を通して、「読む」「書く」「聞く」「話す」の四技能の総合的な力を伸ばすことを目指す。	
		English Workshop Ⅱ	二年次前期末、コース所属学生対象に行う４日間の集中講義。二年次においても短期集中学習の環境の下において、それまでの英語学習で身につけた学力の一層の向上を図ること、そしてこれ以降の学習の進め方を考えることを目的とする。できるだけ日本語を排して、英語中心で授業を進め、受講者の動機付けを高めると同時に英語運用能力を伸長する。あらかじめ教材を配布して、それに基づいて自由会話、討論、ミニ報告書作成と発表、英語によるミニ講義の聴取体験とノートのとり方の学習、グループでのスキットの作成と実行などの活動を行う。	
	コース専門科目（日本・アジア文化コース）	京都の自然と景観	京都の自然と景観は、これまでに大きく変化しながら今日に至っている。京都周辺の山々などに見られる森林などの植生もその例外ではない。植生は長く変化しにくいようにも見えるが、調べてみると、それは人間社会の有り様などを如実に反映して大きく変化してきたことがわかる。本科目では、京都東山、嵐山、比叡山、大文字山など、主に京都近郊山地の植生の歴史について述べながら、その背景にあった社会や文化などについても考える。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	コース専門科目（日本・アジア文化コース）	アジアの宗教	変動する国際関係のなかで近年のもっとも激変している地域がアジアであり、その国際関係とのあいだに潜んでいる問題の一つが宗教問題ではないだろうか。その中で東アジアの伝統的な宗教の諸事情と現代社会の宗教事情を取り上げることでこれからの問題と可能性について考えてみたい。東アジアの生活宗教と社会の歴史、文化などに焦点をあててみたい。何よりも、現代日本の「無宗教事情」を読み解く中で、かつては宗教心豊かな国であった日本の宗教事情をどのように考えるべきかを追求したい。	
		アジアの歴史と思想	中国、朝鮮半島から日本へと伝来した仏教の歴史的変遷を各地域の民間宗教や儒教、あるいは政治、経済的な影響に比定しながら、哲学思想としての仏教の変容を明らかにする。また、近代化以後のアジアにおいて習俗化した仏教が各国の政治制度の中でどのように享受され今日に至ったのか、という問題に関しても言及してみたい。	
		日本の民俗文化	現代に生きる我々自身を理解する視点として日本の民俗文化を考えてみたい。すなわち我が国の伝統的生活についてその性格や特色を知り、それを現代の文化と比較することで、一見すればそのような文化とはつながりが希薄に見える現代文化の幾つかの事象が、実はそうした伝統的生活文化に基礎づけられていることを明らかにしていく。そしてかかる知見が、現代の文化たとえば映画やマンガ、小説などのなどの理解に有効であることを示していきたい。	
		アジアの民族芸能	韓国、朝鮮の芸能をとりあげ、それらの音楽性、口頭伝承的素材、宗教とのかかわりなどに言及する。とくにここではパンソリの成立と展開を中心として、判奏楽器の特色から楽曲の内容に顕著な説話的要素、祭祀としての側面、伝承者のありようと現代的な課題にふれて行く。また、中国大陸の芸能、民族音楽との関連はもとより、日本の古謡への影響についても明らかにしてみたい。	
		現代アジアの比較文化論	現在のアジア情勢は複雑で多元的な現代社会を構築している。特に、急速に変化しつつある東アジアは、歴史的には漢字文化圏に属しており、かつてない豊な文化を一つの文化として共有していた。にもかかわらず、第二次世界大戦後政治的な対立構造をはじめ、短い時間のあいだに全く違う社会と文化を創出しており、互いの理解を妨げる壁となっている。その現代アジア社会の大衆文化を比較してみる試みは絶対必要なものになっている。なお、日本文化の特質をしることにもつながるといえる。	
		日本文化史概論	現代社会のなかに見出される「日本的なるもの」とは何か。また、茶道、香道、花道などの「道」の世界が日本文化に根付くまでにどのような歴史背景が存在したのであろうか。そういった疑問を解き明かすために、この講義では、中世末の連歌師、お伽衆の動向から説明し、江戸初頭の寛永文化の成立にいたる過程を概説する。いわゆる「宗匠」「家元」の制度的な出発点をとおしてみた日本文化の特性に言及する予定である。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	コース専門科目（日本・アジア文化コース）	日本文学史	日本文学の各ジャンル間にみられる影響関係を概観する。とくに古代神話と歴史書、平安朝の物語と和歌、口承文芸と室町時代小説、近世の人形浄瑠璃と歌舞伎、明治初頭の戯作モチーフと三遊亭円朝の作品群などの題材をとりあげて、文学、絵画、口承、芸能文化等の交流史に留意してみたい。文学が文字言語のみによって生成したものでない点を確認しながら、日本文学の成立を考究して行く。以上の講義をとおして日本文学史の全体像を理解していただく。	
		日本美術史	日本美術史を講じるにあたり、その中心であり基本をなす仏教美術をとりあげる。これはインドに始まり、アジア各地を経由して我が国に伝わったものだから、当然日本のみならずアジア全体を見渡す視点が必要となる。考察は遺品の多い仏像を主とし、時代や製作地の違いを反映した「様式」の見分け方を学びたい。また「日本」や「奈良・京都中心」が自明であった従来の美術史ではなく、多視点から批判的に捉える観方も提供したい。	
		アジア美術史	古来わが国に影響を与え続けてきた中国の美術を主にとりあげる。そして中国美術を漢民族中心史観で説くのではなく、多民族が興亡した地の複合文化の所産として捉え、アジア各地との関連を見落とさないようにしたい。考察は内容豊富な「山水画」とスケール雄大な「石窟寺院」を中心に、広大なアジアが生み出した美術の特徴をおさえていきたい。	
		日本の歴史と芸能	日本芸能史に散在する宗教性、とりわけ神祇祭祀との関わりを明らかにしたうえで、16世紀以後の説経節、古浄瑠璃、文楽、歌舞伎などの芸能の生成を概説し、日本芸能の民俗性を明らかにする。また、本来漂泊芸能民の管理下にあった人形芝居（くぐつの芸能）が都市文化に定着するプロセスや、かぶき踊りから三都の歌舞伎芝居への変遷を追尾しながら、都市芸能の成立史に言及する。芸能史にそくして日本中・近世の庶民生活史を鳥瞰するところに、この講義の主目的がある。	
		アジア交流史	第二次世界大戦時における日本のアジア侵略によって生じ、今なお続いている諸問題及び明治期以降近代日本のアジアとの関わりの歴史的背景を検証する。特に、朝鮮・中国及び東南アジア諸国との関係を取りあげ、現在の日本の社会に刻印されているアジアとの関係の歴史について論じる。また当時の日本及びアジア諸国の社会の生活を理解するために、ドキュメンタリー・ビデオ、映画そして特に大日本帝国が国内及び植民地あるいは戦地で発行した古い絵葉書に使われている写真等当時のヴィジュアル・メディアの分析を行う。	
		伝統文化総合講座	京都、日本、アジアにみられる「伝統と現代」をキーワードとして、次の６つのジャンルをとりあげる。⑴古典楽器の意義と現代における再生、⑵語りの文化（講談、落語）、⑶香りの文化を考える、⑷武道と身体表現、⑸古美術鑑賞のてびき、⑹文字のない物語（昔話）。各回ごとに教員の解説とゲストスピーカーによる実演・講義を組み合わせ、受講者の視野を広げる素材として提供する科目である。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	コース専門科目（日本・アジア文化コース）	口承文化の歴史	口承文化に対する学問的アプローチは、民俗学はもちろん、文化人類学や歴史学、文学などからも行われている。本講義は、口承文化の中でも民話、特に異類婚姻譚を中心に講義をする。古くて新しい民話の魅力について多角的に考察したい。	
		比較神話学	世界各国に神話というものが存在する。世界創造神話、人類起源神話、死の起源、火の起源など人類とは切っても切りきれない事象がいかに成立したのかということを説明する神話は、どの民族の神話にも存在する。これらを比較、検討することが比較神話学である。同じような神話があるということは、偶然に同じである場合、ある場所を発端として遠方まで伝わった場合などが考えられる。このように地域的な伝播や変革もあれば、時間的な伝播や変革もあるだろう。ある神話がずっと同じ内容で伝わったものもあれば、全く形を変えて現代に存在するものもある。伝えていく民族の意識の変革や、周辺民族の神話による変革や融合によって、その姿を変えていく。神話から民話、おとぎ話に、また慣習の一部になったものもあり、それを逆にたどって神話の原形を見つけだすのも神話学と言えるだろう。	
		南島文化論	本講義で対象とする「南島」は、九州の南西海上に、北は奄美大島から台湾との国境に向かって弧状に連なる島嶼群である。作家・島尾敏雄の造語によって、ヤボネシア（日本列島）のなかの「琉球弧」とも呼ばれた。ここは、ヤポネシアの中でも、とくに文化的なまとまりをなす地域である。その理由の一つに、歴史的な背景がある。現在、行政的には、沖縄県全域と鹿児島県の一部に属するこの地域は、近代（1879年）以前は、琉球という一つの王国であった。近世初頭（1609年）に、薩摩藩の島津家に侵略され、奄美諸島を領有された。だが、それ以南は、政治的な理由で、島津家の統制下にありながら、近代まで琉球王国として存続し、日本語圏のなかでも独自の文化を保ってきた。本講義では、琉球弧文化の概要が全体的にイメージできるように、歴史の始まりから現代の文化に至るまで、幅広い内容について話したい。いわば、「南島入門編」である。	
		うたの文化論	文字を持たない人びとはいても＜うた＞を知らない人びとはいない。人類が文字を生み出すはるか以前から、おそらくは、ことばの発生と共に＜うた＞はあった。歌を「うたう」という行為は、時代を超え、地域を越えて受け継がれてきた、最も普遍的な表現行為の一つなのである。詠む歌である和歌と異なり、実際に声に出して表出されるうたう歌－歌謡－の表現は、本質的に共同的なものである。時代によって生み出され、時代と共に生き、時代の移り変わりと共に消えて行く。本講ではそうした視点から、それぞれの時代を代表する多様な歌謡の作品をとりあげ、その考察を通じて、それを歌い継いだ人びとの心の内側や時代の精神を読み解く視座と方法とを学ぶ。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	コース専門科目（日本・アジア文化コース）	都市伝説研究	都市に生まれる「噂話」について、その発生のメカニズムを探ることを目指す。材料として取りあげるのは、主として近・現代に生じた話である。ことに大学の怪談、テポドンの噂話、そしてアジア・太平洋戦争中に囁かれた神々や妖怪に関する話などである。それらの分析を通して、なぜそうした話が生み出される必然性があったかについて考えていきたい。	
		説話・伝承史	日本の社会において、ある特定の説話が何世代にもわたって語り伝えられた背景、原因とは何か。本講義においては、そのような視点から、主に近世期の文芸、芝居、絵画表現に見出される怪異譚の成立と展開を考察する。日本の怪異小説を生んだ背景史をたどると、そこには仏教唱導の影響、中国説話の翻案、民俗心意や霊魂観の投影といったさまざまな生成の歴史が見出されるだろう。ここでは従来の文学史があまり扱ってこなかった怪異の表象史を明らかにしたい。	
		絵画とものがたり	平安期の絵巻や中・近世の物語草子、絵本、絵解き図、図会物などの分野は、程度の差こそあれ、図像表現の背後に、絵画のモチーフとなった説話や先行物語のストーリー性を内包する場合が少なくない。この講義では、おもに中世末期の高僧絵伝を題材として、聖徳太子、中将姫などの宗教英雄の物語が、絵画の素材となって民間に流布し、仏教唱導の枠組みをこえた広い享受圏を成立させて行った経緯を概観する。個々の事例をとおして日本文化史にみとめられる図像と文芸の交絡現象に言及する。	
		日本語学	日本語の歴史を音韻、表記、文法等の観点から明らかにしながら、我々のまわりに存在する現代語の素源と変遷を考究する。ことに漢字受容の歴史を考えようとする際、古代・平安朝期の漢文訓読のあり方は度外視することのできないものといえるだろう。ここでは平安物語の漢詩文を中心として、訓読の方法の確立に果たした主要事項を紹介してみたい。	
		日本語教授法	日本語教授法では、第一に日本語を客観的に見ること、第二に母語と母語以外の言語を習得することの違いを実感することを目指す。この目標を達成するために、日本語の音声、語彙・表記、文法、談話を日本語教育の枠組みで学びなおし、第一言語習得と第二言語習得についての基本的な知識に触れる。また、これまで習ったことのない言語をさまざまな教授法を使って学ぶことによって、母語以外の新たな言語を学習することの難しさや教授法の違いが学習に及ぼす影響を体験する。	
		日本古典文学	日本の物語史において歌物語の果たした役割は避けて通れない重要事項といえるえだろう。この講義では、『伊勢物語』『大和物語』の両書をとりあげ、歌物語の成立と享受史にふれてみたい。ことに近世国学者たちの話釈によって、これら平安期の歌物語がどのように解釈され、日本古典の主要作品に位置付けられて行ったかという点に言及する。あわせて『伊勢物語』の影響を受けた18世紀の草双紙に着目し、歌物語の戯画化という問題についても考えてみたい。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	コース専門科目（日本・アジア文化コース）	くずし字講読	いわゆる変体仮名で書かれた近代以前の書物を読解するための基礎的知識を身に付け、くずし字の特性、字母の変遷、古文献調査の方法論などを学ぶ。ことに17世紀以後の版本に見られる変体仮名に慣れることを主目的として、渋川版お伽草子のテキストを使用してくずし字入門を行う。その際、仮名文字の字母を検索する方法や漢字の字体を調べる方法（辞書、仮名変体集の使い方）に重点を置きながら、古文献の読み解きを実践的に指導する。	
		近代文学講読	近代文学の成立を考えるために、明治初頭の硯友社文学から反近代の系譜にいたる主要作家の小説をとりあげ、文体、古典意識、西欧文学の投影といった問題に言及する。とくに夏目漱石『夢十夜』を精読しながら、江戸後期の戯作的発想が近代文学特有のテーマにいかなる展開をはたしたか、を考える予定である。また明治後期から大正期の名作にもふれ、近代文学の時代性、世相性、背景について明らかにして行く。	
	コース専門科目（環境未来コース）	自然教育論	自然教育という概念を実際に現場に出かけて体得します、例えば京都大学上賀茂演習林や深泥が池、宝が池、実相院、鞍馬山に実際に出かけレーチェルカーソンのセンスオブワンダーについて学習する。ネイチャーゲームのいくつかについても実際に体験する。小学校や中学校で実施できるような自然教育の実例について体験学習する。	
		公害史	人類が科学技術の発展ともに負の遺産としておこしてきた環境破壊、人間社会のコミュニティーの破壊について技術史的側面からと文化社会面から労働災害面、反対運動の組織論等多角的な側面から学習する。具体的にはイギリスの産業革命時の大気汚染、テムズ川の汚染問題からはじまり、土呂久ヒ素、足尾銅山、水俣秒、イタイイタイ病、アスベスト問題等をキーパソンを中心として学習する。	
		環境教育論	今日、きわめて多様な取り組みが展開されている環境教育とはどのようなものとして捉えればよいか、その見取り図とも言えるものを踏まえ、「環境教育」と呼ばれる取り組みに関する基礎理解を与えることを主な目的とする。環境教育の類型、主要概念、歴史、担い手、課題などの解説を行うとともに、受講生が、将来、環境教育に指導者としてかかわることも視野に入れ、環境教育の役割や実践のあり方を自分なりによく考える機会も提供する。	
		環境思想論	一般に「環境思想」と呼ばれる考え方や価値観に関する理解を深め、自分なりの環境思想を育てることを目的とする。環境思想あるいはエコロジー運動を支える二本の柱である「ホリスティックな世界観」および「市民の概念」を軸に、ライフスタイルの転換とは何を意味するのか、エコロジカルな社会とはどのようなものして構想されているのかといった問いを、多様な具体的取り組みの背景にあるオルタナティブな価値を確認しつつ考えていく。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	コース専門科目（環境未来コース）	南北問題	環境問題の本質は南北問題であるといわれる。先進国と途上国の格差は縮まるどころか拡がりつつあり、世界の環境と平和に暗い影をおとしている。貧困、食糧、環境破壊、人権抑圧、戦争、政治的混乱といった一連の問題が、どのように（そしてそもそも何故）連動するのか。なぜ、科学技術の進歩や開発援助の拡大では問題が解決されずにきたのか。そのメカニズムを解明し、事例分析を試みる。また、問題解決にむけて世界各地でさまざまに試みられている動きも紹介する。	
		エネルギーと環境	持続可能な社会を実現するうえで、エネルギー政策と技術は根本的に重要である。エネルギーをめぐる従来の議論は、どうしても技術論（とりわけ、供給技術をどう確保するか）に偏りがちであった。この講義では、社会的な制度設計の重要性、需要管理の必要性、および環境的公正の面からみた評価といった側面を重視しつつ、エネルギー的に健全で持続可能な未来の可能性について論じていく	
		環境ビジネス	最新の環境ビジネスの内容の紹介なども含めて、環境ビジネスとは何かを把握、理解する。さらに、環境ビジネスを企画し、その事業計画を立案するなどの実務的ノウハウを取得する。そのために必要な諸要素として、事業企画手法、マーケティング理論、実施体制検討手法、費用積算の技術、売上予測手法、収支計画の立案手法、リスク管理手法などのスキルを学ぶ。また、身近なテーマで.環境ビジネスを企画する。	
		環境マネジメント論Ⅰ	環境マネジメントシステムとは、環境を良くするための「組織のルール体系」である。ISO14001は、このルール体系を作る方法を定めた国際規格である。講義前半は、Plan-Do-Check-Actのサイクルを回して継続的に改善していくマネジメントプロセス、及びISO14001の具体的な要求事項を理解し、それをもとに後半では、環境監査の技法を知識として習得する。環境監査とは、企業などの組織が国際規格に従ってルール体系を作っているか、組織のルールを守っているかを検証するものである。	
		環境マネジメント論Ⅱ	従来の企業評価は財務内容を中心に行われていたが、立て続けに起こる企業の不祥事により、SR(社会的責任)が求められるようになってきた。企業が果たすべき社会的責任とは、利益確保だけではなく、コンプライアンス（法規制等の遵守）はもちろんのこと、利害関係者の期待に応え、環境・社会問題にも積極的に対応していくことである。本講義では、企業のSRへの取り組み状況と課題を理解し、環境マネジメントシステムをSRマネジメントシステムに展開する手法を学ぶ。	
		森と水の環境学	人間を含めたあらゆる生命は水に依存して生きている。日本は比較的水資源に恵まれているが、世界的には水資源が不足しているか水汚染によって困難な生活を強いられている国が多くある。水は地球を循環しているので、量的の減少することは無い。しかし、森林破壊などで水の循環システムが壊れ、ある地域が水不足に悩まされる。森は水循環を維持している。河川流域の上流に森林や田畑があり、中流や下流に都市が形成される。都市の水資源を支えているのは上流の森林であり、その関係についても説明する。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	コース専門科目（環境未来コース）	環境デザイン論	環境デザインとは、人間とそれを取り巻く周囲の環境の相互関係を、製品、家庭、地域、地球などあらゆるスケールにおいて研究するものである。そこで得た知識を、環境政策、地域計画、製品デザイン、教育などに活かし、生活の質的な向上に結びつくような実践課程を含んでいる。人間社会システムと自然システムとの相互関係に着目し、その両方を対象としている。環境デザイン論では、資源・環境管理、都市計画、景観論、ものづくり論、インテリアデザイン、環境心理学、環境社会学などを総合的に取り扱う。	
		製品環境評価	導入では「ごみ問題」についての解説を行う。ごみになってから考えるのでは遅すぎるので、上流管理をするという意味でも製品について考えることは重要である。また、製品には企業の将来展望や社会貢献のイメージがぎっしり詰まっている。それらの知識を収集し、自分なりに主体的に商品を選択していくためにはどうすればよいのかを考える力を養いたい。また、LCAソフトを用いた製品の環境評価についても実習を行う。	
		環境政策論	地球温暖化、森林破壊、砂漠化、オゾン層破壊など地球レベルの環境破壊が進行している。これらに対して、国連や経済開発協力機構など国際機関が協調しながら国際条約を定め、各国の環境改善政策を実施している。日本国内においても、政府レベルでは環境ODAや開発途上国の環境支援を行っている。そして地方自治体、企業、環境NGOも地球環境問題に取り組んでいる。世界および日本における、地球環境問題に対する国際的な政策について学ぶ。	
		地域環境論	日本国内における環境問題は、大気汚染、河川や海洋の水質汚濁、廃棄物問題、自動車公害、環境ホルモンやダイオキシンなどの化学物質汚染、自然、森林、里山の生態系破壊など多様な形態で生じている。これに対して、日本政府は法律や経済･技術政策によって環境改善策に取り組んでいる。さらに、地方自治体、企業、環境NGOもそれぞれの権限や責任において環境改善策に取り組んでいる。日本における、環境問題に対する主体的別の取り組みや、それに対する住民参加の方法について学ぶ。	
		環境社会学	社会学の手法によって具体的な地域を取り上げながら、近・現代社会がどのような社会であるかを概観する。さまざまな地域社会の変化が価値観にかわりながら地球的規模で連動していることに気づく。受講者自らが現代社会の進むべき道について思いを至らせ、社会システムや生活の質的転換のため現在、試みられたり、取り組まれつつある動き（活動、施策）の例について調べ、それらを紹介しあいながら多様な視点で現代社会について考察する。	
		開発教育論	それぞれの風土や歴史や文化のなかで、人々が豊かに暮らすためにはどうしたらよいのか、発展／開発のあり方について考える。特に南北問題や経済のグローバル化による問題を詳しく検討することによって、問題を構造的に捉える作業を行なう。その上で問題解決の糸口を議論する。それは同時に私たち自身の生活のあり方を見直し、オルタナティブな社会のあり方を考えることにもなるだろう。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	コース専門科目（環境未来コース）	生活環境学	水、食べ物をテーマに、特徴的な地域を取り上げ、それぞれの地域環境を「風土」、「社会システム」、「地域文化」の視点から検証しながら「環境と人（ヒト）との関係」、「人が豊かに暮らすとはどうゆうことなのか」を考える。また、受講者が具体的に地域環境の現況について調べ、地域の課題について考察することで、「地域住民が地域の生活環境に関心をもち、その保全のために地域に主体的に関わる重要性」について意識できる機会とする。	
		有機農業論	有機農業の歴史的背景や、長年の蓄積をもつ有機農業技術のあり方、WTOに加盟しているわが国の農業政策における有機農業の位置づけを説明する。そして、マーケティングにおける有機農業の意義、食生活のあり方、食品公害、産消提携、グリーンコンシューマー、グリーンツーリズム、有機農業運動など有機農業の思想から今後の農業や消費生活のあり方についても学ぶ。	
		環境経済学	大気汚染、水汚染、廃棄物問題、地球温暖化など、世界中で様々な環境問題が深刻化しているなか、環境と経済システムの関係を再考し、適切な環境政策を確立していくことが益々重要になっている。本講義では、特に政治経済学的アプローチからサステイナブル・エコノミー実現のための新たな環境経済政策の確立に向けた課題と展望を考究する。 講義序盤では、環境経済学・環境政策の基礎的概念と理論について概説する。その後、様々な環境問題と環境政策の展開・課題について考察する。	
		環境法	日本における環境関係の上位法は、日本国憲法の下に環境基本法と循環型社会形成推進基本法である。その下に、水質汚濁防止法、大気汚染防止法、一連のリサイクル関連法など多くの個別法がある。環境基本法では、基本計画を制定して環境改善策を実施することになっている。少し大きな地方自治体レベルでも、環境基本条例を制定してそれに基づく基本計画により、地域における環境問題に対応している。日常生活に密接に関係した環境法だけでなく、国際的な条約などとの関連においても環境法の成り立ちや役割を説明する。	
		生態学	現在、クマの人里への出没、シカ、サルなどの野生動物による森林や農業への被害、 ブラックバスやブルーギルなど、外来魚による漁業被害や在来種への深刻な影響など社会問題化している。その一方で、淀川のイタセンパラなど多くの種で絶滅阻止が課題となっている。このような問題の解決には、彼らの立場に立って、彼らの生息環境を、人の影響を含めてとらえることが必須である。この講義ではこのような具体的な問題の基礎となる個体群生態学や群集生態学に触れながら、個体群管理や生態系管理など実際の保護管理問題も含めて述べる。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	コース専門科目（環境未来コース）	まちづくり論	「まち」を消費空間と経済活動の場としてのみとらえ、計量化していく というベクトルは、致命的な仕方で、都市「生活者」としての「人」を 損なっていく。同様にグローバル化、経済合理性の座標軸からの「郊外的ファスト風土化」、「マーケットと行政的サービスのネットワーク」変貌は、パトリ性（地元感覚）を失効させる。「まちに守られているがゆえに、人が人を守る」パトリ感覚を「街的感覚」と位置づけ、現代 の渋谷・ミナミ・京都といったまちの現場でのコミュニケーションのありようから抽出し、新しいまちづくりの可能性をさぐる。	
		環境教育プログラム・デザイン	行動化を促す環境教育の有効な手法といわれる参加体験型の学びの場を企画・運営するための基本を、事業企画およびプログラム・デザインの視点から学ぶことを目的とする。理論を取り上げる講義だけでなく、具体的なテーマをもったグループワークを重ねるなかで、参加体験型の学習促進の基本となるかかわり（協同、共育）を五感を通しても捉え、こうした学びの場を実際に作り出し、これを運営していくための実践的な技法を修得する。	
		環境教育ワークショップ	環境教育において重要な位置を占めるワークショップという手法について、講義だけでなく実際にワークショップを体験することで、その参加型・合意形成といった特徴的な性格を理解し、具体的な技法をいくつか使えるようになることを目的とする。将来、ワークショップをデザインし、これを実施するための基本の修得を目指す。同時に、1990年代に急に脚光を浴びることになったワークショップを社会現象として捉え、その意味を考察する。	
		環境教育実習	説明会（1回）および準備クラス講義（3回）を踏まえたうえで、沖縄県八重山地域（西表島西部）における約1週間の実習を通じて、環境教育のプログラムづくり、およびプログラム実施に関する知識と技能を習得することを目的とする。特に、エコツーリズムの実際に直接触れ、自然観察・野外活動、リゾート開発問題、コミュニティ活動、伝統文化・ライフスタイルなど環境教育プログラムを構成する可能性のある要素を多面的に取り上げる。	
		環境NGO論	「NGO（非政府組織）」とは何なのかを様々な角度から検討していく。この授業では、狭い意味のNGOだけではなく、NPOや市民活動、そして草の根運動のように、市民・生活者の立場から社会に対して働きかける各種取り組みについて取り上げる。国内外のさまざまな事例を基に、これらの活動がどのような問題を抱えてどのような可能性を持っているのかを知り、市民が問題解決に向けて取り組むことの意味を考える。	
	コース専門科目（現代社会と人間コース）	現代社会と歴史認識Ⅰ	この「現代社会と歴史認識Ⅰ」では、主に第二次世界大戦までを扱う。つまり、私たちが生きている現代の歴史意識を規定している、近代における歴史意識の形成を追う。近代社会においては歴史はどのように意識されてきたのか、を解明することに重点を置く。結果として、近代社会がいかに歴史意識によって規定されているかを明らかにすることを目的とする。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	コース専門科目（現代社会と人間コース）	現代社会と歴史認識Ⅱ	この「現代社会と歴史認識Ⅱ」では、主に第二次世界大戦以降を扱う。例えばドイツにおいて、ナチスのアウシュヴィッツの虐殺の歴史はどのように考えられ、批判されてきたのか。また、現在、それを肯定的に見る歴史修正主義が様々な形で登場してきているが、それをどのように捉えるのか。これは他人事ではない。現代日本においても過去の戦争をどのように見るかの論争は繰り返しなされている。それらの問題を含め、私たちに生きる現代社会への影響について確認することを目的とする。	
		日本思想史	この「日本思想史」では、現代日本を基礎づけている思想を歴史的に捉える。現代の日本は、単に近代以降に作られた価値観や理念のみによって成立しているわけではない。前近代的価値観や理念の連続のうえに成り立っているのである。古代における天皇制の成立、中世における価値観の転回、鎌倉仏教成立期における宗教意識の転換、近世紀における日本的近代思想の形成などを、現代の視点から振り返ることを目的とする。	
		日本社会の構造	この「日本社会の構造」では、現在、私たちが生活する日本の社会はどのような構造から成り立っているのかについて考察する。日々生活しているものにとっては、それがどのような構造をなしているのかが分かりにくいものである。第二次世界大戦を境に戦前と戦後の日本は、一見すると大きく変わったかのように見えるが、変わっていない部分も厳然として存在している。むしろ、その部分の方が現代日本を規定しているという見方も成り立つ。この講義では、現代日本社会を構造的に見ていくことを目的とする。	
		ライフスタイル論	この「ライフスタイル論」では、21世紀をどのように生きるのかという問いに対して、各自が答えを見い出すヒントを得られることを目的に展開する。現代社会におけるライフスタイルは、価値観の多様化によりさまざまなタイプが存在し、自分らしい生き方や生活様式を選ぶことができるようになった。しかし、消費社会の多彩な誘惑や情報の氾濫の中で、生きる意味を模索し、主体的に自律的に「選ぶ」ことはなかなか難しい問題である。どのようなスタイルを選び自己表現してゆくのか、事例研究と理論研究を紹介しながら考察を進める。「消費社会論」や「マーケティング論」「まちづくり論」にもつながる科目として位置づけられる。	
		食と人間	この「食と人間」では、「食」をとおして社会と人間の関係を考える。現代社会においては、「食」には様々な意味合いが持たされている。栄養面や健康面のみならず、人や環境とのコミュニケーションの面、地域産業のあり方を問う面、循環型社会の持続性を考える面など、これらはすべて人間の生き方そのものにもつながる課題であると言える。講義では、ケーススタディーを交えながら考察し、日常生活からグローバルな課題まで見通す視点を身につけられるよう展開する。自立した生活者の育成と持続可能な社会の形成を目指す科目として位置づけられる。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	コース専門科目（現代社会と人間コース）	人権教育論	この「人権教育論」では、差別の何が問題なのかに焦点を当て考えていく。学校や社会の中で起こる差別やいじめ。それに対して、「差別をしてはいけません」という「正しさ」の言説が飛びかう。そして「ああ、またか」「もう、うんざり」と心中でつぶやきながら、差別やいじめを考えることから逃走してしまう。だから、差別やいじめがなくなる気はしない。学校や社会で差別やいじめが、「問題」としてとりあげられるときに私たちが陥ってしまう感覚である。この講義では、差別やいじめを「する」メカニズムを議論する。差別やいじめを「減らす」ためにはどうしたらいいのだろうか。私たちの身近な具体例を取り上げながら、さまざまな視点から「する」メカニズムを解明することを目的とする。	
		多文化教育論	この「多文化教育論」では、他文化教育を多角的な側面より捉えていく。多文化教育は、少数者の権利擁護、あるいは消滅の危機にある文化の保護、あるいは民族のアイデンティティー確保のための文化の継承などの主張から生まれた、新しい教育の潮流である。現実的世界は、確かに「異質」を基本に多文化によって構成されているのだが、しかし、一方で、その「異質」に対する抑圧的力が「排除」という現実をともないながら、いぜんとして存在していることも事実である。この講義では、多文化教育の理念とその現実を、各国の事例を参考にしながら学ぶ。そして、日本の教育を多様な視角において分析し、日本における多文化教育の可能性について考察することを目的とする。	
		子どもの社会史	この「子どもの社会史」では、主に近現代の「子ども」にまつわる諸課題をとりあげ、その諸課題から社会のありようを歴史的に考察する。具体的な内容としては、近代学校制度の発足期から現代に至るまでの子どもの学校史を中心に講義しつつ、例えば前近代の子どもの暮らし、近代以後の子どもの生活環境や家族形態の変化、児童労働や若年者の就労の問題、子どもの人権思想や近代教育思想の展開などの関連する話題を織り交ぜて検討していく。	
		子ども支援論Ⅰ	この「子ども支援論Ⅰ」では、例えば不登校・いじめ・虐待・非行等の子どもに関する諸課題について、教育・福祉の連携という観点から、具体的な子ども支援のあり方を考察する。特に「学校ソーシャルワーク」の視点に立って、学校における子どもの生活指導上の諸課題、家庭の子育て支援や、子どもの居場所づくりなどの学校外活動の諸課題への取組み等、主に現場での実践的な取組みに関する理論・手法について検討する。	
		子ども支援論Ⅱ	この「子ども支援論Ⅱ」では、「子ども支援論Ⅰ」の内容をふまえ、子ども支援の実践を支える制度・政策のあり方について考察する。特に「子どもの人権保障」と「教育・福祉の連携」という観点から、主に日本政府・地方自治体レベルでの子ども施策のあり方を検討する。具体的には、例えば子育て支援や青少年育成、虐待防止、学校教育・社会教育の連携等に関する子ども施策の具体的な取組みと、各施策を支える理論的な研究動向や制度的な課題等について検討する。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	コース専門科目（現代社会と人間コース）	メディア･コミュニケーション論	初歩的な記号表現から複雑なテクノメディアに至るまで、人類は過去に様々なタイプのメディアを考案してきた。人間にとってコミュニケーションとは不可避であり、それを仲立ちするメディアなしに文化的活動を営むことはできない。本講義では新聞・書籍・電話など、各種メディアを媒介とするコミュニケーション（Mediated Communication）の本質に迫るため、コミュニケーション学やメディア論の基本的な考え方を、あるいは（補完的に）記号論などの考え方を、現代社会にあふれる豊富な事例とともに解説する。またメディアの歴史性と社会性を考慮にいれながら、その技術的な特性が人間や文化に及ぼしてきた影響を明らかにする	
		メディア文化論	この「メディア文化論」では、メディア史の観点より各種メディアの登場と社会の関係性に焦点を当てながら考察していく。よきに付け悪しきに付け、現代社会はメディアに左右される度合いが非常に高いと言える。ここで言うメディアとは、現在流行の電子メディアに限らない。新聞や雑誌などの活字メディアも含む。特にマスメディアについては、近年、その拡大が近代国家を生み出したとする説が有力であるところを見ても、現代社会を考察するうえで無視することはできないであろう。また、現代社会が、いかにメディアによって管理されているか、という視点も重要視される。	
		スポーツと時代	この「スポーツと時代」では、日本社会におけるスポーツの位置を、歴史的側面から考察する。前近代日本における「スポーツ」はそのほとんどが「道」であった。つまり、道徳修養の一方法であったのである。明治の文明開化期になると外国から各種すぽーつが導入されることになるが、それにより日本的「スポーツ」はどのように変わったのか。各種スポーツが限られた人々の持ちものから大衆化されたことは、単にスポーツの変化の歴史と捉えるだけで良いのだろうか。このような視点から、スポーツの歩んできた道を社会との関わりについて考えていく。	
		スポーツと社会	この「スポーツと社会」では、現代日本におけるスポーツのあり方を各種スポーツに関わる事象を元に考察する。ヨーロッパで一般的の存在する「クラブ」はなぜ日本では根付かないのか、スポーツ中継のアナウンサーはなぜあのように絶叫しなければならないのか、なぜスポーツ界には依然として上下関係が存在しているのか、オリンピックでのメダル獲得数はその国の国際的地位を決めるのかなど、私たちの身近なスポーツには分からないことがたくさんある。それらを社会との関係において考察していく。	
		現代社会と哲学	この「現代社会と哲学」では、現代社会の中で生きる私たちが「私」として存在する人間の条件性の一切を解明するために、現象学的探求のうちに探ることをメインテーマとする。哲学で大切なことは、たくさんの知識を身につけることよりも、むしろ自分の頭で考え抜くという態度である。各受講生が、それぞれのテーマについて、従来より抱いていた常識的理解から脱皮し、より新しく深い見方ができるようになることを目的として進めていく。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	コース専門科目（現代社会と人間コース）	現代社会と病理	この「現代社会と病理」では、「社会病理学」という観点から現代社会を分析する。ある個人が異常な犯罪を犯すということは、現代に限った現象ではない。現代社会における病理とは、それがある一定量存在するということにある。では、それを生み出している要因は何なのか、現代社会に特徴的な事象なのか。この講義では、文字通り現代社会における病理現象を解析することに力点を置く。	
		高齢化社会論	この「高齢化社会論」では、日本社会の構造的変化に着目しながら、そこにある原理的問題を理論的に考察していく。現代の日本が高齢者社会であることは言うを待たない。日本だけではなく、いわゆる先進国と呼ばれる国のほとんどは、高齢化社会に突入している。この高齢化社会という問題は、当然のことながら少子化という問題と密接に関係している。つまり社会そのものの構造的問題だということである。この講義では、単に少子高齢化の解消方法を探るということだけでなく、社会全体が抱えている問題として捉え直すところから考えていく。	
		ジェンダーと社会	この「ジェンダーと社会」では、無意識的にも自分が「女である」「男である」と民指揮している事への問いかけからはじまる。「性」ということについて考えるとき、自ずと「生物的性」と「社会的性」というふたつの概念が導き出されてくる。そして、現代社会について考えるときに、もっぱら使用されるのは後者の「性」である。この講義では、現代社会において無意識的に前提とされる性差（ちがい）について、単にそれを暴露・告発するというような方法ではなく、それを支える構造の分析という視点から考察することを目的とする。	
		医療と社会	この「医療と社会」では、医療を「受ける側」「施す側」という二項対立的に捉えるのではなく、私たちの誰もが関係する可能性のある社会問題として捉えていく。社会においては、医療の現場はある特殊な人間だけが関わる場所ではなくなりつつある。それ故に、医療の現場は社会の矛盾や問題点が、増幅された形で現出することがある。この講義では、医師と患者、看護師と患者、医師と看護師というような医療の現場の様々な関係に目を向け、そこに表れる様々な問題を分析・考察する。その結果として、今後の医療がどうあるべきかも見えてくるはずである。	
		家族と社会	この「家族と社会」では、私たち一人一人にとって家族とは何かを問い直すところからはじめる。かつて家族は社会の最小単位であると言われた。しかし、現在、その善し悪しは別として、家族はその機能を失いつつある。個人が最小単位となる社会においては、家族が最大の桎梏となることもあるのである。この講義では、実態としての家族だけではなく、「企業一家」というような比喩的に語られる「家族」をも視野に入れ、現代社会を構造的に分析することを中心的な目的とする。	
		社会教育論	この「社会教育論」では、「現代社会と社会教育（生涯学習）」という観点から、主に日本社会における在住外国人の問題を中心に、「多文化共生」に関連する諸課題にとりくむ社会教育（生涯学習）のあり方を考察する。特に、在住外国人の現状と問題、それを生み出す日本社会の諸課題を知り、ケーススタディや参加型ロールプレイなどを活用して、「多文化共生」の社会・文化形成に向けての知識と実践的なスキルの形成を目指す。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	コース専門科目（現代社会と人間コース）	現代社会論	この「現代社会論」では、まず、そのあまりの複雑さによって思考を回避しがちな現代社会に、様々な切断面を持ち込むことを通して、社会全体を構成している諸要素に注目したい。そしてつぎに、現代社会は捉えがたいものとする認識から自由になることによって、私たち個々それぞれのアプローチによる分析的な現代社会への接近を目指す。その際、こうした分析に有効な方法をこれまでに蓄積されてきた社会学の知見の中から示しながら、具体的な分析事例を紹介する。そうすることによって、私たちは、現代社会を同時代として捉え、それに関心を持ち続けることの意味とその重要性を知ることができる。	
		こころの時代と社会	この「こころの時代と社会」では、現代社会における私たちの「こころ」と社会の関係について、臨床心理学的な側面より考察していく。人間の「こころ」の働きには創造力等の優れた側面も多くある一方で、単調なリズムには耐えられないといった側面も持ち合わせている。人間の生理的・心理的な特性とその発達過程を確認しつつ、その発達プロセスにおける「こころの問題」を考えることで、複雑化した現代社会を生きる自身の「こころ」と他者の「こころ」を考えることを目的とする。	
		こころと思想	この「こころと思想」では、人間にとっての「こころ」の存在を、歴史的側面より考察していく。古代ギリシャ時代の哲学者アリストテレス「こころの座」は心臓にあるとし、その思想は長年において継承され続けてきた。当時の人々は、「こころ」をどのように位置づけ、どのように向き合ってきたのだろうか。このような視点から「こころ」を考えることは、その「こころ」を持つ人間のあり方を問い直すことに他ならないであろう。	
		メディアと政治	この「メディアと政治」では、テレビ、新聞、インターネット等の多様なメディアが発信する情報が、実際の日本国内及び国際的な政治状況にどのような影響を与えているのかについて考察する。例えば、マスメディアにおける選挙結果の予測、政策的な論点の設定、日本と諸外国の関係などに関する報道はどうあるのか、政治的諸課題に関するインターネット上での議論と実際の政治情勢との関係、かつて国内統合にメディアが担った役割とは何だったのかなどを取り上げ、私たちが生きる社会におけるメディアと政治の関係について考えていく。	
		ジャーナリズム論	この「ジャーナリズム論」では、ジャーナリズムの意義を理解するとともに、今日の社会現象に現れる報道や言論の役割を分析し、情報に対する批判的視点の涵養を目的とする。ジャーナリズムとは新聞テレビなどの時事的な報道や言論活動を行なうものと理解されているが、今日の情報社会ではその機能面が関心を引いている。しかし、本来のジャーナリズムの役割はその活動に対する理念を大切にするもので、民主主義と権力や社会的な世論形成への影響、人々の価値観への働きかけなど、規範科学に位置づけられる。この授業では、私たちが生きる現代社会におけるジャーナリズムのあり方について考えていく。	
		現代学校論	この「現代学校論」では、学校の子どもが通うことの「意味」を問い直すところからはじめる。実際の日本の学校は、そこに日々通う子どもにとっていかなる「意味」を持つ場所なのか。学校に日々通い、そこで長い時間を過ごすことを通じて、実際のところ、いったい何をどのように学んでいるのだろうか。この講義では、受講者自身の学校体験を振り返りながら授業を受けてほしい。中心となるテーマは、「学校における子どもの人権」をすえる。学校に子どもが通うことの「意味」が問題になるケースの多くが、これをめぐって生じているからである。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
	コース演習	コース演習Ⅰ	この「コース演習Ⅰ」は、2年次前期の演習科目として設置されている。長期的には4年次前期後期の必修科目である「卒業プロジェクトⅠ/Ⅱ（各３単位）」への第一歩であり、その意味では、自らが定めたテーマを専門に研究するための導入科目であると言えるだろう。内容的には、専門に自らの研究を進めるために必要な問題意識を、プレゼンテーションやディスカッション、あるいは教員との対話などを通して形成することを主眼とする。	
		コース演習Ⅱ	この「コース演習Ⅱ」は、2年次後期の演習科目として設置されている。2年次前期の「コース演習Ⅰ」に引き続き、「卒業プロジェクトⅠ/Ⅱ（各３単位）」へ向けて自らが定めたテーマを専門に研究するための科目である。内容的には、「コース演習Ⅰ」で形成した問題意識をより確固たるものにすることを目標とする。内容的には、専門に研究を進めるために必要な基本文献の精読や基礎資料の調査なども含まれる。一定の知識・方法論・理論を身につけさせ、3年次以降のそれぞれの研究が円滑に進むように指導を行う。	
		コース演習Ⅲ	この「コース演習Ⅲ」は、３年次前期の演習科目として設置されている。次年次に控えた「卒業プロジェクトⅠ/Ⅱ（各３単位）」のため、各々が自らのテーマを設定し、それにむけての仮計画書を作成し、「卒業プロジェクト」のアウトラインを形成する。内容的には、自らの研究の成果を発表したり、それに対しての質問・批判に答えていく。また、教員との対話を通じて、自らの研究に足りない部分を認識することが出来、さらに研究を深めることが可能になる。	
		コース演習Ⅳ	この「コース演習Ⅳ」は、３年次後期の演習科目として設置されている。前期の「コース演習Ⅲ」に引き続き、次年次に控えた「卒業プロジェクトⅠ/Ⅱ（各３単位）」のため、各々が自らの研究の成果を発表したり、それに対しての質問・批判に答えていく。また、教員との対話を通じて、自らの研究に足りない部分を認識することが出来、さらに研究を深めることが可能になる。最終的には、次年次の「卒業プロジェクト」に関する詳しい計画書を提出することが義務付けられる。	
	プロジェクト演習	プロジェクト演習Ⅰ	この「プロジェクト演習Ⅰ」は、2年次前期のプロジェクト科目として設置されている。人文学部の基本理念である「現場主義・体験主義・国際主義」を実践し、学生ひとりひとりの計画的学習力、調査・取材能力、資料収集・分析力、企画立案力、問題解決能力を伸長することを目的とする。具体的には、教員がセメスターの始めに提示するプロジェクトに参加し、それぞれがテーマを定めて主体的に研究を行う。内容はプロジェクトごとに異なってくる。	
		プロジェクト演習Ⅱ	この「プロジェクト演習Ⅱ」は、2年次後期のプロジェクト科目として設置されている。人文学部の基本理念である「現場主義・体験主義・国際主義」を実践し、学生ひとりひとりの計画的学習力、調査・取材能力、資料収集・分析力、企画立案力、問題解決能力を伸長することを目的とする。具体的には、教員がセメスターの始めに提示するプロジェクトに参加し、それぞれがテーマを定めて主体的に研究を行う。内容はプロジェクトごとに異なってくる。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	プロジェクト演習	プロジェクト演習Ⅲ	この「プロジェクト演習Ⅲ」は、３年次前期のプロジェクト科目として設置されている。人文学部の基本理念である「現場主義・体験主義・国際主義」を実践し、学生ひとりひとりの計画的学習力、調査・取材能力、資料収集・分析力、企画立案力、問題解決能力を伸長することを目的とする。具体的には、教員がセメスターの始めに提示するプロジェクトに参加し、それぞれがテーマを定めて主体的に研究を行う。内容はプロジェクトごとに異なってくる。	
		プロジェクト演習Ⅳ	この「プロジェクト演習Ⅳ」は、３年次後期のプロジェクト科目として設置されている。人文学部の基本理念である「現場主義・体験主義・国際主義」を実践し、学生ひとりひとりの計画的学習力、調査・取材能力、資料収集・分析力、企画立案力、問題解決能力を伸長することを目的とする。具体的には、教員がセメスターの始めに提示するプロジェクトに参加し、それぞれがテーマを定めて主体的に研究を行う。内容はプロジェクトごとに異なってくる。	
	卒業プロジェクト	卒業プロジェクトⅠ	この「卒業プロジェクトⅠ」は、4年次前期の必修科目として設置されている。卒業論文の作成、卒業プロジェクトの実施、卒業作品の制作などのための授業である。学生は、自らの卒業プロジェクトの報告や発表を通じ、また参加学生や教員の助言や疑問などに答えていくことで、自らの論文・作品・プロジェクトに足りない部分を認識するだけでなく、その水準を高めていくことを目的とする。最終的には、前期の終了時点で中間報告書の提出を求める。	
		卒業プロジェクトⅡ	この「卒業プロジェクトⅡ」は、4年次後期の必修科目として設置されている。卒業論文の作成、卒業プロジェクトの実施、卒業作品の制作などのための授業である。学生は、自らの卒業プロジェクトの報告や発表を通じ、また参加学生や教員の助言や疑問などに答えていくことで、自らの論文・作品・プロジェクトに足りない部分を認識するだけでなく、その水準を高めていくことを目的とする。最終的には、後期の終了時点で成果物の提出を求める。	
	表現技法・ワークショップ科目（講義科目）	編集論Ⅰ	「日本語書籍編集」を志す学生のために、書籍編集の本質と実践を解説する。編集は「書く」ことと「読む」ことのうちにすべてがある。これらを通してこそ人間はよく「考える」ことができるのである。この科目では、言葉・文字・日本語についての感覚を研ぎすまし、「書く」「読む」を鍛えること、ふだん何気なく手にしている書籍はどんな媒体であるかを再認識すること、を中心テーマとする。そのため、手書きとワープロ、タテ組とヨコ組の違い、文章の成り立ち、推敲の要領などの基礎知識を解説する。	
		編集論Ⅱ	「編集論Ⅰ」と同様、書籍編集の本質と実践を解説する。この科目では、「編集論Ⅰ」に引き続いて、書籍はいかに制作され、編集とは具体的に何をすることかを知る、また現代社会において編集、出版が直面する課題を認識する、ことを目的とする。そのため、編集作業のワークフローを、企画、原稿依頼・入稿・原稿整理、校正、印刷の各段階に分けて詳述し、日本の出版社の実態、書籍の流通、著作権や本とコンピュータといった書籍と出版をめぐる現代的な状況についても解説する。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	表現技法・ワークショップ科目（講義科目）	音楽とメディアⅠ	この科目は、音を用いた活動の多様性を認識すること、音が関係する活動に関する視野を広め、音を用いた様々な身近な活動に関する分析的な視点を持つことが目的である。そのために、まず録音テクノロジーが発達し、それがメディアとして定着するまでの歴史、さらに電子音楽の登場とその影響について解説する。またこれらのテクノロジーが可能にした芸術実践、すなわち「現代音楽」や「サウンド・アート」に関連するテーマもとりあげる。	
		音楽とメディアⅡ	急速なデジタル化の進展の中、多様化するメディアの全体像を俯瞰するとともに、ラジオというメディアの検証を行い、メディアの持つ本質的な意味を探る。また現在の音楽の出発点でもある1960年代から70年代の米国、日本の音楽および業界の変遷を見ながら、音楽と文化、社会、個人との関係を考える。また表現手段としての音楽の特性を理解し、自己表現として音楽を捉えたうえで、感じること、気づくこと、伝えること、考えることを音楽をとおして検討していく。	
		スポーツとメディア	とくにテレビの発展はスポーツの世界を一変させた。スポーツは巨大なイベントビジネスに変容した。この科目ではスポーツとメディアの関係を様々な角度から検証し、現代社会においてスポーツが占める位置を把握することを目的とする。まず世界的なスポーツ組織の構造と相互関係を解説し、メディアの発展とスポーツ報道との関連を歴史的に概観する。さらにスポーツをめぐってメディア、スポンサー企業、広告エージェントの果たす役割と問題点を考察する。	
		作家・制作者による作品論Ⅰ	映画制作の現場からみた日本映画の作品論を展開するとともに、映画の制作工程について概説する。映画制作の全工程について説明するとともに、特に映像の持つ記録機能、表現機能について具体例を挙げて解説する。映画が総合芸術であるという事実を、映画を構成する各パートとその役割を詳述しながら明らかにする。それをふまえて数本の作品を選び、鑑賞しながら、各作品の制作意図、および制作行程において遭遇した諸問題についての検証を行う。	
		作家・制作者による作品論Ⅱ	「おもろい」をプロデュースすることはどうしたら出来るのか、を講義の中心課題とする。地元で様々なアートイベント、舞台公演などのプロデュースを手がけた経験をもとに、プロデュースの企画をたてるための手法、企画を現実のものとするための計画立案、イベントの実行をマネージしサポートする際の注意点などを具体的に解説する。また実際に進行しているプロジェクトを研究したり、自ら参加して実践したりすることで、プロデュースの現場の重要性を理解する。	
		作家・制作者による作品論Ⅲ	われわれが日常目にしている「広告」とは、単に結果としての「広告表現」であり、そこにたどり着くまでの「広告活動」にはさまざまなプロセスやインフラが必要である。この科目では、それら広い意味での「広告活動」を理解することにより、それを通して「社会」を見る視点、および主体的情報編集能力を身につけることを目的とする。主なテーマとして、企業にとっての広告活動の意味、マーケティングの基礎、キャンペーンの企画立案、プレゼンテーションなどを挙げることが出来る。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	表現技法・ワークショップ科目（講義科目）	作家・制作者による作品論Ⅳ	映像表現のおもしろさ、難しさを知るとともに、「情報を批判的に読み解く力」を養うことが目的である。この科目では、社会の様々な問題を扱ったドキュメンタリーを鑑賞しながら、そのテーマや内容について踏みこんだ議論を行い、「自分の言葉で語り、自分の頭で考える力」を鍛えていく。講義の主なテーマとして、ドキュメンタリーとは何か、ドキュメンタリーの企画を考える、オンライン・ジャーナリズムと映像表現、ビデオ・アクティビストの登場、を挙げることが出来る。	
	表現技法・ワークショップ科目（表現技法科目）	プレゼンテーション技法	演習での発表の時のみならず、インターンシップ、就職活動、社会に出た時などに役に立つプレゼンテーションの技術を身につける。プレゼンテーションは、自分らしさを表現しつつ、相手に理解され、期待され、共感されることが目的である。この科目では、プレゼンテーションの考え方、内容の整理方法、表現方法を習得し、実際にプレゼンテーションを行う。また他の受講生とディスカッションを行い、互いのプレゼンテーション技法のスキルアップを図る。	
		写真技法	２年次以降に履修する「写真表現」の基礎となる、カメラと撮影に関する基礎的な知識と技法を習得する。カメラの使用法から始まって、フィルム、露出、レンズの選択、光量、構図、撮影対象の選択とアプローチなどの技術的なテーマを扱う。また毎週、著名な写真家の作品を技術的な視点から分析し、受講生各自の撮影の参考とする。。開講期間中３つないし４つの撮影課題が宿題として与えられ、その課題作品についてクラスでディスカッションを行い、評価する。	
		視聴覚記録の技法	フィールドワークを行う際に必要な視聴覚記録の技法を、実践的に身につけることが目的である。講義以外の作業は、グループ単位で行う。この科目では、「身体的記録」と「器械的記録」の二つの技法を取り扱う。前者は、自らの身体、五感を通じて周囲の情報を記録することであり、後者は種々の器械、例えば、デジタルカメラ、デジタルレコーダー、騒音計など、を用いて記録することである。記録された情報は、コンピュータなどに取り込んで編集し、発表資料として表現する。	
	表現技法・ワークショップ科目（ワークショップ科目）	クリエイティブ ライティングⅠ	クリエイティブ・ライティングⅠでは、様々な文章を書き／読み、それについて的確な批評を加える技術を養う。「書く」ためには、「読む」ことが必要不可欠であり、「読む」という行動を起こすことで、語彙力が備わり、文章の構成が学べる。また知識欲が芽ばえ、独自の批評眼を身につけ、さらには社会に対する考え方も広がっていく。本講義では、先行する様々な「言葉」と対話する技術を身につけながら、自分自身の「言葉」を見つけ出し、内容にふさわしい形をもつ文章へと仕上げていく方法論を提示する。	
		クリエイティブ ライティングⅡ	クリエイティブ・ライティングⅡは、文章力や表現力を高め、様々な文章表現を読み解き、批評し、ライトノベル、大衆小説などの現代文学に深い関心をもつ学生を対象にする講義である。多くの受講生は、「書く」ことで自分を表現したいと思われるが、「書く」と言っても、第三者にそれをうまく伝えるには、一定レベルの技術が必要とされる。本講義においては、作家、ジャーナリスト、評論家、経験豊富な編集者、出版プロデューサーを招き、現在活躍中の皆さんから「書く」技術はもとより、それをまとめ、世に出すための方法論を伝える。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	表現技法・ワークショップ科目（ワークショップ科目）	ドキュメンタリー制作Ⅰ	マス・メディアの中でドキュメンタリーとは、実際に会った事件などの記録を中心として、虚構を加えずに現実の断片を切り取り、様々な視点から編集・加工する制作技法である。そのドキュメンタリーの基本である「記録する」こと、そして制作の発端である「何のために、何を撮りたいのか」について、本講義では主としてテレビにおけるドキュメンタリー作品の解説と分析、そしてドキュメンタリー制作における手法の解説をおこなう。	
		ドキュメンタリー制作Ⅱ	マス・メディアの中でドキュメンタリーとは、実際に会った事件などの記録を中心として、虚構を加えずに現実の断片を切り取り、様々な視点から編集・加工する制作技法である。そのドキュメンタリーの基本である「記録する」こと、そして制作の発端である「何のために、何を撮りたいのか」について、本講義では前期の流れを受け、ドキュメンタリー制作の実作をおこなう。小型デジタルビデオカメラを使用し、個人あるいはグループで小作品制作に挑戦し、映像表現の可能性を実感させることも目標とする。	
		ノンフィクション・ルポルタージュⅠ	ノンフィクション・ルポルタージュの作品は、ありのままの現実を的確に伝えるという点ではニュースと同じだが、そこに書き手の視点や個性・感性・経験などが反映される性質を持っています。そのためここでは社会の中での自分の立ち位置を確認しつつ、具体的に書くための手法（対象物の探し方、取材の仕方、情報収集、文章表現等）について実例をもとに学ぶことを目標とする。	
		ノンフィクション・ルポルタージュⅡ	ノンフィクション・ルポルタージュの作品は、ありのままの現実を的確に伝えるという点ではニュースと同じだが、そこに書き手の視点や個性・感性・経験などが反映される性質を持っています。ここでは前期のノンフィクション・ルポルタージュⅠで学んだとこをもとに、様々な社会現象を、自分の視点で「文章」によって表現する方法を実作により身につけることを目標とします。	
		シナリオ制作Ⅰ	「シナリオとは映画（映像）の設計図である」と言われるが、シナリオを執筆するだけでは理解できない部分も多い。シナリオとは「何か」を学ぶために実際に撮影し、映像作品を制作してもらう。そのプロセスを学び、体験することによってシナリオ表現（文字表現）が映画（映像）の中でどのように生かされていくかを理解し、シナリオ表現の特性を深く学ぶことを目標とする。	
		シナリオ制作Ⅱ	演劇に使用される様々な形態のシナリオ、戯曲を読み、またそれをどのように表現できるかを知り、その上でシナリオを制作していくことを目標とする。実際に幾つかの演劇表現（芝居形式、身体表現等）を学ぶことにより、演劇において、シナリオがどのような使われ方をするのかより深く認識し、様々な演技法を体験する。シナリオ技法Ⅰ同様に、執筆だけでは理解できない部分について、実際の作品（短編）を制作する。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	表現技法・ワークショップ科目（ワークショップ科目）	編集実践Ⅰ	「編集」とは、マス・メディアとしての情報媒体、あるいは個人による何らかの表現や情報発信、いずれの制作過程にも必要な概念および作業のことである。ここではマス・メディアとしての情報媒体の制作に付随する編集作業について、その持つ意味を認識し、「編集力」を身につけること、高めることを目的とする。企画から取材、原稿、編集、レイアウト、校正、印刷校了までの編集者としてすべきことをひとつづつ経験していくことで、ものの見方・考え方、識字力、文章力といった基本的な力を身につけさせる。	
		編集実践Ⅱ	「編集」とは、マス・メディアとしての情報媒体、あるいは個人による何らかの表現や情報発信、いずれの制作過程にも必要な概念および作業のことである。ここではマス・メディアとしての情報媒体の制作に付随する編集作業について、その持つ意味を認識し、「編集力」を身につけること、高めることを目的とする。最終的に編集物を作り上げることで、前期の編集技法Ⅰで得た力に加え、情報媒体とは何か、そしてそれを制作するためにはどのような作業や能力、視点が必要かということを学ばせる。	
		広告表現Ⅰ	私たちの社会における広告の使命、マーケティングにおける広告の役割、広告活動実務のプロセス、広告表現の開発制作プロセス、広告効果の把握と時期広告戦略の立案といった広告ビジネスの発展的なサイクルを理解し、価値創造がどのように展開されるか、企業や組織の関わり方と広告表現・広告メディアの組み立て方を実例をとおしながら学ぶことを目的とする。	
		広告表現Ⅱ	私たちの社会における広告の使命、マーケティングにおける広告の役割、広告活動実務のプロセス、広告表現の開発制作プロセス、広告効果の把握と時期広告戦略の立案といった広告ビジネスの発展的なサイクルを理解し、価値創造がどのように展開されるか、企業や組織の関わり方と広告表現・広告メディアの組み立て方を、前期に学んだ内容を生かして実作を通しながら学ぶことを目的とする。	
		写真表現	「写真技法」で身につけたカメラと撮影に関する基本的な知識と技法を持って、オリジナルプリントを生きた教材として、歴史的背景と現在の新しい概念から導かれた写真表現を更に学ばせる。また前期同様に著名な写真家の作品を技術的な視点から分析すると同時に、後期は受講生同士の作品をこれに加え、ディスカッションを重ねることで、写真を見る基礎的な力を養い、自己の新たな表現活動に転換することができるようにする。	
		図書館リテラシー	図書館の上手な使い方を学ぶ。講義と演習を通して、ブックスおよび電子情報の使い方を身につけ、コースの専門科目学習への基礎とする。まず大学図書館および公立図書館での情報サービスの歴史と現状について学ぶ。つぎに上手な利用者になる方法を手ほどきする。毎週課題がでる。それを図書館の情報資源（ブックスおよび電子情報源）を用いて回答することを通じて、自立的情報探索者となることを目指す。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	表現技法・ワークショップ科目（ワークショップ科目）	図書館文化演習Ⅰ	図書館文化論基礎の上に、アメリカ合衆国で始まった税金で支えられる公立図書館の始まりの物語から、現在のインターネット・パブリック・ライブラリーのような形の24時間７日式バーチャル図書館までの歴史をまなぶ。公立図書館が「民主主義の武器庫」であるという考え方を初めとし、多様な図書館思想を講義する。受講生は指定図書の中から選んだ本についてブックレポートを書き、口頭発表もする。	
		図書館文化演習Ⅱ	現代の公立図書館の多様なサービスについて学ぶ。講義とグループ演習の形式をとる。またＳｏＰなどの今日的図書館トレンドにも触れる。グループ演習の例：　多文化サービス、障害者サービス（視覚、聴覚、身体、ＬＤ等）、病院図書館サービス、受刑者へのサービス、高齢者サービス、児童サービス、ヤングアダルト・サービス、学校図書館と公立図書館の連携など。学期末には任意のサービスについてレポートを書き、口頭発表もする。	
		図書館文化演習Ⅲ	「図書館文化演習Ⅰ、Ⅱ」の上に、各自の選んだテーマについて図書館内外の情報源を駆使して文献調査をおこない、レポートにまとめる。口頭発表と相互評価をおこなう。これは、どのような分野であれ、４年生での卒論の準備となりうる科目である。	
		点字講座Ⅰ	教育の場、労働の場、家庭や地域などで視覚障害者と共に歩むことを目的に、視覚障害者のコミュニケーション手段である点字の技術を取得することに加えて、視覚障害の意味、具体的内容や視覚障害者への支援のあり方などについて実習と講義を中心に学ぶ。そして視覚障害者とのコミュニケーションを人権として保障するために何をすべきかについて考えることを目的とする。	
		点字講座Ⅱ	教育の場、労働の場、家庭や地域などで視覚障害者と共に歩むことを目的に、視覚障害者のコミュニケーション手段である点字の技術を取得することに加えて、視覚障害の意味、具体的内容や視覚障害者への支援のあり方などについて実習と講義を中心に学ぶ。そして視覚障害者とのコミュニケーションを人権として保障するために何をすべきかについて、点字による制作物の作成とディスカッションを中心に展開させる。	
		伝統楽器演習	現代のポピュラーミュージック等に用いられる楽器は、大半が電子楽器の側面をもつ。一方、近代以前の音楽に使用された楽器の特性は、自然素材を生かした演奏方法にあるといえるだろう。木材、絹糸、動物の皮革などを素材とした楽器（琵琶、琴、三味線、三線、鼓など）を実際に手にとることで、伝統音楽の風土性や精神を体得することにこの授業の目的がある。また、西洋音楽流入以前の演奏方法の特色についても演習していきたい。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	表現技法・ワークショップ科目（ワークショップ科目）	書道	文字を書くという行為は単なる意志伝達の手段ではない。そこには、文字の美術意味はもちろん、芸術に内包する精神文化の側面や、東洋思想の具象化という意味が隠されているといわなければならない。この講義では、単に文字の筆法を習うのではなく、文字を書く行為を通じて自身のこころと体を知ることを目的とする。ただし、実技の前提として、いわゆる「書」の歴史を概観しながら、中国、日本の「書」に対するものの見方を学ぶ。	
		農的くらしⅠ	科学技術の進歩によってもたらされたモノ豊な工業文明の没落、崩壊は避けられない。21世紀を担う次世代の若者たちに、如何に生きるべきかを考え、その生き方について、自分たちの現実を反省しつつ、先人たちが実践していた具体的な暮らしの知恵を、講義だけでなく有機農業（畑仕事）や、その素材を使った料理や発酵食品作りなどから学びとることを目標とする。前期は、特に畑作りを中心にした内容を扱う。	
		農的くらしⅡ	科学技術の進歩によってもたらされたモノ豊な工業文明の没落、崩壊は避けられない。21世紀を担う次世代の若者たちに、如何に生きるべきかを考え、その生き方について、自分たちの現実を反省しつつ、先人たちが実践していた具体的な暮らしの知恵を、講義だけでなく有機農業（畑仕事）や、その素材を使った料理や発酵食品作りなどから学びとることを目標とする。後期は、特に収穫とその保存方法を中心にした内容を扱う。	
	地域研究科目（講義科目）	社会統計学	数字、図表の基本的読み方を理解した上で、社会問題を解決する手段としての数字や統計データの役割や社会的な意味を理解できるようにする。また、官公庁、企業，団体等の発表する様々な数字や統計データを知り、収集できるようにする。政策や経営計画の立案の現場で用いられている数字や統計データを教材として、できるだけ利用する。また、物理データや意識データの実測調査の企画や設計の基礎についても学ぶ。	
		社会調査法Ⅰ	アンケート調査やインタビューなどを実際に行うための基礎的な準備から実際のデータ収集、まとめの報告書づくりまでを一通り体験してもらう参加型の講義。調査テーマの設定や先行研究の探し方、アンケート調査項目の設計など、ほぼ毎回課題が出る。自分たちが作成したアンケートをクラスで行い、それによって実際に集めたデータを入力・集計・グラフ作成するために、パソコンを用いた実習の時間も設けている。	
		社会調査法Ⅱ	調査設計とその実施方法を主眼とし、主として社会学的な調査の方法を講義する。社会学ではアンケートやフィールドワークなど、必要とされる調査方法は多い。しかし、アンケートひとつとっても、その設問の作り方から調査対象の選択まで、厳密な事前調査が必要とされ、簡単にできるものではない。この講義では、今後そのような作業を行う学生に対し、実践的な能力が身につくことを目標とする。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	地域研究科目（講義科目）	社会調査特論	社会福祉ニーズの変化や潜在化にうかがえるような健康福祉に関する様々な問題が、地域社会において生起している。こうした問題点に対応するために、地域住民の生活構造の変化、福祉意識の状況についての正確な現状分析の実施と、それによって導かれる将来展望が求められている。こうした作業の前提となる社会調査の実際について、既存の社会調査結果をもとに、設計から分析の一連の過程における各種方法を解説し、実習形態も取り入れて講ずる。	
		社会調査技法Ⅰ	社会調査には統計処理を前提としてデータを扱う量的調査と、手紙や日記など個人のドキュメントや行動の参与的観察記録などによる質的調査がある。この講義では、質的調査法の代表的技法として、インタビュー調査、参与観察法、日記や手紙などのドキュメント分析、映像テクスト分析、会話分析などを扱いながら、社会現象を実証的にどのように捉えるかを学ぶ。	
		社会調査技法Ⅱ	社会調査には統計処理を前提としてデータを扱う量的調査と、手紙や日記など個人のドキュメントや行動の参与的観察記録などによる質的調査がある。この講義では、量的調査の代表的技法として、データの収集方法や分析方法について、手順と課程、統計方法の調査技術、統計処理の手段などを学習する。同時に社会調査の基本的性質や系譜と歴史、今日的な問題として、データ蓄積や倫理問題などにも触れる。	
		京都地域学	長い歴史をもつ京都の地理的、政治・経済的な特質を理解するために、３つの政治変動期に焦点をしぼり、京の都から近代的な歴史都市への変遷を考察する。ひとつ目は律令制貴族社会の衰退期である12世紀の京都と地方社会の関わり、２番目としては庶民経済の確立した17世紀にあらわれる京・大坂・江戸の三都経済の差異性、そして３つ目に明治維新を迎えた京都の歴史都市としての再生に注目し、現代の京都を成り立たせている政治、経済、風土、地勢などの特色を明らかにして行く。	
		京都の産業	いわゆる町衆の時代に成立した京都の伝統産業は、今日の経済社会のなかでいかなる変貌をとげて近代的な経営体制に移行して行ったのであろうか。この講義では、伝統産業の近代化に焦点をあてて現存企業体の歴史変遷を概観することを目的とする。「みすや針」「宮脇賣扇庵」「一保堂」といった個別の事例をとりあげながら、伝統産業の成立と未来展望に言及する。また、世界的企業に発展した「京セラ」などの事例にも着目し、京都地域の産業的特色を考察する。	
		京都の暮らしと祭礼	町家ブームが続いているが、京の町の人々が受け継いできた町方の生活文化については、以外に知られていない。この授業ではまず京都盆地の地形や町の組織、家屋の構造等を把握した上で、そこで営まれてきた祭礼と暮らしの実態を学ぶ。その際には基本的な資料の講読やビデオを多用した説明を行うが、これと平行してある程度（受講者数によって形態は変化する）のフィールドワークの実施も予定している。これによって京の町の各事象についての空間的時間的な位置づけや、問題の解決が可能となるだろう。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	地域研究科目（講義科目）	京都のまちづくり	京都では、伝統的に職住が共存する都心部を中心に、多様な地域資源の再生によるコミュニティの活性化が課題となっている。まちづくりの第１歩は現場に立ってまちを読むことから始まる。まちを読むとは風景を観察することである。風景には地域の歴史的変遷が刻まれている。地域の歴史は地域コミュニティのアイデンティティに関わるものであり、まちづくりのベースとなるものである。これらの視点を用いて、本講義では、京都のまちの特殊性、歴史性を理解しつつ、京都のまちづくりの現状と課題を学ぶ。本講義を受けることで京都のまちの見方が変わることを達成目標とする。	
		日本の自然と風土	日本は国土の約７割を森林で覆われているため、山地部を中心に広く森林を見ることができる。しかし、その森林などの植生は、気候的要因や人為的要因により、地域によって大きく異なるものとなっている。一方、その植生は、人間の社会や文化などを反映して、歴史的に大きく変化してきている。本科目では、日本の自然と風土を理解する上で不可欠なそうした日本の植生の現状や歴史、またその背後にある人々のくらしなどについて述べる。	
		地域研究Ⅰ	東アジアの主な地誌と、この地域の政治的、社会的、経済的、文化的な特質を概説する。まず、まず、東アジアの地理、気候、植生、人口動態などを抑えながら、近現代の歴史を概観する。具体的には中でも特に中国を対象とし、55種の少数民族を含む多民族国家としての中国が形成されてきた過程を、中国歴代王朝と周辺諸民族、諸国家とのかかわり及び対異民族政策を通して考え、多民族国家中国の歴史的背景について検討する。また、中国経済についても、台湾・韓国・香港の経済発展と比較して検討する。	
		地域研究Ⅱ	東南アジアの主な地誌と、この地域の政治的、社会的、経済的、文化的な特質を概説する。まず、まず、東南アジアの地理、気候、植生、人口動態などを抑えながら、近現代の歴史を概観する。具体的には、第二次世界大戦時の日本軍によるマレー半島及びシンガポールの占領や、東南アジアの独立運動に対する日本の政策などを、東南アジア諸国に関するドキュメンタリービデオを用いながら、解説する。また、現在の日本と東南アジアの国々との関係についても解説する。	
		地域研究Ⅲ	南アジアの主な地誌と、この地域の政治的、社会的、経済的、文化的な特質を概説する。まず、まず、南アジアの地理、気候、植生、人口動態などを抑えながら、近現代の歴史を概観する。具体的には、長い歴史によって醸成された多民族・多言語・多宗教地域であるインド世界を、その歴史的背景とともに解説する。また、近年とくにIT産業の急成長でも知られるインドにおける、民族宗教として知られるヒンドゥー教や本来は外国語である英語の公用語としての位置づけなどを検討し、アジア全域における南アジアの現状を考察する。	
		地域研究Ⅳ	イスラーム世界の主な地誌と、この地域の政治的、社会的、経済的、文化的な特質を概説する。まず、イスラーム世界の地理、気候、植生、人口動態などを抑えながら、近現代の歴史を概観する。具体的には、イスラームの基本的教義、預言者ムハンマド（マホメット）の生涯、ウラマーと法、スンナ派とシーア派など、イスラームの基本的な知識を解説し、「イスラーム原理主義」やパレスチナ問題などの現在的な諸問題について取り上げる。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	地域研究科目（講義科目）	地域研究Ⅴ	北アメリカの主な地誌と、この地域の政治的、社会的、経済的、文化的な特質を概説する。まず北米大陸の地理、気候、植生、人口動態などを押さえながら、近現代の歴史を概観する。次に北米の特徴的な多民族社会の形成過程を紹介し、この視点から現在の政治構造、社会階層の問題、および外交政策を分析していく。さらにこの地域の圧倒的な経済力、文化的伝播力が生まれ出た歴史的背景を探り、グローバル時代における北米の影響力とその可能性について考察する。	
		地域研究Ⅵ	カリブ海を含むラテン・アメリカの主な地誌と、この地域の政治的、社会的、経済的、文化的な特質を概説する。まずラテン・アメリカの地理、気候、植生、人口動態などを押さえながら、近現代の歴史を概観する。具体的には先住民の文明とそれに対する西欧諸国による侵略の事実から現在までを対象とする。このように形成されたラテン・アメリカのうち主な国、メキシコ、アルゼンチン、ブラジルなどを中心にして、それぞれ特徴的な政治、社会構造、文化状況と発展著しい経済について解説する。	
		地域研究Ⅶ	ウラル山脈以西のヨーロッパの主な地誌と、この地域の政治的、社会的、経済的、文化的な特質を概説する。まずヨーロッパの地理、気候、植生、人口動態などを押さえながら、近現代の歴史を概観する。具体的にはヨーロッパを北、西、東、中央、南の５つに区分し、それぞれの地域の全体像と、中心的な国の概観を把握する。またEUやユーロ通貨圏の誕生と拡大を検討しつつ、歴史的な実験であるこれらの試みの背景と、その可能性について詳しく考察する。	
		地域研究Ⅷ	アフリカの主な地誌と、この地域の政治的、社会的、経済的、文化的な特質を概説する。まず、まず、アフリカの地理、気候、植生、人口動態などを抑えながら、近現代の歴史を概観する。具体的には、南アフリカの歴史と文化、政治等を中心として、現在のアフリカと世界との関係を考える。現実の社会を理解するためには、その社会のある程度の過去の歴史を知る必要がある。奴隷貿易、植民地主義、民族独立闘争、近代化、女性の権利の問題など、アフリカ諸国が抱える問題を深く理解する。	
		地域研究Ⅸ	オセアニアの主な地誌と、この地域の政治的、社会的、経済的、文化的な特質を概説する。まず、まず、オセアニアの地理、気候、植生、人口動態などを抑えながら、近現代の歴史を概観する。具体的には、イギリス流刑植民地として出発したオーストラリアの歴史を軸に、現在の多文化のオーストラリアへの軌跡を追う。文化的多様性を拡充し、大きな変化を遂げてきたオーストラリアの「国づくり」のプロセスを、日本と比較しながら検討する。	
	地域研究科目（現地研究科目）	国内フィールドプログラムⅠ	この科目は、日本国内において現地調査をする科目である。文科系の学問はともすると机上のものになりがちであるが、最近の学問の傾向は、それだけでは不十分であり、綿密に計画された現地調査が要求される。ここでは1990年代に生まれた「地元学」をテーマに、その現地として水俣を対象にして、地元住民が自らの足と目と耳で調べ、考えながら、地域最大の課題「水俣病」にどう取り組んできたのかを聞き取り調査によって学びます。そして環境施策を次々に講じ、「環境モデル都市づくり」を実践、環境先進都市として脚光を浴びている水俣市の取り組みから、今後の「地元学」の可能性を考える。	

授　業　科　目　の　概　要

（人文学部総合人文学科等）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	地域研究科目（現地研究科目）	国内フィールドプログラムⅡ	この科目は、日本国内において現地調査をする科目である。文科系の学問はともすると机上のものになりがちであるが、最近の学問の傾向は、それだけでは不十分であり、綿密に計画された現地調査が要求される。ここでは、特に沖縄に焦点を当て、現地の大学でのスクーリングと、それに関わる調査をおこない、戦争、基地問題等、日本近代において沖縄がおかれた特殊の立場や独自の文化、また京都との自然環境の違い等について考察することを目標とする。	
		国内フィールドプログラムⅢ	この科目は、日本国内において現地調査をする科目である。文科系の学問はともすると机上のものになりがちであるが、最近の学問の傾向は、それだけでは不十分であり、綿密に計画された現地調査が要求される。ここでは、特に北海道に焦点を当て、現地の大学でのスクーリングと、それに関わる調査をおこない、アイヌ民族問題等、日本近代において北海道がおかれた特殊な立場や、自然環境、観光都市としての北海道の独自性や京都との比較等について考察することを目標とする。	
		国内フィールドプログラムⅣ	この科目は、日本国内において現地調査をする科目である。文科系の学問はともすると机上のものになりがちであるが、最近の学問の傾向は、それだけでは不十分であり、綿密に計画された現地調査が要求される。ここでは、特に我々にとっての地元である京都に焦点を当て、学内でのスクーリングと、それに関わる調査をおこない、現在の京都が抱える諸問題や日常我々が見過ごしている京都の実際と今後について考察し、今後の学生自身の研究対象として、京都が持っている可能性を見出させることを目標とする。	
		海外フィールドプログラムⅠ	この科目は、日本国外において現地調査をする科目である。文科系の学問はともすると机上のものになりがちであるが、最近の学問の傾向は、それだけでは不十分であり、綿密に計画された現地調査が要求される。ここではアフリカに焦点を当て、同じ時代を生きるアフリカの生活文化を体験することをテーマに、事前学習と現地でのスクーリングやワークショップ、実際の調査により、アフリカの多様性について理解することを目標とする。	
		海外フィールドプログラムⅡ	この科目は、日本国外において現地調査をする科目である。文科系の学問はともすると机上のものになりがちであるが、最近の学問の傾向は、それだけでは不十分であり、綿密に計画された現地調査が要求される。ここでは環境先進国としてのドイツに焦点を当て、先進的な環境政策を学ぶことをテーマに、旧西ドイツ、旧東ドイツ特定地域での取り組みに対して、経緯や市民運動について考察し、環境先進国を旧東西の両側から見つめることを目標とする。	
		海外フィールドプログラムⅢ	この科目は、日本国外において現地調査をする科目である。文科系の学問はともすると机上のものになりがちであるが、最近の学問の傾向は、それだけでは不十分であり、綿密に計画された現地調査が要求される。ここではタイに焦点を当て、タイの社会問題と文化を学ぶことをテーマに、深い歴史と豊な伝統文化を誇る国であり、一方でHIVやAIDS、売春といった社会問題を抱えているのが現状について現地でのスクーリングやスタディーツアーにより考察することを目標とする。	

授　業　科　目　の　概　要 （人文学部総合人文学科等）				
科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	（地域研究科目 現地研究科目）	海外フィールドプログラムⅣ	この科目は、日本国外において現地調査をする科目である。文科系の学問はともすると机上のものになりがちであるが、最近の学問の傾向は、それだけでは不十分であり、綿密に計画された現地調査が要求される。ここではインドに焦点を当て、農村開発NGOの現状と課題を学ぶことをテーマに、経済発展から取り残された農村の開発プロジェクトの現状と課題を村人との交流を通じて学ぶ。また都市部における諸問題（貧富の差、ストリートチルドレン、女性差別）も視野にいれ、今日のインドが内包する現実について考察することを目標とする。	

京都精華大学学則

第 1 章　総　　則

(目的)

第 1 条　本学は学校教育法および教育基本法の規定するところに従い、大学教育を施し、広く知識を授けるとともに、深奥な学問芸術を研究・教授し、よりよき社会人としての人間形成を行うことを目的とする。

(自己評価等)

第 2 条　本学は、教育研究水準の向上を図り、本学の目的および社会的使命を達成するため、本学における教育研究活動等の状況について自ら点検および評価を行い、その結果を公表する。

2　前項の点検および評価を行うため、委員会を設ける。

3　委員会に関する規程は、これを別に定める。

4　点検、評価の項目等については、別にこれを定める。

(学部、学科、入学定員および収容定員)

第 3 条　本学に次の学部・学科をおく。

芸術学部	造形学科
	素材表現学科
	メディア造形学科
デザイン学部	ビジュアルデザイン学科
	プロダクトデザイン学科
	建築学科
マンガ学部	マンガ学科
	マンガプロデュース学科
	アニメーション学科
人文学部	総合人文学科

2　前項の学部・学科の入学定員および収容定員は次のとおりとする。

学部	学科	入学定員	編入学定員	収容定員
芸術学部	造形学科	112 人	2 年次 4 人、3 年次 4 人	468 人
	素材表現学科	64 人	2 年次 3 人、3 年次 3 人	271 人
	メディア造形学科	64 人	2 年次 3 人、3 年次 3 人	271 人
デザイン学部	ビジュアルデザイン学科	96 人	2 年次 4 人、3 年次 4 人	404 人
	プロダクトデザイン学科	64 人	2 年次 3 人、3 年次 3 人	271 人
	建築学科	48 人	2 年次 2 人、3 年次 2 人	202 人

マンガ学部	マンガ学科	96人	2年次3人、3年次3人	399人
	マンガプロデュース学科	40人	2年次2人、3年次2人	170人
	アニメーション学科	64人	2年次2人、3年次2人	266人
人文学部	総合人文学科	450人	2年次24人、3年次34人	1,940人

(人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的)

第3条の2　前条の学部･学科の人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的は次のとおりとする。

芸術学部

歴史的文化芸術、とりわけ京都の文化芸術を理解継承しまた多様化する芸術領域の可能性を探究すること、および自立した思考力によって新たな表現を創造する作家、クリエーターの資質を備えた、よりよき社会人としての人間形成を行うことを目的とする。

造形学科

伝統的造形芸術の知識技法にとどまらず、多角的な観察によって新たな造形芸術を開拓できる資質を備えた人材の養成を行う。

素材表現学科

素材重視の芸術表現領域において伝統的技法を継承し、さらに現代における用と美の新たな発展に貢献できる資質を備えた人材の養成を行う。

メディア造形学科

紙からデジタル・メディアまで媒体の特性を重視する造形芸術において、伝統的技法知識および先端的技法知識を修得し、新たなメディア芸術を開拓できる資質を備えた人材の養成を行う。

デザイン学部

デザイン領域において高度な技法知識を修得し新たな可能性を探究すること、および自立した思考によってグローバル社会および地域社会に現実的に貢献するデザイナー・プランナーの資質を備えた、よりよき社会人としての人間形成を行うことを目的とする。

ビジュアルデザイン学科

情報技術の発展によってその目的および手法が飛躍的に拡大した視覚デザインの領域において、現実の社会に貢献できる資質を備えた人材の養成を行う。

プロダクトデザイン学科

社会活動や生活に使用される道具、器具、装置などのデザインの領域において、現実の社会に貢献できる資質を備えた人材の養成を行う。

建築学科

環境、建築、居住空間などのデザイン・設計の領域において、現実の社会に貢献できる資質を備えた人材の養成を目的とする。

マンガ学部

マンガ文化の再評価とともに重要視されるマンガやアニメーションの制作と理論について多角的な教育研究を行い新たな可能性を探究すること、およびマンガ文化の継承と発展に貢献する資質を備えた、よりよき社会人としての人間形成を行うことを目的とする。

マンガ学科

マンガの作品史、表現などについての理論および技法の修得にとどまらず、実践によってマンガ表現の発展に貢献できる資質を備えた人材の養成を目的とする。

マンガプロデュース学科

コンテンツ産業としてのマンガについての体系的理論的把握および媒体ごとの制作手法の修得にとどまらず、マンガ・コンテンツのプロデュースに貢献できる資質を備えた人材の養成を目的とする。

アニメーション学科

アニメーションの作品史、表現などについての理論および技法の修得にとどまらず、実践によってアニメーションの発展に貢献できる資質を備えた人材の養成を目的とする。

人文学部

国際的な視野と体験を重視し、地球環境問題の深刻化、情報技術化、経済のグローバル化の時代に求められる人間の社会と文化についての学際的な教育研究を行うこと、および自立した思考力によって現実の社会と文化に貢献する資質を備えた、よりよき社会人としての人間形成を行うことを目的とする。

総合人文学科

主に以下の 5 つの専門基礎領域で学士課程教育を行うが、これら領域間の学際的な連関にも配慮して異なる領域の学習も保証しつつ、総合的な教養を備えた人材の養成を目的とする。

(1) 現代の大衆文化に関して理論的、実践的な深い理解を持ち、大衆文化の発展と深化に貢献できる人材の養成。(2) 優れた語学能力、特に英語の運用能力、異文化に関する深い理解を持ち、グローバル社会における人間の共存を構想できる人材の養成。(3) 日本の伝統文化とそれを育んだ風土、およびアジア諸地域との文化的交流に関して歴史的な理解を持ち、伝統文化の継承と発展に貢献できる人材の養成。(4) 地球環境問題の社会的、文化的な理解を深め、環境と共存する将来の人間社会の実現に貢献できる人材の養成。(5) 現代社会において急速に変化しつつある人間像を、思想的、社会的、心理的な観点から深く理解し、より人間的な地域社会の構築に貢献できる人材の養成。

(大学院)

第 4 条　本学に大学院をおく。

2　大学院の学則は、別に定める。

(修業年限)

第 5 条　本学の修業年限は 4 年とする。ただし、8 年を超えて在学することはできない。

2　教授会が有益と認めるときは、他の大学等における修学期間を修業年限に算入することができる。ただし、修業年限については 1 年を超えて算入することはできない。

3　前項の規定は、外国の大学における修学期間についても準用する。

第 2 章　学年・学期および休業日

(学年)

第 6 条　本学の学年は 4 月 1 日に始まり、翌年 3 月 31 日に終わる。

(学期および授業日数)

第 7 条　1 学年の授業日数は定期試験の日数を含めて 35 週、210 日を下らないものとし、1 学年を分けて次の学期とする。

① 前　期　4 月 1 日より 9 月 30 日まで

② 後　期　10 月 1 日より 3 月 31 日まで

(休業日)

第 8 条　休業日は次のとおりとする。

① 日曜日

② 国民の祝日に関する法律(昭和 23 年法律第 178 号)に規定する休日

③ 春季・夏季・冬季の休業期間は、各年度ごとに定める。

2　学長が必要と認めたときは、臨時に休業日を設け、または休業日を変更することができる。

3　学長が必要と認めたときは、休業日に授業を行うことができる。

第 3 章　教育課程・単位・教育課程の履修

(教育課程の編成)

第 9 条　本学は、学部および学科等の教育上の目的を達成するために必要な授業科目を開設し、体系的に教育課程を編成する。

2　教育課程は、各授業科目を必修科目、選択科目に分け、これを各年次に配当して編成する。

(授業科目および単位数)

第 10 条　本学の授業科目および単位数は別表Ⅰ、別表Ⅱ、別表Ⅲおよび別表Ⅳのとおりとする。

(単位計算方法)

第 11 条　各授業科目の単位数は、1 単位の授業科目を 45 時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とし、次の各号の基準によって計算する。

(1) 講義および演習については、15 時間から 30 時間までの範囲で定められた時間の授業をもって 1 単位とする。

(2) 実験、実習および実技等の授業については、30 時間から 45 時間までの範囲で定められた時間の授業をもって 1 単位とする。ただし、個人指導による実技の授業については、相応の時間の授業をもって 1 単位とする。

2　前項の規定にかかわらず、卒業論文、卒業制作、学外学修・個別課題学習等の授業科目および公の技能審査等による認定を受けた者については、これらの学修の成果を評価して適切な単位を授与することができる。

(教育課程の履修)

第 12 条　学生は原則として、別表 I に定める教育課程に従い、各年次に配当された授業科目を履修する。

2　学生は当該学部の定めるところ(学部履修規程)により、授業科目を履修し、その単位を修得しなければならない。

3　卒業に必要な単位は、124 単位とする。

(他の大学または短期大学における授業科目の履修等)

第 13 条　教授会が教育上有益と認めるときは、学生が他の大学または短期大学の授業科目を履修することを認める。

2　前項の規定に基づいて学生が履修した単位は 30 単位を超えない範囲で、本学で修得したものとみなすことができる。

3　前項の規定は、学生が外国の大学に留学する場合に準用する。

4　留学に関する規程は、別にこれを定める。

(大学以外の教育施設等における学修)

第 14 条　教授会が本学における教育水準を有し、教育上有益と認めるときは、学生が行う高等専門学校の専攻科における学修、修業年限 2 年以上の専修学校専門課程における学修、文部科学大臣の認定を受けた技能審査の合格に係る学修を本学における履修とみなし単位を与えることができる。

2　前項により与えることができる単位数は 30 単位を超えないものとする。

(入学前の既習得単位等の認定)

第 15 条　教授会が教育上有益と認めるときは、学生が本学入学前に大学または短期大学において履修した授業科目について修得した単位を本学で修得したものとみなすことができる。

2　教授会が教育上有益と認めるときは、本学に入学する前に行った前条第 1 項に規定する学修を本学における授業科目の履修とみなし、単位を与えることができる。

3　前 2 項により修得したものとみなし、または与えることのできる単位数は、編入学の場合を除き、本学において修得した単位以外のものについては、あわせて 30 単位を超えないものとする。

(特別聴講生)

第 16 条　他の大学等の学生で、当該他の大学等との協議に基づき、本学において授業科目を履修することを志願する者については特別聴講生として、学長がこれを許可することがある。

2　特別聴講生に関する規程は本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(履修登録)

第 17 条　学生は履修しようとする授業科目を毎学年始め、所定の期日までに届け出なければならない。

(資格の取得)

第 18 条　本学に教育職員免許状授与の所要資格を得させるための課程をおく。

本学において教育職員免許状の取得を希望する者は、教育職員免許法および教育免許法施行規則に基づき、本学が別表Ⅱに定める教職および教科に関する専門科目を履修し、その単位を修得しなければならない。

本学における教育職員免許状の教科および種類は、以下の表に掲げるとおりとする。

学　部	学　科	免許状の種類(教科)
芸術学部	造形学科	中学校教諭一種免許状(美術) 高等学校教諭一種免許状(美術)
	素材表現学科	中学校教諭一種免許状(美術) 高等学校教諭一種免許状(美術) 高等学校教諭一種免許状(工芸)
芸術学部	メディア造形学科	中学校教諭一種免許状(美術) 高等学校教諭一種免許状(美術)
デザイン学部	ビジュアルデザイン学科	中学校教諭一種免許状(美術) 高等学校教諭一種免許状(美術)
	プロダクトデザイン学科	中学校教諭一種免許状(美術) 高等学校教諭一種免許状(美術) 高等学校教諭一種免許状(工芸)
マンガ学部	マンガ学科	中学校教諭一種免許状(美術) 高等学校教諭一種免許状(美術)

2　図書館司書の資格を取得しようとする者は、図書館法および図書館法施行規則に基づき、本学が別表Ⅲに定める図書館司書課程に関する授業科目を履修し、その単位を修得しなければならない。

図書館司書課程を設置する学部および学科は、以下の表に掲げるとおりとする。

学　部	学　科
芸術学部	造形学科
	素材表現学科
	メディア造形学科
デザイン学部	ビジュアルデザイン学科
	プロダクトデザイン学科

学　　部	学　　科
マンガ学部	マンガ学科
	マンガプロデュース学科
	アニメーション学科

3　博物館学芸員の資格を取得しようとする者は、博物館法および博物館法施行規則に基づき、本学が別表Ⅳに定める図書館司書課程に関する授業科目を履修し、その単位を修得しなければならない。

博物館学芸員課程を設置する学部および学科は、以下の表に掲げるとおりとする。

学　　部	学　　科
芸術学部	造形学科
	素材表現学科
芸術学部	メディア造形学科
デザイン学部	ビジュアルデザイン学科
	プロダクトデザイン学科
マンガ学部	マンガ学科
	マンガプロデュース学科
	アニメーション学科

第 4 章　教育課程修了の認定・単位の授与・卒業および称号

(教育課程修了の認定)

第 19 条　教育課程修了の認定は授業科目の試験、研究報告の成績を審査し、その結果に基づき、教授会の議を経て行う。

2　成績の評価はA(100 点～80 点)、B(79 点～70 点)、C(69 点～60 点)、F(59 点以下)とし、A、B、Cをもって合格とする。

(単位の授与)

第 20 条　学長は、別表Ⅰから Ⅳに定める授業科目を履修した学生に対し、当該授業科目の試験および研究報告の成績を審査し、その結果に基づき、教授会の議を経て、相当する数の単位を与える。

(卒業)

第 21 条　学長は本学の学部に 4 年以上在学し、かつ第 12 条に規定する卒業に必要な単位を修得した者について、教授会の議を経て卒業を認定する。

2　学長は卒業を認定した者に対し、学位記を授与する。

(学位の授与)

第 22 条　本学の芸術学部、デザイン学部およびマンガ学部を卒業した者に、学士(芸術)の学位を授与する。

2　本学の人文学部を卒業した者に、学士(人文)の学位を授与する。

第 5 章　入学・編入学・転入学・休学・復学・退学・転学・除籍および再入学

(入学)

第 23 条　本学の入学は学年の始めとする。

2　前項の規定にかかわらず、人文学部については、外国人留学生・帰国生徒の後期よりの入学を認めることができる。

(入学資格)

第 24 条　本学の第 1 年次に入学することのできる者は、次の各号のいずれかに該当する者でなければならない。

①　高等学校を卒業した者

②　通常の課程による 12 年の学校教育を修了した者(通常の課程以外の課程によりこれに相当する学校教育を修了した者を含む)

③　外国において学校教育における 12 年の課程を修了した者、またはこれに準ずる者で文部科学大臣の指定した者

④　文部科学大臣の指定した者

⑤　文部科学大臣が高等学校の課程と同等の課程を有するものとして認定した在外教育施設の当該課程を修了した者

⑥　大学入学資格検定規程により文部科学大臣の行う大学入学資格検定に合格した者

⑦　相当の年齢に達し、高等学校を卒業した者と同等以上の学力があるものと本学が認めた者

(入学志願手続および合否判定)

第 25 条　入学を志願する者は、本学所定の出願書類に別表Ｖに定める入学検定料を添えて提出しなければならない。

2　提出の方法、時期、同時に提出すべき書類等については別に定める。

3　学長は入学を志願する者に対して入学試験を実施し、教授会における合否判定に基づき、結果を通知する。

(入学手続金の納入および入学許可)

第 26 条　入学試験に合格した者は、学長が指定する期日までに所定の納付金を納入し、かつ必要書類を提出しなければならない。

2　学長は、前項の規定により所定の納付金を納入し、必要書類を提出した者に対して、入学を許可する。

(編入学)

第 27 条　本学の第 3 年次およびに編入学を希望する者については、選考のうえ、学長はこれを許可することがある。

2　第 3 年次に編入学できる者は、次の各号のいずれかに該当する者とする。

①　大学を卒業した者、または大学に 2 年以上在学した者

②　短期大学または高等専門学校を卒業した者

③　専修学校の専門課程を修了した者のうち、学校教育法第 82 条の 10 の規定により大学に編入学できる者

3　第 2 年次に編入学できる者は、次の各号のいずれかに該当する者とする。

①　大学に 1 年以上在学した者

②　短期大学または高等専門学校を卒業した者

4　前 2 項の規定により入学を許可された者がすでに履修した科目および単位の取扱いについては、別にこれを定める。

(転入学)

第 28 条　他の大学に 1 年以上在学してから、本学の学部に転入学しようとする者について、選考のうえ、既に在学していた大学および履修した授業科目の内容と成績とを考慮して、学長は入学を許可することがある。

2　本条により入学を許可された者の修学年限は、他大学における在学年数が 1 年であった者は 3 年、2 年以上であった者は 2 年とし、それぞれ 6 年、4 年を超えて在学することはできない。

3　転入学を許可された者が既に履修した授業科目および単位の取扱いについては、別に定めるところによる。

(休学)

第 29 条　学生が疾病その他の事由によって 3 ヶ月以上就学することができないときは、保証人と連署のうえ、所定の様式により願い出て、学長の許可を得たうえ休学することができる。

2　休学期間は 1 年以内とする。ただし、特別の理由がある場合は 1 年を限度として、休学期間の延長を認めることができる。

3　休学の期間は通算して 4 年を超えることができない。

4　休学の期間は、第 5 条に定める修業年限および在学年限に算入しない。

5　休学期間中の学費は半期 10,000 円、通年 20,000 円とし、納入等に関する規定は第 34 条による。

6　休学に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(復学)

第 30 条　休学者が復学しようとするときは、保証人連署のうえ、所定の様式により願い出て、学長の許可を得たうえ復学することができる。

2　復学は、学期の始めからとする。

3　復学に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(退学および転学)

第 31 条　疾病、その他の事由によって退学または転学しようとする者は、保証人連署のうえ、所定の様式により退学願または転学願を提出し、学長の許可を得なければならない。

2　退学および転学に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(除籍)

第 32 条　学長は、学生が各号のいずれかに該当するときは、学生を除籍する。

①　第 5 条に規定する在学年限を超えた者

②　第 29 条第 2 項および第 3 項に規定する休学年限を超えた者

③　所定の授業料等学費の納付を怠り、その督促を受けてもこれを納付しない者

④　第 30 条の復学手続きのない者

⑤　本学での就学の意思のない者

⑥　本人が死亡したとき

⑦　その他、学長が相当の理由を認めた者

2　除籍に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(再入学)

第 33 条　退学または除籍となった者が、保証人連署のうえ、所定の様式により再入学を願い出たときは、教授会の議を経て、学長がこれを許可することがある。

2　再入学を願い出ることのできる期間は、退学または除籍の日より 2 年以内とする。

3　再入学は学期の始めからとする。

4　再入学に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

第 6 章　入学検定料・入学金および授業料

(入学検定料、入学金および授業料)

第 34 条　入学検定料、入学金および授業料は、別表Ｖの①のとおりとする。

2　前項に規定する既納の入学検定料、入学金および授業料等の学費は、原則として返還しない。

3　前項の規定にかかわらず、入学許可を得た者で、指定の期日までに入学手続の取り消しを願い出た者

については、入学金またはこれに相当する金額を除く学費を返還する。

4　学費納入等に関する規定は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

第 7 章　職員組織および教授会

(職員組織)

第 35 条　本学に学長、副学長、教授、准教授、講師、助教、助手、事務職員、その他の職員をおく。

2　学長は本学則に定める職務を行い、所属職員を統督する。

3　副学長は、学長の職務を助ける。

4　教授、准教授、講師、助教、助手、事務職員、その他の職員の職務は、学校教育法、その他の法令および本学諸規程の定めるところによる。

(教授会)

第 36 条　本学の重要な事項を審議するために各学部に教授会をおき、学部に属する専任の教授、准教授、講師、助教、助手、その他教授会が必要と認めた職員をもって組織する。

2　教授会はその学部に関する次の事項を審議する。

①　学生の入学・編入学・転入学・再入学・休学・退学・転学・留学・除籍・復学および卒業に関する事項

②　教育課程の編成に関する事項

③　学生の試験および課程修了の認定に関する事項

④　教授および研究に関する事項

⑤　教員の人事に関する事項

⑥　学則および諸規程の制定・改廃に関する事項

⑦　学長の諮問した事項

3　各学部に共通する重要な事項を審議するため、全学教授会をおく。

4　教授会に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

第 8 章　聴講生・科目等履修生・委託生・研究生・外国人留学生・帰国生徒および社会人

(聴講生)

第 37 条　本学の教職課程科目のうち「教職に関する専門科目」について聴講しようとする者があるときは、本学の教育・研究に支障のない場合に限り教授会の議を経て、学長がこれを許可する。

2　聴講を許可する授業科目は 1 年度につき 1 年度につき 12 単位とし、在学年限は 1 年以内とする。

3　学長は、特定の授業科目を履修し、その単位を修得した聴講生に対して、単位修得証明書を交付することができる。

4　聴講料等の納付金については、別表Ｖの③に定めるところによる。

5　聴講生に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(科目等履修生)

第 38 条　本学の学生以外の者が本学の特定の授業科目を履修しようとするときは、本学の教育・研究に支障がない限り、教授会の議を経て、学長がこれを許可することができる。

2　履修を許可する授業科目の単位数は、1 年度につき 12 単位とし、在学年限は 1 年以内とする。

3　学長は、特定の授業科目を履修し、その単位を修得した科目等履修生に対し、単位修得証明書を交付することができる。

4　科目等履修の納付金については、別表Ｖの④に定めるところによる。

5　科目等履修生に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(委託生)

第 39 条　公共団体その他の機関から本学の特定の学科に修学を委託されたときは、選考のうえこれを受託し、委託の目的に合致する特定の授業科目の履修について、学長がこれを許可することができる。

2　前項の特定の授業科目の履修およびその単位は、委託者の希望を考慮し教授会においてこれを決定する。

3　学長は、特定の授業科目を聴講し、その単位を修得した委託生に対し、単位修得証明書を交付することができる。

4　委託生の委託料は、別表Ｖの①に規定する授業料相当額とする。

5　委託生に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(研究生)

第 40 条　本学の専任教員のもとで研究しようとする者があるときは、教授会の議を経て、学長がこれを許可することがある。

2　研究生の授業料等の学費は、別表Ｖの⑤に定めるところによる。

3　研究生に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(外国人留学生)

第 41 条　勉学の目的をもった外国人で、第 24 条に定める要件を充足する者が本学への入学を志願するときは、選考のうえ、学長が入学を許可することがある。

2　外国人留学生に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(帰国生徒)

第 42 条　長期間の海外生活を経験した者で、第 24 条に定める要件を充足する者が本学への入学を志願するときは、選考のうえ、学長が入学を許可することがある。

2　帰国生徒に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

(社会人)

第 43 条　社会的経験を有する者で、第 24 条に定める要件を充足する者が本学への入学を志願するときは、選考のうえ、学長が入学を許可することがある。

2　社会人に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

第 9 章　公開講座

(公開講座)

第 44 条　本学に公開講座をおくことができる。

2　公開講座は、一般市民に対し本学の教育を公開し、学問・芸術の研究向上に資することを目的とする。

3　公開講座は、教授会の議を経て随時公開する。

第 10 章　情報館

(情報館)

第 45 条　本学に情報館をおき、教育および研究活動に必要な図書、文献、画像、視聴覚資料および研究資料を収集管理し、教職員、学生および一般市民の利用に供する。

2　情報館に関する規程は、本条に定めるもののほか、別にこれを定める。

第 11 章　保健施設および学生寮

(保健施設)

第 46 条　本学に教職員および学生の保健衛生を管理するために、保健室をおく。

2　学生は、毎年定められた時期に健康診断を受けなければならない。

(学生寮)

第 47 条　本学に学生寮をおく。

2　学生寮に関する規程は、別にこれを定める。

第 12 章　育英奨学制度

(育英奨学制度)

第 48 条　本学に育英奨学制度を設ける。

2　育英奨学制度関する規程は、別にこれを定める。

第 13 章　賞罰

(表彰)

第 49 条　学長は、品行・学業とも優秀で他の模範となる学生に対して、表彰を行うことがある。

(懲戒)

第 50 条　学長は学則または規則に違反し、その他学生の本分に背く行為のあった学生に対して、教授会の議を経て懲戒する。

2　懲戒は訓告、停学および退学とする。

3　前項の退学は、次の各号のいずれかに該当する者に対して行う。

①　性行不良で改善の見込みがないと認められる者

②　正当の理由なく、出席が常でない者

③　大学の秩序を乱し、その他学生の本分に背く者

附　　則

第 1 項　この学則に定めるもののほか、学則の施行に関し、さらに必要な事項は別にこれを定める。

第 2 項　この学則は昭和 54 年 4 月 1 日から実施する。

第 3 項　昭和 54 年度の美術学部造形学科・デザイン学科の総定員は第 4 条の規定にかかわらず次のとおりとする。

昭和 54 年度	造 形 学 科	120 名
	デザイン学科	120 名

第 4 項　この学則は、昭和 57 年 12 月 1 日から実施する。

第 5 項　この学則は、昭和 58 年 4 月 1 日から実施する。

第 6 項　この学則は、昭和 59 年 4 月 1 日から実施する。

第 7 項　この学則は、昭和 60 年 4 月 1 日から実施する。

第 8 項　この学則は、昭和 61 年 4 月 1 日から実施する。

第 9 項　この学則は、昭和 62 年 4 月 1 日から実施する。

ただし、第 4 条の規定にかかわらず、昭和 62 年度から平成 7 年度までの間の入学定員は、次のとおりとする。

学部・学科等	入 学 定 員
美 術 学 部	人
造 形 学 科	120

デザイン学科	120
計	240

第 10 項　この学則は、昭和 63 年 4 月 1 日から実施する。

第 11 項　この学則は、平成元年 4 月 1 日から実施する。

第 12 項　この学則は、平成 2 年 4 月 1 日から実施する。

第 13 項　この学則は、平成 3 年 4 月 1 日から実施する。

第 18 条に規定する人文学部における英語・中学校 1 種免許状、高等学校 1 種免許状を取得しようとする者は、平成元年 4 月入学者より必要単位を履修できるものとする。

2　第 4 条および附則第 9 項ただし書きの規定にかかわらず、平成 3 年度から平成 11 年度までの間の入学定員は、次のとおりとする。

学部・学科等	入　学　定　員	
美 術 学 部	人	
造 形 学 科	150	(平成 8 年度から 11 年度までは 130 人)
デザイン学科	150	(平成 8 年度から 11 年度までは 130 人)
計	300	(平成 8 年度から 11 年度までは 260 人)
人 文 学 部		
人 文 学 科	300	
計	300	

第 14 項　この学則は、平成 4 年 4 月 1 日から実施する。

ただし、第 22 条第 1 項については、平成 3 年 12 月 1 日より施行する。

第 15 項　この学則は、平成 5 年 4 月 1 日から実施する。

この学則は、平成 5 年 4 月 1 日入学者より適用する。平成 5 年以前の入学者(平成 5 年度美術学部編入生を含む)については、従来の第 12 条第 1 項別表 I を適用する。

第 16 項　この学則は、平成 6 年 4 月 1 日から実施する。

第 17 項　この学則は、平成 8 年 4 月 1 日から実施する。

2　ただし、第 4 条の規定にかかわらず、平成 8 年度から平成 11 年度までの間の入学定員は、次のとおりとする。

学部・学科等	入 学 定 員
美 術 学 部	人
造 形 学 科	150
デザイン学科	150
計	300

第 18 項　この学則は、平成 9 年 4 月 1 日から実施する。

第 19 項　この学則は、平成 12 年 4 月 1 日から実施する。

2　別表 I ①に規定する芸術学部教育課程については全学年一斉に移行し、平成 11 年度以前入学者に対

する移行・経過措置については、別にこれを定める。

3　第 4 条の規定にかかわらず、平成 12 年度から平成 15 年までの間の入学定員は、次のとおりとする。

学部・学科等	入　学　定　員			
	平成 12 年度	平成 13 年度	平成 14 年度	平成 15 年度
芸 術 学 部	人	人	人	人
造 形 学 科	150	145	140	135
デザイン学科	170	165	160	155
計	320	310	300	290
人 文 学 部				
人 文 学 科	248	236	224	212
計	248	236	224	212

第 20 項　この学則は、平成 13 年 4 月 1 日から実施する。

ただし、第 18 条に規定する芸術学部マンガ学科における中学校教諭 1 種免許状(美術)および高等学校教諭 1 種免許状(美術)を取得しようとする者は、平成 12 年 4 月入学者より必要単位を履修できるものとする。

また、人文学部環境社会学科において図書館司書の資格を取得しようとする者および芸術学部マンガ学科・人文学部環境社会学科において博物館学芸員の資格を取得しようとする者は、平成 12 年 4 月入学者より必要単位を履修できるものとする。

第 21 項　この学則は、平成 15 年 4 月 1 日から実施する。

ただし、人文学部人文学科は、改定後の学則第 3 条の規定にかかわらず、当該学科に在籍する者が当該学科に在籍しなくなるまでの間、存続するものとする。

また、改定後の学則第 4 条の規定にかかわらず、平成 15 年度の人文学部社会メディア学科および文化表現学科の入学定員は、人文学部人文学科の臨時的定員の漸減計画による人数を継承し、以下のとおりとする。

学部・学科等	入 学 定 員
人 文 学 部	人
社会メディア学科	116
文 化 表 現 学 科	96
計	212

第 22 項　この学則は、平成 16 年 4 月 1 日から実施する。

ただし、人文学部社会メディア学科において第 18 条に規定する高等学校教諭 1 種免許状(公民)を取得しようとする者は、平成 15 年 4 月入学者より必要単位を履修することができるものとする。

また、芸術学部造形学科・デザイン学科・マンガ学科、人文学部社会メディア学科・文化表現学科において図書館司書の資格を取得しようとする者、および人文学部社会メディア学科・文化表現学科にお

いて博物館学芸員の資格を取得しようとする者は、平成 15 年 4 月入学者より必要単位を履修することができるものとする。

さらに、別表 I については、平成 15 年 4 月入学者より適用する。

第 23 項　この学則は、平成 17 年 4 月 1 日から実施する。

ただし、人文学部環境社会学科において第 18 条に規定する高等学校教諭 1 種免許状(公民)を取得しようとする者は、平成 16 年 4 月入学者より必要単位を履修することができるものとする。

第 24 項　この学則は、平成 18 年 4 月 1 日から実施する。

ただし、別表 I に規定する教育課程のうち、芸術学部基礎講義・演習科目、デザイン学部基礎講義・演習科目、マンガ学部基礎講義・演習科目、芸術学部専門講義科目、デザイン学部専門講義科目、デザイン学部建築学科専門教育科目の一部、マンガ学部専門講義科目については、芸術学部の平成１７年４月以前入学者に対しても一斉に適用し、履修することができるものとする。その移行・経過措置は別に定める。

第 25 項　この学則は、平成 19 年 4 月 1 日から実施する。

ただし、別表 I に規定する教育課程のうち、デザイン学部建築学科専門教育科目の「身体空間演習」と「インテリア表現演習」については平成 19 年 4 月入学者より適用し、人文学部専門教育科目については平成 17 年 4 月入学者より適用し、それ以外については平成 18 年 4 月入学者より適用する。

第 26 項　この学則は、平成 20 年 4 月 1 日から実施する。

ただし、別表 I に規定する教育課程のうち、芸術学部造形学科専門教育科目、デザイン学部基礎講義・演習科目、ビジュアルデザイン学科専門教育科目、マンガ学部基礎講義・演習科目、専門講義科目、アニメーション学科専門教育科目の一部については平成 20 年 4 月以前入学者に対しても一斉に適用し、履修できるものとする。その移行・経過措置は別に定める。

また、第 34 条に規定する入学金は平成 21 年 4 月入学者より適用し、授業料は、平成 20 年 4 月入学者より適用する。

さらに、第 29 条第 5 項に規定する休学期間中の学費は、平成 20 年 4 月 1 日より在籍学生に一斉適用する。

第 27 項　この学則は、平成 21 年 4 月 1 日から実施する。

別表Ⅰ　教育課程

① 芸術学部

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数 必修	単位数 選択	単位数 計	備考
芸術学部	芸術学部共通	基礎講義・演習科目					「英語」(留学生は「日本語」)4単位必修、外国語科目(留学生は母語以外)2単位選択必修を含み、基礎講義・演習科目、芸術学部専門講義科目および他学部交流科目から 44 単位以上必修
		哲学	1･2･3･4		2	2	
		現代思想	1･2･3･4		2	2	
		宗教学	1･2･3･4		2	2	
		倫理と社会	1･2･3･4		2	2	
		日本文学	1･2･3･4		2	2	
		世界文学	1･2･3･4		2	2	
		民俗学	1･2･3･4		2	2	
		考古学	1･2･3･4		2	2	
		日本近現代史 1	1･2･3･4		2	2	
		日本近現代史 2	1･2･3･4		2	2	
		社会学	1･2･3･4		2	2	
		政治学	1･2･3･4		2	2	
		法学概論	1･2･3･4		2	2	
		日本国憲法	1･2･3･4		2	2	
		文化人類学	1･2･3･4		2	2	
		芸術と経済	1･2･3･4		2	2	
		芸術学 1	1･2･3･4		2	2	
		芸術学 2	1･2･3･4		2	2	
		東洋古典講座 1	1･2･3･4		2	2	
		東洋古典講座 2	1･2･3･4		2	2	
		西洋古典講座 1	1･2･3･4		2	2	
		西洋古典講座 2	1･2･3･4		2	2	
		現代日本社会論 1	1･2･3･4		2	2	
		現代日本社会論 2	1･2･3･4		2	2	
		言葉の科学	1･2･3･4		2	2	
		視覚認知論	1･2･3･4		2	2	
		科学の歴史	1･2･3･4		2	2	
		自然科学論	1･2･3･4		2	2	
		文明と環境	1･2･3･4		2	2	
		生物学	1･2･3･4		2	2	
		数学	1･2･3･4		2	2	
		マンガ文化論 1	1･2･3･4		2	2	
		マンガ文化論 2	1･2･3･4		2	2	
		情報処理基礎 1	1･2･3･4		1	1	
		情報処理基礎 2	1･2･3･4		1	1	
		進路研究	1･2･3･4		2	2	
		点字講座 1	1･2･3･4		2	2	

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考
				必修	選択	計	
芸術学部	芸術学部共通	点字講座 2	1･2･3･4		2	2	
		健康学 1	1･2･3･4		2	2	
		健康学 2	1･2･3･4		2	2	
		スポーツ演習 1	1･2･3･4		2	2	
		スポーツ演習 2	1･2･3･4		2	2	
		英語 1	1		2	2	
		英語 2	1		2	2	
		英語 3	2･3･4		2	2	
		英語 4	2･3･4		2	2	
		日本語 1	1		2	2	
		日本語 2	1		2	2	
		日本語 3	2･3･4		2	2	
		日本語 4	2･3･4		2	2	
		上級日本語 1	1･2･3･4		2	2	
		上級日本語 2	1･2･3･4		2	2	
		フランス語 1	1･2･3･4		2	2	
		フランス語 2	1･2･3･4		2	2	
		フランス語 3	2･3･4		2	2	
		フランス語 4	2･3･4		2	2	
		中国語 1	1･2･3･4		2	2	
		中国語 2	1･2･3･4		2	2	
		中国語 3	2･3･4		2	2	
		中国語 4	2･3･4		2	2	
		朝鮮語 1	1･2･3･4		2	2	
		朝鮮語 2	1･2･3･4		2	2	
		朝鮮語 3	2･3･4		2	2	
		朝鮮語 4	2･3･4		2	2	
		タイ語 1	1･2･3･4		2	2	
		タイ語 2	1･2･3･4		2	2	
		タイ語 3	2･3･4		2	2	
		タイ語 4	2･3･4		2	2	
		教育学概論	1･2･3･4		2	2	
		図書館概論	1･2･3･4		2	2	
		生涯学習概論	1･2･3･4		2	2	
		人権教育論	1･2･3･4		2	2	
		現代学校論	1･2･3･4		2	2	
		ＣＧ基礎演習 1	1･2･3･4		2	2	
		ＣＧ基礎演習 2	1･2･3･4		2	2	
		国内フィールドワーク 1	1･2･3･4		2	2	

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数 必修	選択	計	備考
芸術学部	芸術学部共通	国内フィールドワーク 2	1･2･3･4		2	2	
		海外フィールドワーク 1	1･2･3･4		2	2	
		海外フィールドワーク 2	1･2･3･4		2	2	
		写真技法演習 1	1･2･3･4		2	2	
		写真技法演習 2	1･2･3･4		2	2	
		キャリアアップ演習 1	1･2･3･4		2	2	
		キャリアアップ演習 2	1･2･3･4		2	2	
		芸術学部専門講義科目					
		芸術基礎講座 1	1･2･3･4		2	2	
		芸術基礎講座 2	1･2･3･4		2	2	
		美術史 1	1･2･3･4		2	2	
		美術史 2	1･2･3･4		2	2	
		西洋美術史 1	1･2･3･4		2	2	
		西洋美術史 2	1･2･3･4		2	2	
		日本美術史 1	1･2･3･4		2	2	
		日本美術史 2	1･2･3･4		2	2	
		アジア美術史 1	1･2･3･4		2	2	
		アジア美術史 2	1･2･3･4		2	2	
		比較芸術論	1･2･3･4		2	2	
		日本近代美術史	1･2･3･4		2	2	
		造形心理学 1	1･2･3･4		2	2	
		造形心理学 2	1･2･3･4		2	2	
		美学概論 1	2･3･4		2	2	
		美学概論 2	2･3･4		2	2	
		工芸概論 1	2･3･4		2	2	
		工芸概論 2	2･3･4		2	2	
		現代美術概論	2･3･4		2	2	
		現代美術作家論	2･3･4		2	2	
		文様史 1	2･3･4		2	2	
		文様史 2	2･3･4		2	2	
		芸術学セミナー	2･3･4		2	2	
		芸術工学概論	2･3･4		2	2	
		ウェブ・テクノロジー論	2･3･4		2	2	
		美術解剖学	2･3･4		2	2	
		身体と表現	2･3･4		2	2	
		映像論 1	2･3･4		2	2	
		映像論 2	2･3･4		2	2	
		メディア論	2･3･4		2	2	
		版画論 1	2･3･4		2	2	

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考
				必修	選択	計	
芸術学部	芸術学部共通	版画論 2	3･4		2	2	
		アートマネジメント論	3･4		2	2	
		現代造形論 1	3･4		2	2	
		現代造形論 2	3･4		2	2	
		陶芸史 1	3･4		2	2	
		陶芸史 2	3･4		2	2	
		染織史 1	3･4		2	2	
		染織史 2	3･4		2	2	
		現代絵画 1	3･4		2	2	
		現代絵画 2	3･4		2	2	
		メディアアート論	3･4		2	2	
		インテリアデザイン概論 1	3･4		2	2	
		インテリアデザイン概論 2	3･4		2	2	
		知的財産権入門	3･4		2	2	
		現代音楽論	3･4		2	2	
		作品批評 1	3･4		2	2	
		作品批評 2	3･4		2	2	
		学外実習 1	3･4		3	3	
		学外実習 2	3･4		2	2	
		美術評論演習 1	3･4		2	2	
		美術評論演習 2	3･4		2	2	
	造形学科	造形学科専門教育科目					80 単位以上必修
		デッサン 1	1		3	3	
		デッサン 2	1		3	3	
		基礎立体・彫塑 1	1		3	3	
		基礎立体・彫塑 2	1		3	3	
		基礎立体・彫塑 3	1		2	2	
		基礎デザイン 1	1		3	3	
		基礎デザイン 2	1		3	3	
		基礎デザイン 3	1		2	2	
		表現基礎 1	1		5	5	
		表現基礎 2	1		2	2	
		表現基礎 3	1		2	2	
		表現基礎 4	1		5	5	
		描写表現 1	1		3	3	
		描写表現 2	1		3	3	
		絵画基礎 1	1･2･3		3	3	
		絵画基礎 2	1･2･3		3	3	
		絵画基礎 3	2		2	2	

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考
				必修	選択	計	
芸術学部	造形学科	絵画基礎4	2		4	4	
		絵画技法1	1		2	2	
		絵画技法2	1		2	2	
		絵画技法3	3		2	2	
		絵画技法4	3		2	2	
		日本画基礎1	2		4	4	
		日本画基礎2	2		5	5	
		日本画基礎3	2		4	4	
		日本画基礎4	2		5	5	
		立体基礎1	2		2	2	
		立体基礎2	2		4	4	
		立体基礎3	2		3	3	
		立体基礎4	2		3	3	
		立体表現1	2		3	3	
		立体表現2	2		3	3	
		版画技法1	2		2	2	
		版画技法2	2		2	2	
		写真表現1	2		2	2	
		写真表現2	2		2	2	
		日本画材料実習	2		2	2	
		材料実習	2		4	4	
		模写1	2		2	2	
		模写2	3		2	2	
		工芸1	2		4	4	
		工芸2	1		2	2	
		彫刻史演習	2		2	2	
		素材論演習	2		2	2	
		絵画1	3		3	3	
		絵画2	3		3	3	
		絵画3	3		3	3	
		絵画4	3		3	3	
		絵画5	3		3	3	
		絵画6	3		3	3	
		絵画7	4		3	3	
		絵画8	4		3	3	
		絵画9	4		3	3	
		日本画1	3		3	3	
		日本画2	3		3	3	
		日本画3	3		3	3	

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数 必修	選択	計	備考
芸術学部	造形学科	日本画4	3		3	3	
		日本画5	3		3	3	
		日本画6	3		3	3	
		日本画7	4		6	6	
		立体造形1	3		4	4	
		立体造形2	3		3	3	
		立体造形3	3		4	4	
		立体造形4	3		3	3	
		空間造形1	3		3	3	
		空間造形2	3		3	3	
		造形技法1	3		2	2	
		造形技法2	3		2	2	
		空間造形演習1	1		2	2	
		空間造形演習2	1		2	2	
		表現研究1	3		2	2	
		表現研究2	3		2	2	
		表現研究3	3		2	2	
		表現研究4	3		2	2	
		日本画演習1	4		2	2	
		日本画演習2	4		2	2	
		自由制作	4		3	3	
		美術演習1	4		2	2	
		美術演習2	4		2	2	
		環境野外彫刻	4		6	6	
		卒業制作実習	4	9		9	
	素材表現学科	素材表現学科専門教育科目					80単位以上必修
		デッサン1	1		2	2	
		デッサン2	1		2	2	
		デッサン3	2		2	2	
		デッサン4	2		2	2	
		表現基礎1	1		4	4	
		表現基礎2	1		4	4	
		表現基礎3	1		4	4	
		表現基礎4	1		4	4	
		基礎立体1	1		2	2	
		基礎立体2	2		2	2	
		基礎デザイン1	1		3	3	
		基礎デザイン2	1		3	3	
		絵画基礎1	1		3	3	

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考
				必修	選択	計	
芸術学部	素材表現学科	絵画基礎2	1		3	3	
		立体造形1	1		3	3	
		立体造形2	1		3	3	
		工芸基礎1	2		4	4	
		工芸基礎2	2		4	4	
		デザイン基礎1	2		4	4	
		デザイン基礎2	2		4	4	
		陶芸基礎1	2		3	3	
		陶芸基礎2	2		3	3	
		陶芸基礎3	2		3	3	
		陶芸基礎4	2		6	6	
		工芸	2		3	3	
		釉薬技法演習1	2		2	2	
		釉薬技法演習2	2		2	2	
		素材演習1	2		2	2	
		素材演習2	2		2	2	
		テキスタイル1	3		5	5	
		テキスタイル2	3		5	5	
		テキスタイル3	3		5	5	
		テキスタイル4	3		5	5	
		テキスタイル5	4		9	9	
		表現研究1	3		2	2	
		表現研究2	3		2	2	
		陶芸1	3		3	3	
		陶芸2	3		3	3	
		陶芸3	3		3	3	
		陶芸4	3		3	3	
		陶芸5	3		6	6	
		陶芸6	4		9	9	
		造形演習1	3		2	2	
		造形演習2	3		2	2	
		図法製図1	3		2	2	
		図法製図2	3		2	2	
		陶磁器技法論1	4		2	2	
		陶磁器技法論2	4		2	2	
		卒業制作実習	4	9		9	
	メディア表現学科	メディア造形学科専門教育科目					80単位以上必修
		映像概論	1		2	2	
		版画概論	2		2	2	

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考
				必修	選択	計	
芸術学部	メディア造形学科	デッサン1	1		3	3	
		デッサン2	1		3	3	
		基礎デザイン1	1		3	3	
		基礎デザイン2	1		3	3	
		立体構成1	1		3	3	
		立体構成2	1		3	3	
		グラフィック・デザイン基礎	1		3	3	
		映像基礎	1		3	3	
		CG基礎演習1	1		2	2	
		CG基礎演習2	1		2	2	
		工芸	1		2	2	
		立体造形	1		2	2	
		造形演習1	1		2	2	
		造形演習2	1		2	2	
		造形演習3	2		2	2	
		造形演習4	3		2	2	
		造形演習5	4		2	2	
		造形演習6	4		2	2	
		平面造形1	1		3	3	
		平面造形2	1		3	3	
		平面造形3	1		3	3	
		平面造形4	1		3	3	
		平面造形5	2		3	3	
		平面造形6	2		3	3	
		平面造形7	3		3	3	
		平面造形8	3		3	3	
		版画1	2		3	3	
		版画2	2		3	3	
		版画3	2		3	3	
		版画4	2		3	3	
		版画5	3		3	3	
		版画6	3		3	3	
		版画7	3		3	3	
		版画8	3		3	3	
		写真技法1	2		2	2	
		写真技法2	3		2	2	
		グラフィック・デザイン	2		3	3	
		メディア表現実習1	2		3	3	
		メディア表現実習2	2		3	3	

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考
				必修	選択	計	
芸術学部	メディア表現学科	メディア表現実習 3	3		3	3	
		メディア表現実習 4	3		3	3	
		メディア表現実習 5	4		3	3	
		サウンド・デザイン 1	2		3	3	
		サウンド・デザイン 2	3		3	3	
		映像実習 1	2		3	3	
		映像実習 2	2		3	3	
		映像実習 3	3		3	3	
		映像実習 4	3		3	3	
		映像実習 5	4		3	3	
		３ＤＣＧ演習 1	2		2	2	
		３ＤＣＧ演習 2	2		2	2	
		サウンドデザイン論	2		2	2	
		総合プロジェクト演習	3		2	2	
		総合プロジェクト	3		3	3	
		メディア・アート演習	3		2	2	
		メディア造形 1	4		3	3	
		メディア造形 2	4		3	3	
		メディア造形 3	4		3	3	
		映像総合研究	4		3	3	
		卒業制作実習	4	9		9	

② デザイン学部

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数 必修	選択	計	備考
デザイン学部	デザイン学部共通	基礎講義・演習科目					ビジュアルデザイン学科は、「デザイン専門英語」(留学生は「日本語」)6単位必修を含み、基礎講義・演習科目、デザイン学部専門講義科目および他学部交流科目から 46 単位以上必修 プロダクトデザイン学科は、「デザイン専門英語」(留学生は「日本語」)6単位必修を含み、基礎講義・演習科目、デザイン学部専門講義科目および他学部交流科目から 42 単位以上必修 建築学科は、「デザイン専門英語」(留学生は「日本語」)6単位必修を含み、基礎講義・演習科目、デザイン学部専門講義科目および他学部交流科目から 24 単位以上必修
		哲学	1･2･3･4		2	2	
		現代思想	1･2･3･4		2	2	
		宗教学	1･2･3･4		2	2	
		倫理と社会	1･2･3･4		2	2	
		日本文学	1･2･3･4		2	2	
		世界文学	1･2･3･4		2	2	
		民俗学	1･2･3･4		2	2	
		考古学	1･2･3･4		2	2	
		日本近現代史 1	1･2･3･4		2	2	
		日本近現代史 2	1･2･3･4		2	2	
		社会学	1･2･3･4		2	2	
		政治学	1･2･3･4		2	2	
		法学概論	1･2･3･4		2	2	
		日本国憲法	1･2･3･4		2	2	
		文化人類学	1･2･3･4		2	2	
		芸術と経済	1･2･3･4		2	2	
		芸術学 1	1･2･3･4		2	2	
		芸術学 2	1･2･3･4		2	2	
		東洋古典講座 1	1･2･3･4		2	2	
		東洋古典講座 2	1･2･3･4		2	2	
		西洋古典講座 1	1･2･3･4		2	2	
		西洋古典講座 2	1･2･3･4		2	2	
		現代日本社会論 1	1･2･3･4		2	2	
		現代日本社会論 2	1･2･3･4		2	2	
		言葉の科学	1･2･3･4		2	2	
		視覚認知論	1･2･3･4		2	2	
		科学の歴史	1･2･3･4		2	2	
		自然科学論	1･2･3･4		2	2	
		文明と環境	1･2･3･4		2	2	
		生物学	1･2･3･4		2	2	
		数学	1･2･3･4		2	2	
		マンガ文化論 1	1･2･3･4		2	2	
		マンガ文化論 2	1･2･3･4		2	2	
		情報処理基礎 1	1･2･3･4		1	1	
		情報処理基礎 2	1･2･3･4		1	1	
		進路研究	1･2･3･4		2	2	
		点字講座 1	1･2･3･4		2	2	
		点字講座 2	1･2･3･4		2	2	

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考
				必修	選択	計	
デザイン学部	デザイン学部共通	健康学 1	1･2･3･4		2	2	
		健康学 2	1･2･3･4		2	2	
		スポーツ演習 1	1･2･3･4		2	2	
		スポーツ演習 2	1･2･3･4		2	2	
		デザイン専門英語 1	1		2	2	
		デザイン専門英語 2	1		2	2	
		デザイン専門英語 3	2･3･4		2	2	
		デザイン専門英語 4	2･3･4		2	2	
		日本語 1	1		2	2	
		日本語 2	1		2	2	
		日本語 3	2･3･4		2	2	
		日本語 4	2･3･4		2	2	
		上級日本語 1	1･2･3･4		2	2	
		上級日本語 2	1･2･3･4		2	2	
		フランス語 1	1･2･3･4		2	2	
		フランス語 2	1･2･3･4		2	2	
		フランス語 3	2･3･4		2	2	
		フランス語 4	2･3･4		2	2	
		中国語 1	1･2･3･4		2	2	
		中国語 2	1･2･3･4		2	2	
		中国語 3	2･3･4		2	2	
		中国語 4	2･3･4		2	2	
		朝鮮語 1	1･2･3･4		2	2	
		朝鮮語 2	1･2･3･4		2	2	
		朝鮮語 3	2･3･4		2	2	
		朝鮮語 4	2･3･4		2	2	
		タイ語 1	1･2･3･4		2	2	
		タイ語 2	1･2･3･4		2	2	
		タイ語 3	2･3･4		2	2	
		タイ語 4	2･3･4		2	2	
		教育学概論	1･2･3･4		2	2	
		図書館概論	1･2･3･4		2	2	
		生涯学習概論	1･2･3･4		2	2	
		人権教育論	1･2･3･4		2	2	
		現代学校論	1･2･3･4		2	2	
		ＣＧ基基礎演習 1	1･2･3･4		2	2	
		国内フィールドワーク 1	1･2･3･4		2	2	
		国内フィールドワーク 2	1･2･3･4		2	2	
		海外フィールドワーク 1	1･2･3･4		2	2	

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考
				必修	選択	計	
デザイン学部	デザイン学部共通	海外フィールドワーク 2	1･2･3･4		2	2	
		写真技法演習 1	1･2･3･4		2	2	
		写真技法演習 2	1･2･3･4		2	2	
		キャリアアップ演習 1	1･2･3･4		2	2	
		キャリアアップ演習 2	1･2･3･4		2	2	
		デザイン学部専門講義科目					
		デザイン史 1	1･2･3･4		2	2	
		デザイン史 2	1･2･3･4		2	2	
		建築史 1	1･2･3･4		2	2	
		建築史 2	1･2･3･4		2	2	
		日本近代工芸史	1･2･3･4		2	2	
		カラーコーディネート演習	1･2･3･4		2	2	
		プロダクトカラー論	1･2･3･4		2	2	
		西洋家具史	1･2･3･4		2	2	
		京都の伝統美術工芸 1	2･3･4		2	2	
		京都の伝統美術工芸 2	2･3･4		2	2	
		写真史	2･3･4		2	2	
		かたちの文化論	2･3･4		2	2	
		いろの文化論	2･3･4		2	2	
		デザイン論 1	2･3･4		2	2	
		デザイン論 2	2･3･4		2	2	
		伝統建築論	2･3･4		2	2	
		現代建築論	2･3･4		2	2	
		日本家具史	2･3･4		2	2	
		ユニバーサルデザイン論	2･3･4		2	2	
		近代意匠論	2･3･4		2	2	
		インテリアデザイン論	2･3･4		2	2	
		近代空間論	2･3･4		2	2	
		印刷論 1	3･4		2	2	
		印刷論 2	3･4		2	2	
		写真論	3･4		2	2	
		色彩学	3･4		2	2	
		ランドスケープデザイン	3･4		2	2	
		まちづくりデザイン	3･4		2	2	
		視覚文化論 1	3･4		2	2	
		視覚文化論 2	3･4		2	2	
		素材論 1	3･4		2	2	
		素材論 2	3･4		2	2	
		学外実習 1	3･4		3	3	

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考
				必修	選択	計	
デザイン学部	デザイン学部共通	学外実習2	3･4		2	2	
		デザインマネージメント概論	3･4		2	2	
		デザイン法規概論	3･4		2	2	
		人間生活工学	3･4		2	2	
		インテリアファブリック概論	3･4		2	2	
		商品開発論	3･4		2	2	
		広告概論	3･4		2	2	
		プランニングと企画	4		2	2	
	ビジュアルデザイン学科	ビジュアルデザイン学科 専門教育科目					78単位以上必修
		書字演習1	1		2	2	
		書字演習2	1		2	2	
		書字論	1		2	2	
		タイポグラフィ1	1		3	3	
		タイポグラフィ2	1		3	3	
		ドローイング1	1		3	3	
		ドローイング2	1		3	3	
		画像実習1	1		3	3	
		画像実習2	1		3	3	
		デッサン1	1		3	3	
		デッサン2	1		3	3	
		デッサン3	2		3	3	
		デッサン4	2		3	3	
		イメージ表現1	1		3	3	
		イメージ表現2	1		3	3	
		イメージ表現3	2		3	3	
		空間表現1	1		3	3	
		空間表現2	1		3	3	
		描画技法1	1		3	3	
		描画技法2	1		3	3	
		描画技法3	2		3	3	
		描画技法4	2		3	3	
		作画実習1	1		3	3	
		作画実習2	1		3	3	
		シナリオ実習1	1		3	3	
		シナリオ実習2	1		3	3	
		CG演習1	2		2	2	
		CG演習2	2		2	2	
		CG演習3	2		2	2	

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考
				必修	選択	計	
デザイン学部	ビジュアルデザイン学科	ＣＧ演習４	2		2	2	
		ＣＧ演習５	3		2	2	
		ＣＧ演習６	3		2	2	
		ＣＧ演習７	3		2	2	
		ＣＧ実習１	1		3	3	
		ＣＧ実習２	1		3	3	
		ＣＧ実習３	1		3	3	
		ＣＧ実習４	1		3	3	
		工芸	2		2	2	
		基礎立体・彫塑	2		2	2	
		文字設計１	2		2	2	
		文字設計２	2		2	2	
		文字組版演習１	2		2	2	
		文字組版演習２	2		2	2	
		図像デザイン１	2		2	2	
		図像デザイン２	2		2	2	
		デジタルフォト１	2		2	2	
		デジタルフォト２	2		2	2	
		インタラクティブデザイン演習	2		2	2	
		映像表現	2		3	3	
		オンラインデザイン１	2		2	2	
		オンラインデザイン２	2		2	2	
		オンラインデザイン３	3		2	2	
		オンラインデザイン４	3		2	2	
		ゲームデザイン１	2		2	2	
		ゲームデザイン２	2		2	2	
		ゲームデザイン３	3		2	2	
		ゲームデザイン４	3		2	2	
		キャラクターデザイン１	2		2	2	
		キャラクターデザイン２	2		2	2	
		キャラクターデザイン３	3		3	3	
		キャラクターデザイン４	3		3	3	
		ムービーデザイン１	2		2	2	
		ムービーデザイン２	2		2	2	
		ムービーデザイン３	3		3	3	
		ムービーデザイン４	3		3	3	
		ＤＴＰデザイン１	2		2	2	
		ＤＴＰデザイン２	2		2	2	
		ＤＴＰデザイン３	3		2	2	

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考
				必修	選択	計	
デザイン学部	ビジュアルデザイン学科	ＤＴＰデザイン 4	3		2	2	
		コンテンツプロデュース 1	2		2	2	
		コンテンツプロデュース 2	2		2	2	
		コンテンツプロデュース 3	3		2	2	
		コンテンツプロデュース 4	3		2	2	
		グラフィックデザイン 1	3		2	2	
		グラフィックデザイン 2	3		2	2	
		グラフィックデザイン 3	3		2	2	
		グラフィックデザイン 4	3		2	2	
		グラフィックデザイン 5	3		2	2	
		グラフィックデザイン 6	3		2	2	
		プロモーションデザイン 1	3		2	2	
		プロモーションデザイン 2	3		2	2	
		プロモーションデザイン 3	3		2	2	
		プロモーションデザイン 4	3		2	2	
		広告デザイン 1	3		2	2	
		広告デザイン 2	3		2	2	
		グラフィックデザイン講座	3		2	2	
		広告総合研究	3		2	2	
		イラストレーション 1	3		2	2	
		イラストレーション 2	3		2	2	
		イラストレーション 3	3		2	2	
		イラストレーション 4	3		2	2	
		イラストレーション 5	3		2	2	
		イラストレーション 6	3		2	2	
		ビジュアルアート 1	3		2	2	
		ビジュアルアート 2	3		2	2	
		ビジュアルアート 3	3		2	2	
		ビジュアルアート 4	3		2	2	
		ビジュアルアート 5	3		2	2	
		ビジュアルアート 6	3		2	2	
		アート批評	3		2	2	
		コンテンツビジネス実習	3		3	3	
		ビジュアルプレゼンテーション 1	4		2	2	
		ビジュアルプレゼンテーション 2	4		2	2	
		デザインマネージメント 1	4		2	2	
		デザインマネージメント 2	4		2	2	
		コラボレーション 1	4		2	2	
		コラボレーション 2	4		2	2	

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数 必修	単位数 選択	単位数 計	備考
デザイン学部	ビジュアルデザイン学科	アートプロモーション 1	4		2	2	
		アートプロモーション 2	4		2	2	
		メディアプレゼンテーション 1	4		2	2	
		メディアプレゼンテーション 2	4		2	2	
		コンテンツ企画 1	4		3	3	
		コンテンツ企画 2	4		3	3	
		コンテンツ企画 3	4		3	3	
		コンテンツ企画 4	4		3	3	
		インターンシップ 1	4		3	3	
		インターンシップ 2	4		3	3	
		インターンシップ 3	4		2	2	
		卒業論文	4		2	2	
		卒業制作	4	4		4	
	プロダクトデザイン学科	プロダクトデザイン学科 専門教育科目					82 単位以上必修
		基礎デザイン 1	1	2		2	
		基礎デザイン 2	1	2		2	
		基礎デザイン 3	2	3		3	
		京都の伝統演習 1	1	1		1	
		京都の伝統演習 2	1	1		1	
		絵画基礎	1	3		3	
		立体構成	1	3		3	
		素材造形 1	1	3		3	
		素材造形 2	1	3		3	
		素材造形 3	2		2	2	
		素材造形 4	2		2	2	
		CG演習 1	1	2		2	
		CG演習 2	2		2	2	
		CG演習 3	2		2	2	
		CG演習 4	3		2	2	
		CG演習 5	3		2	2	
		工芸 1	1		2	2	
		工芸 2	1		2	2	
		立体造形 1	2	3		3	
		立体造形 2	2	3		3	
		平面造形 1	2	2		2	
		平面造形 2	2	2		2	
		コンセプト企画実習	2	3		3	
		写真演習	2		2	2	

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考
				必修	選択	計	
デザイン学部	プロダクトデザイン学科	工作演習 1	2		2	2	
		工作演習 2	2		2	2	
		プロダクトデザイン 1	3		3	3	
		プロダクトデザイン 2	3		3	3	
		プロダクトデザイン 3	4		3	3	
		プロダクトデザイン 4	4		3	3	
		エディトリアルデザイン 1	3		3	3	
		エディトリアルデザイン 2	4		3	3	
		地域環境デザイン 1	3		3	3	
		地域環境デザイン 2	4		3	3	
		パブリックデザイン 1	3		3	3	
		パブリックデザイン 2	3		3	3	
		パブリックデザイン 3	4		3	3	
		パブリックデザイン 4	4		3	3	
		プロダクトコミュニケーションデザイン 1	3		3	3	
		プロダクトコミュニケーションデザイン 2	3		3	3	
		プロダクトコミュニケーションデザイン 3	3		3	3	
		プロダクトコミュニケーションデザイン 4	3		3	3	
		プロダクトコミュニケーションデザイン 5	4		3	3	
		プロダクトコミュニケーションデザイン 6	4		3	3	
		プロダクトコミュニケーションデザイン 7	4		3	3	
		家具デザイン	3		3	3	
		トランスポーターデザイン 1	3		3	3	
		トランスポーターデザイン 2	4		3	3	
		PCD演習 1	3		2	2	
		PCD演習 2	3		2	2	
		PCD演習 3	4		2	2	
		PCD演習 4	4		2	2	
		インテリアプロダクトデザイン 1	3		3	3	
		インテリアプロダクトデザイン 2	3		3	3	
		インテリアプロダクトデザイン 3	3		3	3	
		インテリアプロダクトデザイン 4	3		3	3	
		インテリアプロダクトデザイン 5	3		3	3	
		インテリアプロダクトデザイン 6	4		3	3	
		インテリアプロダクトデザイン 7	4		3	3	
		インテリアプロダクトデザイン 8	4		3	3	
		インテリアプロダクトデザイン 9	4		3	3	
		インテリアデザイン 1	3		3	3	
		インテリアデザイン 2	3		3	3	

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考
				必修	選択	計	
デザイン学部	プロダクトデザイン学科	インテリアデザイン 3	4		3	3	
		インテリアデザイン 4	4		3	3	
		スペースデザイン 1	3		3	3	
		スペースデザイン 2	3		3	3	
		スペースデザイン 3	4		3	3	
		スペースデザイン 4	4		3	3	
		ライティングデザイン 1	3		3	3	
		ライティングデザイン 2	3		3	3	
		ファニチュアデザイン 1	3		3	3	
		ファニチュアデザイン 2	4		3	3	
		ＩＰＤ演習 1	3		2	2	
		ＩＰＤ演習 2	3		2	2	
		ＩＰＤ演習 3	3		2	2	
		ＩＰＤ演習 4	4		2	2	
		卒業制作・卒業論文	4	4		4	
	建築学科	建築学科専門教育科目					90 単位以上必修
		建築概論	1	2		2	
		身体空間論	1	2		2	
		身体空間演習	4		2	2	
		家具・衣装設計	1	3		3	
		コンピューター演習 1	1	2		2	
		コンピューター演習 2	1	2		2	
		コンピューター演習 3	2	2		2	
		コンピューター演習 4	2	2		2	
		製図絵画技法演習	1		2	2	
		内部空間論	1	2		2	
		インテリア表現演習	3		2	2	
		インテリア設計	1	3		3	
		工作技法演習	1		2	2	
		日本建築史 1	1		2	2	
		日本建築史 2	1		2	2	
		建築計画	1		2	2	
		一般構造	1		2	2	
		測量演習	1		2	2	
		フィールドワーク 1	1		2	2	
		フィールドワーク 2	2		2	2	
		まちづくり論	2	2		2	
		まちづくり演習	2		2	2	
		建築設計基礎 1	2	3		3	

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考
				必修	選択	計	
デザイン学部	建築学科	建築設計基礎2	2	3		3	
		仮想空間論	2	2		2	
		仮想空間演習	2		2	2	
		西洋建築史1	2		2	2	
		西洋建築史2	2		2	2	
		エコロジー空間論	2	2		2	
		建築材料演習	2		2	2	
		商業プロデュース演習	3･4		2	2	
		積算演習	4		2	2	
		空間の思想1	3	2		2	
		空間の思想2	3	2		2	
		空間の思想3	4	2		2	
		空間の思想4	4	2		2	
		設計1	3	6		6	
		設計2	3	6		6	
		設計3	4	6		6	
		設計4	4	6		6	
		現代建築批評1	3		2	2	
		現代建築批評2	3		2	2	
		伝統建築工法	2		2	2	
		建築構造	3		2	2	
		環境工学	3		2	2	
		設備工学	3		2	2	
		建築力学	3		2	2	
		材料実験	3		2	2	
		施工演習	3		2	2	
		建築実習1	3		2	2	
		建築実習2	4		2	2	
		景観デザイン	4		2	2	
		建築法規	4		2	2	
		法規・構造演習	4		2	2	
		住環境・商業空間演習	4		2	2	
		卒業制作	4	4		4	

③ マンガ学部

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数 必修	単位数 選択	単位数 計	備考
マンガ学部	マンガ学部共通	基礎講義・演習科目					「マンガ専門英語」(留学生は「日本語」)6 単位必修を含み、基礎講義・演習科目、マンガ学部専門講義科目および他学部交流科目の中から 40 単位以上必修
		哲学	1･2･3･4		2	2	
		現代思想	1･2･3･4		2	2	
		宗教学	1･2･3･4		2	2	
		倫理と社会	1･2･3･4		2	2	
		日本文学	1･2･3･4		2	2	
		世界文学	1･2･3･4		2	2	
		民俗学	1･2･3･4		2	2	
		考古学	1･2･3･4		2	2	
		日本近現代史 1	1･2･3･4		2	2	
		日本近現代史 2	1･2･3･4		2	2	
		社会学	1･2･3･4		2	2	
		政治学	1･2･3･4		2	2	
		法学概論	1･2･3･4		2	2	
		日本国憲法	1･2･3･4		2	2	
		文化人類学	1･2･3･4		2	2	
		芸術と経済	1･2･3･4		2	2	
		芸術学 1	1･2･3･4		2	2	
		芸術学 2	1･2･3･4		2	2	
		東洋古典講座 1	1･2･3･4		2	2	
		東洋古典講座 2	1･2･3･4		2	2	
		西洋古典講座 1	1･2･3･4		2	2	
		西洋古典講座 2	1･2･3･4		2	2	
		現代日本社会論 1	1･2･3･4		2	2	
		現代日本社会論 2	1･2･3･4		2	2	
		言葉の科学	1･2･3･4		2	2	
		視覚認知論	1･2･3･4		2	2	
		科学の歴史	1･2･3･4		2	2	
		自然科学論	1･2･3･4		2	2	
		文明と環境	1･2･3･4		2	2	
		生物学	1･2･3･4		2	2	
		数学	1･2･3･4		2	2	
		マンガ文化論 1	1･2･3･4		2	2	
		マンガ文化論 2	1･2･3･4		2	2	
		情報処理基礎 1	1･2･3･4		1	1	
		情報処理基礎 2	1･2･3･4		1	1	
		進路研究	1･2･3･4		2	2	
		点字講座 1	1･2･3･4		2	2	
		点字講座 2	1･2･3･4		2	2	

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考
				必修	選択	計	
マンガ学部	マンガ学部共通	健康学 1	1･2･3･4		2	2	
		健康学 2	1･2･3･4		2	2	
		スポーツ演習 1	1･2･3･4		2	2	
		スポーツ演習 2	1･2･3･4		2	2	
		マンガ専門英語 1	1		2	2	
		マンガ専門英語 2	1		2	2	
		マンガ専門英語 3	2･3･4		2	2	
		マンガ専門英語 4	2･3･4		2	2	
		日本語 1	1		2	2	
		日本語 2	1		2	2	
		日本語 3	2･3･4		2	2	
		日本語 4	2･3･4		2	2	
		上級日本語 1	1･2･3･4		2	2	
		上級日本語 2	1･2･3･4		2	2	
		フランス語 1	1･2･3･4		2	2	
		フランス語 2	1･2･3･4		2	2	
		フランス語 3	2･3･4		2	2	
		フランス語 4	2･3･4		2	2	
		中国語 1	1･2･3･4		2	2	
		中国語 2	1･2･3･4		2	2	
		中国語 3	2･3･4		2	2	
		中国語 4	2･3･4		2	2	
		朝鮮語 1	1･2･3･4		2	2	
		朝鮮語 2	1･2･3･4		2	2	
		朝鮮語 3	2･3･4		2	2	
		朝鮮語 4	2･3･4		2	2	
		タイ語 1	1･2･3･4		2	2	
		タイ語 2	1･2･3･4		2	2	
		タイ語 3	2･3･4		2	2	
		タイ語 4	2･3･4		2	2	
		教育学概論	1･2･3･4		2	2	
		図書館概論	1･2･3･4		2	2	
		生涯学習概論	1･2･3･4		2	2	
		人権教育論	1･2･3･4		2	2	
		現代学校論	1･2･3･4		2	2	
		国内フィールドワーク 1	1･2･3･4		2	2	
		国内フィールドワーク 2	1･2･3･4		2	2	
		海外フィールドワーク 1	1･2･3･4		2	2	
		海外フィールドワーク 2	1･2･3･4		2	2	

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数 必修	選択	計	備考
マンガ学部	マンガ学部共通	写真技法演習 1	1･2･3･4		2	2	
		写真技法演習 2	1･2･3･4		2	2	
		キャリアアップ演習 1	1･2･3･4		2	2	
		キャリアアップ演習 2	1･2･3･4		2	2	
		マンガ学部専門講義科目					
		雑誌プロデュース論	1･2･3･4		2	2	
		キャラクター造形論 1	1･2･3･4		2	2	
		キャラクター造形論 2	1･2･3･4		2	2	
		風刺画論 1	1･2･3･4		2	2	
		風刺画論 2	1･2･3･4		2	2	
		脚本概論 1	1･2･3･4		2	2	
		脚本概論 2	1･2･3･4		2	2	
		マンガ史概論 1	1･2･3･4		2	2	
		マンガ史概論 2	1･2･3･4		2	2	
		編集概論 1	1･2･3･4		2	2	
		編集概論 2	1･2･3･4		2	2	
		現代マンガ論 1	1･2･3･4		2	2	
		現代マンガ論 2	1･2･3･4		2	2	
		日本アニメーション史	1･2･3･4		2	2	
		海外アニメーション史	1･2･3･4		2	2	
		アニメーション作品作家研究 1	1･2･3･4		2	2	
		アニメーション作品作家研究 2	1･2･3･4		2	2	
		映像史 1	1･2･3･4		2	2	
		映像史 2	1･2･3･4		2	2	
		マーケティング論 1	2･3･4		2	2	
		マーケティング論 2	2･3･4		2	2	
		比較マンガ論 1	2･3･4		2	2	
		比較マンガ論 2	2･3･4		2	2	
		企画演習 1	2･3･4		2	2	
		企画演習 2	2･3･4		2	2	
		新聞研究 1	2･3･4		2	2	
		新聞研究 2	2･3･4		2	2	
		映画論 1	2･3･4		2	2	
		映画論 2	2･3･4		2	2	
		マンガ産業論	2･3･4		2	2	
		メディア情報研究 1	3･4		2	2	
		メディア情報研究 2	3･4		2	2	
		シナリオ論 1	3･4		2	2	
		シナリオ論 2	3･4		2	2	

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数 必修	選択	計	備考
マンガ学部	マンガ学部共通	作家研究1	3･4		2	2	
		作家研究2	3･4		2	2	
		作品研究1	3･4		2	2	
		作品研究2	3･4		2	2	
	マンガ学科	マンガ学科専門教育科目					84単位以上必修
		デッサン1	1	3		3	
		デッサン2	1	3		3	
		デッサン3	1		2	2	
		デッサン4	1		2	2	
		絵画技法1	1	3		3	
		絵画技法2	1	3		3	
		デザイン1	1	3		3	
		デザイン2	1	3		3	
		CG基礎演習1	1･2		2	2	
		CG基礎演習2	1･2		2	2	
		クロッキー基礎1	1		2	2	
		クロッキー基礎2	1		2	2	
		制作実習1	2	3		3	
		制作実習2	2	3		3	
		制作実習3	3	3		3	
		制作実習4	3	3		3	
		制作実習5	4	3		3	
		風刺画1	2		3	3	
		風刺画2	2		3	3	
		クロッキー1	2		3	3	
		クロッキー2	2		3	3	
		脚本実習1	2		3	3	
		脚本実習2	2		3	3	
		脚本実習3	3		3	3	
		脚本実習4	3		3	3	
		表現技法1	2		3	3	
		表現技法2	2		3	3	
		表現技法3	3		3	3	
		表現技法4	3		3	3	
		CG演習1	2		2	2	
		CG演習2	2		2	2	
		CG演習3	2		2	2	
		CG演習4	2		2	2	
		工芸	2		2	2	

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数 必修	単位数 選択	単位数 計	備考
マンガ学部	マンガ学科	基礎立体・彫塑	2		2	2	
		カートゥーン 1	3		3	3	
		カートゥーン 2	3		3	3	
		カリカチュア 1	3		3	3	
		カリカチュア 2	3		3	3	
		カートゥーン技法演習 1	3		2	2	
		カートゥーン技法演習 2	3		2	2	
		現代メディア文化論 1	3		2	2	
		現代メディア文化論 2	3		2	2	
		現代メディア文化論演習 1	3		2	2	
		現代メディア文化論演習 2	3		2	2	
		アニメーション演習 1	3		2	2	
		アニメーション演習 2	3		2	2	
		マンガ制作実務演習	3		2	2	
		マンガ制作実務研修	3		2	2	
		自由制作	4	3		3	
		批評実習	4	3		3	
		卒業制作実習	4	9		9	
	マンガプロデュース学科	マンガプロデュース学科 専門教育科目					84 単位以上必修
		編集技術演習 1	1	2		2	
		編集技術演習 2	1	2		2	
		原作概論 1	1	2		2	
		原作概論 2	1	2		2	
		取材演習 1	1	2		2	
		取材演習 2	1	2		2	
		ネームドリル実習 1	1	3		3	
		ネームドリル実習 2	1	3		3	
		デッサン 1	1		2	2	
		デッサン 2	1		2	2	
		CG基礎演習 1	1		2	2	
		CG基礎演習 2	1		2	2	
		クロッキー基礎 1	1		2	2	
		クロッキー基礎 2	1		2	2	
		原作実習 1	2	3		3	
		原作実習 2	2	3		3	
		原作実習 3	3	3		3	
		原作実習 4	3	3		3	
		編集実習 1	2	3		3	

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数 必修	選択	計	備考
マンガ学部	マンガプロデュース学科	編集実習 2	2	3		3	
		編集実習 3	3	3		3	
		編集実習 4	3	3		3	
		評論概論 1	2	2		2	
		評論概論 2	2	2		2	
		評論演習 1	2	2		2	
		評論演習 2	2	2		2	
		評論演習 3	3	2		2	
		評論演習 4	3	2		2	
		CG演習 1	2		2	2	
		CG演習 2	2		2	2	
		アニメーション演習 1	2		2	2	
		アニメーション演習 2	2		2	2	
		演劇論 1	3	2		2	
		演劇論 2	3	2		2	
		マンガプロデュース制作実務演習	3		2	2	
		マンガプロデュース制作実務研修	3		2	2	
		制作実習 1	4	3		3	
		制作実習 2	4	3		3	
		自由制作 1	4	3		3	
		自由制作 2	4	3		3	
		卒業制作・卒業論文	4	4		4	
	アニメーション学科	アニメーション学科 専門教育科目					84単位以上必修
		アニメーション原理演習 1	1	2		2	
		アニメーション原理演習 2	1	2		2	
		アニメーションCG演習 1	1	2		2	
		アニメーションCG演習 2	1	2		2	
		アニメーションCG演習 3	2		2	2	
		アニメーションCG演習 4	2		2	2	
		アニメーション造形基礎実習 1	1	3		3	
		アニメーション造形基礎実習 2	1	3		3	
		アニメーション原論 1	1	2		2	
		アニメーション原論 2	1	2		2	
		アニメーション・プロデュース演習 1	2・3		2	2	
		アニメーション・プロデュース演習 2	2・3		2	2	
		作画演習 1	1		2	2	
		作画演習 2	1		2	2	
		作画演習 3	2		2	2	

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考
				必修	選択	計	
マンガ学部	アニメーション学科	作画演習 4	2		2	2	
		作画演習 5	3		2	2	
		作画演習 6	3		2	2	
		アニメーションメディア論	1		2	2	
		アニメーション産業論	1		2	2	
		アニメーション演出論 1	2	2		2	
		アニメーション演出論 2	2	2		2	
		アニメーション分析演習 1	2	2		2	
		アニメーション分析演習 2	2	2		2	
		アニメーション造形表現実習 1	2		3	3	
		アニメーション造形表現実習 2	2		3	3	
		ＣＧ理論 1	3		2	2	
		ＣＧ理論 2	3		2	2	
		モデリング実習 1	2・3		3	3	
		モデリング実習 2	2・3		3	3	
		ｽﾄｯﾌﾟﾓｰｼｮﾝｱﾆﾒｰｼｮﾝ実習 1	2		3	3	
		ｽﾄｯﾌﾟﾓｰｼｮﾝｱﾆﾒｰｼｮﾝ実習 2	2		3	3	
		音響実習 1	4	3		3	
		音響実習 2	4	3		3	
		アニメーションＣＧ実習 1	3	3		3	
		アニメーションＣＧ実習 2	3	3		3	
		アニメーション創作演習 1	3	2		2	
		アニメーション創作演習 2	3	2		2	
		アニメーション造形実践実習 1	3		3	3	
		アニメーション造形実践実習 2	3		3	3	
		自由制作	4	9		9	
		卒業制作実習	4	9		9	
		卒業制作	4	4		4	

④ 人文学部

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数 必修	単位数 選択	単位数 計	備考
人文学部	総合人文学科	基礎教育科目					○ 必修科目 12 単位を含め、36 単位以上を基礎教育科目の中から選択履修 ○ 所属するコースが指定する科目から 24 単位および他コース専門科目から 12 単位を含め、40 単位以上を基礎教育科目および専門教育科目の中から選択履修 ○ コース演習科目の必修 6 単位、表現技法・ワークショップ科目と地域研究科目の選択必修 6 単位を含めた 20 単位以上を、専門教育科目のうちコース演習科目、表現技法・ワークショップ科目および地域研究科目の中から選択履修 ○ 28 単位以上を基礎教育科目、専門教育科目および他学部交流科目の中から自由選択単位として選択履修
		【教養科目】					
		考古学	1･2･3･4		2	2	
		民俗学Ⅰ	1･2･3･4		2	2	
		民俗学Ⅱ	1･2･3･4		2	2	
		地理学Ⅰ	1･2･3･4		2	2	
		地理学Ⅱ	1･2･3･4		2	2	
		哲学	1･2･3･4		2	2	
		宗教学	1･2･3･4		2	2	
		倫理学	1･2･3･4		2	2	
		日本文学	1･2･3･4		2	2	
		世界文学	1･2･3･4		2	2	
		心理学Ⅰ	1･2･3･4		2	2	
		心理学Ⅱ	1･2･3･4		2	2	
		芸術学Ⅰ	1･2･3･4		2	2	
		芸術学Ⅱ	1･2･3･4		2	2	
		総合講座	1･2･3･4		2	2	
		キャリアデザインⅠ	1･2･3･4		2	2	
		キャリアデザインⅡ	1･2･3･4		2	2	
		キャリアデザインⅢ	2･3･4		2	2	
		キャリアデザインⅣ	2･3･4		2	2	
		教育と社会	1･2･3･4		2	2	
		法学概論	1･2･3･4		2	2	
		日本国憲法	1･2･3･4		2	2	
		社会学Ⅰ	1･2･3･4		2	2	
		社会学Ⅱ	1･2･3･4		2	2	
		経済学Ⅰ	1･2･3･4		2	2	
		経済学Ⅱ	1･2･3･4		2	2	
		政治学概論	1･2･3･4		2	2	
		国際政治学	1･2･3･4		2	2	
		文化人類学	1･2･3･4		2	2	
		障害者理解	1･2･3･4		2	2	
		生物学Ⅰ	1･2･3･4		2	2	
		生物学Ⅱ	1･2･3･4		2	2	
		科学史	1･2･3･4		2	2	
		環境と文明	1･2･3･4		2	2	
		生命科学と倫理	1･2･3･4		2	2	
		自然科学概論	1･2･3･4		2	2	
		数学	1･2･3･4		2	2	

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数 必修	選択	計	備考
人文学部	総合人文学科	論理学	1･2･3･4		2	2	
		会計学	1･2･3･4		2	2	
		経営学	1･2･3･4		2	2	
		生涯学習概論Ⅰ	1･2･3･4		2	2	
		生涯学習概論Ⅱ	1･2･3･4		2	2	
		ボランティア論	1･2･3･4		2	2	
		日本史	1･2･3･4		2	2	
		西洋史	1･2･3･4		2	2	
		東洋史	1･2･3･4		2	2	
		教育学概論	1･2･3･4		2	2	
		図書館概論	1･2･3･4		2	2	
		健康学Ⅰ	1･2･3･4		2	2	
		健康学Ⅱ	1･2･3･4		2	2	
		スポーツ実習Ⅰ	1･2･3･4		1	1	
		スポーツ実習Ⅱ	1･2･3･4		1	1	
		身体運動文化実習	1･2･3･4		1	1	
		【語学科目】					「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」か「Oral Communication Ⅰ」「Oral Communication Ⅱ」「Grammar and Vocabulary Ⅰ」「Grammar and Vocabulary Ⅱ」のいずれかを4 単位必修(留学生は「日本語Ⅰ」「日本語Ⅱ」4 単位必修)を含め、【語学科目】の中から8単位必修
		英語Ⅰ	1		2	2	
		英語Ⅱ	1		2	2	
		Oral Communication Ⅰ	1		1	1	
		Oral Communication Ⅱ	1		1	1	
		Grammar and Vocabulary Ⅰ	1		1	1	
		Grammar and Vocabulary Ⅱ	1		1	1	
		Oral Presentation Ⅰ	2		1	1	
		Oral Presentation Ⅱ	2		1	1	
		Writing and Vocabulary Ⅰ	2		1	1	
		Writing and Vocabulary Ⅱ	2		1	1	
		日本語Ⅰ	1		2	2	
		日本語Ⅱ	1		2	2	
		日本語Ⅲ	2･3･4		2	2	
		日本語Ⅳ	2･3･4		2	2	
		フランス語Ⅰ	1･2･3･4		2	2	
		フランス語Ⅱ	1･2･3･4		2	2	
		フランス語Ⅲ	2･3･4		2	2	
		フランス語Ⅳ	2･3･4		2	2	
		中国語Ⅰ	1･2･3･4		2	2	
		中国語Ⅱ	1･2･3･4		2	2	
		中国語Ⅲ	2･3･4		2	2	
		中国語Ⅳ	2･3･4		2	2	

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数 必修	選択	計	備考
人文学部	総合人文学科	朝鮮語Ⅰ	1･2･3･4		2	2	
		朝鮮語Ⅱ	1･2･3･4		2	2	
		朝鮮語Ⅲ	2･3･4		2	2	
		朝鮮語Ⅳ	2･3･4		2	2	
		タイ語Ⅰ	1･2･3･4		2	2	
		タイ語Ⅱ	1･2･3･4		2	2	
		タイ語Ⅲ	2･3･4		2	2	
		タイ語Ⅳ	2･3･4		2	2	
		ドイツ語Ⅰ	1･2･3･4		2	2	
		ドイツ語Ⅱ	1･2･3･4		2	2	
		ドイツ語Ⅲ	2･3･4		2	2	
		ドイツ語Ⅳ	2･3･4		2	2	
		スペイン語Ⅰ	1･2･3･4		2	2	
		スペイン語Ⅱ	1･2･3･4		2	2	
		スペイン語Ⅲ	2･3･4		2	2	
		スペイン語Ⅳ	2･3･4		2	2	
		【情報基礎科目】					
		情報ネットワーク論	1･2･3･4		2	2	
		情報メディアと法律	1･2･3･4		2	2	
		情報と倫理	1･2･3･4		2	2	
		メディア･リテラシー論	1･2･3･4		2	2	
		【情報リテラシー科目】					
		情報リテラシーⅠ	1		1	1	
		情報リテラシーⅡ	1		1	1	
		メディア･システム設計Ⅰ	1･2･3･4		1	1	
		メディア･システム設計Ⅱ	1･2･3･4		1	1	
		メディア･データ編集Ⅰ	1･2･3･4		1	1	
		メディア･データ編集Ⅱ	1･2･3･4		1	1	
		【大学入学科目】					
		大学ナビⅠ	1	2		2	
		大学ナビⅡ	1	2		2	
		初年次演習Ⅰ	1	2		2	
		初年次演習Ⅱ	1	2		2	
		日本語リテラシーⅠ	1		3	3	
		日本語リテラシーⅡ	1		3	3	
		専門教育科目					
		コース専門科目					
		【現代文化表現コース】					
		美学概論	1･2･3･4		2	2	

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考
				必修	選択	計	
人文学部	総合人文学科	文化社会学概論	1･2･3･4		2	2	
		プロジェクト・プランニング	1･2･3･4		2	2	
		デザイン史	2･3･4		2	2	
		映画芸術史	2･3･4		2	2	
		ポピュラー・ミュージック史	2･3･4		2	2	
		西洋美術史	2･3･4		2	2	
		グループワーク概論	2･3･4		2	2	
		メディア編集論	2･3･4		2	2	
		サブカルチャー論	2･3･4		2	2	
		サウンドスケープ論	2･3･4		2	2	
		身体表現論	2･3･4		2	2	
		現代芸術論	2･3･4		2	2	
		現代文学論	2･3･4		2	2	
		建築文化論	2･3･4		2	2	
		コンテンツ・プロデュース論	2･3･4		2	2	
		日本映画論	2･3･4		2	2	
		ファッション論	2･3･4		2	2	
		映画批評論	2･3･4		2	2	
		空間デザイン論	2･3･4		2	2	
		音環境デザイン論	2･3･4		2	2	
		情報メディア論	2･3･4		2	2	
		舞踊史	2･3･4		2	2	
		マンガ文化論	2･3･4		2	2	
		アニメ文化論	2･3･4		2	2	
		舞台芸術論	2･3･4		2	2	
		「性」の社会・文化史	2･3･4		2	2	
		【国際コミュニケーションコース】					
		英語音声学Ⅰ	2･3･4		2	2	
		英語音声学Ⅱ	2･3･4		2	2	
		英米文学史	2･3･4		2	2	
		英語圏文学Ⅰ	1･2･3･4		2	2	
		英語圏文学Ⅱ	2･3･4		2	2	
		文化心理学	2･3･4		2	2	
		英語圏文化論Ⅰ	1･2･3･4		2	2	
		英語圏文化論Ⅱ	2･3･4		2	2	
		異文化間コミュニケーション	2･3･4		2	2	
		言語学Ⅰ	2･3･4		2	2	
		言語学Ⅱ	2･3･4		2	2	

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考
				必修	選択	計	
人文学部	総合人文学科	地球市民論	1･2･3･4		2	2	
		国際社会論	2･3･4		2	2	
		人間の安全保障	2･3･4		2	2	
		Education and Society	2･3･4		2	2	
		Marginalized Voices	2･3･4		2	2	
		Intensive Reading Ⅰ	2･3･4		1	1	
		Intensive Reading Ⅱ	2･3･4		1	1	
		Advanced Oral Skills Ⅰ	3･4		1	1	
		Advanced Oral Skills Ⅱ	3･4		1	1	
		Academic Writing Ⅰ	3･4		1	1	
		Academic Writing Ⅱ	3･4		1	1	
		Academic Reading Ⅰ	3･4		1	1	
		Academic Reading Ⅱ	3･4		1	1	
		Academic Skills Ⅰ	4		1	1	
		Academic Skills Ⅱ	4		1	1	
		English Workshop Ⅰ	1･2･3･4		1	1	
		English Workshop Ⅱ	2･3･4		1	1	
		【日本・アジア文化コース】					
		京都の自然と景観	2･3･4		2	2	
		アジアの宗教	2･3･4		2	2	
		アジアの歴史と思想	2･3･4		2	2	
		日本の民俗文化	2･3･4		2	2	
		アジアの民族芸能	2･3･4		2	2	
		現代アジアの比較文化論	2･3･4		2	2	
		日本文化史概論	2･3･4		2	2	
		日本文学史	2･3･4		2	2	
		日本美術史	2･3･4		2	2	
		アジア美術史	2･3･4		2	2	
		日本の歴史と芸能	2･3･4		2	2	
		アジア交流史	2･3･4		2	2	
		伝統文化総合講座	1･2･3･4		2	2	
		口承文化の歴史	2･3･4		2	2	
		比較神話学	2･3･4		2	2	
		南島文化論	2･3･4		2	2	
		うたの文化論	1･2･3･4		2	2	
		都市伝説研究	2･3･4		2	2	
		説話・伝承史	1･2･3･4		2	2	
		絵画とものがたり	2･3･4		2	2	
		日本語学	2･3･4		2	2	

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考
				必修	選択	計	
人文学部	総合人文学科	日本語教授法	2･3･4		2	2	
		日本古典文学	2･3･4		2	2	
		くずし字講読	2･3･4		2	2	
		近代文学講読	2･3･4		2	2	
		【環境未来コース】					
		自然教育論	2･3･4		2	2	
		公害史	1･2･3･4		2	2	
		環境教育論	2･3･4		2	2	
		環境思想論	3･4		2	2	
		南北問題	2･3･4		2	2	
		エネルギーと環境	2･3･4		2	2	
		環境ビジネス	2･3･4		2	2	
		環境マネジメント論 Ⅰ	2･3･4		2	2	
		環境マネジメント論 Ⅱ	2･3･4		2	2	
		森と水の環境学	2･3･4		2	2	
		環境デザイン論	1･2･3･4		2	2	
		製品環境評価	2･3･4		2	2	
		環境政策論	2･3･4		2	2	
		地域環境論	2･3･4		2	2	
		環境社会学	2･3･4		2	2	
		開発教育論	2･3･4		2	2	
		生活環境学	1･2･3･4		2	2	
		有機農業論	2･3･4		2	2	
		環境経済学	2･3･4		2	2	
		環境法	2･3･4		2	2	
		生態学	2･3･4		2	2	
		まちづくり論	2･3･4		2	2	
		環境教育プログラム・デザイン	2･3･4		2	2	
		環境教育ワークショップ	2･3･4		2	2	
		環境教育実習	2･3･4		2	2	
		環境ＮＧＯ論	2･3･4		2	2	
		【現代社会と人間コース】					
		現代社会と歴史認識 Ⅰ	2･3･4		2	2	
		現代社会と歴史認識 Ⅱ	2･3･4		2	2	
		日本思想史	2･3･4		2	2	
		日本社会の構造	2･3･4		2	2	
		ライフスタイル論	2･3･4		2	2	
		食と人間	2･3･4		2	2	
		人権教育論	2･3･4		2	2	

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考
				必修	選択	計	
人文学部	総合人文学科	多文化教育論	2·3·4		2	2	
		子どもの社会史	2·3·4		2	2	
		子ども支援論Ⅰ	2·3·4		2	2	
		子ども支援論Ⅱ	2·3·4		2	2	
		メディア·コミュニケーション論	2·3·4		2	2	
		メディア文化論	1·2·3·4		2	2	
		スポーツと時代	2·3·4		2	2	
		スポーツと社会	1·2·3·4		2	2	
		現代社会と哲学	2·3·4		2	2	
		現代社会と病理	2·3·4		2	2	
		高齢化社会論	2·3·4		2	2	
		ジェンダーと社会	2·3·4		2	2	
		医療と社会	2·3·4		2	2	
		家族と社会	2·3·4		2	2	
		社会教育論	2·3·4		2	2	
		現代社会論	2·3·4		2	2	
		こころの時代と社会	1·2·3·4		2	2	
		こころと思想	2·3·4		2	2	
		メディアと政治	2·3·4		2	2	
		ジャーナリズム論	2·3·4		2	2	
		現代学校論	2·3·4		2	2	
		コース演習					
		コース演習Ⅰ	2		2	2	
		コース演習Ⅱ	2		2	2	
		コース演習Ⅲ	3		2	2	
		コース演習Ⅳ	3		2	2	
		プロジェクト演習					
		プロジェクト演習Ⅰ	2		4	4	
		プロジェクト演習Ⅱ	2		4	4	
		プロジェクト演習Ⅲ	3		4	4	
		プロジェクト演習Ⅳ	3		4	4	
		卒業プロジェクト					
		卒業ジェクトⅠ	4	3		3	
		卒業ジェクトⅡ	4	3		3	
		表現技法・ワークショップ科目					
		【講義科目】					
		編集論Ⅰ	2·3·4		2	2	
		編集論Ⅱ	2·3·4		2	2	
		音楽とメディアⅠ	2·3·4		2	2	

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数 必修	選択	計	備考
人文学部	総合人文学科	音楽とメディアⅡ	2･3･4		2	2	
		スポーツとメディア	2･3･4		2	2	
		作家･制作者による作品論Ⅰ	2･3･4		2	2	
		作家･制作者による作品論Ⅱ	2･3･4		2	2	
		作家･制作者による作品論Ⅲ	2･3･4		2	2	
		作家･制作者による作品論Ⅳ	2･3･4		2	2	
		【表現技法科目】					
		プレゼンテーション技法	1･2･3･4		2	2	
		写真技法	1･2･3･4		2	2	
		視聴覚記録の技法	1･2･3･4		2	2	
		【ワークショップ科目】					
		クリエイティブライティングⅠ	2･3･4		2	2	
		クリエイティブライティングⅡ	2･3･4		2	2	
		ドキュメンタリー制作Ⅰ	2･3･4		2	2	
		ドキュメンタリー制作Ⅱ	2･3･4		2	2	
		ノンフィクション・ルポルタージュⅠ	2･3･4		2	2	
		ノンフィクション・ルポルタージュⅡ	2･3･4		2	2	
		シナリオ制作Ⅰ	2･3･4		2	2	
		シナリオ制作Ⅱ	2･3･4		2	2	
		編集実践Ⅰ	2･3･4		2	2	
		編集実践Ⅱ	2･3･4		2	2	
		広告表現Ⅰ	2･3･4		2	2	
		広告表現Ⅱ	2･3･4		2	2	
		写真表現	2･3･4		2	2	
		図書館リテラシー	2･3･4		2	2	
		図書館文化演習Ⅰ	2･3･4		2	2	
		図書館文化演習Ⅱ	3･4		2	2	
		図書館文化演習Ⅲ	3･4		2	2	
		点字講座Ⅰ	2･3･4		2	2	
		点字講座Ⅱ	2･3･4		2	2	
		伝統楽器演習	2･3･4		2	2	
		書道	2･3･4		2	2	
		農的くらしⅠ	2･3･4		2	2	
		農的くらしⅡ	2･3･4		2	2	
		地域研究科目					
		【講義科目】					
		社会統計学	1･2･3･4		2	2	
		社会調査法Ⅰ	1･2･3･4		2	2	
		社会調査法Ⅱ	1･2･3･4		2	2	

学部	学科	授業科目	配当年次	単位数			備考
				必修	選択	計	
人文学部	総合人文学科	社会調査特論	1･2･3･4		2	2	
		社会調査技法Ⅰ	1･2･3･4		2	2	
		社会調査技法Ⅱ	1･2･3･4		2	2	
		京都地域学	1･2･3･4		2	2	
		京都の産業	1･2･3･4		2	2	
		京都の暮らしと祭礼	1･2･3･4		2	2	
		京都のまちづくり	1･2･3･4		2	2	
		日本の自然と風土	1･2･3･4		2	2	
		地域研究Ⅰ	1･2･3･4		2	2	
		地域研究Ⅱ	1･2･3･4		2	2	
		地域研究Ⅲ	1･2･3･4		2	2	
		地域研究Ⅳ	1･2･3･4		2	2	
		地域研究Ⅴ	1･2･3･4		2	2	
		地域研究Ⅵ	1･2･3･4		2	2	
		地域研究Ⅶ	1･2･3･4		2	2	
		地域研究Ⅷ	1･2･3･4		2	2	
		地域研究Ⅸ	1･2･3･4		2	2	
		【現地研究科目】					
		国内フィールドプログラムⅠ	1･2･3･4		2	2	
		国内フィールドプログラムⅡ	1･2･3･4		2	2	
		国内フィールドプログラムⅢ	1･2･3･4		2	2	
		国内フィールドプログラムⅣ	1･2･3･4		2	2	
		海外フィールドプログラムⅠ	1･2･3･4		2	2	
		海外フィールドプログラムⅡ	1･2･3･4		2	2	
		海外フィールドプログラムⅢ	1･2･3･4		2	2	
		海外フィールドプログラムⅣ	1･2･3･4		2	2	

別表Ⅱ　教職に関する専門科目

教職に関する科目

学部	学科	授業科目	単位数 必修	単位数 選択	単位数 計	備考
芸術学部・デザイン学部・マンガ学部	課程を設置する各学科	教育の意義等に関する科目				
		教職論		2	2	
		教育の基礎理論に関する科目				
		教育原理		2	2	
		教育心理学		2	2	
		教育制度論		2	2	
		教育課程および指導法に関する科目				
		教育課程論		2	2	
		美術科教育法Ⅰ		2	2	
		美術科教育法Ⅱ		2	2	
		美術科・工芸科教育法Ⅰ		2	2	
		美術科・工芸科教育法Ⅱ		2	2	
		道徳教育論		2	2	
		特別活動論		2	2	
		教育方法論		2	2	
		生徒指導、教育相談および進路指導等に関する科目				
		生徒指導論(進路指導を含む)		2	2	
		教育相談(カウンセリングを含む)		2	2	
		総合演習				
		教職総合演習		2	2	
		教育実習				
		事前・事後指導		1	1	
		教育実習Ⅰ		2	2	
		教育実習Ⅱ		2	2	

教科または教職に関する科目

学部	学科	授業科目	単位数 必修	単位数 選択	単位数 計	備考
人文学部を除く各学部	課程を設置する各学科	人権教育論		2	2	
		現代学校論		2	2	

別表Ⅲ　図書館司書課程に関する科目

学部	学科	区分	授業科目	単位数			備考
				必修	選択	計	
芸術学部・デザイン学部・マンガ学部	課程を設置する学科	必修科目	生涯学習概論	2		2	
			図書館概論	2		2	
			図書館経営論	1		1	
			図書館サービス論	2		2	
			情報サービス概説	2		2	
			情報サービス演習	1		1	
			情報検索演習	1		1	
			図書館資料論	2		2	
			専門資料論	2		2	
			資料組織概説	2		2	
			資料組織演習	2		2	
			児童サービス論	2		2	
		選択科目	図書及び図書館史		2	2	
			情報機器論		2	2	
			図書館特論		2	2	

別表Ⅳ　博物館学芸員課程に関する科目

学部	学科	区分		授業科目	単位数 必修	単位数 選択	単位数 計	備考
芸術学部・デザイン学部・マンガ学部	課程を設置する学科	必修科目		生涯学習概論	2		2	
				博物館学Ⅰ	2		2	
				博物館学Ⅱ	2		2	
				博物館学Ⅲ	2		2	
				博物館実習	3		3	
				視聴覚教育・メディア論	2		2	
				教育学概論	2		2	
		選択科目	美術史	美術史1		2	2	2系列以上にわたり、それぞれ1科目以上、計2科目4単位以上を履修しなければならない。
				美術史2		2	2	
				日本美術史1		2	2	
				日本美術史2		2	2	
				アジア美術史1		2	2	
				アジア美術史2		2	2	
				西洋美術史1		2	2	
				西洋美術史2		2	2	
			考古学	考古学		2	2	
			民俗学	民俗学		2	2	
			自然科学史	科学の歴史		2	2	
			生物学	生物学		2	2	

別表Ⅴ

① 正規の学生の授業料等

1. 入学検定料

費　　目	金　　額
入 学 検 定 料	35,000 円
大学入試センター試験を利用する入学試験の検定料	10,000 円

注） 入学検定料は、学内規程により減免することができる。

2. 入学金

費　　目	金　　額
入　　学　　金	200,000 円

3. 芸術学部学費

費　　目	前　　期	後　　期	年　　間
授　　業　　料	775,000 円	775,000 円	1,550,000 円

4. デザイン学部学費

費　　目	前　　期	後　　期	年　　間
授　　業　　料	789,500 円	789,500 円	1,579,000 円

5. マンガ学部学費

費　　目	前　　期	後　　期	年　　間
授　　業　　料	789,500 円	789,500 円	1,579,000 円

6. 人文学部学費

費　　目	前　　期	後　　期	年　　間
授　　業　　料	543,000 円	543,000 円	1,086,000 円

② 編入学・転入学・再入学の授業料等は入学年次に相当する正規の学生の年次の授業料等に準ずるものとし、入学検定料および入学金については正規の学生の 1 年生に準ずるものとする。

③ 聴講料

登　　録　　料	15,000 円
聴　　講　　料 （ 1 単 位 あ た り ）	15,000 円

④ 科目等履修料

登　　録　　料	15,000 円
履　　修　　料 （ 1 単 位 あ た り ）	15,000 円

⑤ 研究生学費

研　究　生	前　　期	後　　期	年　　間
芸　術　学　部	288,500 円	288,500 円	577,000 円
デ ザ イ ン 学 部	293,000 円	293,000 円	586,000 円
マ ン ガ 学 部	293,000 円	293,000 円	586,000 円
人　文　学　部	211,000 円	211,000 円	422,000 円

京都精華大学研究生学費算出基準

(1) 研究生出願手数料 ＝ 学部入学検定料×1/3

(2) 研究生授業料 ＝ (学部入学金＋学部授業料)×1/3

(3) ただし、千円未満は四捨五入とする。

設置の趣旨等を記載した書類

ア　設置の趣旨及び必要性

1998年4月に本学が人文学部人文学科を設置して以来、人文学部の教育における基本方針は、学際主義、国際主義、体験主義であった。この基本方針は、平成12年4月の環境社会学科の設置、平成15年4月の文化表現学科、社会メディア学科の設置においても変わらず引き継がれ現在に至っている。日本のみならず世界の急速な変化を目の当たりにする現在において、この基本方針はますますその重要性を増していることが痛感されるが、その教育内容を時代の要請に応える形で再編することが喫緊の課題となってきた。

日本国内では少子化が進行し、今後数十年にわたって社会のあらゆる側面で未曾有の変化が予測される状況である。国立社会保障・人口問題研究所が2006年12月に発表した『日本の将来推計人口』では、中位仮定として2050年に全人口が約9500万人に減少すると推定されている。0～14歳の年少人口は、2005年の1759万人から821万人へと半減し、生産年齢人口である15～64歳の人口は同じく8442万人から、4930万人へと激減する。現在、そしてこれから高等教育機関で学ぶ学生は、その生涯において日本社会の大規模な変化に直面して生きていかねばならないのである。

高等教育機関が大衆化し、いわゆるユニバーサル化が進行している。それにともなって入学生の学力や学習意欲の低下が指摘されている。それらの向上を図ることはもちろんのことであるが、今後の激動する日本社会の中で、必要とされる基礎的な力はこれまで以上に重視されなければならない。社会に適応するだけでは足らず、社会に貢献し、よりよい社会を作り出す人材を、数少ない人口の中から多数養成する必要があるからである。

すなわち、2005年1月の中央教育審議会答申『我が国の高等教育の将来像』にあるように、「活力ある社会が持続的に発展していくためには，専攻分野についての専門性を有するだけでなく，幅広い教養を身に付け，高い公共性・倫理性を保持しつつ，時代の変化に合わせて積極的に社会を支え，あるいは社会を改善していく資質を有する人材，すなわち『21世紀型市民』を多数育成していかねばならない」のである。

本学人文学部は「21世紀型市民」の養成に、次のようなアプローチをとろうと考えている。すなわち、主に人文科学、社会科学の幅広い教養に加えて、芸術や現代文化の諸相を深く理解した上で、よりよい文化や社会の構築に寄与できる人材を育成するための教育である。

そのために本学人文学部が従来備えてきた、社会科学、環境社会学、文化学などの分野に加えて、映画、マンガ、アニメ、ファッション、ポピュラー音楽などの現代文化に関する学問分野を教育研究の対象に加え、さらにこれらの諸分野が急速にグローバル化している状況を踏まえ、事実上の国際標準語となりつつある英語の教育研究にも力を入れることとした。総合人文学科に含まれる教育研究における学問分野は、文化学、とくに現代の大衆文化に関する文化社会学、語学、国際関係学、異文化間コミュニケーション論、文学、日本語教育学、環境社会学、社会学、心理学、教育学などである。

総合的教養教育をめざす総合人文学科が育成しようとする人材は、上記のようにさまざまな領域の知識を積極的に吸収しながら、自らの力で考える、すなわちグローバルな視野から課題を発見し、多角的な知識を持って解決に貢献できる人材である。具体的な進路としては、文系の大学院への進学、学校教員、現代社会の問題に取り組む公共団体、NGO、文化活動のプロモーターなどが考えられる。21世紀の市民に必要な素養を身につけることによって国の内外を問わず地球社会に求められる人材を養成しようとするのである。

イ　学部、学科等の特色

総合人文学科の学士課程教育は、2005年1月の中央教育審議会答申『我が国の高等教育の将来像』で示された、「教養教育と専門基礎教育を中心として主専攻・副専攻の組合せを基本としつつ，専門教育は修士・博士課程や専門職学位課程の段階で完成させるもの(言わば「総合的教養教育型」)」を目標として掲げている。

次の3点を本学科における特色としてあげることができる。一つは、基礎的な専門教育を修得した上で専門以外の様々な分野に挑戦する意欲と素養を身につける教育である。学士課程を終えて進学するにせよ、就職するにせよ、一つの専門だけで人生を豊かにし社会に貢献できる訳ではない。大学教育を通じて、自らの興味を深めることはもちろんのこと、関連する諸領域を学ぶことが自らを向上させ知的な価値を高めることを実感することが求められる。そのために専門的な教育を受けつつ、他領域の教育を受けることのできるカリキュラムを構想した。

教養教育とは、専門教育を薄めたものではない。諸領域の知識をもとに自らの力で課題に取り組み考える力を身につけること、それが教養教育の最大の目標であろう。考える力を身につけるため、人文学部ではすでに日本語リテラシーという科目を導入し、添削と対面指導を通じて、考えるための日本語運用能力に焦点を絞ったユニークな教育を行ってきた。総合人文学科の教育は、レポートや論文を書く、ワークショップで一つの作品を完成させる、あるいはフィールドプログラムに参加する、といった心と体を用いる活動をふんだんに取り入れるが、それらはすべて自らの体験と感動をもとにして自らの力で考える力を学生から引き出すことを目的として行われる。

冷戦が終わり急速なグローバル化が進行している。日本の人口は減少するが、世界の人口は急増している。新しい地域の勃興、発展が今後数十年にわたって続くであろう。このような世界の急速な一体化を促進してきた条件の一つは、英語を使用する人口の急速な拡大である。現在の若者にとって英語運用能力は、人生において必須のものであるといわなければならない。総合人文学科では、初年次の英語教育体制を抜本的に見直し、英語教育のための教員体制および設備を整備し、英語運用能力の強化をはかる。

ウ　学部、学科等の名称及び学位の名称

本学人文学部は約20年前に設置されたが、この間本学部の教育分野をめぐる状況は大きく変化してきた。従来からあった伝統的な「人文学」の学問分野に加えて、日本社会の成熟を反映して現代文化、とくにその大衆文化の教育研究や、アジアの中の日本という観点からの伝統文化の再考、身体と心の関連といったテーマが学問的にも、教育的にも求められるようになってきた。総合的教養教育を掲げる学科として、これら現代のニーズに応えて教育分野を従来より幅広いものにする必要があると考え、「総合」の二文字を冠して「総合人文学科」と称することにした。英語名は、リベラルアーツ教育を行うことを明示するために、Department of Liberal Artsとした。学位の名称は従来と変わらず「人文学士」、学位の英語名も従前と同じDegree of Bachelor (Humanities)のままとする。

エ　教育課程の編成の考え方及び特色

総合人文学科の科目は大きく分けて基礎教育科目と専門教育科目に分けられる。

基礎教育科目は、教養科目（53科目）、語学科目（38科目）、情報基礎科目（4科目）、情報リテラシー科目（6科目）、大学入門科目（6科目）、合計107科目によって構成される。既存の３学科においては、基礎教育科目はＡ群（一般教養系科目58科目）、Ｂ群（スポーツ系科目6科目）、Ｃ群（語学系科目36科目）の合計100科目で構成されているが、内容に即した科目群の名称にあらためるとともに、各科目の必要性を精査し、教養教育を強く推進するため、体系的かつ解り易く再配置したものである。学生は必修科目8単位を含めた36単位を基礎教育科目から履修する。

専門教育科目は、各コース専門科目（5コース合計134科目）、コース演習科目（4科目）、プロジェクト演習科目（4科目）、卒業プロジェクト科目（2科目）以外に、表現技法・ワークショップ科目群35科目（講義科目（9科目）、表現技法科目（3科目）、ワークショップ科目（23科目））および地域研究科目群28科目（講義科目（20科目）、現地研究科目（8科目））の合計207科目を配置した。それぞれのコースは、各コース専門科目、同演習科目以外に基礎教育科目、表現技法・ワークショップ科目群および地域研究科目群などの中からコースの教育目標に合致した科目をいくつか指定し、各コース専門科目と合わせてコース指定科目と呼ぶ。コースに所属した学生はコース指定科目の中から定められた単位数の履修が必要である。既存３学科の専門教育科目は、各学科の専門科目（環境社会学科62科目、社会メディア学科57科目、文化表現学科53科目）と学部共通科目（合計77科目、内訳はメディア・表現科目群20科目、ワークショップ科目群26科目、地域研究科目群28科目、総合研究科目群3科目）によって構成されていたが、専門基礎教育を目的とした主専攻・副専攻の組合せによる履修を推進するため、各科目の必要性を精査し、体系的かつ解り易く再配置したものである。

以下、総合人文学科の教育課程の特色を初年次教育、コース選択と副専攻、ワークショップ科目、地域研究科目についてやや詳しく説明する。

(1) 初年次教育：「大学ナビI, II」,「初年次演習I, II」、「日本語リテラシーI, II」、「英語I, II」、「Oral Communication I, II」および「Grammar and Vocabulary, II」

総合人文学科では、初年次教育の中心的な科目として「大学ナビI, II」「初年次演習I, II」「日本語リテラシーI, II」「英語I, II」（英語運用能力の上級者に対しては、「英語I, II」に代わって、「Oral Communication I, II」および「Grammar and Vocabulary I, II」）を用意している。

「大学ナビI, II」では、高校までの学びとは異なる大学での学びの方法、発表手法などに関する内容はもちろんのこと、自らの希望と適性を把握した上で将来の目標設定や自己開発を行うキャリアデザイン、心身の仕組みと健康など、自立した市民として必要な知識、見識を学ぶ。「初年次演習I, II」は、「大学ナビI, II」の内容と関連する題材を用いて、少人数クラスでの作業、意見発表、議論などを行う。「初年次演習I, II」は、大学での学びの第一歩を実際に経験する科目であると同時に、学生同士の知的交流の場でもあり、また教員にとってそれぞれの学生の個性を見極め各人への指導方法を考案するための場でもある。

「日本語リテラシーI, II」は、平成18年度の「特色ある大学教育支援プログラム」に採択され、その教育内容には学内外で高い評価がなされている。米国のリベラルアーツカレッジの多くで、「英語」による批判的思考の訓練がなされているが、「日本語リテラシー」の教育内容は多くの学生の母語である「日本語」でそれを行おうとするものである。またこの科目には、作文のためのメモ作り、作文の添削と書き直しの指導など濃密な対面授業が含まれているため、学生の興味関心のありか、のばすべき長所など、学生個々人の特性を把握しやすい。

「英語I, II」は初年次の選択必修科目である（上級者は「英語I, II」の代わりに「Oral Communication I, II」および「Grammar and Vocabulary I, II」を選択履修しなければならない）。能力別の科目履修となっており、レベルに合わせた授業内容の工夫を行っている。21世紀のグローバル社会において、英語を自立的に学修できる能力はきわめて重要である。そのためにこれらの科目でも、学生個々人の英語能力また英語学習への態度に応じてきめ細かな指導を行い、自立的な学修能力を養うことを目指している。

初年次教育における「大学ナビI, II」「初年次演習I, II」「日本語リテラシーI, II」「英語I, II」「Oral Communication I, II」「Grammar and Vocabulary I, II」の科目担当者は相互に授業内容、授業の効果などについて情報を交換し合い、学期の途中であっても臨機応変にそれぞれの内容や授業方法について修正を施すことが出来るような体制をとる。初年次教育の担当者が協力し合って、学生の能力を引き出すためにより効果的な手法の開発、共有を行える体制を用意する。

(2) コース選択と主専攻、副専攻制度

初年次教育の後半では、とくに２年次以降の学生個々人の興味と特性にあったコースの選択が重要なテーマとなる。上記の科目を中心として、各コースの教員や、先輩学生から情報を得る機会を用意するとともに、各コースの代表的な科目をいくつか履修する。さらに学生個人の問題意識、関心の在処を確かめた上で、２年次から分属するコースを決定するための指導を行う。

２年次に分属するコースは、教育研究内容に関連性の高い科目をグループ化したものである。総合人文学科では５つのコースで発足する。すなわち、現代文化とその表現を探究する「現代文化表現コース」、英語能力の向上と国際理解を二本柱とする「国際コミュニケーションコース」、日本の伝統文化への理解を深め、アジアのそれとの関連を探る「日本・アジア文化コース」、環境問題を乗り越える未来社会を指向しその課題を学ぶ「環境未来コース」、現代社会における人間の諸問題を探究する「現代社会と人間コース」である。各コースはその教育目的に即した科目を指定し、その中から24単位を選択履修しなければならない。総合的な教養教育を推進する目的から所属コース以外の他コース専門科目も12単位修得するよう定めている。残余の単位については必修の６単位を除いて、基礎教育科目及び専門教育科目、他学部及び他大学等の専門教育科目の中から、選択して履修する。

学生が所属するコースを主専攻とするが、他のコースを副専攻とすることも可能なカリキュラムを構成する。つまり特定のコースを専攻して専門的な教育を受けると同時に、さらに幅広い教養を身につけることも可能にし、総合人文学科のリベラルアーツ教育を教育課程の面から保証する。

所属するコースではコース専門科目を選択して履修する他、２、３年次に選択必修であるコース演習を履修する。ただし、国内外での交換留学を行う学生は留学期間中はコース演習を履修しない。４年次には必修科目として卒業プロジェクトを履修する。卒業プロジェクトは、学士課程の総仕上げとして論文や調査報告という形式での成果発表の他、制作物の展示、あるいは舞台での発表など、学生の研究内容に則した形式での発表が求められる。２、３年次のコース演習では卒業プロジェクトに向けて、学生個々人のテーマ選択とその深化を促進するよう指導が行われる。コース演習は少人数クラスであり、研究テーマの指導をきめ細かに行うことができる。

(3) ワークショップ、地域研究など、実践、実地体験をもとにした学び

既存３学科においても人文学部全体の共通専門科目として、ワークショップ科目、地域研究科目が設置されていた。これらは制作を行ったり、フィールドで調査を行ったりと、座学と講義だけでは不可能な、まさに心身を用いた総合的な学びを提供していた。総合人文学科においてもその大部分を選択科目として継承するが、これまでの科目運営の経験に鑑み科目構成をより体系的に整理し直した。表現技法・ワークショップ科目では、基礎的な科目として「プレゼンテーション技法」「写真技法」「視聴覚記録の技法」を初年次から選択履修できるようにし、それを踏まえて２年次以降により専門的な科目を履修するようにした。また地域研究科目では地域調査の基礎的な方法論である質的、量的な調査手法や、調査結果の解析に必要な社会統計学に関する科目を用意し、より体系的に学ぶことが出来るよう配慮した。

オ　教員組織の編成の考え方及び特色

従来の人文学部は、環境社会学科、社会メディア学科、文化表現学科で構成されており、それぞれの学科が学科会議をほぼ毎週開催して、日常的な教学内容、学生生活等に関する連絡調整を行っていた。つまり学科の教員がグループとして学生指導のための学科運営責任を担っていた。総合人文学科では、学生が各コースに分属するのは２年次からなので、２年次以降と初年次とでは教育を担う教員組織の形態が異なる。

各コースに分属した２年次以降の教育は、各コースの専任教員がコース会議を開催し日常的に運営していく体制となる。従来の３学科それぞれの教員組織が、５つのコースの教員組織に再編されることになる。各コースにはその教育内容と密接に関連する研究分野を持った教員を配置しているので、各コースの指定する講義科目（選択履修）はその大部分を各々のコースの専任教員が担当することになる。また各コースの「コース演習」、「卒業プロジェクト」などの選択必修科目、必修科目も専任教員が主に担当することになっている。各コースの主要な科目を専任教員が担当し、またコース会議を定期的に開催することによって専任教員相互の情報共有、意見交換がはかられるため、質の高い専門教育を行える体制となっている。

初年次はコースに分属していないので、２年次以降のコース教員会議とは別に対応する教員組織を編成する。上記「教育課程の編成の考え方及び特色」において取り上げた初年次教育の中心的な科目、すなわち「大学ナビI，II」「初年次演習I，II」「日本語リテラシーI，II」「英語I，II」「Oral Communication I，II」「Grammar and Vocabulary I，II」のそれぞれは、授業内容の企画・運営を専任教員が担当しており、それら専任教員に加えて、若干の兼任教員が授業を行う。場合によっては、教員を補佐するTA、助手などと教員がともに行うこともある。たとえば「日本語リテラシーI，II」は、講義を専任教員が行い、課題作文の指導を教員と助手とがおこなう形式をとる。「初年次演習I，II」においても、専任教員と助手の組み合わせできめ細かに学生とのコミュニケーションを行う体制をとる。「大学ナビI，II」も専任教員が担当する。「英語I，II」「Oral Communication I，II」「Grammar and Vocabulary I，II」は、専任教員が企画・運営し、専任教員と兼任教員が実際の授業を担当する。

これらの科目のうち「日本語リテラシーI，II」「英語I，II」の専任教員はもっぱら初年次教育に専念し、２年次以上の専門科目などを原則として担当しないが、これら科目の担当専任教員と「大学ナビI，II」「初年次演習I，II」担当の専任教員は、相互に情報交換を行い、相互の授業内容の調整、授業方法の改善、個別学生の状況把握などを行うための「初年次教育運営委員会」（仮称）を作り、初年次の教育をつねに改善していく体制を用意する。

専任教員の年齢構成は総合人文学科発足の平成21年4月において、20、30歳代が約13％、40歳代が約18％、50歳代が約41％、60歳代が約28％となる。40歳代以下がやや少ないが、教育研究水準の維持向上および教育研究の活性化に支障はない。

カ　教育方法、履修指導及び卒業要件

（1）初年次教育における教育方法と履修指導

学生は初年次に、基礎教育科目を中心とした講義科目を選択履修し、また上述した「大学ナビI, II」「初年次演習I, II」「日本語リテラシーI, II」「英語I, II」「Oral Communication I, II」「Grammar and Vocabulary I, II」という中心的な科目を必修あるいは選択必修として履修する。講義系科目は受講人数が多くなりがちであるため、本学では人文学部の学生のみを対象として開講する基礎教育科目を多数設けている。さらに履修登録者が200人以上の科目に対して、授業補助員を1名配置し、授業準備や授業運営、出席や提出課題の整理など、担当教員の指示のもと授業に関連する業務を補佐する体制をとっている。

「大学ナビI, II」は講義形式をとるが、「初年次演習I, II」は各クラス20名程度以内の学生数で開講する。各クラスはジェンダーバランスなど学生の属性の多様性を考慮して決められる。上述のように、教員の指導のもと授業を補助する助手が各クラスに配置される。「初年次演習I, II」では、教室内にとどまらずキャンパス内の教学資源にできるだけ多く触れ、また京都市内でのフィールドワークなど、これから4年間を過ごす学内外の環境に親しむことも目的としている。「日本語リテラシーI, II」は、国語力、とくに作文能力のレベルによって4ないし5のクラスに分けられる。したがってそれぞれのクラスは100名前後の人数となり、毎週1回の講義はこのクラス単位で受講する。しかし、講義以外に毎週1回設定されている実習では各クラスをさらに3つにわけ、きめ細かな作文指導を行えるように配慮している。このように「日本語リテラシーI, II」は、講義と実習を組み合わせた科目なので、前期、後期各3単位（講義2単位、実習1単位）となっている。「英語I, II」あるいはそれに代わる「Oral Communication I, II」「Grammar and Vocabulary I, II」も、クラス編成はレベル別に行われる。各クラスは最大30名で構成され、それぞれのレベルにあった授業内容を工夫する。インターネット、あるいはCALL教室を用いた自習用教材なども用意する計画である。

従来人文学部では学習支援ルームを置き、主に初年次生を対象に文献をはじめとした学内外のリソースの使用法、研究書や論文の読みこなし方、レジメの作り方、プレゼンテーションの技法などを指導するTAを配置してきた。総合人文学科においても同様にTAや助手などを学習支援ルームに常時配置し、上述の「初年次教育運営委員会」（仮称）のもと、学生の教学に関する総合的な支援体制を充実させていく。

(2) 各コースにおける教育方法と履修指導

学生は２年次以降は各コースに分属することになる。上述のように学生は各コースが指定した科目を履修しながら必修科目となる４年次の卒業プロジェクトに向けて自らのテーマを探索し、学びを深めていく。２年次、３年次は、国内外の留学などオフキャンパスのプログラムに参加しない場合は、必ずコース演習を選択しなければならない。各コース会議を構成する専任教員は原則として全員がコース演習を担当し、また必修となる卒業プロジェクトを担当するので、キャンパスにいる２年次以降の学生はいずれかの専任教員の指導を日常的に受けることになる。各コース演習、卒業プロジェクトは平均10名前後で構成され、担当教員は指導学生の履修状況などを細かくモニターし、オフィスアワーの時間な

どを用いて助言を与える。
　いったんコースに分属しても、学生個人の関心の変化、テーマの深化によっては他のコースへ異動する方が学習効果を高められることもあり得る。そのような場合にも柔軟に対応できるようなルールと、指導体制を用意する。

（3）GPAの導入と履修登録の指導

　総合人文学科では、GPAを導入し卒業要件にも含める。つまりGPAがある一定値未満である場合は、その他の卒業要件をすべて満たしていても卒業を認めない。また各コースでの専門教育で必要な、必修科目の単位を取得できなかった場合には「仮進級」とする制度も導入する。GPAは半期ごとに学生本人と担当教員によってモニターされ、学生に対するきめ細かな履修指導に用いられる。半期に履修登録できる単位数は最大20単位であるが、GPAの数値が低い学生は次の学期に登録できる単位数を減少させる、また数値の高い学生は次学期の登録単位数の上限を増加させる仕組みも導入する。GPAと「仮進級」制度の導入は、大学入学の早い時期から個別の履修指導を行い、授業への真摯な取り組みを促すために有効であると考えている。

（4）卒業要件

　卒業に必要な単位数は124単位であるが、その内訳は以下の通りである。
総合人文学科の科目は基礎教育科目と専門教育科目に分けられる。初年次には、基礎教育科目がら合計36単位を履修しなければならない。そのうち「大学ナビI, II」「初年次演習I, II」の計8単位は必修である。また「英語I, II」（計4単位）か、「Oral Communication I, II」および「Grammar and Vocabulary I, II」（計4単位）のいずれかを履修しなければならない。また外国語は上記科目の他に4単位を履修しなければならず、これら16単位を含めて基礎教育科目から合計36単位を履修することが必要である。
　専門教育科目の履修必要単位数は合計で60単位とする。専門科目には５コースの指定する科目が配置されているが、合計で40単位をこれらの科目によって履修しなければならない。その選択履修内訳は、２年次以降に所属するコースが指定する専門科目から最低24単位、他のコースが指定する専門科目から最低12単位とするが、すべてのコース指定の専門科目からの履修合計単位数40を必要条件とするのである。
　上記40単位に加えて学生は以下の20単位を専門科目から履修する必要がある。すなわち、２年次、３年次で「コース演習I, II, III, IV（各2単位）」を履修しなければならない。ただし、国内外の留学をする学生は、留学期間中のコース演習履修を必要条件としない。また４年次の「卒業プロジェクトI, II（各3単位）」を履修しなければならない。さらに、編集技法や映像作品制作などを実地に学ぶ「表現技法･ワークショップ科目」および「地域研究科目」のなかから最低6単位を選択履修しなければならない。
　上記の基礎教育科目36単位と専門教育科目60単位の合計96単位を基本とし、卒業要件単位数からの残余である28単位は、人文学部開設のすべての科目、および他学部、他大学などで開設し受講可能な科目から自由に履修することが出来る。

(5) 履修モデルについては添付資料を参照ください。

キ　施設、設備等の整備計画

(a) 校地、運動場の整備計画

本学は風致地区に指定される洛北の山あいに立地し、校地の２／３は森林である。この恵まれた環境を維持し最大限に活かすことが基本的な条件となっている。さらに、講義室、実習室等の授業に用いられる施設のみならず、授業外に図書およびそれ以外の情報資料を自由に利用する勉学のための「情報館」や「学習支援室」などの施設、課外活動のための部やサークルが使うための施設、そして食堂等の厚生施設を充実させることが肝要であると考えている。

運動場は、キャンパス内の体育館、グランド、テニスコートなどで充分に確保されており、これら運動施設は、授業や他大学との交流に活用されているだけでなく、地域社会にも開放されている。

学生の休息その他の利用については、食堂、カフェのみならず、各教室棟内部にロビー・スペースを設け、またキャンパス内の各所にはベンチ等を設置し、憩いにも充分な配慮がなされている。

(b) 校舎等施設の整備計画

研究室は全専任教員に個室を提供している。各研究室は最小でも１４㎡であり、個別の学生指導、数人規模のゼミ等が行えるよう整備している。

講義科目、演習科目などのための教室は、授業科目数、クラス数等の計画に適切に対応するよう整備され、教室サイズに適切な AV 機器の設置、またインターネット接続のための整備がなされている。

従来から情報関連科目のための PC ルームは専用 PC 等を配置している。また総合人文学科の開設に伴い外国語教育の充実のために現在の PC74 台を配置したコール教室に加え PC50 台配置のコール教室を整備する計画である。

学生は自習のために授業時間外の各教室を自由に使用できるが、もっぱら自習のために終日使用できる約 120 席を清風館「学習支援室」内に配置している。隣接の「多読ライブラリー」にも自習用の机および椅子 80 席が配置され、授業時間外の利用に便宜がはかられている。これらの場所においても、学生は PC を持ち込みインターネットに接続することができる。

総合人文科の開設は、学部収容定員の増加、また科目数・クラス数等の増加は伴わず、既存の教育施設設備を活用する範囲内の計画と言えることから、校舎等施設は充分に整備されていると認識している。

(c) 図書等の資料及び図書館の整備計画

図書等の資料については、毎年の追加的整備を経常的に進めている。総合韻文学科の開

設は一学部一学科の構成であり従来の人文学部の教育目的、学生規模等を変更するものでないことから、従来の人文学部関連の経常的整備に準ずる計画である。ただし、５コースの専門領域関連の図書については、いずれかに偏ることのないよう整備をすすめることとしている。

本学には全学共用の施設として「情報館」があるが、その蔵書冊数は約 23 万冊であり、毎年の経常的整備では約 2,400 万円の図書購入を行っているが、その内とくに人文学部関連とすることが出来る経常的購入額は約 900 万円である。

電子ジャーナル等のデジタルデータベースとしては、以下のものが整備されている。

「Japan Knowledge」「Magazine Plus」「日経 BP 記事検索サービス」「聞蔵 II ビジュアル」「明治･大正・昭和の読売新聞」「K.O.D.研究社オンライン･ディクショナリー」「日国オンライン」「O.E.D.2nd ed.」「ルーラル電子図書館」「アジア動向データベース」「Grove Art Online」「First Search」「K-Port」

また他に、「国立国会図書館（NDL-OPAC)」「Nacsis Webcat」「Webcat Plus」「京都府図書館総合目録ネトワーク」なども利用できるよう整備されている。

「情報館」は、図書以外の視聴覚資料の蓄積、また情報通信機能も充実させる方針で 1997 年度に設置されたものである。大学の知識資源の社会的還元にも力を入れるべく地域社会にも開放され、年間 2 万人の一般市民の利用がある。「情報館」には図書資料の他に約 7,000 点の AV 資料があり、また館内の「メディアセンター」は、AV 制作のためのスタジオが設置され､さらに PC 等電子機器を使っての編集や制作を支援するため専門の職員を配置している。デジタルビデオカメラ等の機器の貸し出しも行っている。

「情報館」は 4 階構造で、約 4,700 ㎡の延べ床面積である。その内閲覧スペースは約 1,900 ㎡、閲覧席数約 500 席であり、視聴覚および情報末端スペースは約 1,100 ㎡が確保されている。書庫および事務スペースは約 1,000 ㎡である。

ク　入学者選抜の概要

すでに述べてきたように「総合的教養教育をめざす総合人文学科が育成しようとする人材は、さまざまな領域の知識を積極的に吸収しながら、自らの力で考える、すなわちグローバルな視野から課題を発見し、多角的な知識を持って解決できる人材」である。一般入試、公募制推薦入試等では総合的教養教育を行うために必要な基礎的な科目を試験科目とするとともに、アドミッション・オフィス入試では対話を行う姿勢、講義内容などの理解力、自分の力で考える思考力を審査している。

選抜方法および各選抜方式による入学者の定員配分は以下のように考えている。

・一般入試　145名
・公募制推薦入試　80名
・大学入試センター試験利用入試　18名
・アドミッション・オフィス入試　110名
・留学生入試・社会人入試・帰国生徒入試　20名

・その他の特別推薦入試　77名

ケ　企業実習や海外語学研修など学外実習の具体的計画

学外で行う実習科目は、専門教育科目の中の地域研究科目（現地研究科目）に含まれている。すなわち国内フィールドプログラムおよび海外フィールドプログラムである。

これらのプログラムの実習施設名、所在地、受け入れ人数は以下のとおりである。実習先との連携体制、成績評価体制および単位認定方法については国内、国外それぞれのプログラムの最後にまとめて記載した。

(1) 国内フィールドプログラム

実習施設名：旭川大学および周辺施設
所在地：北海道旭川市
受け入れ人数：15名程度

実習施設名：京都市内各所
所在地：京都府京都市
受け入れ人数：30名程度

実習施設名：沖縄大学および周辺施設
所在地：沖縄県那覇市
受け入れ人数：15名程度

実習施設名：国立水俣病総合研究センター、水俣市立水俣病資料館など
所在地：熊本県水俣市
受け入れ人数：15名程度

(2) 国内フィールドプログラムの実習先との連携体制、成績評価体制および単位認定方法

京都市内でのプログラムはもちろん、それ以外のプログラムも実習先とは長期にわたる交流がある。旭川大学と沖縄大学とは国内交換留学協定を結んでおり、その関係もあって教員のみならず職員も頻繁に相互訪問してきた。水俣とも、環境社会学を専攻する本学の教員が長年交流してきた。各プログラムの目的、内容、危機管理体制については、京都市内と水俣については本学教員と教務課が、旭川大学と沖縄大学については本学教員と教務課、およびそれぞれの大学の教員と教務関係部署が共同して定めている。すべてのプログラムにおいて少なくとも期間の一部は本学教員が帯同し、教学上の指導を行う。プログラム終了後は、改善のための意見交換が行われ、翌年以降のプログラム内容に反映される体制をとる。

プログラムにより異なるが、原則として参加者が確定するとプログラム開始前に事前研修が行われる。プログラムは5日から10日前後の期間、講義とフィールドトリップ、ワークショップなどを組み合わせて行われ、終了後にレポートを提出、場合によっては簡易な報告書を製本することもある。事前研修、およびプログラムへの参加態度、レポート、報告書の内容などを総合して、プログラム担当の専任教員が成績評価を行う。各プログラムは「講義」「演習」と「実習」の組み合わせであるが、国内フィールドプログラム2単位に必要な学習時間を十分確保している。

(3) 海外フィールドプログラム

実習施設名：University of Limerick, Language Center
所在地：アイルランド、リムリック市
受け入れ人数：20名

実習施設名：大邱大学
所在地：大韓民国、大邱市
受け入れ人数：20名

実習施設名：中央戯劇学院
所在地：中国、北京
受け入れ人数：20名

実習施設名：チェンマイ大学
所在地：タイ王国、チェンマイ市
受け入れ人数：10名

実習施設名：西カトリック大学
所在地：フランス、アンジェ市
受け入れ人数：20名

実習施設名：トンブクトゥ、バマコ、ジェンネ、モプティなど
所在地：マリ共和国
受け入れ人数：10名程度

実習施設名：地球の友と歩む会
所在地：インド、ナッタム郡
受け入れ人数：20名

実習施設名：アジアボランティアセンター
所在地：マーシャル諸島、マジュロ周辺

受け入れ人数：15名

(4) 海外フィールドプログラムの実習先との連携体制、成績評価体制および単位認定方法

上述の８つの海外フィールドプログラムのうち、最初の５つは語学研修を目的としており、残りの３つは定められたテーマに沿った研修を目的としている。語学研修を目的としたフィールドプログラムは、各大学が行っている3～4週間の語学研修プログラムを利用する。各大学の語学研修プログラム担当者とは、本学教員と国際交流担当の職員が恒常的に連絡を取り、語学研修のカリキュラム、宿泊施設などの受け入れ体制、危機管理体制などを確認する。語学研修を目的とした海外フィールドプログラムの成績評価は、本学が指定する項目について各語学研修を行う大学から評価を素点で提出してもらい、それをもとに行う。本学指定の様式を利用できない場合は、発行される修了証などをもとに成績評価をおこなう。

テーマが定められた海外フィールドプログラムは、約10日間～4週間の期間で行われる。現地での実習施設と各プログラム担当者が密接に連絡を取り､各プログラムの目的､内容、危機管理体制について十分確認する。また各プログラムとそのテーマについて、十分な事前学習、事後学習の時間を取る。熱帯地域でのプログラムに参加する学生は、招聘された専門家による熱帯医学の概論を受講し、当該地域での熱帯病予防について実践的に学ぶ。現地のプログラムに教員が帯同できない場合においても、メールなどで参加学生を指導するようにする。このプログラムの成績評価は、事前学習、事後学習、課題レポートなどを総合的に評価して行う。

語学研修を目的としたプログラムは、主に「実習」を中心としているが、海外フィールドプログラム2単位に必要な学習時間を十分確保している｡またテーマが定められた海外フィールドプログラムは、「講義」「演習」「実習」を組み合わせて行われるが、事前と事後の学習も含め2単位に必要な学習時間を十分確保している。

コ　編入学の具体的計画

総合人文学科では２年次からの編入学定員24名、３年次からの編入学定員34名を設定している。それぞれの履修モデルについては資料資料を参照ください。

(1)　３年次編入生の既修得単位の認定方法および教育上の配慮

短期大学卒業者、4年制大学の2年生修了者などの既修得単位の認定については、原則として62単位を上限とする｢一括認定方式｣を採用するが、個々の事例について授業科目の履修状況などを考慮し、総合人文学科における教育を組織的、体系的に受けることができるよう、｢逐次認定方式｣の適用もありうることとする。

上記一括認定方式による上限62単位のうち、36単位を限度に｢基礎教育科目｣を履修したものとみなし、同じく18単位を限度に｢専門教育科目｣を履修したものとみなし、さらに8

単位を限度として「自由選択科目」を履修したものとして認定することとする。しかし既修得科目の内容によっては、本学に置ける対応科目を個別に認定する方法も併用する。
　ただし3年次は各コースに分属して専門教育を受け始めてから1年経っており、3年次から編入する学生の専門教育科目への「ソフト・ランディング」には相当の配慮が必要である。そのため、３年次編入生のコース所属については、編入学願書出願時に所属希望コースをたずね、編入学試験合格決定後に、短期大学等の成績証明書にもとづき、学習の継続性、体系性等を充分に勘案し、コースへの分属を決定する。
　あらかじめコースごとの編入学生履修モデルを設定し、それにもとづきながら編入生が各自の関心にあわせ適切な履修ができるよう配慮する。
　また編入学時に、履修指導を含めたガイダンス、オリエンテーションを綿密に行うとともに、履修指導および学習支援を担当教員と教務委員会が協力して行う。

（2）２年次編入生の既修得単位の認定方法および教育上の配慮

　２年次編入の対象者は、短期大学卒業者、４年制大学の1年制修了者などである。既修得単位の認定方法において3年次編入生と異なる点は、最大限30単位まで認定する点である。30単位のうち大部分は必修科目も含む基礎教育科目として一括認定されるが、既修得科目の内容を個々に検討し、必要な場合は本学に置ける対応科目を個別に認定する方法も併用する。
　2年次編入生は、1年次からの入学生が各コースに分属する際に入学するので、専門教育科目の履修については他の学生とほぼ異なるところはない。したがって教育上の配慮としては初年次教育、およびコース選択に関することにほぼ限られる。
　3年次編入生と同様、編入学願書出願時に所属希望コースを尋ね、編入学試験合格後に、短期大学等の成績証明書にもとづき、コースへの分属を決定する。
　出身校における初年次教育に含まれていない主要な科目については、編入後2年生として履修することもあり得る。
　編入学時の履修指導を含めたガイダンス、オリエンテーション、学習支援の体制に関しては、3年次編入生と同様に行う。

サ　管理運営

　総合人文学科の教学面の管理運営については、一学部一学科の構成であるため、人文学部教授会を中心に行われる。学部の教学運営に責任をもつ学部教授会は、専任の教授、准教授及び講師を構成員とし、招集者である学部長が議長となる。定例の学部教授会は毎月開催され、臨時の学部教授会も年に数度開催されている。
　学部教授会の審議事項は、
・学生の入学、編入学、転入学、休学、退学、除籍、復学及び卒業に関する事項
・教育課程の編成に関する事項
・学生の試験及び課程修了の認定に関する事項

・教授及び研究に関する事項
・教員の人事に関する事項
・学則及びその他関連する諸規程の制定、改廃に関する事項
・学部内の連絡調整に関する事項
・学長の諮問した事項
・学部長の選出に関する事項
・その他全学教授会から付議された事項
と定められている。

総合人文学科の開設にあたって、この人文学部教授会のありかたを変更する計画はなく、従来どおりの役割、構成及び開催頻度を維持することになる。しかしながら、３学科構成から１学科５コース構成へと再編成する計画であるため、これまで学部長のもとに設けられ各学科長の召集する学科会議は廃止される。かわって各コース会議が設けられる計画である。その役割は、学生教育指導および生活指導の各コースにおける運営および連絡調整等に限定されるが、定期的なコース会議の開催によって、専任教員相互の情報共有、意見交換によって質の高いコース運営が行われる。

総合人文学科の教育課程の特色である初年次教育についてはとくに十全な配慮が必要であり、別項「オ　教員組織の編成の考え方及び特色」ですでに述べたとおり、「大学ナビ」「初年次演習」「日本語リテラシー」「英語」等を担当する専任教員によって構成される「初年次教育運営委員会」（仮称）を設け、担当教員間の情報交換、授業内容の調整、授業方法の改善、個別学生の状況把握を経常的に行うとともに、初年次教育を毎年度改善していく体制とする計画である。この「初年次教育運営委員会」は学部の教務事項全般について管理運営の責任をもつ教務委員会と連携することはもとより、学長のもとに設置されている教育推進センターとも緊密に連携し、初年次教育実施を支援する体制が用意されている。

学部教授会のもとに組織されるその他の各種委員会については、教育課程運営全般及び学生の試験実施等の教務事項について委任される教務委員会、入学試験等の事項について委任される入試委員会、学生生活関連の事項及び休退学・除籍等について委任される学生生活委員会等の従来からの委員会が、学部専任教員から選任された委員によって構成される計画である。

シ　自己点検・評価

本学では「京都精華大学自己点検・自己評価規程」にもとづき、自己点検・評価活動を行うために自己点検・評価委員会を設け、1996年以来自己点検・評価活動を行ってきた。主として、その年度に特定の部署や教学プログラムをとりあげ、集中的に点検･評価を加えるものであった。その結果はこれまで4冊の報告書として刊行されている。

2003年度にそれまでの活動を点検し体制の見直しが行われたが、その過程で新しい体制の構築が進まず､2004年度には委員会も編成されなかった。このように一時停滞を見たが、2005年度から、新たに自己点検・評価委員会を発足させ再スタートを期した。

2006年度は、自己点検・評価委員を各学部・研究科から１名、また教務部、総務部、企画室、学長室といった教学と組織運営の要となる部署から委員を選出して、自己点検・評価委員会を組織した。このように全学の体制をとるとともに、事務局を学長室がつとめ、学長直轄の組織とした。

2006年度からは、これまでの自己点検・評価活動が、年度毎に特定の部署や教学プログラムをとりあげる方式をあらため、大学基準協会の点検・評価項目(A群・B群)すべてにおける点検・評価に取り組むこととした。

また、授業評価アンケートも全開講科目を対象に取り組んだ。

2006年度から、自己点検・評価委員会が中心になり、全学のあらゆる活動・側面に点検・評価を加える方針を立てた。教学部門では、全学部・研究科・学科・コースの長にヒアリングを行い、事務部門各部署には報告書原稿の執筆というかたちで点検・評価を行った。

授業評価アンケートも、2005年度後期はPCあるいは携帯電話による入力形式をとっていたため、回答件数が762件とかなり低調であった。しかし、2006年度は用紙の配布・回収形式にしたことによって、前期において20,464件のアンケート回答を得ることができた。このように回収率が高くなりデータとしての意味も出てきたことにより、担当教員にも集計結果を通知し、さらに授業に関する改善点を提出してもらうようにしている。

2007年度は引き続き自己点検・評価に取り組んだ。2008年度に学校教育法第69条の3にある「認証評価」を本学として初めて受けるべく、2007年度に行った自己点検・評価報告書を大学基準協会に提出済である。この報告書は2009年1月に予定されている大学基準協会による最終評価結果を待って、それとあわせて刊行することになっている。

ス　情報の提供

本学のホームページの冒頭に「大学概要」へのリンクがあり、以下の情報を公開している（平成20年4月現在）

建学の理念、法人組織の概要、事業報告書（入学定員数、在学生数、事業および財務の概要を含む）、財務諸表、2005年度自己点検・自己評価報告書の全文、2006年度授業評価アンケート結果報告など。

さらに在学生向けのページでは、すべての学部、大学院のシラバスを自由に検索できる。また各学部・大学院の紹介ページでは教員のプロフィールを閲覧できるようになっている。

授業内容の公開にも力を注いでいる。すべての学部の授業の一部を講義ノートなどで公開している。未だ少数であるが、授業内容の一部を動画でも公開している。卒業論文、卒業制作や学生による報告書の一部もホームページ上で全文を公開している。

セ　教員の資質の維持向上の方策

現在本学には、教員の資質の維持向上を恒常的かつ組織的に推進する組織として全学的なFD委員会が設置されている。このFD委員会は、全学部の教務委員会が母体になっており、

４学部と２研究科を合わせて７部門（人文学部部門、芸術学部部門、デザイン学部部門、マンガ学部部門、芸術研究科博士前期課程部門、芸術研究科博士後期課程部門、人文学研究科部門）から構成される。それぞれの部門は、教務主任、各学部担当教務課長、教務課員がひとつのチームになり、各部門のFD活動を推進している。

FD委員会の目的は、それぞれの部門のFDマネジメントサイクル（PDCA）を回すこと、そして各部門間のFD活動の情報交換によって全学のFDを活性化させること、さらには、年次ごとに京都精華大学全体のFD活動の目標を設定することなどである。もちろん、全学的に必要であると共通に認識される教育改善・開発に関しては、FD委員会が中心になって様々な研修会等が催されることになっている。

4学部２研究科からなる京都精華大学は、４つの学部のうち３つが芸術系組織であり、教員も授業形態も多様である。また、本学は、よりよき教育や大学の姿を求めて当時のマス化した日本の大学状況への批判から開学したという経緯を持ち、教育に対する改善・改革の力は、潜在的に備わっている。このような固有の組織性を生かし日常における教育改善・開発活動をベースにしながら、教員の資質の維持向上を図り、高等教育のユニバーサル化・グローバル化あるいは日本固有の大学の問題に対応していくこと。これが京都精華大学のFD委員会を支えている原理である。また、本学のFD活動の特徴は、その部門メンバーに職員を入れていることである。教員だけでなく、職員が加わることによって、よりスムーズにFD活動が展開されるだけでなく、SD的な効果も見込まれている。

年度末に、次年度のFD活動の目標が設定され、その目標を各部門に持ち帰り、それぞれの部門の目標を作成する。FDのPDCAサイクルをまわすことを第一義にするFD委員会の目的は、日常的な教育開発・改善活動をもその活動の対象にできるだけでなく、自己点検・自己評価活動のPDCAとも連動し、全学の教学組織を活性化させる方途になっている。

FD委員会は、全学的かつ組織的に教員の資質の維持向上を目指したものであるが、教員個人レベルでその資質を向上させる制度として、各セメスターの後半に実施される授業アンケートがある。全ての科目について授業アンケートは行われ、その集計結果を担当教員に提示する。教員は、アンケート結果を見た上で、さらによりよい授業の実現のために、今後の改善点を所定様式で提出しなければならない。

このように、本学は、教員の資質の維持向上を目指すべく、組織的に機能するFD委員会と個人的に機能する授業アンケートの制度を整えている。

教　　員　　名　　簿

学　長　の　氏　名　等						
調書番号	役職名	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年齢	保有学位等	月額基本給（千円）	現　職 （就任年月）
－	学長	シマモト　カン 島本　　浣 ＜平成18年5月＞		博士 （文学）		京都精華大学学長（H18．5） 京都精華大学芸術学部教授 （平成14．4）

教　員　の　氏　名　等

（人文学部総合人文学科）

調書番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年齢	保有学位等	月額基本給(千円)		担当授業科目の名称		担当単位数	年間開講数	現　職 (就任年月)
1	専	教授	サイトウ　ヒカル 斎藤　光 〈平成21年4月〉		学術修士 理学修士			サブカルチャー論 マンガ文化論 「性」の社会・文化史 科学史 コース演習Ⅰ コース演習Ⅱ コース演習Ⅲ コース演習Ⅳ 卒業プロジェクトⅠ 卒業プロジェクトⅡ	前 前 後 後 前 後 前 後 前 後	2 2 2 2 2 2 2 2 3 3	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 教授 (平14. 4)
2	専	教授	タグチ　ヨウコ 田口　瑛子 〈平成21年4月〉		M.L.S (米国)			図書館リテラシー 図書館文化演習Ⅰ 図書館文化演習Ⅱ 図書館文化演習Ⅲ コース演習Ⅱ 卒業プロジェクトⅠ	前 後 前 後 後 前	2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 教授 (平5. 4)
3	専	教授	ツツイ　ヨウイチ 筒井　洋一 〈平成21年4月〉		法学修士			グループワーク概論 情報メディア論 情報ネットワーク論 コース演習Ⅰ コース演習Ⅲ コース演習Ⅳ プロジェクト演習Ⅰ プロジェクト演習Ⅱ プロジェクト演習Ⅲ プロジェクト演習Ⅳ 卒業プロジェクトⅡ	前 後 前 前 前 後 前 後 前 後 後	2 2 2 2 2 2 4 4 4 4 3	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 教授 (平15. 4)
4	専	教授	エンドウ　イクエ 遠藤　育枝 〈平成21年4月〉		M.A (米国)			英語圏文学Ⅰ Academic SkillsⅠ Academic SkillsⅡ Writing and Vocabulary Ⅰ Writing and Vocabulary Ⅱ コース演習Ⅰ コース演習Ⅱ コース演習Ⅳ 卒業プロジェクトⅠ	前 前 後 前 後 前 後 後 前	2 1 1 1 1 2 2 2 3	1 1 1 1 1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 教授 (平11. 4)
5	専	教授	クスノセ　ケイコ 楠瀬　佳子 〈平成21年4月〉		文学修士			英語圏文学Ⅱ 地域研究Ⅷ コース演習Ⅱ コース演習Ⅲ コース演習Ⅳ プロジェクト演習Ⅲ プロジェクト演習Ⅳ 卒業プロジェクトⅡ	後 前 後 前 後 前 後 後	2 2 2 2 2 4 4 3	1 1 1 1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 教授 (平2. 4)

調書番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年齢	保有学位等	月額基本給(千円)		担当授業科目の名称		担当単位数	年間開講数	現　職 (就任年月)
6	専	教授	ゴ　コウメイ 呉　宏明 〈平成21年4月〉		教育学修士			Education and Society Academic Writing Ⅰ Academic Writing Ⅱ Academic Reading Ⅰ Academic Reading Ⅱ 教育と社会 コース演習Ⅰ コース演習Ⅱ コース演習Ⅲ コース演習Ⅳ 卒業プロジェクトⅡ	前 前 後 前 後 後 前 後 前 後 後	2 1 1 1 1 2 2 2 2 2 3	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 教授 (平1. 4)
7	専	教授	サワダ　マサト 澤田　昌人 〈平成21年4月〉		理学博士			コース演習Ⅰ コース演習Ⅲ プロジェクト演習Ⅰ プロジェクト演習Ⅱ 海外フィールドプログラムⅠ	前 前 前 後 前集中	2 2 4 4 2	1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 教授 (平14. 4)
8	専	教授	レベッカ ジェニスン Rebecca　Jennison 〈平成21年4月〉		M.A (米国)			英語圏文化論Ⅱ 地球市民論 コース演習Ⅲ コース演習Ⅳ プロジェクト演習Ⅰ プロジェクト演習Ⅱ 卒業プロジェクトⅡ 海外フィールドプログラムⅣ	後 後 前 後 前 後 後 後集中	2 2 2 2 4 4 3 2	1 1 1 1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 教授 (平9. 4)
9	専	教授	タカハシ　シンイチ 髙橋　伸一 〈平成21年4月〉		博士 (文学)			英語圏文化論Ⅰ Intensive Reading Ⅰ Intensive Reading Ⅱ Grammar and Vocabulary Ⅰ Grammar and Vocabulary Ⅱ 初年次演習Ⅰ 初年次演習Ⅱ コース演習Ⅱ プロジェクト演習Ⅲ プロジェクト演習Ⅳ 卒業プロジェクトⅡ	前 前 後 前 後 前 後 後 前 後 後	2 1 1 1 1 2 2 2 4 4 3	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 教授 (平19. 4)
10	専	教授	ツジ　セツコ 辻　節子 〈平成21年4月〉		M.A (米国)			Marginalized Voices Advanced Oral Skills Ⅰ Advanced Oral Skills Ⅱ コース演習Ⅱ コース演習Ⅲ コース演習Ⅳ 卒業プロジェクトⅠ	後 前 後 後 前 後 前	2 1 1 2 2 2 3	1 1 1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 教授 (平19. 4)
11	専	教授	エグチ　エイコ 江口　英子 〈平成21年4月〉		M.A (米国)			日本語教授法 日本語Ⅰ 日本語Ⅳ コース演習Ⅰ コース演習Ⅱ 卒業プロジェクトⅠ	前 前 後 前 後 前	2 2 2 2 2 3	1 1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 教授 (平19. 4)

調書番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年齢	保有学位等	月額基本給(千円)		担当授業科目の名称		担当単位数	年間開講数	現　職 (就任年月)
12	専	教授	オグラ　ジュンイチ 小椋　純一 〈平成21年4月〉		農学博士			京都の自然と景観 日本の自然と風土 コース演習Ⅰ コース演習Ⅲ コース演習Ⅳ プロジェクト演習Ⅰ プロジェクト演習Ⅱ 卒業プロジェクトⅠ 卒業プロジェクトⅡ	後 前 前 前 後 前 後 前 後	2 2 2 2 2 4 4 3 3	1 1 1 1 1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 教授 (平11. 4)
13	専	教授	クントン　インタラタイ Khoontong Intarathai 〈平成21年4月〉		経済学博士			コース演習Ⅰ コース演習Ⅱ コース演習Ⅳ 卒業プロジェクトⅠ	前 後 後 前	2 2 2 3	1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 教授 (平1. 4)
14	専	教授	ツツミ　クニヒコ 堤　邦彦 〈平成21年4月〉		文学博士			日本の歴史と芸能 説話・伝承史 京都地域学 京都の暮らしと祭礼 初年次演習Ⅰ 初年次演習Ⅱ コース演習Ⅲ プロジェクト演習Ⅰ プロジェクト演習Ⅱ 卒業プロジェクトⅠ 卒業プロジェクトⅡ	前 後 前 後 前 後 前 前 後 前 後	2 2 2 2 2 2 2 4 4 3 3	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 教授 (平9. 4)
15	専	教授	デビッド　ボゲット David Boggett 〈平成21年4月〉		M.A (英国)			アジア交流史 地域研究Ⅱ コース演習Ⅱ コース演習Ⅲ コース演習Ⅳ プロジェクト演習Ⅲ プロジェクト演習Ⅳ 卒業プロジェクトⅡ 海外フィールドプログラムⅢ	前 後 後 前 後 前 後 後 後集中	2 2 2 2 2 4 4 3 2	1 1 1 1 1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 教授 (平5. 4)
16	専	教授	ヤマナ　シンセイ 山名　伸生 〈平成21年4月〉		文学修士			日本美術史 アジア美術史 伝統文化総合講座 コース演習Ⅰ コース演習Ⅱ プロジェクト演習Ⅲ プロジェクト演習Ⅳ 卒業プロジェクトⅡ	後 前 前 前 後 前 後 後	2 2 2 2 2 4 4 3	1 1 1 1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 教授 (平14. 4)
17	専	教授	イタクラ　ユタカ 板倉　豊 〈平成21年4月〉		工学修士			自然教育論 公害史 コース演習Ⅰ コース演習Ⅱ プロジェクト演習Ⅲ プロジェクト演習Ⅳ 卒業プロジェクトⅡ 国内フィールドプログラムⅠ	前 後 前 後 前 後 後 前集中	2 2 2 2 4 4 3 2	1 1 1 1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 教授 (平19. 4)

調書番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年齢	保有学位等	月額基本給(千円)		担当授業科目の名称		担当単位数	年間開講数	現　職 (就任年月)
18	専	教授	イノウエ　ユウイチ 井上　有一 〈平成21年4月〉		国際学修士 Ph.D Caudidacy (米国)			環境教育論 環境思想論 コース演習Ⅱ コース演習Ⅲ コース演習Ⅳ プロジェクト演習Ⅰ プロジェクト演習Ⅱ 卒業プロジェクトⅠ 卒業プロジェクトⅡ	後 前 後 前 後 前 後 前 後	2 2 2 2 2 4 4 3 3	1 1 1 1 1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 教授 (平12. 4)
19	専	教授	オンチ　ノリオ 恩地　典雄 〈平成21年4月〉		工学博士			環境ビジネス キャリアデザインⅠ キャリアデザインⅡ 社会統計学 コース演習Ⅰ コース演習Ⅲ コース演習Ⅳ 卒業プロジェクトⅠ	前 前 後 後 前 前 後 前	2 2 2 2 2 2 2 3	1 1 1 1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 教授 (平13. 4)
20	専	教授	ホソカワ　コウメイ 細川　弘明 〈平成21年4月〉		Ph.D (米国)			南北問題 エネルギーと環境 コース演習Ⅱ コース演習Ⅲ コース演習Ⅳ プロジェクト演習Ⅲ プロジェクト演習Ⅳ 卒業プロジェクトⅠ 卒業プロジェクトⅡ	前 後 後 前 後 前 後 前 後	2 2 2 2 2 4 4 3 3	1 1 1 1 1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 教授 (平13. 4)
21	専	教授	ヤマダ　クニヒロ 山田　國廣 〈平成21年4月〉		工学博士			森と水の環境学 環境デザイン論 環境政策論 地域環境論 初年次演習Ⅰ 初年次演習Ⅱ コース演習Ⅰ プロジェクト演習Ⅰ プロジェクト演習Ⅱ 卒業プロジェクトⅠ 卒業プロジェクトⅡ	前 後 前 後 前 後 前 前 後 前 後	2 2 2 2 2 2 2 4 4 3 3	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 教授 (平9. 4)
22	専	教授	アラオカ　コウタロウ 荒岡　興太郎 〈平成21年4月〉		法学修士			図書館概論 コース演習Ⅰ コース演習Ⅱ コース演習Ⅲ コース演習Ⅳ 卒業プロジェクトⅠ	前 前 後 前 後 前	2 2 2 2 2 3	1 1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 教授 (平5. 4)

調書番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年齢	保有学位等	月額基本給(千円)		担当授業科目の名称		担当単位数	年間開講数	現　職 (就任年月)
23	専	教授	クリス　ミツル 栗巣　満 〈平成21年4月〉		体育学修士			スポーツと時代 スポーツと社会 こころの時代と社会 こころと思想 健康学Ⅰ 健康学Ⅱ 初年次演習Ⅰ 初年次演習Ⅱ コース演習Ⅲ コース演習Ⅳ 卒業プロジェクトⅡ	前 後 前 後 前 後 前 後 前 後 後	2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 3	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 教授 (平14. 4)
24	専	教授	ナカジマ　マサズミ 中島　勝住 〈平成21年4月〉		教育学修士			人権教育論 多文化教育論 現代社会論 コース演習Ⅰ コース演習Ⅱ コース演習Ⅳ 卒業プロジェクトⅠ 卒業プロジェクトⅡ	前 後 後 前 後 後 前 後	2 2 2 2 2 2 3 3	1 1 1 1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 教授 (平9. 4)
25	専	教授	ワシオ　ケイジ 鷲尾　圭司 〈平成21年4月〉		水産学修士			ライフスタイル論 食と人間 総合講座 大学ナビⅠ 大学ナビⅡ コース演習Ⅲ プロジェクト演習Ⅲ プロジェクト演習Ⅳ 卒業プロジェクトⅠ 卒業プロジェクトⅡ	前 後 前 前 後 前 前 後 前 後	2 2 2 2 2 2 4 4 3 3	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 教授 (平12. 4)
26	専	教授	カジカワ　ヨシコ 梶川　よ志子 〈平成21年4月〉		文学修士			英語Ⅰ コース演習Ⅰ プロジェクト演習Ⅱ 卒業プロジェクトⅠ	前 前 後 前	8 2 2 2	4 1 1 1	京都精華大学 人文学部 教授 (平11. 4)
27	専	教授	キタワキ　トクコ 北脇　徳子 〈平成21年4月〉		文学修士			英語Ⅱ コース演習Ⅰ プロジェクト演習Ⅰ 卒業プロジェクトⅠ	後 前 前 前	8 2 2 2	4 1 1 1	京都精華大学 人文学部 教授 (平11. 4)
28	専	教授	モンマ　トキオ 門間　都喜郎 〈平成21年4月〉		法学修士			コース演習Ⅰ コース演習Ⅱ コース演習Ⅲ コース演習Ⅳ 卒業プロジェクトⅠ	前 後 前 後 前	2 2 2 2 3	1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 教授 (平5. 4)
29	専	教授	フィリップ　ルイット Philip　Lewitt 〈平成21年4月〉		Ph.D (米国)			コース演習Ⅰ コース演習Ⅱ コース演習Ⅲ コース演習Ⅳ 卒業プロジェクトⅡ	前 後 前 後 後	2 2 2 2 3	1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 教授 (平2. 4)

調書番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年齢	保有学位等	月額基本給(千円)		担当授業科目の名称		担当単位数	年間開講数	現　職 (就任年月)
30	専	准教授	イノウエ　マサヒト 井上　雅人 〈平成21年4月〉		修士 (社会学)			文化社会学概論 デザイン史 ファッション論 コース演習Ⅰ コース演習Ⅱ コース演習Ⅲ コース演習Ⅳ 卒業プロジェクトⅠ 卒業プロジェクトⅡ	前 後 前 前 後 前 後 前 後	2 2 2 2 2 2 2 3 3	1 1 1 1 1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 准教授 (平20．4)
31	専	准教授	コマツ　マサフミ 小松　正史 〈平成21年4月〉		博士 (工学)			ポピュラー・ミュージック史 サウンドスケープ論 音環境デザイン論 視聴覚記録の技法 コース演習Ⅰ コース演習Ⅱ コース演習Ⅲ コース演習Ⅳ プロジェクト演習Ⅲ プロジェクト演習Ⅳ 卒業プロジェクトⅠ 卒業プロジェクトⅡ	前 後 前 後 前 後 前 後 前 後 前 後	2 2 2 2 2 2 2 2 4 4 3 3	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 准教授 (平19．4)
32	専	准教授	ウスビ　サコ Oussouby Sacko 〈平成21年4月〉		博士 (工学)			プロジェクト・プランニング 建築文化論 空間デザイン論 初年次演習Ⅰ 初年次演習Ⅱ コース演習Ⅲ コース演習Ⅳ プロジェクト演習Ⅰ プロジェクト演習Ⅱ 卒業プロジェクトⅡ 国内フィールドプログラムⅣ	後 前 後 前 後 前 後 前 後 後 前集中	2 2 2 2 2 2 2 4 4 3 2	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 准教授 (平19．4)
33	専	准教授	マエダ　シゲル 前田　茂 〈平成21年4月〉		博士 (文学)			美学概論 映画芸術史 現代文学論 映画批評論 コース演習Ⅰ コース演習Ⅱ コース演習Ⅲ コース演習Ⅳ 卒業プロジェクトⅠ 卒業プロジェクトⅡ	前 後 後 前 前 後 前 後 前 後	2 2 2 2 2 2 2 2 3 3	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 准教授 (平20．4)
34	専	准教授	ミカミ　カヨ 三上　賀代 〈平成21年4月〉		学術修士			身体表現論 舞踏史 コース演習Ⅰ コース演習Ⅱ プロジェクト演習Ⅲ プロジェクト演習Ⅳ 卒業プロジェクトⅠ	後 前 前 後 前 後 前	2 2 2 2 4 4 3	1 1 1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 准教授 (平19．4)

調書番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年齢	保有学位等	月額基本給(千円)		担当授業科目の名称		担当単位数	年間開講数	現　職 (就任年月)
35	専	准教授	ヤブウチ　サトシ 籔内　智 〈平成21年4月〉		修士 (教育学)			英語音声学Ⅰ 言語学Ⅰ 言語学Ⅱ English WorkshopⅠ English WorkshopⅡ コース演習Ⅰ コース演習Ⅱ コース演習Ⅲ コース演習Ⅳ プロジェクト演習Ⅲ プロジェクト演習Ⅳ 卒業プロジェクトⅠ 卒業プロジェクトⅡ	前 前 後 前 後 前 後 前 後 前 後 前 後	2 2 2 1 1 2 2 2 2 4 4 3 3	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 准教授 (平15．4)
36	専	准教授	シン　チャンホウ 申　昌浩 〈平成21年4月〉		博士 (学術)			アジアの宗教 現代アジアの比較文化論 宗教学 コース演習Ⅰ コース演習Ⅱ コース演習Ⅲ コース演習Ⅳ 卒業プロジェクトⅠ 卒業プロジェクトⅡ 国内フィールドプログラムⅢ	前 後 後 前 後 前 後 前 後 前集中	2 2 2 2 2 2 2 3 3 2	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 准教授 (平20．4)
37	専	准教授	スエツグ　サトシ 末次　智 〈平成21年4月〉		文学修士			南島文化論 うたの文化論 コース演習Ⅰ コース演習Ⅱ コース演習Ⅲ コース演習Ⅳ 卒業プロジェクトⅠ 卒業プロジェクトⅡ 国内フィールドプログラムⅡ	前 後 前 後 前 後 前 後 前集中	2 2 2 2 2 2 3 3 2	1 1 1 1 1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 准教授 (平15．4)
38	専	准教授	マツオ　マコト 松尾　眞 〈平成21年4月〉		人文学修士			コース演習Ⅰ コース演習Ⅱ コース演習Ⅲ コース演習Ⅳ プロジェクト演習Ⅰ プロジェクト演習Ⅱ 卒業プロジェクトⅠ 卒業プロジェクトⅡ	前 後 前 後 前 後 前 後	2 2 2 2 4 4 3 3	1 1 1 1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 准教授 (平14．4)
39	専	准教授	イワモト　シンイチ 岩本　真一 〈平成21年4月〉		修士 (学術)			日本思想史 日本社会の構造 コース演習Ⅰ コース演習Ⅱ コース演習Ⅲ コース演習Ⅳ 卒業プロジェクトⅠ 卒業プロジェクトⅡ	後 前 前 後 前 後 前 後	2 2 2 2 2 2 3 3	1 1 1 1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 准教授 (平14．4)
40	専	准教授	スミトモ　ツヨシ 住友　剛 〈平成21年4月〉		修士 (文学)			子どもの社会史 子ども支援論Ⅰ 子ども支援論Ⅱ コース演習Ⅰ コース演習Ⅱ コース演習Ⅲ コース演習Ⅳ プロジェクト演習Ⅰ プロジェクト演習Ⅱ 卒業プロジェクトⅠ 卒業プロジェクトⅡ	前 後 後 前 後 前 後 前 後 前 後	2 2 2 2 2 2 2 4 4 3 3	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 准教授 (平20．4)

調書番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年齢	保有学位等	月額基本給(千円)		担当授業科目の名称		担当単位数	年間開講数	現　職 (就任年月)
41	専	准教授	ハルヤマ　フミエ 春山　文枝 〈平成21年4月〉		経済学修士			コース演習Ⅰ コース演習Ⅱ コース演習Ⅲ コース演習Ⅳ 卒業プロジェクトⅠ 卒業プロジェクトⅡ	前 後 前 後 前 後	2 2 2 2 3 3	1 1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 准教授 (平19. 4)
42	専	講師	タムラ　ユカ 田村　有香 〈平成21年4月〉		理学修士			製品環境評価 社会調査法Ⅰ コース演習Ⅰ コース演習Ⅱ コース演習Ⅲ コース演習Ⅳ 卒業プロジェクトⅠ 卒業プロジェクトⅡ 海外フィールドプログラムⅡ	後 前 前 後 前 後 前 後 前集中	2 2 2 2 2 2 3 3 2	1 1 1 1 1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 講師 (平12. 4)
43	専	講師	ハットリ　シズエ 服部　静枝 〈平成21年4月〉		修士(経済学)			環境マネジメント論Ⅰ 環境マネジメント論Ⅱ コース演習Ⅲ コース演習Ⅳ プロジェクト演習Ⅲ プロジェクト演習Ⅳ 卒業プロジェクトⅠ 卒業プロジェクトⅡ	前 後 前 後 前 後 前 後	2 2 2 2 4 4 3 3	1 1 1 1 1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 講師 (平15. 9)
44	専任	講師	コレサワ　ノリゾウ 是澤　範三 〈平成21年4月〉		博士(文学)			日本語学 コース演習Ⅰ コース演習Ⅱ 卒業プロジェクトⅠ 卒業プロジェクトⅡ	前 前 後 前 後	2 2 2 3 3	1 1 1 1 1	新田青雲中等教育学校 教諭（国語） (平成17. 4)
45	兼担	教授	ナカヒラ　ヨシオ 中平 佳男 〈平成21年4月〉		体育学士			スポーツ実習Ⅰ スポーツ実習Ⅱ	前 後	4 4	4 4	京都精華大学 芸術学部 教授 (平成7. 4)
46	兼担	教授	ミヤ カズホ 宮 一穂 〈平成21年4月〉		大学卒			世界文学	後	2	1	京都精華大学 デザイン学部 教授 (平成18. 4)
47	兼担	教授	ワタナベ ヒデユキ 渡邊 英之 〈平成21年4月〉		文学修士			教育学概論	前	2	1	京都精華大学 芸術学部 教授 (平成15. 4)
48	兼担	講師	サトウ モリヒロ 佐藤 守弘 〈平成21年4月〉		博士(芸術学)			芸術学Ⅰ	前	2	1	京都精華大学 デザイン学部 准教授 (平成20. 4)
49	兼担	講師	ツガタ ノブユキ 津堅 信之 〈平成22年4月〉		農学士			アニメ文化論	後	2	1	京都精華大学 マンガ学部 講師 (平成18. 4)
50	兼担	教授	モリシタ　イクヒコ 森下 育彦 〈平成21年4圧〉		人文学士			日本語リテラシーⅠ 日本語リテラシーⅡ クリエイティブライティングⅠ クリエイティブライティングⅡ	前 後 前 後	9 9 2 2	3 3 1 1	京都精華大学 教育推進センター 教授 (平成19. 3)
51	兼担	准教授	イチジ ケイスケ 市地 敬典 〈平成22年4月〉		Ph.D(米国)			哲学 現代社会と哲学	後 前	2	1	京都精華大学 教育推進センター 准教授 (平成19. 4)

調書番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年齢	保有学位等	月額基本給(千円)		担当授業科目の名称		担当単位数	年間開講数	現　職 (就任年月)
52	兼任	講師	アイカワ　ヤスコ 相川　康子 ＜平成21年4月＞		修士＊ (経済学)			ジャーナリズム論 ボランティア論	前 後	1 1	1 1	神戸大学 経済学研究所 准教授 (平成19．9)
53	兼任	講師	アオキ　ヤミナ 青木　ヤミナ ＜平成22年4月＞		M.A (仏国)			フランス語Ⅲ フランス語Ⅳ	前 後	2 2	1 1	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平成9．4)
54	兼任	講師	アカリ　チアキ 明里　千章 ＜平成22年4月＞		修士 (文学)			近代文学講読	後	2	1	千里金蘭大学 現代社会学部 教授 (平成20．4)
55	兼任	講師	アサノ　ヒサエ 浅野　久枝 ＜平成21年4月＞		修士 (教育学)			民俗学Ⅰ 民俗学Ⅱ	前 後	2 2	1 1	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平成15．4)
56	兼任	講師	アマノ　ヤヨイ 雨野　弥生 ＜平成22年4月＞		修士 (日本語日本文化)			日本文学史	後	2	1	京都女子大学 宗教・文化研究所 共同研究員 (平成19．4)
57	兼任	講師	イシクラ　ヤスジ 石倉　康次 ＜平成22年4月＞		修士＊ (社会学)			高齢化社会論	後	2	1	立命館大学 産業社会学部 教授 (平成17．4)
58	兼任	講師	イトウ　ヤスコ 伊藤　泰子 ＜平成21年4月＞		文学士			メディア・システム設計Ⅰ メディア・システム設計Ⅱ	前 後	1 1	1 1	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平成18．4)
59	兼任	講師	イケダ　ヒロシ 池田　浩士 ＜平成22年4月＞		文学修士			現代社会と歴史認識Ⅰ 現代社会と歴史認識Ⅱ	前 後	2 2	1 1	京都精華大学 教育推進センター 教授 (平成16．4)
60	兼任	講師	イワツキ　トモヤ 岩槻　知也 ＜平成21年4月＞		人間科学博士			生涯学習概論Ⅱ	後	2	1	京都女子大学 発達教育学部 准教授 (平成19．4)
61	兼任	講師	ウエダ　ノブユキ 上田　信行 ＜平成22年4月＞		Ed.D (米国)			メディア編集論	後	2	1	同志社女子大学 現代社会学部 教授 (平成16．4)
62	兼任	講師	ウメヅ　ミノル 梅津　實 ＜平成21年4月＞		修士 (法学)			政治学概論	前	2	1	同志社大学大学院 法学研究科 教授 (昭和59．4)
63	兼任	講師	エダ　フキオ 枝　富喜夫 ＜平成21年4月＞		経営学士			情報リテラシーⅠ 情報リテラシーⅡ	前 後	3 3	3 3	モーリスビジネス学院 専任講師 (平成9．1)
64	兼任	講師	エンマンジ　ヨウスケ 円満字　洋介 ＜平成21年4月＞		工学士			京都のまちづくり	後	2	1	円満字設計事務所 (平成19．4)
65	兼任	講師	オオキ　フジ 大木　冨志 ＜平成22年4月＞		短期大学卒			伝統楽器演習	前	2	1	元　池坊学園顧問 (平成17年3月まで)
66	兼任	講師	オオタ　トオル 太田　達 ＜平成21年4月＞		農学士			京都の産業	後	2	1	株式会社　老松 役員 (昭和56．4)
67	兼任	講師	オオタキ　トモオリ 大瀧　友織 ＜平成22年4月＞		修士＊ (社会学)			家族と社会	前	2	1	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平成19．4)

調書番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年齢	保有学位等	月額基本給(千円)		担当授業科目の名称		担当単位数	年間開講数	現　職 (就任年月)
68	兼任	講師	オカダ　アキヒト 岡田　彰仁 ＜平成22年4月＞		芸術学士			シナリオ制作Ⅰ	前集中	2	1	有限会社 FILMATTORE 代表取締役 (平成16．4)
69	兼任	講師	オナベ　トモコ 尾鍋　智子 ＜平成21年4月＞		学術博士			生命科学と倫理	前	2	1	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平成16．4)
70	兼任	講師	オバタ　セイゴウ 小畑　清剛 ＜平成22年4月＞		法学博士			環境法	前	2	1	元　姫路獨協大学 法学部教授 (平成20年3月まで)
71	兼任	講師	オモテ　ノブタカ 表　恒匡 ＜平成21年4月＞		修士 (芸術)			写真技法 写真表現	前 後	1 1	1 1	有限会社ニュートロン ｷﾞｬﾗﾘｰﾏﾈｰｼﾞｬｰ (平成20．4)
72	兼任	講師	オリイ　ホヅミ 折井　穂積 ＜平成21年4月＞		文学博士			フランス語Ⅰ フランス語Ⅱ	前 後	2 2	1 1	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平成12．4)
73	兼任	講師	カガワ　ユウイチ 香川　雄一 ＜平成21年4月＞		学術博士			地域研究Ⅶ	前	2	1	滋賀県立大学 環境科学部 講師 (平成18．4)
74	兼任	講師	カツヤマ　ヒロコ 勝山　廣子 ＜平成22年4月＞		M.A (米国)			点字講座Ⅰ 点字講座Ⅱ	前 後	2 2	1 1	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平成6．4)
75	兼任	講師	カミオカ　ユタカ 上岡　裕 ＜平成22年4月＞		言語学学士			広告表現Ⅰ 広告表現Ⅱ	前集中 後集中	2 2	1 1	特定非営利活動法人 そらべあ基金 代表理事 (平成20．4)
76	兼任	講師	カミクラ　ツネユキ 上倉　庸敬 ＜平成22年4月＞		文学博士			現代芸術論	前	2	1	大阪大学 文学部　教授 (平成8．4)
77	兼任	講師	カワシマ　ケンシ 川島　憲志 ＜平成22年4月＞		master of education (米国)			環境教育プログラム・デザイン 環境教育実習	前集中 前集中	2 2	1 1	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平成16．4)
78	兼任	講師	カワバタ　ミキト 川端　幹人 ＜平成22年4月＞		学士 (法学)			キャリアデザインⅢ キャリアデザインⅣ	前 後	2 2	1 1	有限会社 プリグラフィックス 取締役 (平成16．4)
79	兼任	講師	カワマタ　ヒデミ 河俣　英美 ＜平成21年4月＞		修士 (教育学)			情報メディアと法律	後	2	1	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平成16．4)
80	兼任	講師	キクチ　マサカズ 菊池　政和 ＜平成21年4月＞		修士 (文学)			絵画とものがたり 日本文学	後 前	2 2	1 1	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平成18．4)
81	兼任	講師	キタモト　マサヤ キタモト　マサヤ ＜平成22年4月＞		高校卒			舞台芸術論	後	2	1	劇団　遊劇体 主宰 (平成3．4)
82	兼任	講師	キバ　アキシ 木場　明志 ＜平成21年4月＞		修士＊ (文学)			日本史	後	2	1	大谷大学 文学部　教授 (平成10．4)
83	兼任	講師	キム　ビョンジン 金　炳辰 ＜平成21年4月＞		修士 (文学) (韓国)			朝鮮語Ⅰ 朝鮮語Ⅱ	前 後	2 2	1 1	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平成20．4)

調書番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年齢	保有学位等	月額基本給(千円)		担当授業科目の名称		担当単位数	年間開講数	現　職 (就任年月)
84	兼任	講師	コウ　ヒロキ 江　弘毅 ＜平成22年4月＞		農学士			まちづくり論	前	2	1	(株) 140B 取締役編集責任者 (平成18. 4)
85	兼任	講師	コハラ　タケアキ 小原　丈明 ＜平成21年4月＞		人間・環境学博士			地理学Ⅰ	前	2	1	京都大学大学院 人間・環境学研究科 助教 (平成19. 4)
86	兼任	講師	コボリ　マサヒロ 小堀　眞裕 ＜平成21年4月＞		法学博士			国際政治学	後	2	1	立命館大学 法学部　教授 (平成15. 4)
87	兼任	講師	サカモト　タク 坂本　卓 ＜平成22年4月＞		文学士			ドキュメンタリー制作Ⅱ	後集中	2	1	アジアプレス インターナショナル 所属ジャーナリスト (平成6. 4)
88	兼任	講師	ササキ　シズカ 佐々木　閑 ＜平成22年4月＞		文学博士			アジアの歴史と思想	前	2	1	花園大学 文学部　教授 (平成14. 4)
89	兼任	講師	サトイ　ヒサキ 里井　久輝 ＜平成22年4月＞		言語文学博士			英語音声学Ⅱ 異文化間コミュニケーション	後 前	2 2	1 1	摂南大学 外国語学部 准教授 (平成20. 4)
90	兼任	講師	サトウ　ノリコ 佐藤 典子 ＜平成21年4月＞		文学士			スペイン語Ⅰ スペイン語Ⅱ スペイン語Ⅲ スペイン語Ⅳ	前 後 前 後	2 2 2 2	1 1 1 1	ECC外語学院 スペイン語非常勤講師 (平成4. 4)
91	兼任	講師	シゲノ　アグリ 重野　亜久里 ＜平成22年4月＞		文学士			社会教育論	前	2	1	特定非営利活動法人 多文化共生センター きょうと　理事長 (平成18. 4)
92	兼任	講師	シマダ　アキヒコ 島田　昭彦 ＜平成22年4月＞		社会学士			作家・制作者による作品論Ⅱ	前集中	2	1	株式会社　クリップ 代表取締役 (平成18. 6)
93	兼任	講師	ジョン ベネット JOHN BENNETT ＜平成21年4月＞		MA in TESOL (米国)			Oral Communication Ⅰ Oral Communication Ⅱ Oral Presentation Ⅰ Oral Presentation Ⅱ	前 後 前 後	1 1 1 1	1 1 1 1	立命館大学 情報理工学部 非常勤講師 (平成20. 4)
94	兼任	講師	スエマツ　ノリコ 末松　憲子 ＜平成22年4月＞		修士 (人文学)			くずし字購読	後	2	1	(財)ひょうご震災記念 21世紀研究機構 人と防災みらいセンター 震災資料専門員
95	兼任	講師	スエチカ　コウタ 末近　浩太 ＜平成21年4月＞		地域研究博士			地域研究Ⅳ	後	2	1	立命館大学 国際関係学部 准教授 (平成18. 4)
96	兼任	講師	スギノ　トオル 杉野　徹 ＜平成22年4月＞		修士 (文学)			英米文学史	前	2	1	同志社女子大学大学院 文学研究科 教授 (平成20. 3)
97	兼任	講師	スギハラ　ミツシ 杉原　充志 ＜平成21年4月＞		修士 (法学)			地域研究Ⅸ	前	2	1	羽衣国際大学 産業社会学部 教授 (平成18. 4)
98	兼任	講師	スズキ　ヒロヤス 鈴木　洋保 ＜平成22年4月＞		学士 (工学)			書道	後	2	1	京都女子大学 国文学科 非常勤講師 (平成12. 4)
99	兼任	講師	スズキ　ヤスフミ 鈴木　靖文 ＜平成21年4月＞		修士 (工学)			社会調査法Ⅱ 社会調査技法Ⅱ	後 前	2 2	1 1	有限会社 ひのでや エコライフ研究所 代表取締役 (平成12. 6)

調書番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年齢	保有学位等	月額基本給(千円)		担当授業科目の名称		担当単位数	年間開講数	現　職 (就任年月)
100	兼任	講師	ソデナガ　ショウジ 袖長　省二 ＜平成21年4月＞		芸術学士			数学 論理学	前 後	2 2	1 1	京都アートスクール 株式会社 常勤講師 (昭和53．4)
101	兼任	講師	ソノダ　チエ 苑田　知江 ＜平成22年4月＞		社会学士			ノンフィクション・ルポルタージュⅠ ノンフィクション・ルポルタージュⅡ	前集中 後集中	2 2	1 1	朝日新聞社週刊AERA フリーランス記者 (平成5．4)
102	兼任	講師	タイ　シオリ 田井　志穂里 ＜平成21年4月＞		修士(教育学)			情報と倫理	前	2	1	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平成20．4)
103	兼任	講師	タカタ　ケン 高田　研 ＜平成22年4月＞		修士(教育学)			環境教育ワークショップ	前集中	2	1	都留文科大学 社会学科　教授 (平成19．4)
104	兼任	講師	タカハシ　リュウタ 髙橋　隆太 ＜平成22年4月＞		言語・文化学士			人間の安全保障	後	2	1	日本学術振興会 特別研究員 (平成19．4)
105	兼任	講師	タナカ　ツヨシ 田中　剛 ＜平成21年4月＞		修士(教育学)			中国語Ⅰ 中国語Ⅱ 中国語Ⅲ 中国語Ⅳ	前 後 前 後	2 2 2 2	1 1 1 1	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平成17．4)
106	兼任	講師	タナカ　ハルナ 田中　春奈 ＜平成22年4月＞		修士(芸術)			シナリオ制作Ⅱ	後集中	2	1	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平成18．4)
107	兼任	講師	タナカ　ブパポーン 田中　ブパポーン ＜平成22年4月＞		大学卒(タイ)			タイ語Ⅲ タイ語Ⅳ	前 後	2	1	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平成8．4)
108	兼任	講師	タニ　ノリコ 谷　祝子 ＜平成21年4月＞		体育学士			身体運動文化実習	後	1	1	神戸女学院大学 体育研究室　教授 (平成2．4)
109	兼任	講師	タマモト　エイコ 玉本　英子 ＜平成22年4月＞		準学士			ドキュメンタリー制作Ⅰ	前集中	2	1	アジアプレス インターナショナル 所属ジャーナリスト (平成6．4)
110	兼任	講師	チアシ　アキヒロ 知足　章宏 ＜平成22年4月＞		国際関係学博士			環境経済学 開発教育論	後 後	2 2	1 1	立命館大学 経営学部 非常勤講師 (平成10．4)
111	兼任	講師	ツキハラ　トシヒロ 月原　敏博 ＜平成21年4月＞		修士(文学)			地理学Ⅱ 地域研究Ⅲ	後 前	2 2	1 1	福井大学 教育地域科学部 准教授 (平成19．4)
112	兼任	講師	ツルタ　ナオミ 鶴田　尚美 ＜平成21年4月＞		修士(文学)			倫理学	前	2	1	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平成15．4)
113	兼任	講師	ツン　クァンズ 鄭　光子 ＜平成22年4月＞		修士(文学)			朝鮮語Ⅲ 朝鮮語Ⅳ	前 後	2 2	1 1	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平成7．4)
114	兼任	講師	テヅカ　ケイコ 手塚　恵子 ＜平成22年4月＞		文学修士			比較神話学 アジアの民族芸能	後 前	2 2	1 1	京都学園大学 人間文化学部 准教授 (平成19．4)
115	兼任	講師	テラオ　サトシ 寺尾　智史 ＜平成21年4月＞		修士(学術)			地域研究Ⅵ	後	2	1	神戸学院大学 国際文化学研究科 助教 (平成19．7)

調書番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年齢	保有学位等	月額基本給(千円)		担当授業科目の名称		担当単位数	年間開講数	現　職 (就任年月)
116	兼任	講師	トリイ　ユウスケ 鳥居　祐介 ＜平成21年4月＞		Ph.D.American Studies (米国)			地域研究Ⅴ	前	2	1	立命館大学 文学部 非常勤講師 (平成20. 4)
117	兼任	講師	ナイトウ　マホ 内藤　真帆 ＜平成21年4月＞		人間・環境学博士			社会調査特論 社会調査技法Ⅰ	後 前	2 2	1 1	日本学術振興会 特別研究員PD (平成20. 4)
118	兼任	講師	ナガオ　フミタカ 長尾　文孝 ＜平成21年4月＞		修士 (環境科学)			メディア・データ編集Ⅰ メディア・データ編集Ⅱ	前 後	1 1	1 1	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平成13. 4)
119	兼任	講師	ナカガワ　カツシ 中川　克志 ＜平成22年4月＞		文学博士			音楽とメディアⅠ	前	2	1	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平成18. 4)
120	兼任	講師	ナカガワ　テルヒコ 中川　輝彦 ＜平成22年4月＞		修士 (人間科学)			現代社会と病理 医療と社会	前 後	2 2	1 1	龍谷大学 社会学部 特任講師 (平成18. 4)
121	兼任	講師	ナカジマ　サダオ 中島　貞夫 ＜平成22年4月＞		大学卒			作家・制作者による作品論Ⅰ	後集中	2	1	映画監督
122	兼任	講師	ナカツカ　カナ 中塚　華奈 ＜平成22年4月＞		農学博士			有機農業論	前	2	1	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平成16. 4)
123	兼任	講師	ナカニシ　ヒロツグ 中西　宏次 ＜平成22年4月＞		修士 (教育学)			現代学校論	後	2	1	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平成19. 4)
124	兼任	講師	ナカフシキ　ヒロシ 中伏木　寛 ＜平成21年4月＞		工学士			芸術学Ⅱ	後	2	1	宝塚造形芸術大学 造形学部 准教授 (平成20. 4)
125	兼任	講師	ナカマ　ユウコ 仲間　裕子 ＜平成22年4月＞		文学博士			西洋美術史	前	2	1	立命館大学 産業社会学部 教授 (平成10. 4)
126	兼任	講師	ナカムラ　ジュンコ 中村　潤子 ＜平成21年4月＞		修士＊ (文学)			考古学	前	2	1	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平成2. 4)
127	兼任	講師	ニシダ　マコト 西田　慎 ＜平成21年4月＞		Doktor der Philosophie (ﾄﾞｲﾂ)			西洋史	前	2	1	神戸大学 非常勤講師 (平成20. 4)
128	兼任	講師	ノナカ　アキヒロ 野中　章弘 ＜平成22年4月＞		経済学士			作家・制作者による作品論Ⅳ	前集中	2	1	立教大学大学院 21世紀社会デザイン研究科　特任教授 (平成19. 4)
129	兼任	講師	ハザマ　アキコ 間　晶子 ＜平成22年4月＞		修士 (言語文化学)			日本語Ⅲ	前	2	1	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平成10. 4)
130	兼任	講師	ハシモト　アキヒコ 橋本　章彦 ＜平成22年4月＞		文学博士			都市伝説研究 日本の民俗文化	後 前	2 2	1 1	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平成16. 4)
131	兼任	講師	ババ　マサル 馬場　優 ＜平成22年4月＞		法学博士			国際社会論	前	2	1	奈良産業大学 法学部 非常勤講師 (平成13. 12)

調書番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年齢	保有学位等	月額基本給(千円)		担当授業科目の名称		担当単位数	年間開講数	現　職 (就任年月)
132	兼任	講師	ハマサキ　カナコ 濱崎　加奈子 ＜平成22年4月＞		修士 (学術)			日本文化史概論	前	2	1	京都工芸繊維大学 伝統みらい研究ｾﾝﾀｰ 特任准教授 (平成19．4)
133	兼任	講師	ハヤシ　タイゾウ 林　大造 ＜平成21年4月＞		学術博士			社会学Ⅰ 社会学Ⅱ	前 後	2 2	1 1	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平成15．4)
134	兼任	講師	ハラダ　トモヨ 原田　智代 ＜平成21年4月＞		修士 (教育学)			環境社会学 生活環境学 環境NGO論	前 後 前	2 2 2	1 1 1	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平成7．4)
135	兼任	講師	ヒオキ　カニワ 日沖　桜皮 ＜平成22年4月＞		文学士			編集実践Ⅰ 編集実践Ⅱ	前集中 後集中	2 2	1 1	株式会社　桜風舎 代表取締役社長 (平成9．4)
136	兼任	講師	フクエ　ツバサ 福江　翼 ＜平成21年4月＞		修士 (理学)			自然科学概論	前	2	1	
137	兼任	講師	ブンドウ　ダイスケ 分藤　大翼 ＜平成21年4月＞		地域研究博士			文化人類学	前	2	1	京都精華大学 芸術学部 非常勤講師 (平成18．4)
138	兼任	講師	マスダ　シン 増田　真 ＜平成21年4月＞		修士 (文化・言語学)			タイ語Ⅰ タイ語Ⅱ	前 後	2 2	1 1	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平成14．4)
139	兼任	講師	マツオ　ヒデスケ 松尾　秀助 ＜平成22年4月＞		法学士			スポーツとメディア	後集中	2	1	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平成16．4)
140	兼任	講師	マツナミ　メグミ 松波　めぐみ ＜平成21年4月＞		修士 (人間科学)			障害者理解	前	2	1	関西大学 社会学部 非常勤講師 (平成16．4)
141	兼任	講師	マツモト　ケンタロウ 松本　健太郎 ＜平成21年4月＞		人間・環境学博士			メディア・コミュニケーション論 メディア文化論	後 前	2 2	1 1	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平成19．4)
142	兼任	講師	マツモト　ヒサヤ 松本　寿弥 ＜平成22年4月＞		修士 (人間・環境学)			文化心理学	後	2	1	学校法人　京都インターナショナルスクール　理事 (平成17．4)
143	兼任	講師	マトバ　カオリ 的場　香織 ＜平成21年4月＞		法学博士			法学概論 日本国憲法	前 後	2 2	1 1	名古屋短期大学 現代教養学科 専任講師 (平成18．9)
144	兼任	講師	ミウラ　シュンスケ 三浦　俊介 ＜平成22年4月＞		修士 (文学)			口承文化の歴史	前	2	1	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平成8．4)
145	兼任	講師	ミツイ　ショウイチ 光井　將宇 ＜平成21年4月＞		修士 (経営学)			経営学	前	2	1	奈良先端科学技術大学院大学 客員准教授 (平成19．8)
146	兼任	講師	ムライ　アキヒコ 村井　明彦 ＜平成21年4月＞		修士 (経済学)			経済学Ⅰ 経済学Ⅱ	前 後	2 2	1 1	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平成20．4)
147	兼任	講師	ムラカミ　オキマサ 村上　興正 ＜平成22年4月＞		理学博士			生態学	後	2	1	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平成15．4)

調書番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年齢	保有学位等	月額基本給(千円)		担当授業科目の名称		担当単位数	年間開講数	現　職 (就任年月)
148	兼任	講師	モトノ　イチロウ 本野　一郎 ＜平成21年4月＞		修士 (農学)			環境と文明 農的くらしⅠ 農的くらしⅡ	前 前 後	2 2 2	1 1 1	神戸大学 客員教授 (平成19. 4)
149	兼任	講師	モリ　トキヒコ 森　時彦 ＜平成21年4月＞		文学博士			地域研究Ⅰ	前	2	1	京都大学 人文科学研究所 教授 (平成7. 4)
150	兼任	講師	モリ　ノリコ 森　紀子 ＜平成21年4月＞		文学博士			東洋史	後	2	1	神戸大学 人文学研究所 教授 (平成19. 4)
151	兼任	講師	モリ　ヒロシ 森　ひろし ＜平成22年4月＞		高校卒			編集論Ⅰ 編集論Ⅱ	前 後	2	1 1	(株) MC&C 嘱託ライター (平成9. 10)
152	兼任	講師	モリシタ　マサナオ 森下　正修 ＜平成21年4月＞		文学博士			心理学Ⅰ 心理学Ⅱ	前 後	2 2	1 1	京都府立大学 社会福祉学部 准教授 (平成17. 10)
153	兼任	講師	ヤマギシ　ユウ 山岸　裕 ＜平成21年4月＞		教育ファシリテーション修士			会計学	後	2	1	大阪経済大学 経営学部 講師 (平成18. 4)
154	兼任	講師	ヤマグチ　シュンスケ 山口　俊介 ＜平成22年4月＞		芸術学士			プレゼンテーション技法	前集中	2	1	有限会社かほり堂 代表 (平成16. 1)
155	兼任	講師	ヤマザキ　アツヨシ 山崎 篤良 ＜平成21年4月＞		経済学士			ドイツ語Ⅰ ドイツ語Ⅱ ドイツ語Ⅲ ドイツ語Ⅳ	前 後 前 後	2 2 2 2	1 1 1 1	株式会社ECC ドイツ語非常勤講師 (昭和58. 4)
156	兼任	講師	ヤマダ　ソウヘイ 山田　創平 ＜平成22年4月＞		文学博士			ジェンダーと社会	後	2	1	厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業研究班員 (平成18. 2)
157	兼任	講師	ヤマナカ　ハヤト 山中　速人 ＜平成22年4月＞		社会学博士			メディアと政治	後	2	1	関西学院大学 総合政策学部 教授 (平成12. 4)
158	兼任	講師	ヤマモト　テツジ 山本　哲司 ＜平成21年4月＞		修士 (文学)			生涯学習概論Ⅰ	前	2	1	龍谷大学 社会学部 特任講師 (平成15. 4)
159	兼任	講師	ヤマモト　ナガヤス 山本　長恭 ＜平成22年4月＞		文学士			作家・制作者による作品論Ⅲ	後集中	2	1	株式会社　電通 (昭和60. 4)
160	兼任	講師	ユモト　タカカズ 湯本　貴和 ＜平成21年4月＞		理学博士			生物学Ⅰ 生物学Ⅱ	前 後	2 2	1 1	総合地球環境学研究所　教授 (平成15. 4)
161	兼任	講師	ヨシダ　カオル 吉田　馨 ＜平成22年4月＞		文学士			日本映画論	前	2	1	京都映画祭実行委員会 (平成7. 4)
162	兼任	講師	ヨシダ　ススム 吉田　進 ＜平成22年4月＞		大学卒			音楽とメディアⅡ	後集中	2	1	(株)エフエム京都 代表取締役社長 (平成17. 6)
163	兼任	講師	ヨシダ　タカヒロ 義田　孝裕 ＜平成22年4月＞		文学博士			日本古典文学	後	2	1	安田女子大学 大学院研修員 (平成19. 4)

調書番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年齢	保有学位等	月額基本給(千円)		担当授業科目の名称		担当単位数	年間開講数	現　職 (就任年月)
164	兼任	講師	ヨシモト　ユウコ 吉本　優子 ＜平成21年4月＞		修士 (日本語日本文化)			日本語Ⅱ	後	2	1	京都精華大学 人文学部 非常勤講師 (平成12．4)
165	兼任	講師	リ　ボンウ 李　鳳宇 ＜平成22年4月＞		高校卒			コンテンツ・プロデュース論	後	2	1	株式会社　シネカノン 代表取締役 (平成1．4)
166	兼任	講師	ワキハマ　ノリコ 脇浜　紀子 ＜平成21年4月＞		M.A (米国)			メディア・リテラシー論	前集中	2	1	読売テレビ放送 株式会社 (平成2．4)